

拓殖大学大学院
言語教育研究科博士論文

日本語の身体語彙とその慣用表現
— 「二次」「三次」身体語彙を中心に—

Body Part Terminology and Its Idioms in Japanese:
Focusing on Secondary and Tertiary Level Words

指導教授：小林 孝郎教授

倪 秀梅

2021年8月

目 次

第 1 章 序論	1
はじめに	1
1.1 本研究の背景	1
1.2 本研究の目的	2
1.3 本研究の意義	3
1.4 本研究の方法・手順	3
1.5 本論文の構成	4
第 2 章 日本語の身体語彙に関する先行研究	5
2.1 日本語の身体語彙の取り扱う範囲や分類に関する研究	5
2.1.1 「一次身体語彙」に限った研究	5
2.1.2 「一次身体語彙」に「二次身体語彙」「三次身体語彙」も加えた研究	7
2.2 先行研究における日本語の身体語彙採録状況調査	10
2.3 日本語の「身体語彙」の取り扱う範囲や分類に関する先行研究のまとめ	11
2.4 本研究で取り扱う「身体語彙」の定義及びその分類	12
第 3 章 『分類語彙表』による身体語彙調査	12
3.1 『分類語彙表』から採集した身体語彙及びその慣用表現の実態	13
3.2 身体語彙の分類	19
3.2.1 「一次身体語彙」の位置による分類	20
3.2.2 「二次身体語彙」の発現要因による分類	23
3.2.3 「三次身体語彙」の発現要因による分類	26
3.3 「語種」による身体語彙特徴についての考察	29
3.3.1 「語種」の面からの「一次身体語彙」に関する考察	29
3.3.2 「語種」の面からの「二次身体語彙」に関する考察	32
3.3.3 「語種」の面からの「三次身体語彙」に関する考察	34
3.3.4 「語種」の面からの「身体語彙」に関する考察のまとめ	37
3.4 「品詞性」による身体語彙特徴についての考察	38
3.4.1 「一次身体語彙」の品詞性	38
3.4.2 「二次身体語彙」の品詞性	39
3.4.3 「三次身体語彙」の品詞性	41
3.4.4 「品詞性」による「身体語彙」に関する考察のまとめ	43
3.5 本章のまとめ	43

第4章 日本語の慣用表現に関する先行研究	44
4.1 呉 (2016、2017) の区分についての検討	44
4.2 本研究における区分の試み	47
1) 萌芽期	47
2) 模索期	48
3) 確立期	52
4) 成長期	60
5) 発展期	67
4.3 本研究で取り扱う慣用表現の定義と範囲	68
第5章 日本語の「身体語彙」を構成要素として持つ慣用表現に関する先行研究	69
5.1 日本語の「身体語彙」慣用表現に関する先行研究	69
5.1.1 日本語の身体語彙慣用表現のみの先行研究	69
5.1.2 先行研究における日本語の身体語彙慣用表現の採録状況調査	73
5.1.3 他言語の身体語彙慣用表現との対照研究	74
5.1.3.1 韓国語との対照研究	74
5.1.3.2 中国語との対照研究	75
5.1.3.3 その他の言語との対照研究	77
5.2 日本語の身体語彙慣用表現先行研究のまとめ	78
5.3 日本語の身体語彙慣用表現先行研究の問題点	79
5.4 本研究の課題	79
第6章 身体語彙慣用表現に関する調査	79
6.1 七種の慣用句辞典・研究書における身体語彙慣用表現について	80
6.2 『分類語彙表』における身体語彙慣用表現について	84
6.3 七種の慣用句辞典・研究書と『分類語彙表』の慣用表現に含まれる身体語彙の比較	87
6.4 身体語彙慣用表現の統語的分析	88
6.4.1 品詞分類による考察	88
6.4.2 身体語彙に後接する助詞の使用状況の考察	90
6.4.3 「身体語彙」に後接する助詞の用法や意味機能に関する考察	92
6.4.3.1 後接する助詞「を」の使い方について	93
6.4.3.2 後接する助詞「が」の使い方について	94
6.4.3.3 後接する助詞「に」の使い方について	95

6.4.3.4 後接する助詞「から」の使い方について	96
6.4.3.5 後接する助詞「で」の使い方について	96
6.4.3.6 後接する助詞「と」の使い方について	97
6.4.3.7 後接する助詞「の」の使い方について	97
6.4.3.8 後接する助詞「へ」の使い方について	98
6.4.3.9 後接する助詞「より」の使い方について	99
6.4.3.10 後接する助詞「は」の使い方について	99
6.4.3.11 後接する助詞「も」の使い方について	100
6.4.3.12 後接する助詞「まで」の使い方について	101
6.4.4 後接助詞を伴わない「身体語彙」慣用表現	101
6.5 本章のまとめ	102
第7章 比喩形式と比喩的慣用表現研究	102
7.1 比喩形式の概念	102
7.1.1 メタファー	103
7.1.2 メトニミー	104
7.1.3 シネクドキー	105
7.1.4 「メタファー、メトニミー、シネクドキー」の関係	106
7.1.5 シミリ	108
7.2 比喩的慣用表現に関する先行研究	109
7.2.1 意味論に基づく先行研究	109
7.2.2 認知言語学に基づく先行研究	111
7.2.3 他言語との対照研究で扱われた比喩的慣用表現	112
7.3 中国語における「慣用表現」の先行研究	114
7.4 本研究における日中慣用表現の対応関係	117
第8章 「二次」・「三次」身体語彙及びその慣用表現の日中対照	117
8.1 「二次」身体語彙（血、息、力）の基本義及び拡張義の日中対照	117
8.1.1 「血」の意味	118
8.1.1.1 日本語の「血」の意味	118
8.1.1.2 中国語の「血」の意味	119
8.1.1.3 「血」の日中対照	120
8.1.2 「息」の意味	120
8.1.2.1 日本語の「息」の意味	120
8.1.2.2 中国語の「息」の意味	121

8.1.2.3 「息」の日中対照	122
8.1.3 「力」の意味	123
8.1.3.1 日本語の「力」の意味	123
8.1.3.2 中国語の「力」の意味	124
8.1.3.3 「力」の日中対照	125
8.2 「三次」身体語彙（気、意、念）の基本義及び拡張義の日中対照	125
8.2.1 「気」の意味	126
8.2.1.1 日本語の「気」の意味	126
8.2.1.2 中国語の「气（気）」の意味	127
8.2.1.3 「気／气」の日中対照	128
8.2.2 「意」の意味	128
8.2.2.1 日本語の「意」の意味	128
8.2.2.2 中国語の「意」の意味	129
8.2.2.3 「意」の日中対照	130
8.2.3 「念」の意味	130
8.2.3.1 日本語の「念」の意味	130
8.2.3.2 中国語の「念」の意味	131
8.2.3.3 「念」の日中対照	131
8.3 「二次」・「三次」身体語彙の日中対照のまとめ	132
8.4 「二次」身体語彙（「血」）・「三次」身体語彙（「気」）を構成要素として持つ慣用表現の日中対照	132
8.4.1 日中両言語における「血」を構成要素として持つ比喩的慣用表現	132
8.4.2 日中両言語における「血」を構成要素として持つ比喩的慣用表現の対照	136
8.4.2.1 基本義に基づくもの	137
A. メトニミー形式	138
B. メタファー形式	146
C. メトニミー＋シミリ形式	147
D. メタファー＋シミリ形式	148
8.4.2.2 拡張義に基づくもの	149
A. シネクドキー形式	149
B. メタファー形式	151
C. メトニミー形式	152
8.4.2.3 中国語に特有なもの	152
A. メタファー形式	152
B. シネクドキー形式	153

C. メトニミー形式	153
8.4.3 日中両言語における「血」を構成要素として持つ比喩的慣用表現のまとめ	154
8.4.4 日中両言語における「気/气」を構成要素として持つ比喩的慣用表現	154
8.4.5 日中両言語における「気/气」を構成要素として持つ比喩的慣用表現の対照	157
8.4.5.1 基本義に基づくもの	158
8.4.5.2 拡張義に基づくもの	158
A. メタファー形式	159
B. メトニミー形式	166
8.4.5.3 中国語に特有なもの	169
8.4.6 日中両言語における「気/气」を構成要素として持つ比喩的慣用表現のまとめ	169
8.5 「一次」身体語彙慣用表現と「二次」・「三次」身体語彙慣用表現の比喩形式について	170
8.5.1 一次身体語彙「目」の慣用表現と比喩形式	171
8.5.2 一次身体語彙「鼻」の慣用表現と比喩形式	171
8.5.3 一次身体語彙「首」の慣用表現と比喩形式	171
8.5.4 「一次」身体語彙慣用表現の比喩形式のまとめと「二次」・「三次」の比喩形式	172
8.6 本章のまとめ	172
第9章 本研究のまとめと今後の課題	173
9.1 本研究のまとめ	173
9.2 今後の課題	175
参考文献	176
謝辞	184
<付録 1>七種の慣用句辞典・研究書から採集した慣用表現一覧	185
<付録 2>本論文で取り扱う慣用表現一覧	205

第1章 序論

はじめに

人間は世界中どこにあっても、同じ身体構造を有し、しかもその身体の各部位は同じ生理的な機能を果たしているため、これらを表す身体語彙は、人間の基本的、かつ、素朴な喜怒哀楽の感情、思考や微妙な心理状態などと深く関わっているものと思われる。

したがって、これらの身体語彙を構成要素として持つ慣用表現(以下「身体語彙慣用表現」と略する)は、世界各国のどの言語においても、数多く存在しているのは言うまでもないことであろう。

日中両国は同じアジアの漢字文化圏の国であり、しかも、昔から相互に文化、制度、習慣、風俗など数多くの面で交流してきたため、両言語に数多く存在している身体語彙、及び身体語彙慣用表現は、意味用法においても、使用範囲においても、共通するところは少なくないが、一方で、両国は異なる文化、言語意識、生活習慣、風俗を持つことから、重なり合うように見える慣用表現も、それらによって生じた物事に対する考え方の違いの影響を受け、相違点が随所に見られる。

そこで、本論文では、これらの身体語彙、及びそれらを構成要素として持つ慣用表現について日中対照研究を行い、日中両言語の慣用表現の全体像に少しでも迫り、そのことで、外国語教育や翻訳などの分野においても有益なものを提示できればと考える。

振り返ると、これまでに、当該分野に関する対照研究が多くの研究者によって、さまざまな視座から考察が行われてきたが、これらの研究はほとんど具体的な身体部位、例えば、頭、目、口などを表す、本論文のカテゴリーでは「一次身体語彙」と呼ぶもの、及びそれらの語彙を含む慣用表現を対象としたものであり、身体部位が果たしている生理的な作用や、それによって生じた生理現象などを表す、本論文で言う「二次身体語彙」、「三次身体語彙」、及びそれらの慣用表現に関する研究は、管見では、極めて僅かであり、研究の不足している領域だと思われる。

したがって、本研究は、先行研究を踏襲したうえで、「身体語彙」、「身体語彙慣用表現」の2つに分けて考察を進める。

始めに、従来「身体語彙」と呼ばれていたものについて検討し、特にこれまであまり触れられていない具体的な身体部位が果たしている生理的な作用や、それによって生じた生理現象などを表す語彙をそれぞれ「二次」、「三次」身体語彙として位置付け、その整理を行い、次に、それらの語彙を構成要素として持つ慣用表現について、日本語と中国語の対照を通して、両言語の特徴の一端を探ることにしたい。

1.1 本研究の背景

「身体語彙」とは『大辞林(第四版)』(2019)によれば、「身体各部位の名称を表す語彙、アタマ・ドウ・テ・アシなどの類のことを指している」とされる。一方、身体語

彙慣用表現は日本語に多数存在し、日本人の日々の言語生活の中に深く根を下ろしている。日本語の文献、新聞や文学作品に止まらず、ネットメディアなどでも目にすることが多いことの所以である。このことから、身体語彙慣用表現が、日本人の基本的で、かつ、素朴な心理や感情、思考といったものと深く結びついていることが窺われる。

平成 22 年度(2010)から令和元年度(2019)までに文化庁が実施した「世論調査」では、平成25年度(2013)、平成29年度(2017)を除き、身体語彙を含む慣用表現の意味への理解、使い方の変化に関する設問が調査項目の一つであった。

筆者が注目したのは、これらの「世論調査」の質問項目として、「手、足、目」のような具体的な身体部位を表す語だけではなく、年度によって、その具体的な身体部位を発源元とする現象や活動を表す語、例えば「声、気、怒り、笑い、情け、泣き」を含む慣用表現が記載されていることである(<表 1>)。

<表 1>文化庁が実施した『世論調査』の設問項目における身体語彙慣用表現まとめ
(平成 22 年度～令和元年度の調査を基に筆者作成)

世論調査 (平成22年度～令和元年度)			
令和元年度	手をこまねく	浮足立つ	雪辱を果たす (雪辱を晴らす)
	噛んで含むように	噛んで含めるように	
平成30年度	舌の根の乾かぬうちに	舌の先の乾かぬうちに	
平成29年度	—	—	—
平成28年度	心が折れる	目が点になる	背筋が凍る
平成27年度	愛想を振りまく	愛嬌をふりまく	寝覚めが悪い (目覚めが悪い)
平成26年度	眉をひそめる	眉をしかめる	
平成25年度	—	—	—
平成24年度	怒り心頭に発する	怒り心頭に達する	気が置けない
平成23年度	食指が動く	食指をそそられる	舌先三寸 (口先三寸)
平成22年度	情けは人の為ならず	声を荒げる	声を荒らげる

※ () 内は慣用表現の揺れである。

1.2 本研究の目的

本研究の目的は以下の3点である。

一つ目は、先行研究を踏まえた上で、従来の「身体語彙」の定義を再検討し、加えて、「二次・三次」身体語彙を採集、整理することである。

本研究では、「手、足、目」のような、直接的具体的な身体部位の名称を表す語を「一

次の身体部位語彙（以下「一次身体語彙」と略称）と呼ぶことにする。

また、「世論調査」に現れた身体部位を発源元とした「声」のような語や、身体部位の活動そのものを表す「あくび、まばたき、喘ぎ」のような語を「二次的生理活動語彙（以下「二次身体語彙」と略称）」と呼ぶこととする。

さらに、身体活動の様々な位相を抽象化した概念を表す「世論調査」の「気、情け」のような語や、心理的な活動・状態を示す「憂、愁」のような語を「三次的精神感覚語彙（以下「三次身体語彙」と略称）」¹と呼ぶ。

加えて、本研究では、「身体語彙」という用語を、これら「一次～三次」の語彙を総合したものとし、「身体語彙慣用表現」も三次までを一括した呼称とする。

本論文では、これらの身体語彙に焦点を当て、身体語彙の特徴について分析したうえで、日中両言語におけるこれらの語彙の元々の意味と、拡張された意味について、対照研究を行い、その異同を探ってみたい。

二つ目は、身体語彙慣用表現の先行研究を踏襲したうえで、辞典・研究書類、『分類語彙表』（国立国語研究所 2004、以下、『分類語彙表』と記載）での取り上げ方を整理して、そしてそれらの身体語彙慣用表現について分析をし、「一次～三次」の「身体語彙慣用表現」の実像に迫ることである。

三つ目は、身体語彙とその慣用表現の日中両言語における比較対照を通して、両言語における特徴と異同を考察することである。

本研究は、「一次」～「三次」の3つの種類に分けた「身体語彙」を構成要素として持つ慣用表現、特に「二次身体語彙」、「三次身体語彙」を含む慣用表現を研究対象とし、日中両言語におけるこれらの身体語彙慣用表現の比喩形式、意味用法に見られる相違を考察し、日中両言語の特徴を探ることを目指すものである。

1.3 本研究の意義

本研究の意義としては、以下の3点が挙げられる。

第一は、「二次身体語彙」「三次身体語彙」を含めた「身体語彙」を整理することによって、「身体語彙」の新たな位置づけが得られることである。

同様に、「二次身体語彙」「三次身体語彙」を加えた「身体語彙慣用表現」研究の新たな進展を切り拓くことも期待される。これが第二の点となる。

第三は、日中両言語における身体語彙慣用表現の異同を考察することで、慣用表現の日中対照研究の発展の一助とし、中国語母語話者の日本語習得に寄与することである。

1.4 本研究の方法・手順

1) 本研究は、まず『分類語彙表』の細目のなかから身体語彙を採集し、整理をする。

¹ 倪（2019）では、「三次的意志感覚語彙」と呼んだが、所属する語彙を網羅した用語として不足があることから、「三次的精神感覚語彙」と呼称を変更した。

2) 採集した「身体語彙」(「一次身体語彙」(533語)、「二次身体語彙」(441語)、「三次身体語彙」(436語))の3類型について、ここに所属する身体語彙を、品詞性をもとに分析する。

3) 慣用句辞典・研究書と『身体語彙表』を資料として、採集した「身体語彙」を含む慣用表現を比較し、身体語彙慣用表現の実像を考察したうえで、「身体語彙慣用表現リスト」を作成する。

4) 慣用句辞典・研究書と『身体語彙表』をもとに採集した身体語彙慣用表現を比較し、その中に含まれる「一次～三次」身体語彙のそれぞれの上位3位を確認した後、さらに統語的分析を用いて、身体語彙慣用表現の特徴を検討する。

5) 比喩的身体語彙慣用表現を対象に、対応する中国語の表現と比較しながら、日中両言語の身体語彙慣用表現の特徴と異同を考察する。

1.5 本論文の構成

本論文は大きく「身体語彙」と「身体語彙の慣用表現」の2つの部分に分かれ、以下のように構成されている。

本章の序章では、先ず本研究の背景、目的、意義、方法と手順など基本事項について述べ、本論文の構成及び各章の概要について記す。

次章以降、下記の構成で議論を進める。

第2章では、日本語の「身体語彙」に関する先行研究を概観したうえで、従来の「身体語彙」の定義を再検討し、「二次・三次」の身体語彙を身体語彙として位置付け、その分類、整理を行う。

第3章では、先行研究を踏まえて立てた「一次身体語彙」、「二次身体語彙」、「三次身体語彙」の3類型を基準に、『分類語彙表』を資料として、対象範囲を拡げて身体語彙を採集し、そのうえで、「一次身体語彙」については、その所在位置、「二次身体語彙」・「三次身体語彙」については、その語の「発現要因」という下位分類基準を設け、それぞれに所属する身体語彙数を確認し、さらに「語種」と、品詞性の面からこの三種類の身体語彙の特徴について考察する。

第4章では、日本語の慣用表現に関する先行研究を概観したうえで、呉(2017)の区分に倣って、呉の区分で触れられていない芳賀(1911)や、横山(1935)、それに外国語との対照研究の現状や問題点などについて検討し、本研究の慣用表現に関する時期区分を試み、本論文で取り扱う慣用表現の定義と範囲を定める。

第5章では、日本語の「身体語彙」を含む慣用表現に関する先行研究を概観した上で、本研究の身体語彙の課題について検討する。

第6章では、まず、七種の慣用句辞典・研究書を対象として調査を行い、「一次～三次」身体語彙慣用表現を採集する。

次に、『分類語彙表』に収録されている慣用表現を採集して、調査の範囲を広げる。

さらに、採集した「一次～三次」身体語彙を構成要素として持つ「慣用表現リスト」を作成し、品詞性分類や、統語的構造の分析、後接する助詞の共起状況について調べる。

第7章では、比喩形式の概念、加えて日本語の比喩的慣用表現に関する先行研究、及び中国語における慣用表現の先行研究を概観したうえで、本研究における日中両言語の慣用表現の対応関係を検討する。

第8章では、まず、複数の国語辞書と中国語辞書の記述をもとに、第6章で述べた「二次」・「三次」身体語彙慣用表現数のそれぞれの上位3位までの語である「血、息、力」（二次）、「気、念、意」（三次）の元々の意味（以下、「基本義」と呼ぶこととする）、及びこれらの語彙を構成要素とした熟語や慣用表現における拡張された意味（以下「拡張義」と呼ぶこととする）を検討する。

次に、第6章で採集した「二次」・「三次」身体語彙で代表的な「血」と「気」を構成要素として持つ比喩的慣用表現を対象に、複数の慣用句辞書及び『現代日本語書き言葉均衡コーパス（以下『BCCWJ』と略する）』、『北京语言大学汉语语料（北京語言大学漢語コーパス）以下『BCC』と略する）』から採集した用例を用いて、それぞれの慣用表現にどのような比喩形式が用いられ、それに対応する中国語表現がどのようなものであるかを考察し、両言語の持つ特徴の一端を探ってみる。

第9章では、本論文全体をまとめ、今後の課題について述べる。

第2章 日本語の「身体語彙」に関する先行研究

2.1 日本語の身体語彙の取り扱い範囲や分類に関する研究

日本語の身体語彙の取り扱い範囲や分類についての研究は、大きく「一次身体語彙」のみについての研究と、「一次身体語彙」のみならず、「二次身体語彙」、「三次身体語彙」にも触れた研究との、二つの分野に分けることができる。

前者は、古くは芳賀（1911）に遡るが、全体的に見れば、数が少なく、主に60年代以前の、慣用表現研究の「萌芽期」「模索期」に多く見られる。一方、後者は主に60年代に入ってから見られるようになるが、和田（1969）がその嚆矢であると思われる。

2.1.1 「一次身体語彙」に限った研究

一次身体語彙、及びそれを構成要素として持つ慣用表現は、どの言語においても数多く存在し、人間の基本的で、素朴な心理や感情、思考などを表すのが一般的であるため、これらの語彙に関する先行研究は多くの研究者によって行われてきている。

この点について、倪（2018）では、「60年代から徐々に盛んになってきた」（p. 50）と述べたが、さらに前述の芳賀（1911）にまで遡ることができた。

芳賀（1911）は、「頭と顔」、「眼」、「鼻」、「口」、「耳」、「胸」、「腹」、「腰」、「尻」など各身体部位の役割や重要性、及びこれらの「一次的身体部位語彙」含む身体に関する慣用表現を挙げて、その意味や用法について論じた。

その後、横山（1935）も、身体の部分的名称「頭・顔・面・目・耳・口・歯・鼻・手・足（脚）・腹等」を応用したイディオムを例にして、熟語の研究を行い、身体の各部分の名称を用いたイディオムは、

観念の内容に親しみ又は似通ひがあると、形・大きさ・役目・作用・位置・運動等色々なことを縁にして、意義を変らせて用みられるので、聯想で縁がついて一方から一方へ移るのであるから、意義の轉置に入るのである。而も、同時にいろいろな方面に用みられるのである。 (p. 514)

としている。

管見の限りでは、芳賀（1911）は、はじめて身体語彙に関する「言い回し」を論じたのであり、その後横山（1935）が現れてきたが、二人とも具体的な身体部位を表す語彙を例にしていたのである。

しかも、芳賀（1911）の研究対象は10語であり、横山（1935）の研究対象は11語であったが、その中で「頭・顔・目・耳・口・鼻・腹」の7語が重なっている。

芳賀（1911）、横山（1935）の身体語彙を構成要素とした慣用表現についての研究は「4.2 本研究における区分の試み-1）」で詳述することとする。

この他、横山（1935）に

藤岡先生が昭和五年8月の「ことばの講座」で「意味の變遷」といふ題で八月二十日、二十一日の二日間話された中に、「目」「耳」「足」等のついたことばについて觸れられてあるだけのやうである（「ことばの講座」第一 JI 所載一五二一三頁） (p. 2)

また、白石（1942）に

この種のものに就いては既に芳賀矢一博士、藤岡勝二博士、横山辰次氏の研究がある (p. 158)

という記載があり、藤岡勝二の研究に言及しているが、それらの原著等は現在のところ未確認である。

さらに、森田（1966）は、慣用表現の主題についての調査で、採集例全体の23.4%が身体語彙を含むものであることから、特に顕著な傾向として、人体に関するものが多いと指摘し、慣用句に含まれている身体語彙は数量の多寡から見れば、手、目、口、鼻、血、

腹、足、尻、腰、骨、腕の順であることを明らかにしている。

森田 (1966) も芳賀 (1911)、横山 (1935) と同じように、具体的な身体部位を表す「一次」的身体語彙を取り上げて、それらを構成要素として持つ慣用表現について論じたが、その「二次身体語彙」、「三次身体語彙」に関しては、触れていなかったのである。

また、モラディ (2014) は、日本語の身体を構成する部位の名称に従って、身体各部位を表す身体語彙を「頭部・胴体部・四肢部・全身部」の4つの部分に分けて、それぞれの類に含まれている身体語彙を並べて分類した。さらに、慣用句の中では、頻繁に使用される「目、手、口、身、胸、腹、耳、顔、頭、足、首、背、血、肩、鼻、歯、肝、舌、膝、唇」の20語を順に取り上げて研究の対象とし、認知言語学の角度から日本語とペルシア語の対照研究を行った。(＜表2＞)

＜表2＞ モラディ (2014) による身体部位語彙分類表 (筆者作成)

分類	身体部位	よく使われている部位の名称
1	頭部	頭、髪、顎、眉、目、頬、耳、口、鼻、舌、歯、額、首、喉、髭
2	胴体部	胸、心臓、肝、肺腑、胃、腸、腹、腰、背、胆、臍
3	四肢部	肩、腕、肘、手、指、掌、尻、足、股、膝、脛、踵
4	全身部	身、血、骨、皮、神経、肉

「4.2 本研究における区分の試み-4)」において詳述とするが、モラディ (2014) は認知言語学の視点から日本語とペルシア語の対照研究を行い、メタファー、メトニミー、シネクドキーの三種類の「転義」からそれぞれの慣用表現が持つ意味拡張について論述し、明らかにしたことは非常に評価できるものであるが、その分析は「一次身体語彙」までにとどまっている。

2.1.2 「一次身体語彙」に「二次身体語彙」、「三次身体語彙」も加えた研究

60年代に入って、「一次身体語彙」のみならず、「二次身体語彙」、「三次身体語彙」、及びそれらの語彙を構成要素として持つ慣用表現に関する研究が、徐々に多くの研究者に注目されるようになり、数多くの研究成果が産み出されるようになった。この時期の代表的な研究として、和田 (1966)、星野 (1976)、林 (2002)、モラディ (2014) 等が挙げられる。

和田 (1969) は、「からだことば」という用語で、65項目に及ぶ体に関する語彙を対象に取り上げ、中には、「頭、額、顔、頬、眉」のような最も基本的な身体部位の語彙のほかに、「涙、汗、唾、糞、尿、息」などのような、一種の身体の分泌物ないしは排泄物²などをも対象としており、筆者の調べた限りでは、これが「一次身体語彙」以外の身体語彙

² この身体の分泌物や排泄物は本論文で取り扱う「二次」身体語彙に当てはまる。

を取り上げた初めての研究である。

また、星野（1976）は、

身体語彙を用いて日常生活における経験、特に身体に受け止めた経験を情感豊かに表現するという事は、日本語に限らず、他の言語にも見られることである。それが人間としての普遍的な現象であり、言語・文化の差異に関わらず、経験をそのものに即してできるだけピッタリした語彙で表現しようという欲求・活動・結果が普遍的にあるに違いない (p. 158)

と述べ、身体語彙には「身体とその部位を指示する名称」だけではなく、

身体部位ではないが、それから派生した力・熱・痛み・血・涙・涙・汗・垢・唾・へど・屁・糞（尿）・息（呼吸）や、さらには「気」を用いた表現の一部なども身体語彙による表現に含めて差し支えないであろう。

すう・はく、ふく、なめる、かぐ、みる、きく、（中略）ふむなどの身体部位が関与した動詞による表現。また、これらに基づく形容詞、副詞その他が含まれよう (p. 158)

と指摘し、身体語彙として捉えている対象は、直接身体部位を指す「一次身体語彙」だけでなく、そこから派生した動作、感覚、作用なども含まれており、かなり広範囲にわたっていると主張している。

星野（1976）が、身体語彙として捉えている対象をかなり広範囲に広げ、「身体語彙による表現の分類」（p. 158）の中で、身体部位語彙の数を増やした。

次に、「身体部位の名称」、「語種」、「形態」、「音節」、「意味」の5つの角度から分類し³、身体語彙に関する概念や分類、さらに表現上の意義などの整理を試みた。この研究成果は後の研究者に大きな影響を与えたと言える。

しかし、和田（1969）も、星野（1976）も身体部位語彙から「派生した」（星野 1976 : 158）語彙（筆者注：本研究の「二次身体語彙」、「三次身体語彙」）を動作、感覚、作用などの項目に明白に分けることを示さなかった。

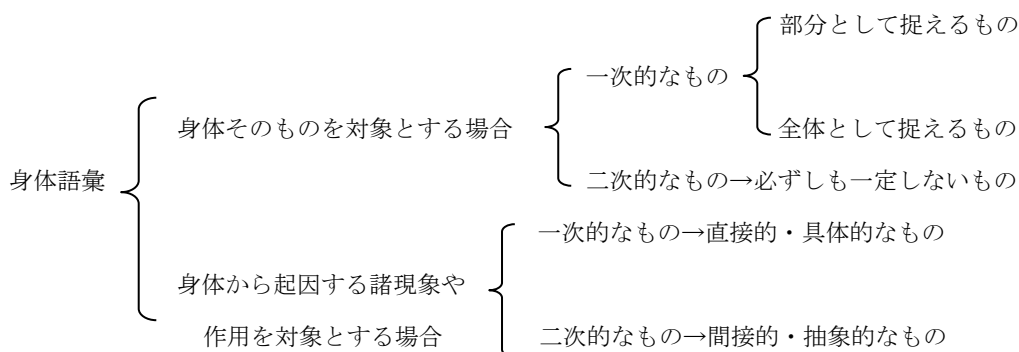
林（2002）は、韓国語と日本語における身体語彙慣用句の比較研究において、

人間にとって身体の各部位は、単なる生理的な機能や肉体の一部としての役割の範疇を越え、私たちの普段の言語生活のうえで、比喩的・暗示的に転用されることが多い。また、それは人間のもっとも基本的な喜怒哀楽の感情などを豊富に表現することと密接な関係があるばかりでなく、時には私たちを取り込むさまざまな複雑な事象や概念の表

³ 詳しくは「2.2 日本語の「身体語彙」を構成要素として持つ慣用表現に関する先行研究」を参照

と述べ、〈図1〉に示すように、身体語彙を「身体そのものを対象とする場合」と「身体から起因する諸現象や作用を対象とする場合」と分けている。

〈図1〉 林(2002)による身体語彙分類



また、前者には「頭・首・顔・眼・口・鼻」などの「部分としてとらえるべきもの」(p. 58)と、「骨・け・皮・肌・血・神経」などのような「身体のある特定の部位というよりはほぼ体全体にわたって具備される作用する総体的なもの」(p. 58)があり、後者には「涙・汗・つば・垢・尿」などのような「身体による直接的な分泌物、または排泄物としてとらえる性格のもの」(p. 58)や、「念・魂・意・気・心」などのような「人間の精神と最も深い関わり合いを持つもの」(p. 58)があるとしている。なお、ここで林(同上)は、「一次的なもの」、「二次的なもの」という記述をしているが、これは本研究の「一次」「二次」とは異なるものである⁴。

さらに、林(2002)は具体的な身体部位語彙のことを「頭部・胴体部・四肢部・全身部」の4つの部分に分けて、それぞれの類に含まれている身体語彙を列挙して、分類したうえで、「頭部」の「目・口・顔・耳・頭・鼻・首」、「胴体部」の「胸・腹・腰・肝・腸」、「四肢部」の「手・足・尻・肩」、「全身部」の「身・血・骨」を例にして、韓国語と日本語におけるこれらの語彙を構成要素として持つ慣用句の対照研究を行った。(〈表3〉)

林(2002)が身体語彙を「身体そのものを対象とする場合」と「身体から起因する諸現象や作用を対象とする場合」と明白に分けて分類したことと、「二次的なもの」という捉え方を提示したことは、身体語彙の研究史において、非常に重要な貢献をしており、その後の身体語彙に関する研究に新たな視点を示したものであると思われる。

⁴ 林(2002)の言っている「二次」とは、「こぶ・ほくろ・えくぼ・白髪」などのような、「必ずしも一定した身体部位とは言い難い性格のものであり、表現の上でも比喩・暗示的に転用されることは稀であるもの」や、「念・魂・意・気・心」などのような、「人間の精神と深く関わり合いを持つもの」、つまり、林の分類における「間接的・抽象的」なものを指す。本論文で取り扱う「二次」とは範囲が違ふことは明らかである。

<表 3>林 (2002) による身体部位語彙分類表 (筆者作成)

頭部	頭・顔・髪・つむじ・額・眉・目・頬・耳・鼻・口・唇・舌・歯・顎・ひげ・首・喉
胴体部	胸・心臓・肺腑・肝・胃・腸・腹・腰・背
四肢部	肩・腕・肘・手・指・爪・掌・尻・足・股・膝・すね・きびす
全身部	身・血・骨

しかし、林 (2002) は「二次的なもの」という捉え方を提示したものの、身体語彙を構成要素とした慣用表現の日韓対照研究の段階においては、和田 (1969) や、星野 (1976) と同じように、「一次身体語彙」を構成要素として持つ慣用表現の考察にとどまっている。

2.2 先行研究における日本語の身体語彙採録状況調査

本研究では、慣用句研究文献や慣用句辞典(書)における採録状況を、先行研究の中から宮地 (1982)、白石 (1995)、宮園(1999)、国広(2010)、西谷(2016)、林(2002)、木原(2014)を対象にして、身体語彙及びその慣用表現の出現数を年代順、「一次～三次」のレベル別に調査した結果を<表 4>に記す。

<表 4> 先行研究における身体語彙数のレベル別収録状況 (筆者作成)

著者 & 書作名	身体語彙数			
	一次	二次	三次	総数
宮地(1982)『慣用句の意味と用法』	49語	15語	36語	100語
白石(1995)『国語慣用句大辞典』	51語	17語	36語	104語
宮園(1999)『慣用句の意味と使い方』	29語	8語	15語	52語
国広(2010)『日本語誤用・慣用小辞典』	16語	2語	6語	24語
西谷(2016)『勘違い慣用表現の辞典』	41語	11語	29語	81語
林(2002)『日・韓両国語の慣用的表現の対照研究』	18語	1語	—	19語
木原(2014)『身体名イディオム和英辞典』	35語	—	—	35語
異なり語数	69語	27語	51語	147語

全体的に、「一次身体語彙」の数は、「二次・三次」身体語彙数を大きく上回っているが、「二次・三次」身体語彙数も無視できない数であることが分かる。

なお林(2002)は、「身体から起因する諸現象や作用を対象とする場合」に言及しているにも関わらず、「二次・三次」身体語彙で取り上げているのは、「血」の一語のみである。

また、木原 (2014) は、「二次・三次」語彙が含まれていないことについて特に言及は

ないが、学習者向けの学習用辞典なので一次語彙に止めたものと思われる。

さらに、上記7冊の慣用句研究文献や慣用句辞典(書)における異なり身体語彙の採録状況についてまとめたのが次の<表5>である。

<表5>上記7冊慣用句研究文献や慣用句辞典(書)における異なり身体語彙の採録状況(筆者作成)

採録した 文献数	異なり一次身体語彙(69語)																
7冊	目	手	口	頭	足	胸	耳	顔									
6冊	首	腹	面	舌	指	眉	身	顎									
5冊	骨	腰	心	鼻	尻	背	髪	臍									
4冊	歯	肩	肝	羽	腸	脚	膝	角	体	毛	眼						
3冊	腕	根	尾	脇	皮	爪	額	喉	肘								
2冊	股	脛	腑	肌	頬	乳	脂	胆	えくぼ	牙	鱗	踵					
1冊	筋	瞳	懐	髭	神経	傷	拳	肺	胃	頸	けつ	唇	肉				
採録した 文献数	異なり二次身体語彙(27語)																
4冊	息	血	声	涙	言う												
3冊	力	脈	跡	唾													
2冊	音	あぐら	汗	あくび	咳	垢	呼吸										
1冊	見る	寝る	嘔む	屁	小便	いびき	皺	おなら	聞く	涎	反吐						
採録した 文献数	異なり三次身体語彙(51語)																
5冊	気	念	情け														
4冊	意	思	影	笑	喧嘩	嘘											
3冊	歩み	精	恨み	志	感	憂	痛	機嫌	鳴	恥	泣き	怒り	慮				
2冊	想	願	性	喜び	痩せ	蟹螯	勢い	勘	沈黙	姿	態	嘆き					
1冊	考	形	愁	痺れ	調子	癩	希望	悔い	遺憾	堪忍	欲	心配	疑い	祈り	度胸	容	魄

69語の「一次身体語彙」のうち、「目、手、口、頭、足、胸、耳、顔」など半数以上の35語が7冊中4冊以上に収録されているのに対して、「二次身体語彙」では、4冊以上に収録されているのは「息、血、声、涙、言う」の5語のみであり、さらに、「三次身体語彙」となると、51語のうち、「気、念、情け、意、思、影、笑、喧嘩、嘘」の9語のみであった。

この結果からも、「二次身体語彙」、「三次身体語彙」は無視できない数が存在しているにも関わらず、さほど重視されていないと言えるであろう。

なお、上記七種の資料から採集した身体語彙の語種は、「一次～三次」のどのレベルにおいても、漢語と和語に限られ、後述する「外来語」と「オノマトペ」は見られなかった。

2.3 日本語の「身体語彙」の取り扱う範囲や分類に関する先行研究のまとめ

身体語彙表現は、どの言語においても見られ、人間の基本的な喜怒哀楽の感情や微妙な心理状態、ひいては、人間を取り囲むさまざまな事象や概念とも深く結びついているため、

これに関する研究も従来多くの研究者によって、いろいろな角度から行われてきた。

その中で、日本語の身体語彙の分類や範囲についての考察や研究は、芳賀（1911）から出発し、隆盛期は60年代からだと思われる。

ところが、これらの研究は、筆者が調べた限りでは、ほとんどは具体的な「一次部位語彙」を研究対象としており、なかには和田（1969）、星野（1976）、林（2002）が述べた「身体部位ではないが、それから派生した力・熱・痛み・血・涙・涙・汗・垢・唾・へど・屁・糞（屎）・息（呼吸）や、気」（星野 1976）、「身体から起因する諸現象や作用」（林 2002）として身体語彙に入れても差し支えないとする研究もあったが、残念ながら、三者ともこれらの語彙を構成要素として持つ慣用表現については触れなかった。

さらに、本論文で取り扱う「二次身体語彙」の中に含まれる身体活動そのものを表す「あくび、まばたき、喘ぎ」などのような語彙や、「三次身体語彙」の中に含まれる心理的な状態を示す「笑う（笑い）、憂、愁」などのような語彙を対象とした分類は管見ではほとんど見当たらなかった。

しかしながら、これらの「二次身体語彙」や、「三次身体語彙」は、日中両言語にともに存在しており、人間にとって、具体的な身体部位を表す「一次身体語彙」と同じ、もしくはそれ以上に身近なものであるため、これらの語彙を構成要素として持つ語彙表現は、「一次身体語彙」による表現と同じように、人間の基本的で、かつ、素朴な心理や感情、思考といったものと深く結びついているがゆえに、その言語の背景にある文化を反映する一側面でもあるといっても過言ではなからう。

2.4 本研究で取り扱う「身体語彙」の定義及びその分類

すでに述べたように、日本語の身体語彙の取り扱う範囲や分類に関する先行研究は、ほとんどが具体的な身体部位を表す「一次身体語彙」を研究対象としており、それらの語彙によって「派生した」（星野 1976）「二次身体語彙」に関する分類について触れた研究はあったものの（例えば、和田（1969）、星野（1976）、林（2002）など）、明確な分類を示したのは林（2002）のみであった。さらに、「三次身体語彙」を一類型とした研究も見当たらなかった。

したがって、本論文では日本語の身体語彙の取り扱う範囲、並びにその分類を試みて、「一次」「二次」「三次」の「身体語彙」の定義を再検討してみると、「二次身体語彙」、「三次身体語彙」を構成要素として持つ慣用表現を認知言語学の立場から見てみることにする。

第3章 『分類語彙表』による身体語彙調査

前章では、慣用句研究文献や慣用句辞典(書)を対象に、日本語の身体語彙の採録状況を検討した。

本章では、さらに対象範囲を拡げて身体語彙を採集することを目的として、『分類語彙表—増補改訂版』から「一次～三次」の身体語彙を採集した。これは、前章で調査した先行研究リストでは取り上げられていない身体語彙の補充を考慮したものである。

3.1 『分類語彙表』から採集した身体語彙の実態

第1章ではすでに、本研究において、「身体語彙」とは、直接的具体的な身体各部位の名称を表す「一次身体語彙」、身体部位を発源元とした語や、身体部位の活動そのものを表す語である「二次身体語彙」、身体活動の様々な位相を抽象化した概念を表す語や、心理的な活動・状態を表す語である「三次身体語彙」を総合したものであることを述べた。

本研究では、この定義を満たす身体語彙を『分類語彙表』をもとに採集することにした。なお、『分類語彙表』からの身体語彙の採集にあたって、以下の1)、2)に留意した。

- 1) 複数の漢字が同じ読みを持つ場合、それぞれを別語として扱った。例：「あし（足、脚）」
- 2) 類義語もリストに含めた。例：「顔：おもて、つら、めん等」

<表6>に、「一次～三次」身体語彙の採集元である『分類語彙表』の項目を表す。

<表6> 「身体語彙」の採集先の『分類語彙表』項目

類	部門	中項目			
1 ・ 体 の 類	1.1 抽象的關係	【1.11 類】	【1.13 様相】	【1.14 力】	【1.15 作用】
		【1.17 空間】	【1.18 形】	【1.19 量】	
	1.3 人間活動—精神及び行為	【1.30 心】	【1.31 言語】	【1.33 生活】	【1.34 行為】
		【1.35 交わり】	【1.36 待遇】		
	1.4 生産物及び用具	【1.42 衣料】			
1.5 自然物および自然現象	【1.50 自然】	【1.56 身体】	【1.57 生命】		
2 ・ 用 の 類	2.1 抽象的關係	【2.13 様相】	【2.15 作用】		
	2.3 精神及び行為	【2.30 心】	【2.31 言語】	【2.32 芸術】	【2.33 生活】
		【2.36 待遇】			
2.5 自然現象	【2.50 自然】	【2.56 身体】	【2.57 生命】		
3 ・ 相 の 類	3.1 抽象的關係	【3.12 存在】	【3.13 様相】	【3.15 作用】	【3.18 形】
		【3.19 量】			
	3.3 精神および行為	【3.30 心】	【3.31 言語】	【3.33 生活】	
	3.5 自然現象	【3.50 自然】			

次に、<表6>の各項目から採集した「一次～三次」身体語彙をそれぞれ、項目ごとに<表7-1>～<7-3-3>に示す。

<表 7-1> 『分類語彙表』の「一次身体語彙」

類	部門	中項目	分類項目	語彙数	所属語彙
1 ・ 1 ・ 3 ・ 4 ・ 5	1 ・ 1 ・ 1 ・ 3 ・ 4 ・ 5	【1.11 類】	1.1101 等級、 系列	1	筋
			1.1563 防止・ 妨害・回避	1	ネック
		【1.17 空間】	1.1710 点	6	目もと、耳もと、口もと、手もと、足もと、ひざもと
			1.1711 線	1	筋
			1.1742 中、隅、 端	4	舌端、舌尖、舌頭、舌尖
			1.1770 内外	1	懐
			1.1780 ふち、 そば、まわり、	1	鼻先
		【1.18 形】	1.1820 玉、凹 凸、うず、しわ	1	えくぼ
			1.1830 穴、口	2	口(こう)、口
		【1.19 量】	1.1962 助数接 辞	3	口、手、足
	【1.30 心】	1.3000 心	9	心(こころ)、心(しん)、胸、腹、骨、腰骨、胆、肝、懐	
		1.3001 感覚	1	神経	
		1.3030 表情、 態度	3	顔、フェース、ポーカールフェイス	
		1.3040 信念、 努力、忍耐	2	心、筋	
		1.3041 自信 誇り、恥、反	2	顔、心臓	
		1.3061 思考、 意見、疑い	1	目	
		1.3063 比較、 参考、区別、選	1	目	
		1.3071 論理、 証明、偽り、誤	1	筋	
		1.3081 方法	1	手	
		1.3093 聞き、 味豆	1	耳	
		【1.33 生活】	1.3331 食生活	1	乳
			1.3332 衣生活	1	裸
			1.3370 遊樂	1	拳
			1.3374 スポー ツ	1	手
	1.3392 手足の 動作		4	大腿、小股、外また、内また	
	【1.34 行為】	1.3410 身上	1	身	
		1.3421 才能	3	手筋、手腕、腕	
	【1.42 衣料】	1.4252 武器、 防具、刑具	2	面、胴	
	【1.56 身体】	1.5600 身体	6	身、骨節、筋骨、裸、ボディー、ヌード	
		1.5601 頭、目 鼻、顔	95	頭、頭(かしら)、頭(かぶり)、頭(こうべ)、頭(ず)、頭(つむり)、頭蓋、頭角、前 頭、後頭、頭頂、喉頭、旋毛、首、首筋、首根っこ、小首、あご、上あご、上顎、下あご、の ど、咽喉、のどくび、のど元、ほっぺ、ほお、ほっぺた、えくぼ、頸部、項(うなじ)、顔、 顔(かんぼせ)、面(つら)、面(おも)、面(おもて)、鼻、小鼻、鼻筋、鼻柱、鼻つら、 鼻梁、鼻面、鼻先、鼻腔、鼻孔、鼻下、鼻溝、耳、耳たぶ、耳朶(じだ)、耳殻、外耳、中耳、 内耳、小耳、口、口もと、口腔、口蓋、軟口蓋、硬口蓋、口蓋垂、のどちんこ、のどひこ、 唇、上唇、下唇、くちびし、額、おでこ、こめかみ、目、眼(がん)、眼(まなこ)、目もと、 目頭、目尻、まなじり、目角、目玉、眼球、ひとみ、瞳孔、眸子、網膜、まぶた、眼瞼、眼 窩、舌、べろ、舌端、舌の根、ヘッド、プロフィール	
		1.5602 胸、背、 腹	60	胸、軀幹、背、背中、背筋、肩、胸、胸部、胸中、胸腔、胸板、乳、乳房、乳首、乳頭、おっ ぱい、わき、前胸、小胸、腹、おなか、横つ腹、下腹、へそ、臍(はぞ)、腰、小腰、臀部、し り、けつ、おいど、肛門、尾、尾っぽ、しっぽ、局所、局部、秘部、恥部、陰部、外陰部、 隠し所、恥丘、陰阜、会陰、男根、ちんちん、陰茎、包茎、龟头、金玉、女陰、陰門、陰唇、 陰核、ショルダー、バスト、ウエスト、ヒップ、ペニス	
		1.5603 手足、 指	67	四肢、手、左手、右手、手先、上膊、下膊、上腕、前膊、腕、かいな、右腕、左腕、手首、腕 首、手の平、たなごころ、手の甲、こぶし、足、脚、下肢、脚部、前足、後足、後ろ足、前肢、 後肢、また、内また、もも、太もも、大腿、大腿部、すね、脛(はぎ)、足首、かかと、き びす、くびす、くるぶし、足の裏、足の甲、関節、ひじ、ひざ、ひざ頭、ひざ僧、股関節、 指、親指、母指、人差し指、食指、中指、たかたか指、薬指、紅差し指、無名指、小指、指先、 翼、羽、羽根(はね)、尾羽、ひれ、尾ひれ	
		1.5604 膜、筋、 神経、内蔵	133	膜、結膜、粘膜、骨膜、脳膜、鼓膜、網膜、角膜、筋膜、横隔膜、腹膜、弁膜、筋肉、肉、腱、 アキレス腱、膝蓋腱、筋心筋、腹筋、括約筋、背筋、腱、皮脂腺、分泌腺、消化腺、口蓋扁 桃、扁桃腺、甲状腺、汗腺、涙腺、胸腺、乳腺、前立腺、内分泌腺、リンパ腺、リンパ節、リン パ管、神経、視神経、聴神経、運動神経、感覚神経、末梢神経、三叉神経、中枢神経、交感 神経、副交感神経、自律神経、迷走神経、神経細胞、脳、脳髓、脳細胞、脳みそ、脳漿、大脳、 小脳、前頭葉、側頭葉、脳幹、間脳、中脳、大脳皮質、視床、脳下垂体、松果体、脊髄、脊 髄、心肺、心臓、ハート、心房、心室、血管、静脈、大静脈、動脈、大動脈、頸動脈、毛細血 管、毛細管、毛管、肺、肺尖、肺門、気管、気管支、えら、気嚢、咽喉、咽頭、声門、声帯、 膀胱、肝臓、肝、脾臓、腎臓、副腎、胆嚢、輸尿管、食道、胃腸、胃、胃袋、胃壁、腸、十二 指腸、小腸、盲腸、大腸、直腸、原腸、噴門、幽門、腸壁、はらわた、わた、膀胱、尿道、尿 路、輸尿管、輸精管、輸卵管、卵管、睾丸、精巣、子宮、産道、胎盤、羊膜、臍帯(せいたい、 さいたい)、ニューロン、ハート	
		1.5605 皮、 毛髪、羽毛	42	皮、皮膚、皮膚、表皮、頭皮、皮下組織、肌(はだ、はだえ)、ほくろ、しみ、いぼ、指紋、 掌紋、うろこ、髪、頭髪、毛髪、前髪、後れ毛、後ろ髪、鬢、小鬢、まゆ、まゆ毛、まつげ、 ひげ、鬚髯(しゅぜん)、口ひげ、ほおひげ、あごひげ、毛、毛(もう)、体毛、毛穴、毛根、 鼻毛、胸毛、わき毛、陰毛、恥毛、足毛、スキン、ヘア	
1.5606 骨、歯、 爪、角、甲		55	骨、軟骨、硬骨、骨(こつ)、頭骨、頭蓋骨、頭蓋、頰骨、顎骨、頭骨、肋骨(ろっこつ)、 あばら骨、あばら、背骨(せぼね)、脊椎、椎骨、椎間板、半月板、頸椎、腰椎、腰骨、尾骨、 尾てい骨、貝殻骨、鎖骨、大腿骨、脛骨、ひざ皿、膝蓋骨、髓、脊髄、骨髄、脳髓、歯、乳 歯、永久歯、前歯、奥歯、門歯、犬歯、糸切り歯、臼歯、親知らず、知歯、知歯骨、八重歯、 きば、歯茎、しぎん、歯肉、歯根、歯髓、歯槽、つめ、角		
1.5607 体液、 分泌物		10	脂(あぶら)、体脂肪、皮下脂肪、内臓脂肪、中性脂肪、乳脂肪、リンパ、乳(ちち)、乳 (にゅう)、おっぱい、		
【1.57 生命】		1.5721 病気、 体調	2	扁桃、痔	

<表 7-2-1> 『分類語彙表』の「二次身体語彙」－「1. 体の類」

部門	中項目	分類項目	語彙数	所属語彙
1・1 抽象的關係	【1.13 様相】	1.1302 趣、調子	2	息、呼吸
		1.1400 力	1	パワー
	【1.14 カ】	1.1402 物力・権力・体力など	2	バイタリティー、スタミナ
		1.1510 動き	1	動き
	【1.15 作用】	1.1520 進行、過程、経由	1	歩み
		1.1522 走り、飛び、流れなど	15	歩み、歩行、歩き、歩(ほ)、走り、走行、飛び、スキップ(する)、ホップ(する)、ステップ(する)、ジャンプ(する)、ハードリング(する)、スリッパ(する)、スライド(する)、スライディング(する)
1.1525 連れ、導き、追い、逃げなど		1	逃げ	
1.1560 接近、接触、隔離		1	触り	
1・3 人間活動―精神及び行為	【1.30 心】	1.3003 飢渴、酔い、疲労、睡眠など	7	渴き、渴、便、尿、眠り、睡眠、寝
		1.3012 恐れ、怒り、悔しさ	3	怒り、憤り、喜び
		1.3013 安心、焦燥、満足	3	焦り、自慰、憂い
		1.3014 苦悩、悲哀	8	煩い、悩み、悶、哀れ、愁い、愁え、嘆き、嘆
		1.3020 好悪、愛憎	5	憎しみ、嫉妬、嫉み、妬み、恨み
		1.3030 表情、態度	10	泣き、涕泣、号泣、慟哭、嗚咽、落涙、笑い、嘆息、ため息、スマイル
		1.3031 声	9	叫び、うめき、呻吟、悲鳴、さえずり、ささ鳴き、嘶き、ボイス、ブーイング
		1.3042 欲望、期待、失望	4	望み、願い、願(がん)、脈
		1.3047 信仰、宗教	1	祈り
		1.3050 学習、習慣、記憶	2	覚え、忘れ
	1.3061 思考、意見、疑い	4	思い、考え、見、疑い	
	【1.31 言語】	1.3100 言語活動	1	叫び
		1.3121 合図、挨拶	4	叩頭、叩首、握手、呐喊
		1.3131 話、談話	1	語り
	【1.33 生活】	1.3370 遊楽	1	踊り
		1.3390 身振り	11	叩頭、叩首、合掌、キス、キッス、ベーズ、ネッキング、セックス、オナニー、マスターベーション、ベッティング
		1.3391 立ち居	2	座り、あぐら
		1.3392 手足の動作	6	拱手、拍手、握手、キャッチ、パンチ、チョップ
	1.3393 口、鼻、目の動作	12	咀嚼、呼吸、息、せき、しゃっくり、くしゃみ、嘔吐、瞬き、閉眼、開眼、睥睨、ウインク、	
【1.34 行為】	1.3422 威厳・行儀・品行	1	モーション	
【1.36 待遇】	1.3683 脅迫、中傷、愚弄など	1	にらみ	
1・5 自然物および自然現象	【1.50 自然】	1.5001 エネルギー	1	力
		1.5030 音	3	音、鳴り、唸り
		1.5040 におい	3	体臭、口臭、腋臭(わきが)
	【1.56 身体】	1.5607 体液、分泌物	70	血、鼻血、血漿、月経、経水、体液、胃液、胃酸、溜飲、消化液、膝液、胆汁、胆液、腸液、リンパ液、精液、羊水、乳(ちち)、乳(にゅう)、乳汁、涙、鼻水、涙、鼻汁、つば、唾液、よだれ、痰、汗、便、糞便、尿、糞尿、おわい、大便、ふん、くそ、うんち、うんこ、尿、小便、おしっこ、小用(しょうよう、こよう)、小水、尻、おなら、へど、嘔吐(おうと)、げろ、吐瀉(としゃ)、ふけ、かさぶた、結石、尿石、胆石、垢、手あか、耳あか、耳かす、耳くそ、目くそ、鼻くそ、歯垢、歯石、歯くそ、うみ、膿(のう)、ホルモン、インスリン、ステロイド
		1.5608 卵	3	精子、精虫、卵子
	【1.57 生命】	1.5710 生理	45	呼吸、息、あえぎ、あくび、しゃっくり、いびき、くしゃみ、せき、瞬き、おくび、げっぷ、嘔吐、排尿、放尿、小便、遺尿、お漏らし、放屁、おなら、脈、動悸、熱、月経、初経、初潮、閉経、月の物、月役、射精、早漏、夢精、遺精、受精、授精、排卵、着床、破水、懐妊、受胎、懐胎、陣痛、つわり、パルス、ブルス、メンス
		1.5720 障害、けが	8	けが、傷(きず)、傷(しょう)、やけど、こぶ、あざ、あばた、いも
1.5721 病気、体調		44	わきが、麦粒種、下痢、便秘、秘結、疥癬、瘡、疥、白くも、癬(なまず)、白なまず、湿疹、汗疹、鳥肌、蕁麻疹、疱疹、天然痘、痘瘡、疱疹、痘疹、腫瘍、潰瘍、腫物、肉腫、膿疱、膿瘍、筋腫、子宮筋腫、卵巣嚢腫、にきび、水痘、水疱瘡、腫れ、脚気、しこり、凝り、震い、戦慄き、戦慄、けいれん、攣縮、酔い、めまい、眩暈	

拓殖大学大学院言語教育研究科博士後期課程

<表 7-2-2> 『分類語彙表』の「二次身体語彙」－「2.用の類」

類	部門	中項目	分類項目	語彙数	所属語彙		
2 ・ 1 抽象 の 関係	2 ・ 3 精神 及 び 行 為	【2.13 様相】	2.1340 講話・混乱	2	がたがたする、どろどろする		
		【2.15 作用】	2.1510 動き	10	動く、動かす、うごめく、うごめかす、躍る、震える、震う、ひくひくする、びくびくする、びよこびよこする		
			2.1511 動揺、回転	14	弾む、弾ます、弾く、揺れる、動揺する、揺る、揺らす、揺らぐ、揺るぐ、揺るがす、振る、舞う、ぶらぶらする、がくがくする		
			2.1513 固定、傾き、転倒など	12	傾ける、傾く、傾ぐ、かしげる、倒れる、倒す、転がる、転げる、転がす、転ぶ、転ばす、転ける		
			2.1520 進行、過程、経路	4	うねる、徘徊する、彷徨する、うろちよるする		
			2.1522 走り、飛び、流れなど	15	歩く、歩む、走る、駆る、駆ける、馳せる、飛ぶ、飛ばす、弾む、はじく、はじける、跳ぶ、躍る、跳ねる、はう		
			2.1525 連れ・導き・追い・逃げなど	1	エスケープする		
			2.1526 進退	1	ダッシュする		
		【2.30 心】	2.3001 感覚	1	ぞくぞくする		
			2.3011 快、喜び	3	喜ぶ、喜ばす、楽しむ		
			2.3012 恐れ、怒り、悔しさ	14	恐れる、怖がる、恐ろしがる、おびえる、怖じる、怖じける、慄く、びびる、躊躇する、怒る、怒る(いかる)、憤る、むかつく		
			2.3013 安心、焦燥、満足	7	恐れる、焦る、焦れる、焦らす、いらだつ、慌てる		
			2.3014 苦悩、悲哀	14	あえぐ、悩む、悩ます、煩う、煩わす、詫びる、悲しむ、悲しがる、愁える、嘆く、嘆ずる、嘆じる		
			2.3020 好悪、愛憎	13	憎む、憎しむ、憎がる、憎らしがる、甘える、甘やかす、羨む、羨ましがる、妬む、嫉む、恨む、恨めしがる、怨ずる		
			2.3021 敬意、感謝、信頼など	1	仰ぐ		
			2.3030 表情、態度	8	鞞蹙する、怒る(いかる)、泣く、嗚咽する、笑う、笑む、微笑む、嘆息する		
			2.3031 声	13	喚呼する、わめく、叫ぶ、うめく、呻吟する、鳴く、歌う、さえずる、嘶く、吠える、咆哮する、哮る、うなる		
			2.3042 欲望、期待、失望	2	願う、祈る		
			2.3047 信仰、宗教	1	祈る		
			2.3050 学習、習慣、記憶	2	覚える、忘れる		
			2.3061 思考、意見、疑い	3	思う、抱く、考える		
			2.3062 注意、認知、了解	1	見る		
			2.3066 判断、推測、評価	4	見る、踏む、読む、にらむ		
			2.3091 見る	7	見る、仰ぐ、望む、眺める、睥睨する、きよろきよろする、きよときよとする		
			2.3093 聞く、味わう	3	聞く、聞かす、嗅ぐ		
			【2.31 言語】	2.3100 言語活動	18	言う、しゃべる、吐く、ささやく、つぶやく、黙る、黙する、黙す、怒鳴る、ののしる、叫ぶ、絶叫する、吟ずる、吟じる、歌う、唱える、詠ずる、詠じる	
				2.3121 合図、挨拶	3	叩頭する、叩首する、握手する	
				2.3131 話、談話	7	話す、語る、話せる、談ずる、談じる、講ずる、講じる	
		2.3132 問答		4	問う、尋ねる、聞く、答える		
		2.3133 会議、論議		3	口論する、けんかする、口げんかする		
		2.3150 読み		2	読む、見る		
		2.3151 書き	1	書く			
		【2.32 芸術】	2.3230 音楽	9	弾く、はじく、弾する、弾じる、ならす、打つ、たたく、吹く、歌う		
		【2.33 生活】	2.3330 生活、起臥	7	起きる、起こす、覚める、寝る、寝かす、休む、眠る		
			2.3331 食生活	9	食う、食べる、食わず、食らう、食らわす、飲む、飲ます、すする、吸う		
			2.3370 遊楽	4	遊ぶ、楽しむ、踊る、舞う		
			2.3380 いたずら、騒ぎ	1	暴れる		
			2.3390 身振り	6	暴れる、拝む、お辞儀する、叩頭する、叩首する、ぺこぺこする		
			2.3392 手足の動作	2	持つ、執る		
		2.3393 口、鼻、目の動作	19	かじる、かむ、咀嚼する、なめる、なめずる、呼吸する、あえぐ、むせる、むせぶ、咳く、しゃくりする、吐く、嘔吐する、嘔吐(えずく)、かぐ、瞬く、閉眼する、にらむ、睥睨する			
		【2.36 待遇】	2.3680 待遇	1	へいへいする		
		2 ・ 5 現象 自然	2 ・ 5 現象 自然	【2.50 自然】	2.5030 音	3	鳴る、鳴らす、うなる
				【2.57 生命】	2.5710 生理	17	あえぐ、むせる、むせぶ、しゃっくりする、むかつく、吐瀉する、吐乳する、小便する、排尿する、放尿する、放屁する、脱糞する、射精する、遺精する、夢精する、受精する、授精する
					2.5721 病気、体調	8	震える、戦慄する、戦慄く、慄く、痙攣する、攣縮する、酔う、ぶるぶるする

拓殖大学大学院言語教育研究科博士後期課程

<表 7-2-3> 『分類語彙表』の「二次身体語彙」－「3.相の類」

	部門	中項目	分類項目	語彙数	所属語彙
3. 相の類	3.3 精神及び行為	【3.31 言語】	3.3100 言語活動	5	べちゃべちゃ、ふうふう、ぎゃあぎゃあ、がやがや、わいわい
		【3.33 生活】	3.3390 身振り・立ち居・動作（手足・口・鼻・目）	3	ばたばた、どたばた、どかどか
	3.5 自然	【3.50 自然】	3.5030 音	8	ががああ、こんこん、きいきい、ちゅうちゅう、ごほごほ、すうすう、びいびい、ひゅうひゅう

<表 7-3-1> 『分類語彙表』の「三次身体語彙」－「1.体の類」

類	部門	中項目	分類項目	語彙数	所属語彙
1. 体の類	1.1 抽象的關係	【1.13 様相】	1.13 様相	1	相
			1.1302 趣、調子	12	気配、気色（けしき）、気、人気（ひとけ）、気分、調子、相、姿、オーラ、ニュアンス、ムード、コンディション
			1.1310 風・勘・姿	3	スタイル、ルックス、パーソナリティー
		【1.14 力】	1.1400 力	3	エネルギー、パワー、パンチ
			1.1403 勢い	3	勢い、威勢、勢威
		【1.15 作用】	1.1583 進歩、衰退	7	衰え、衰弱、衰微、萎靡、消沈、頹廃、頹唐
		【1.17 空間】	1.1720 範囲、席、跡	1	跡
	【1.18 形】	1.1800 形、型、姿、構え	2	姿、影	
	1.3 人間活動―精神及び行為	【1.30 心】	1.3000 心	12	気、気骨、根気、根性、精、魂、メンタリティー、エゴ、プレッシャー、ストレス、リラックス、ガッツ
			1.3001 感覚	15	感、感じ、痛み、痛さ、かゆみ、痛痒、痛（つう）、センス、テレパシー、インスピレーション、ショック、センセーション、フィーリング、テクスチャ、タッチ
			1.3002 感動、興奮	11	驚き、気絶、失神、失心、喪神、喪心、めまい、エキサイト、フィーバー、エクスタシー、ヒス
			1.3003 飢渴、酔い、疲労、睡眠など	8	餓え、酔い、飽き、倦怠、疲れ、眠り、アンニュイ、ドリーム
			1.3010 感情、気分	13	情（じょう）、喜、怒、哀、楽、喜怒哀、哀楽、気分、気持ち、機嫌、パッション、ポエジー、コンプレックス
			1.3011 快、喜び	3	喜び、楽しみ、エンジョイ
			1.3012 恐れ、怒り、悔しさ	8	恐れ、恐怖、怖じ気、躊躇、恐縮、怒り、憤り、スリル、
			1.3013 安心、焦燥、満足	12	くつろぎ、落ち着き、心配、気骨、憂い、憂え、憂さ、憂慮、懸念、苛立ち、焦り、フラストレーション
			1.3014 苦悩、悲哀	20	苦しみ、苦、迷惑、困惑、煩い、悩み、悶、哀れ、愁い、愁え、悲しみ、悲、嘆き、嘆、憂鬱、ペーソス、ノスタルジア、ホームシック、ダメージ、メランコリー
			1.3020 好悪、愛憎	14	好き、嫌い、嫌気、憎、憎しみ、憧れ、情け、うらやみ、嫉妬、嫉み、妬み、恨み、デリカシー、ジェラシー
			1.3030 表情、態度	11	こび、媚態、泣き、号泣、慟哭、嗚咽、笑い、嘆息、ため息、笑み、コケツトリー
			1.3031 声	4	叫び、うめき、呻吟、悲鳴
			1.3040 信念、努力、忍耐	5	念、精、心、意、魂
			1.3041 自信、誇り、恥、反省	6	面目、顔、恥、悔い、プライド、メンツ
			1.3042 欲望、期待、失望	7	欲、望み、願い、願（がん）、志、脈、リビドー
			1.3045 意志	3	意、気、志
			1.3060 知・知識	1	エスプリ
			1.3061 思考、意見、疑い	10	思い、慮、考え、考、想、念、感、疑い、懸念、心配
			1.3067 決心、解決、決定、迷い	5	迷い、戸惑い、惑い、躊躇、ためらい
1.3070 意味、問題、趣旨など			1	想	
1.3071 論理、証明、偽り、誤り、訂正など	1	うそ			
【1.33 生活】	1.3390 身振り	1	態		
	1.3393 口、鼻、目の動作	4	ため息、せき、瞬き、睥睨		
【1.34 行為】	1.3410 身上	7	性、心性、根性、ど根性、気宇、気骨、気風		
【1.35 交わり】	1.3420 人柄	1	バックボーン		
	1.3520 応接、送迎	1	悔やみ		
【1.36 待遇】	1.3683 脅迫、中傷、愚弄など	1	にらみ		
1.5 自然現象	【1.50 自然】	1.5001 エネルギー	1	力	
		1.5010 光	1	影	
	【1.56 身体】	1.5607 体液、分泌物	1	血	
【1.57 生命】	1.5710 生理	5	あえぎ、せき、瞬き、脈、熱		
	1.5721 病気、体調	15	かゆみ、痛痒、震い、震え、戦慄き（わななき）、戦慄、けいれん、痙縮、酔い、めまい、眩暈、気絶、失神、失心、意		

<表 7-3-2> 『分類語彙表』の「三次身体語彙」－「2.用の類」

類	部門	中項目	分類項目	語彙数	所属語彙
2.用の類	2.1 抽象の關係	【2.13 様相】	2.1340 講話・混乱	1	がたがたする
			2.1341 粗密、繁簡	2	気はる、緊張する
		【2.15 作用】	2.1510 動揺・回転	3	ぐらぐらする、ふらふらする、ぐりぐりする
	2.1520 進行、過程 <small>経過</small>		5	うろつく、徘徊する、彷徨する、迷う、さまよう	
	2.3 精神及び行為	【2.30 心】	2.3000 心	4	テンション、リラックス(する)、ぼやぼやする、うかうかする
			2.3001 感覚	8	感じる、感ずる、ちくちくする、ひりひりする、がんがんする、きりきりする、ずきずきする、びりびりする
			2.3002 感動、興奮	4	狂う、ひやひやする、どきどきする、くらくらする
			2.3003 飢渴、酔い、疲労、睡眠など	8	酔う、覚める、飽きる、倦(う)む、疲れる、へとへと、うとうとする、とろとろする、
			2.3011 快、喜び	8	喜ぶ、喜ばす、楽しむ、楽しがる、さばさばする、わくわくする、そわそわする、うきうきする
			2.3012 恐れ、怒り、悔しさ	16	恐れる、怖がる、恐ろしがる、おびえる、怖(お)じる、怖(お)じける、慄(おの)のく、恐縮する、びびる、躊躇する、怒る(いかる)、憤る、むかつく、びくびくする、むかむかする
			2.3013 安心、焦燥、満足	21	くつろぐ、心配する、懸念する、恐れる、憂える、焦る、焦(じ)れる、焦らす、いらだつ、のびのびする、はらはらする、くさくさする、むずむずする、やきもきする、こせこせする、せかせかする、まごまごする、おろおろする、おたおたする、のうのうする、もやもやする
			2.3014 苦悩、悲哀	17	苦しむ、苦しがる、あえぐ、苦しめる、困る、悩む、悩ます、煩う、煩わす、寂しがる、悲しむ、悲しがる、愁える、嘆く、嘆ずる、嘆じる、くよくよする
			2.3020 好悪、愛憎	18	嫌う、憎む、憎しむ、憎がる、憎らしがる、恋う、恋しがる、憧れる、慕う、哀れむ、哀れがる、羨む、羨ましがる、妬む、嫉む、恨む、恨めしがる、怨ずる
			2.3021 敬意、感謝、信頼など	1	仰ぐ
			2.3030 表情、態度	22	恥ずかしがる、恥じらう、慥慥する、怒る(いかる)、泣く、号泣する、嗚咽する、笑う、笑む、嘆息する、ぎすぎすする、いじいじする、うじうじする、もじもじする、ぐずぐずする、もたもたする、はきはきする、にこにこする、にやにやする、にたにたする、へらへらする、でれでれする
			2.3040 信念・努力・忍耐	2	ごろごろする、だらだらする
			2.3041 自信、誇り、恥、反省	3	恥じる、悔いる、悔やむ
			2.3042 欲望・期待・失望	1	うずうずする
			2.3047 信仰、宗教	2	念ずる、念じる
			2.3061 思考、意見、疑い	8	思う、信じる、信ずる、疑う、疑る(うたぐる)、心配する、懸念する、危惧する
			2.3066 判断、推測、評価	1	にらむ
			2.3067 決心、解決、決定、迷い	8	迷う、迷わす、惑わす、惑う、戸惑う、動揺する、ためらう、躊躇する
			2.3091 見る	2	きよろきよろする、きよときよとする
	【2.33 生活】	2.3370 遊樂	1	楽しむ	
		2.3380 いたずら、騒ぎ	3	騒ぐ、騒がす、暴れる	
		2.3390 身振り	2	暴れる、べこべこする	
		2.3393 口、鼻、目の動作	7	あえぐ、むせる、むせぶ、咳く、瞬く、にらむ、睥睨する	
	【2.50 自然】	2.5060 材質	4	ざらざわする、ふわふわする、かりかりする、こりこりする、	
	【2.56 身体】	2.5600 身体	1	ころころする、	
2.5 自然現象	【2.57 生命】	2.5710 生理	5	あえぐ、むせる、むせぶ、しゃっくりする、むかつく	
		2.5720 障害、けが	1	痛む	
		2.5721 病気、体調	7	震える、戦慄する、戦慄く、慄く、びりびりする、ぶるぶるする、よろよろする	

<表 7-3-3> 『分類語彙表』の「三次身体語彙」－「3.相の類」

類	部門	中項目	分類項目	語彙数	所属語彙
3. 相の類	3.1 抽象的關係	【3.12 存在】	3.1210 出沒	3	むくむく、むらむら、すごすご
		【3.13 様相】	3.1341 弛緩・粗密・繁簡	1	がらがら、
		【3.15 作用】	3.1500 作用・変化	1	くるくる
			3.1510 動き	4	どしどし、もそもそ、もぞもぞ、じりじり
			3.1522 走り・飛び・流れなど	6	すたすた、どたどた、とことこ、ちょちょこ、よちよち、とぼとぼ
			3.1552 分割・分裂・分散	1	ぼろぼろ
	【3.18 形】	3.1800 形	1	くしゃくしゃ	
	3.3 精神及び行為	【3.30 心】	3.3000 心	2	こちこち、もきもき
			3.3001 感覚	2	じんじん、しくしく
			3.3003 飢渴・酔い・疲労・睡眠など	4	くたくた、ぐたぐた、しょぼしょぼ、ぐうぐう、すやすや
			3.3011 快・喜び	3	ほくほく、うはうは、いそいそ
			3.3013 安心・焦燥・満足	3	おどおど、いらいら、むしゃくしゃ
			3.3030 表情・態度	9	しゃあしゃあ、ぬけぬけ、ぶりぶり、さめざめ、めそめそ、ぐすぐす、おいおい、くすくす、くつくつ
			3.3040 信念・努力・忍耐	3	くよくよ、つらつら、つくづく、
			3.3042 欲望・期待・失望	1	しおしお
			3.3045 意志	7	しぶしぶ、いやいや、こわごわ、恐る恐る、おずおず、おめおめ、のめのめ
		【3.33 生活】	3.3390 身振り・立ち居・動作(手足・口・鼻・目)	4	じたばた、よたよた、ひよるひよる、がぶがぶ
【3.34 行為】	3.3430 行為・行動	2	しゃきしゃき、ばりばり		
3.5 自然現象	【3.50 自然】	3.5030 音	5	こちこち、かちかち、ぼんぼん、はあはあ、ふうふう	

<表 7-1>～<表 7-3-3>のリストをもとに、次節からは、「一次～三次」身体語彙をその意味の側面から下位分類して、検討していくことにする。

3.2 身体語彙の分類

本節では、前節の<表 7-1>～<表 7-3-3>で示した「一次～三次」身体語彙を、「一次身体語彙」については、その「所在位置」によって、上部→下部、外部→内部の順に記載する。また、「二次身体語彙」・「三次身体語彙」については、その語の「発現要因」によって、下位分類を試みる。

「一次～三次」の語彙レベル別及び分類項目別の所属語彙数の全体像を次の<表 8>に示す。

ここで、「一次～三次」の語彙レベル別の所属語彙数を考察すると、「一次身体語彙」が 533 語と最も多く、「二次身体語彙」が 441 語、「三次身体語彙」が 436 語である。

このことから、数の上では、「一次身体語彙」に及ばないものの、「二次身体語彙」、「三次身体語彙」も日本語の語彙カテゴリーとして相応の役割を果たしていることが窺われる。

なお、先行研究では、「一次身体語彙」の異なり語数は 69 語、「二次身体語彙」は 27 語、「三次身体語彙」は 51 語であった。

また、本研究では「身体語彙」の範囲を人体に限らず、比喩的に用いられる可能性のあ

る動物の部位名「嘴、鱗」なども取り上げた⁵。

<表 8> 「一次～三次」身体語彙の分類項目と所属語彙数

語彙レベル別語彙数	分類基準別語彙数	
一次身体語彙 (533語)	頭部 (192語)	身体外部(108語)
		身体内部(84語)
	軀体部 (166語)	身体外部(71語)
		身体内部(95語)
	四肢部 (92語)	上四肢(49語)
		下四肢(43語)
	全身部 (83語)	身体外部(26語)
		身体内部(57語)
二次身体語彙 (441語)	身体部位活動そのものを示す語 (239語)	
	身体部位の生理作用を示す語 (186語)	
	身体部位活動の生成結果を示す語 (16語)	
三次身体語彙 (436語)	身体部位が関与した感覚によって生じた概念を示す語 (109語)	
	心理活動そのものを示す語 (141語)	
	身体部位が関与した動作によって生じた概念を示す語 (108語)	
	身体全体や部位をとおじて発せられる心理的概念を示す語 (78語)	

次項からは、<表 8>の分類をもとに、「一次身体語彙」、「二次身体語彙」、「三次身体語彙」の順に、それぞれの特徴を考察し、その結果について分類を試みる。

3.2.1 「一次身体語彙」の位置による分類

前掲の<表 8>では、「一次身体語彙」をその身体部位の存在位置により、「頭部」、「軀体部」、「四肢部」、「全身部」に四区分した。

また、「頭部」、「軀体部」、「全身部」については、「所在位置」により、さらに「身体外部」と「身体内部」に二分し、「四肢部」には「上四肢」と「下四肢」の2つを置いた。<表 9-1>～<表 9-4>は、「頭部」、「軀体部」、「全身部」及び「四肢部」の分類項目別の語彙リストを示すものである。ここからは、「一次身体語彙」を部位別に整理しておきたい。

まず、「頭部」に所属する「一次身体語彙」を存在位置順（上→下、外→内）に次の<表 7-1>に示す⁶。

⁵ 呉 (2014) は、身体部位詞は人間や動物の身体の部分を表すだけでなく、さらに基本義から様々な意味へと拡張している (p. 187) と述べている。

⁶ <表 9-1>では、網かけがついている「頭」は、意味的な違いから、「一次身体語彙」>「頭部」>「身体外部」及び「身体内部」の両項目に記載した。

<表 9-1> 「頭部」の「一次身体語彙」

分類項目		所属語彙									
頭部 (192語)	身体外部 (108語)	髪	ヘア	前髪	後ろ髪	後れ髪	旋毛	頭髪	頭	頭(かしら)	頭(かぶり)
		頭(こうべ)	ヘッド	頭(ず)	頭(つむり)	かぶり	頭角	前頭	後頭	頭頂	頭皮
		頭蓋	角	額	おでこ	こめかみ	鬢	小鬢	人中	顔	顔(かんぼせ)
		べそ	頬	ほお	ほっぺた	ほっぺ	鰓(えら)	面	面(おも)	面(おもて)	面(つら)
		フェース	プロフィール	ボーカプ フェイス	眉	まゆ毛	睫	目	眼	眼(まなこ)	目先
		目角	目頭	目尻	目もと	目玉	眼球	眼窩	瞳	瞳孔	まなじり
		まぶた	眼瞼	睛	眸	眸子	鼻	鼻先	鼻梁	鼻面	小鼻
		鼻溝	鼻孔	鼻毛	耳	耳垂れ	耳たぶ	耳殻	外耳	小耳	耳朶(じだ)
		耳もと	口	口(こう)	口もと	口先	口腔	唇	上唇	下唇	くちばし
		ひげ	口ひげ	ほおひげ	あごひげ	鬚髯	顎	上顎	下あご	えくぼ	鰭
	首	小首	首根っこ	ネック	喉くび	喉もと	頸	うなじ			
	身体内部 (84語)	頭	三叉神経	頭骨	頭蓋骨	脳	脳幹	間脳	中脳	大脳皮質	脳下垂体
		大脳	小脳	脳髄	脳細胞	脳漿	脳みそ	脳膜	前頭葉	側頭葉	頬骨
		角膜	網膜	涙腺	視床	鼻筋	鼻柱	鼻腔	中耳	内耳	鼓膜
		口蓋	軟口蓋	硬口蓋	口蓋垂	喉	のど	喉頭	咽頭	咽喉	のどちんこ
		のどひこ	口蓋扁桃	扁桃	扁桃腺	声門	声帯	舌	べろ	歯	きば
		歯茎	歯肉	歯根	歯髄	歯槽	しごん	八重歯	前歯	奥歯	門歯
		犬歯	糸切り歯	臼歯	親知らず	乳歯	知歯	知恵歯	永久歯	牙	舌端
		舌尖	舌頭	舌尖	舌の根	顎骨	甲状腺	頸髄	頸骨	頸椎	頸動脈
首筋		視神経	聴神経	中枢神経							

「頭部」に所属する身体語彙は192語であった。位置別では、「身体内部」(84語)よりも「身体外部」(108語)の所属語が多い。

次に、「軀体部」に所属する「一次身体語彙」を存在位置順(上→下、外→内)に<表 9-2>に示す⁷。

<表 9-2> 「軀体部」の「一次身体語彙」

分類項目		所属語彙									
軀体部 (166語)	身体外部 (71語)	軀幹	肩	ショルダー	胸	胸郭	胸毛	胸腔	胸板	バスト	胴
		懐	脇	前脇	小脇	わき毛	腋	乳	乳(ちち)	乳(にゅう)	おっぱい
		乳首	乳房	乳頭	背	背中	脊	腰	小腰	ウエスト	臀
		尻	けつ	ヒップ	おいど	肛門	尾	尾ひれ	しっぽ	尾っぽ	尾羽
		腋	腹(はら)	おなか	臍	臍(ほぞ)	臍帯	痔	陰毛	陰唇	局所
		局部	秘部	恥部	陰部	外陰部	陰核	隠し所	会陰	亀頭	ちんちん
		陰茎	包茎	男根	ペニス	金玉	女陰	陰門	恥丘	陰阜	睾丸
	身体内部 (95語)	恥毛									
		鎖骨	貝殻骨	胸	胸腔	胸腺	乳脂肪	乳腺	懐	背筋	背骨
		肋	あばら	あばら骨	肋骨	肋膜	横隔膜	腰骨	腰椎	椎骨	脊椎
		脊髄	椎間板	尾骨	尾てい骨	心	心(しん)	ハート	心房	心室	心臓
		心筋	肺	肺尖	肺門	胆	胆嚢	輸胆管	腸	はらわた	十二指腸
		小腸	盲腸	大腸	直腸	原腸	腸壁	食道	胃	胃袋	胃壁
		腑	脾	脾臓	腹(はら)	おなか	腹筋	横っ腹	中っ腹	下腹	腹膜
		骨盤	臓	肝	肝臓	脾	脾臓	腎	腎臓	副腎	内分泌腺
		消化腺	前立腺	膀胱	尿道	尿路	輸尿管	幽門	括約筋	肋間神経	噴門
		丹田	泌尿器	気管	気管支	気嚢	痔	輸精管	輸卵管	卵管	卵巣
		精巣	子宮	産道	胎盤	羊膜					

⁷ <表 9-2>では、網かけがついている「胸、懐、腹(はら)、おなか、痔」の5語は、意味的な違いから「一次身体語彙」>「軀体部」>「身体外部」及び「身体内部」の両項目に記載した。

「軀体部」に所属する身体語彙は 166 語であった。また、存在位置別語彙数は、「身体内部」が 95 語、「身体外部」が 71 語で、「身体内部」のほうが多い。

次に、「四肢部」に所属する「一次身体語彙」を存在位置順（上→下、外→内）に＜表 9-3＞に示す。

＜表 9-3＞ 「四肢部」の「一次身体語彙」

分類項目		所属語彙									
四肢部 (92語)	(49語) 上四肢	膊	上膊	下膊	前膊	肘	臂	肢	四肢	上肢	前肢
		羽	羽根	翼	腕	かいな	右腕	左腕	腕首	腕っ節	上腕
		手	手首	左手	右手	手先	手筋	手の平	掌	たなごころ	手の甲
		手腕	手もと	虎口	指	親指	母指	人差し指	食指	中指	たかたか指
		薬指	紅差し指	無名指	小指	指先	指紋	掌紋	拳	爪	
	(43語) 下四肢	下肢	後肢	股	股関節	小股	外また	内また	大腿	腿	太腿
		大腿部	大腿骨	膝	ひざもと	ひざ頭	ひざ小僧	膝窩	膝皿	膝蓋骨	膝蓋腱
		脛	はぎ	脛骨	踵	きびす	かかと	くびす	踝	くるぶし	踵
		アキレス腱	足	足の裏	足の甲	前足	後足	後ろ足	足首	足もと	脚部
		脚	足毛	半月板							

「四肢部」に所属する身体語彙は 92 語であった。また、存在位置別語彙数は、「上四肢」が 49 語で、「下四肢」(43 語)と差は見られなかった。

最後に、「全身部」に所属する「一次身体語彙」を存在位置順（上→下、外→内）に＜表 9-4＞に示す。

＜表 9-4＞ 「全身部」の「一次身体語彙」

分類項目		所属語彙									
全身部 (83語)	(26語) 身体外部	体	身	ボディー	裸	ヌード	軀	毛	毛(もう)	体毛	毛穴
		毛根	皮	表皮	皮膚	スキン	肌	はだえ	殻	鱗	骸
		傷	ほくろ	いぼ	こぶ	しみ	痣				
		腺	リンパ腺	汗腺	皮脂腺	関節	椎	皮下組織	肉	筋	筋肉
		髄	骨髄	神経	運動神経	感覚神経	末梢神経	副交感神経	自律神経	迷走神経	神経細胞
		ニューロン	交感神経	リンパ	リンパ節	リンパ管	リンパ球	血管	血清	毛細血管	毛細管
	身体内部 (57語)	毛管	赤血球	白血球	血小板	脈	静脈	大静脈	動脈	大動脈	骨
		骨(こつ)	骨節	筋骨	軟骨	硬骨	膜	粘膜	弁膜	皮膚	結膜
		骨膜	脂	脂肪	体脂肪	内臓脂肪	皮下脂肪	こぶ			

「全身部」に所属する身体語彙は 83 語であった。内訳は「身体内部」が 57 語で、「身体外部」の 26 語を大きく上回る。

以上のように、「一次身体語彙」の全体像を整理すると、「頭部」に所属する語彙数が最も多く、192 語に上り、「軀体部」(167 語)、「四肢部」(92 語)、「全身部」(83 語)の順に

続いている。

また、「一次身体語彙」には、「頭、腹（はら）、おなか」の6語のように、「身体内部」「身体外部」に並存する語もあった。

3.2.2 「二次身体語彙」の発現要因による分類

前掲の<表 8>では、「二次身体語彙」を個々の身体部位の活動内容から、

- ①身体部位活動そのものを表す語
- ②身体部位の生理作用を表す語
- ③身体部位活動の生成結果を表す語

に3分類した。これらを分類するにあたって、本研究では以下のように判断基準を設けた。

「①身体部位活動そのものを表す語」とは、具体的な身体部位の具象的な運動を表す語のことを指す。例えば、「目」の運動を表す語「開眼、閉眼、見る」、「口」の運動を表す語「言う、嘶く、歌う」、「手」の運動を表す語「握手する、合掌、拱手」などである。

「②身体部位の生理作用を表す語」には、身体部位の自主的な生理現象を表す語と、その生理作用によってできたものを表す語が含まれる。前者は、「しゃっくり、くしゃみ、あくび」などの、視覚で捉えることのできる生理現象を表す語のことである。後者は「血、垢、膿」などの身体部位の生理現象によってでき、且つ視覚で捉えることのできるものを表す語である。

「③身体部位活動の生成結果を表す語」とは、「声、力、音」などのような生理現象によって生成した結果を表す語や、「傷、けが、やけど」のような身体が関与した何らかの行為によってできた語である。これらの特徴として、前者は視覚で捉えることができず、後者の場合はそれが可能であることが挙げられる。

ここからは、①～③の分類項目ごとの所属語数⁸と所属語彙について検討することにし、始めに、その全体像を<表 10-1>～<表 10-3>に示す。なお、表中の網かけ部分「息、おしっこ、呼吸」など23語は、①、②のいずれにも該当する語であると見なし、双方の表中に示すものとする⁹。

「①身体部位活動そのものを表す語」に所属する語彙を五十音順に<表 10-1>に示す。

⁸ 語彙数は、1マス=1語として算出した。

⁹ 中には、「息」が「①身体部位活動そのものを表す語」と、「②身体部位の生理作用を表す語」、及び「③身体部位活動の生成結果を表す語」の3者に該当すると見なす。

<表 10-1> 「身体部位活動そのものを表す語」の「二次身体語彙」

分類項目	所属語彙									
身体部位活動そのものを表す語(239語)	(喘)/あえ-ぎ/-く	握手/-する	あくび	仰ぐ	あざげる	(焦)/あせ-り/-る	暴れる	歩/ある-き/-く/あゆ-み/-む	慌てる	言う
	(憤)/いきどお-り/-る	怒/-り/-る	息	抱く	いただく	嘶く	(折)/い-り/-る	いびき	いらだつ	飲(いん)
	ウインク	動/-き/-く/-かす	うごめ/-く/-かす	歌う	疑/-い/-う	打つ	(唸)/うな-り/-る	(呻)/うめ-き/-く	恨/うら-み/-む	羨む
	うろちよるする	(詠)/えい-じ-る/-ずる	嘔吐(えずく)	エスケープする	怨/-ずる	嗚咽/-する	嘔吐/-する	(起)/-き-る/-こす	お辞儀する	おしっこ
	(踊)/おど-り/-る	驚/-き/-く	おなら	慄/-き/-く	オナニー	おびえる	覚える	思/-い/-う	お漏らし	泳ぐ
	開眼	書く	がくがくする	合掌	嗅ぐ	(傾)/-く/-ける	語/-り/-る	渴(かつ)	悲/-しみ/-しむ	(嘔)/-じ-る/-む
	(駆)/-ける/-る	がたがたする	渴/-き/-く	考/-え/-える	喚呼する	感/-じ/-じる	感(かん)	キス	開/-く/-かす	キッス
	キャッチ	泣(きゅう)	拱手	きよときよとする	きよるきよるする	吟ずる	(食)/く-う/-わす/-らう/-らす/た-べる	くしゃみ	狂/-い/-う	睨(げい)
	痙攣/-する	喧嘩/-する	げっぷ	考(こう)	呼吸/-する	号泣/-する	叩首/-する	叩頭/-する	講/-ずる/-じる	答える
	転/-がる/-がす/-げる/-ばす/-び/-ぶ	恨(こん)	さえず/-り/-る	(叫)/さけ-び/-ぶ	ささやく	覚める	(騒)/さわ-ぎ/-ぐ	触/-り/-る	思(し)	嫉妬
	焦れる	(知)/-る	しゃっくり/-する	しゃべる	ジャンプ(する)	笑(しょう)	触(しょく)	小便/-する	(信)/しん-じ-る/-ずる	呻吟/-する
	吸う	吸る	スキップ(する)	ステップ(する)	スライディング(する)	スライド(する)	スリップ(する)	ぞくぞくする	(座)/-り/-る	咳(せき)
	咳/-く	セックス	戦慄/-する	想	憎(ぞう)	走行	咀嚼/-する	(嫉)/そね-み/-む	(倒)/たお-す/-れる	嗔ける
	尋ねる	叩く	ダッシュする	脱糞する	楽/-しみ/-しむ	黙/-り/-る	ため息	嘆(たん)	嘆/たん-じ-る/-ずる/なげ-き/-く	嘆息/-する
	談/-じる/-ずる	チョップ	つぶやく	涕泣	怒(ど)	問う	動(どう)	動悸	働哭	吐瀉/-する
	吐乳/-する	呐喊	唱える	(怒鳴)/どな-り/-る	飛/-び/-ぶ	どろどろする	眺める	泣/-き/-く	舐める	悩/-み/-む/-ます
	鳴/-り/-る/-らす	憎/-しみ/-む	逃げる	睨/-み/-む	願/-い/-う	(妬)/ねた-み/-む	ネッキング	眠/-り/-る	寝/-る/-るかす	悩(のう)
	悩乱する	望/-み/-む	ののしる	飲/-む/-ます	ハードリン	徘徊する	排尿する	這う	吐く	拍手/-する
	走/-り/-る	(弾)/はず-む/-ます/ひ-く	駆/-せる/-ける	話/-す	跳/-ねる/-ぶ	パンチ	ひくひくする	びくびくする	びくびくする	びびる
	悲鳴	響聲/-する	吹く	踏む	振る	(震)/-い/-う/-える	ぶるぶるする	聞(ぶん)	閉眼/-する	睥睨/-する
	パーゼ	へいへいする	べこべこする	ベッティング	へど	放屁/-する	彷徨する	吠/-える	歩行	咆哮する
	ホップ(する)	微笑/-み/-む	ホルモン	舞う	マスターベーション	(惑)/-い/-う	瞬/-き/-く	見る	むかつ/-き/-く	黙/-する
	(咽)/-ぶ/-る	鳴(めい)	モーション	持つ	休む	揺/-れる	酔/-い/-う	読む	喜/-び/-ぶ/-ばす	落涙
慮	攀縮	論/-じる/-ずる	忘れる	煩/-い/-う/-わす	戦慄き	詫びる	わめく	笑/-い/-う		

※ 表中の()内の漢字は、「(食)/く-う/-わす/-らう/-らわす/た-べる」の(食)のように、『分類語彙表』において、「食事」のような熟語としての記載があるが、単漢字・漢熟語としては記載のないものである。また、「/」記号の後部に、『分類語彙表』に記載されている単語を記す。例えば、「思/-い/-う」の場合、「思い、思う」の2語であることを示す。

「①身体部位活動そのものを表す語」に所属する語彙数は239語であった。「二次身体語彙」の全語彙数(441語)の54.2%を占めており、最も多い。

次の<表 10-2>は「②身体部位の生理作用を表す語」の採集結果を五十音順に示したものである。

<表 10-2> 「身体部位の生理作用を表す語」の「二次身体語彙」¹⁰

分類項目	所属語彙									
身体部位の生理作用を表す語 (186語)	垢	あくび	痣	汗	汗疹	跡	痘痕	胃液	息	胃酸
	遺精/ーする	遺尿	いびき	いぼ	インスリン	膿	うんこ	うんち	液	嘔吐
	おしっこ	おなら	お漏らし	おわい	潰瘍	瘡	瘍	痂	がくがくする	がたがたする
	脚気	筋腫	くそ	糞	尿	くしゃみ	経水	月経	血圧	血液
	血漿	結石	下痢	げろ	口臭	呼吸/ーする	こぶ	子宮筋腫	歯垢	しこり
	歯石	湿疹	死斑	紫斑	皰(しば)	しみ	射精/ーする	しゃっくり/ーする	腫	受精/ーする
	授精/ーする	腫瘍	腫物	消化液	小水	小便/ーする	小用	初経	初潮	白癩(しろくも)
	白癩(しろなまざ)	しわ	疹	蕁麻疹	陣痛	腺液	水痘	精子	精液	咳
	ステロイド	戦慄/ーする	早漏	ぞくぞくする	そばかす	体液	体臭	大便	唾液	痰
	胆汁	胆汁	胆石	血	乳(ちち)	腸液	月の物	唾	つわり	手あか
	天然痘	動悸	痘疹	凍瘡	痘瘡	とらふ	鳥肌	癩	涙	にきび
	肉腫	乳(にゅう)	乳汁	尿	尿石	粘液	熱	膿(のう)	膿汁	膿疱
	膿瘍	排尿	排卵/ーする	歯ぐそ	白斑	麦粒腫	排尿する	吐く	破水	疥
	潰	鼻ぐそ	鼻水	鼻汁	鼻血	パルス	斑	斑点	斑紋	ひくひくする
	びくびくする	びくびくする	秘結	皮癬	便秘	ふけ	(震)/ーい/ーう/ーえる	ブルス	ぶるぶるする	ふん
	糞尿	糞便	屁	閉経	へど	便	疱	疱疹	疱疹	放尿
	放屁/ーする	ほくろ	ホルモン	瞬く	水疱瘡	耳あか	耳ぐそ	耳かす	夢精/ーする	目ぐそ
	眩暈	めまい	メンズ	痘	痒疹	羊水	涎	落涙	卵子	卵巣囊腫
溜飲	リンパ液	攣縮	老人斑	腋臭	戦慄き					

「②身体部位の生理作用を表す語」は 186 語で、「二次身体語彙」の下位分類の中で 2 番目に多い。

「③身体部位活動の生成結果を表す語」の採集結果を五十音順に<表 10-3>に示す。

<10-3> 「身体部位活動の生成結果を表す語」の「二次身体語彙」

分類項目	所属語彙									
(果動) 1をの体 6表生部 語す成位 語結活	息	音	傷	けが	声	秋波	傷(しょう)	スタミナ	スマイル	力
	バイタリティー	パワー	ブーイング	ボイス	脈	やけど				

本調査では、この範疇に属する語彙は 16 語のみであり、「二次身体語彙」の 3 分類中最少であった。

「二次身体語彙」の全体像を整理すると、「①身体部位を活動表す語」が最も多く、239 語に上る。「②身体部位の生理作用を表す語」(186 語)、「③身体部位活動の生成結果を表す語」(16 語)がそれに続く。

また、「あくび、いびき、おしっこ」などの 30 語は、「二次身体語彙」の「①身体部位活動そのものを表す語」と、「②身体部位の生理作用を表す語」のいずれの分類にも該当する語である。

さらに、「痣、こぶ、ほくろ」などの「一次身体語彙」の具体的な身体部位を表す語で

¹⁰ 表中にアンダーラインが引かれている「痣、いぼ、しみ、こぶ、ほくろ」の 5 語は「一次身体語彙」としても用いられる語であることを示す。

ありながら、「二次身体語彙」 > 「②身体部位の生理作用を表す語」にも該当する語が 5 語あった。

3.2.3 「三次身体語彙」の発現要因による分類

前掲の<表 8>では、「三次身体語彙」を

- ①心理活動そのものを表す語
- ②身体部位を通じて発せられる心理的状态を表す語
- ③身体部位が関与した感覚によって生じた概念を表す語
- ④身体全体や部位を通じて発せられる雰囲気を表す語

に 4 分類した。

なお、この 4 つの分類項目について、本研究では以下のように判断基準を設けた。

「①心理活動そのものを表す語」とは、「悔む、憧れる、慕う」のような心理的な動きを表す語のことである。これらの語は「言う」、「見る」、「走る」のような身体部位の具体的な動作を表す語ではなく、抽象的な動作を表す語である。

「②身体部位を通じて発せられる心理的状态を表す語」とは、体全体や、脳、目などの具体的な身体部位を通じて発せられる心理的状态を表している語である。例えば、体全体を通じて発せられた語には、「萎靡、興奮、困惑」などがある。また、脳を通じて発せられた語には、「飽きる、怒/-り/-る、恨み」などがあり、目を通じて発せられた語には、「睨/-み/-む、睥睨する」がある。

「③身体部位が関与した感覚によって生じた概念を表す語」とは、「哀れ、怒り、悲しみ」や、「痛み、めまい、酔い」などのような抽象的な身体感覚を表す語である。

「④身体全体や部位を通じて発せられる雰囲気を表す語」とは、「勢い、気配、根性」のような、体全体や具体的な身体部位を通じて、感じられる、または人に感じさせる雰囲気を表す語である。

ここから、①～④の「三次身体語彙」の分類項目ごとの所属語彙数と所属語彙を<表 11-1>～<表 11-4>に示す。

まず、「①心理活動そのものを表す語」を五十音順に<表 11-1>に示す。

<表 11-1> 「①心理活動そのものを表す語」の「三次身体語彙」

分類項目	所属語彙									
心理活動そのものを表す語(109語)	倦む	飽きる	懂れる	(焦)/あせり/ーる	暴れる	慌てる	哀れ/ーがる/ーむ	安堵する	(憤)/いきどおーり/ーる	怒/ーり/ーる
	いやいや	いらだつ	うきうきする	疑/ーい/ーう	恨/うらーみ/ーむ/ーましがる	羨む	憂/うれーい/ーえる	愁/うれーい/ーえる	うろつく	怨/ーずる
	嗚咽/ーする	怖/おーじける/ーこわーがる	おずおず	恐る恐る	恐/ーれる/ーろしがる	驚/ーき/ーく	慄/ーき/ーく	おめおめ	おびえる	思/ーい/ーう
	悲し/ーみ/ーむ/ーがる	考え/ーる	感/ーじ/ーじる/ーずる	危惧する	気はる	恐縮する	嫌う	緊張する	悔/く/ーい/く/や/ーむ	くつろぐ
	ぐらぐらする	狂/ーい/ーう	苦し/ーむ/ーめる	懸念する	恋/ーう/ーしがる	志す	媚び/ーる	困る	こわごわ	さばさばする
	寂しがる	さまよう	(騒)/さわーぎ/ーぐ/ーがす	しおしお	慕/ーう	しぶしぶ	焦れる	信/ーじる/ーずる	心配する	戦慄/ーする
	想	憎(ぞう)	(嫉)/そねーみ/ーむ	そわそわする	楽し/ーみ/ーむ/ーがる	ためらう	嘆/たん/ーじる/ーずる/なげ/ーき/ーく	嘆息/ーする	躊躇する	疲れる
	つくづく	つらつら	動揺する	どきどきする	戸惑う	ドリーム	泣/ーき/ーく	悩/ーみ/ーむ/ーます	憎/ーしみ/ーむ	睨/ーみ/ーむ
	願/ーい/ーう	(妬)/ねたーみ/ーむ	念/ーじる/ーずる	望/ーみ/ーむ	悩乱する	のめめ	徘徊する	恥/は/ーじ/ーらう/ーる/はずかし/ーがる/ーむ	びくびくする	びびる
	悲鳴	震/ーい/ーう/ーえる	疲弊する	睥睨/ーする	彷徨する	微笑/ーみ/ーむ	(惑)/まど/ーい/ーう/ーわす	(迷)/まよ/ーい/ーう	むかつ/ーき/ーく	(咽)/むせ/ーぶ/ーる
(酔)/よ/ーい/ーう	よくよく	喜/ーび/ーぶ/ーばす	慮	攀縮	わくわくする	(煩)/わす/ーら/ーい/ーう/ーわす	戦慄き	笑/ーい/ーう		

※ 表中の網かけのマスは、三次①の他に、二次①や三次②にも該当する語もある。

「①心理活動そのものを表す語」は109語であり、「三次身体語彙」の下位分類の中で2番目に多い。

「②身体部位を通じて発せられる心理的状态を表す語」を五十音順に<表 11-2>に示す。

<表 11-2> 「②身体部位を通じて発せられる心理的状态を表す語」の「三次身体語彙」

分類項目	所属語彙									
身体部位を通じて発せられる心理的状态を表す語(141語)	飽きる	(焦)/あせり/ーる	哀れ/ーがる/ーむ	(憤)/いきどおーり/ーる	怒/ーり/ーる	いそいそ	萎靡	いやいや	いらいら	いらだつ
	うかうかする	うずうずする	うきうきする	疑/ーい/ーう	鬱	うはうは	恨/うら/ーみ/ーむ/ーましがる	羨む	憂/うれ/ーい/ーえる	愁/うれ/ーい/ーえる
	エキサイト	エクスタシー	エンジョイ	懊悩	怨/ーずる	怖/お/ーじける/ーこわ/ーがる	恐/ーれる/ーろしがる	恐る恐る	おたおたする	落ち着き
	おどおど	驚/ーき/ーく	慄/ーき/ーく	おびえる	おろおろする	がたがたする	かちかち	悲し/ーみ/ーむ/ーがる	がぶがぶ	かりかりする
	危惧する	気はる	恐縮する	嫌う	緊張する	くさくさする	くしゃくしゃ	悔/く/ーい/く/や/ーむ	くよくよする	ぐらぐらする
	狂/ーい/ーう	苦し/ーむ/ーめる	倦怠する	恋/ーう/ーしがる	興奮	こせこせする	こちこち	困る	困惑	さばさばする
	寂しがる	さまよう	しおしお	しぶしぶ	そわそわする	ジェラシー	慕/ーう	失心	嫉妬	じりじり
	焦れる	しゃあしゃあ	憔悴	消沈	ショック	心配	衰弱	すごすご	スリル	せかせかする
	喪心	(嫉)/そね/ーみ/ーむ	頹廢	頹唐	楽し/ーみ/ーむ/ーがる	ダメージ	ためらう	躊躇する	つくづく	つらつら
	デリカシー	動揺する	戸惑う	疲れる	どきどきする	悩/ーみ/ーむ/ーます	憎/ーしみ/ーむ	睨/ーみ/ーむ	ぬげぬげ	(妬)/ねた/ーみ/ーむ
	のうのうする	のびのびする	悩乱する	ノスタルジア	恥/は/ーじ/ーらう/ーる/はずかし/ーがる/ーむ	パッション	はらはらする	びくびくする	ヒス	びびる
	疲弊する	フィーバー	フラストレーション	ぶりぶり	ふわふわする	睥睨/ーする	ベース	彷徨する	茫然自失する	ホームシック
	ほくほく	ぼろぼろ	まごまごする	(惑)/まど/ーい/ーう/ーわす	(迷)/まよ/ーい/ーう	むかつ/ーき/ーく	むくむく	むしゃくしゃ	むずむずする	むらむら
	メランコリー	もそもそ	もぞもぞ	もだえ	もやもやする	やきもきする	憂鬱	(酔)/よ/ーい/ーう	喜/ーび/ーぶ/ーばす	わくわくする
	(煩)/わす/ーら/ーい/ーう/ーわす									

※ 表中の網かけ部分は、三次②の他に、三次①にも該当する語もある。

「②身体部位を通じて発せられる心理的状态を表す語」は141語であり、「三次身体語彙」の下位分類で最も多い。

「③身体部位が関与した感覚によって生じた概念を表す語」を五十音順に〈表 11-3〉に示す。

〈表 11-3〉 「③身体部位が関与した感覚によって生じた概念を表す語」の「三次身体語彙」

分類項目	所属語彙									
身体部位が関与した感覚によって生じた概念を表す語(108)	哀歎	哀れ/ーがる/ーむ	安堵する	アンニュイ	いじいじする	畏縮	(憤)/いきどお/ーり/ーる	怒/ーり/ーる	痛/ーみ/ーむ/ーまし/ーさ	いらだつ
	恨/うら/ーみ/ーむ/ーま	羨む	遺憾	飢え	うじうじする	うとうとする	悦	懊惱	怖/お/ーじ/ーる/ーじけ/ーる/こわ	恐/ーれる/ーろしがる
	落ち着き	衰え	悲し/ーみ/ーむ/ーがる	がらがら	痒/ーみ	がんがんとする	喜(き)	ぎすぎすする	恐縮する	嫌う
	きりきりする	ぐうぐう	ぐずぐずする	くたくた	ぐたぐた	悔/く/ーい/く/や/ーむ	くつろぐ	くらくらする	くるくる	苦し/ーむ/ーめる
	倦怠	興奮	こりこりする	ころころする	ごろごろする	恨(こん)	困惑	寂しさ	ざらざらする	慕わしさ
	嫉妬	しょぼしょぼ	じんじん	好き	ずきずきする	(嫉)/そね/ーみ/ーむ	楽し/ーみ/ーむ/ーがる	だらだらする	ちくちくする	躊躇する
	痛(つう)	疲れる	痛痒	でれでれする	怒(ど)	動悸	とろとろする	懐かしさ	悩/ーみ/ーむ/ーます	憎/ーしみ/ーむ
	にこにこする	にたにたする	にやにやす	(妬)/ねた/ーみ/ーむ	熱(ねつ)	眠り	はあはあ	はきはきする	恥/は/ーじ/ーらう/ーる/は/ーずか/ーし/ーがる/ーむ	悲(ひ)
	悲喜	疲弊する	ひやひやす	ひりひりする	びりびりする	びりびりする	ふうふう	ふらふらする	ぶるぶるする	ふわふわする
	へとへと	へらへらす	ぼやぼやす	ぼんぼん	(感)/まど/ーい/ーう/ーわす	(迷)/まよ/ーい/ーう	むかつ/ーき/ーく	むかむかする	めまい	眩暈
	もじもじする	(酔)/よ/ーい/ーう	痒(よう)	喜/ーび/ーぶ/ーばす	楽	攀縮	(煩)/わ/ーず/ーら/ーい/ーう/ーわす	戦慄き		

※ 表中の網かけ部分は、三次③の他に、三次①にも該当する語もある。

「③身体部位が関与した感覚によって生じた概念を表す語」は108語であった。

最後に、「④身体全体や部位を通じて発せられる雰囲気を表す語」の結果を〈表 11-4〉に示す。

〈表 11-4〉 「④身体全体や部位を通じて発せられる雰囲気を表す語」の「三次身体語彙」

分類項目	所属語彙									
身体全体や部位を通じて発せられる雰囲気(78語)	意	勢い	威勢	嫌気	インスピレーション	うそ	エゴ	エスプリ	エネルギー	オーラ
	影	形	ガッツ	勘	感じ	気	気宇	機嫌	気色	気配
	気風	気分	気骨	気持ち	コケットリー	志	媚び	根気	根性	コンディション
	コンプレックス	性	情(じょう)	神	心性	姿	スタイル	ストレス	精	勢威
	センス	センセーション	相	態	魂	血	力	調子	テクスチャ	テレパシー
	テンション	度胸	情け	ニュアンス	熱	念	パーソナリティ	魄	恥	バックボーン
	パワー	パンチ	フィードバック	プライド	プレッシャー	ポエジー	貌	脈	ムード	メンツ
	面目	メンタリティー	容	欲	リビドー	リラックス	ルックス	霊		

※ 表中の網かけ部分は、三次④の他に、二次②にも該当する語もある。

この範疇に所属する身体語彙は 78 語であった。「三次身体語彙」に所属する語彙の中で、最少である。

「三次身体語彙」の全体像を整理すると、「②身体部位を通じて発せられる心理的状态を表す語」が 141 語で、最も多く、続いて、「①心理活動そのものを表す語」が 109 語確認できた。「③身体部位が関与した感覚によって生じた概念を表す語」が 108 語、「④身体全体や部位を通じて発せられる雰囲気を表す語」が 78 語の順であった。

また、「泣く、嗚咽する、笑う」のように、「二次身体語彙」と「三次身体語彙」の双方に該当する語があった。

同様に、「三次身体語彙」の分類①と、②の双方に該当する語や、「三次身体語彙」の分類①と分類③の双方に該当する語も確認できた。

3.3 語種による身体語彙特徴についての考察

本節では、<表 9-1>～<表 11-4>の身体語彙リスト（以下、「リスト」と略述する）に収録された「一次～三次」の各レベルに所属する身体語彙を「語種」のにより、

- ①和語
- ②漢語
- ③外来語
- ④混種語

に分類し、<表 12-1>～<表 14-4>はその分類項目に基づき、各分類の所属語彙と所属語彙数を整理した結果を示すものである。

なお、語種の判別は「Web 茶まめ：各種 UniDic を使用した形態素解析ツ（国立国語研究所）、以下「Web 茶まめ」と略称）」に拠った。

3.3.1 「語種」の面からの「一次身体語彙」に関する考察

「一次身体語彙」の語種による分類を<表 12-1>～<表 12-4>に示す（<表 9-1>～<表 9-4>の記載順）。

まず、「①頭部」に所属する「一次身体語彙」を語種の面から分析して得た結果を<表 12-1>に示す。

<表 12-1>語種による「一次身体語彙①」の分類

分類項目		所属語彙										
頭部 (192語)	身体外部 (108語)	和語 (78)	髪	前髪	後ろ髪	後れ髪	頭	頭(かしら)	頭(かぶり)	頭(こうべ)	頭(ず)	頭(つむり)
			かぶり	角	額	おでこ	こめかみ	顔	べそ	頬	ほお	ほっぺた
			ほっぺ	鯉(えら)	面(おも)	面(おもて)	面(つら)	眉	まゆ毛	睫	目	眼
			眼(まなこ)	目先	目角	目頭	目尻	目もと	目玉	瞳	まなじり	まぶた
			睛	鼻	鼻先	鼻梁	鼻面	小鼻	鼻溝	鼻毛	耳	耳垂れ
			耳たぶ	小耳	耳朶(じだ)	耳もと	口	口もと	口先	唇	上唇	下唇
			くちばし	ひげ	口ひげ	ほおひげ	あごひげ					
		首	小首	首根っこ	喉	喉くび	喉もと	頸	うなじ			
		漢語 (23)	旋毛	頭髪	頭角	前頭	後頭	頭頂	頭皮	頭蓋	鬢	人中
			面	眼球	眼窩	瞳孔	眼瞼	眸	眸子	鼻孔	耳殻	外耳
	口(こう)		口腔	鬚髯								
	外来語 (6)	ヘア	ヘッド	フェース	プロフィール	ボーカフ フェイス	ネック					
		混種語 (1)	小鬢									
	身体内部 (84語)	和語 (24)	頭	脳	脳みそ	頬骨	鼻筋	鼻柱	喉	のど	のどちんこ	のどひこ
			舌	べろ	歯	きば	八重歯	前歯	奥歯	糸切り歯	親知らず	牙
			舌端	舌先	舌の根	首筋						
		漢語 (59)	三叉神経	頭骨	頭蓋骨	脳幹	間脳	中脳	大脳皮質	脳下垂体	大脳	小脳
			脳髄	脳細胞	脳漿	脳膜	前頭葉	側頭葉	角膜	網膜	涙腺	視床
			鼻腔	中耳	内耳	鼓膜	口蓋	軟口蓋	硬口蓋	口蓋垂	喉頭	咽頭
咽喉			口蓋扁桃	扁桃	扁桃腺	声門	声帯	歯茎	歯肉	歯根	歯髄	
歯槽			しぎん	門歯	犬歯	臼歯	乳歯	知歯	知恵歯	舌頭	舌尖	
顎骨			甲状腺	頸髄	頸骨	頸椎	頸動脈	視神経	聴神経	中枢神経		
外来語 (0)		-										
		混種語 (1)	永久歯									

「頭部」では、「身体外部」と「身体内部」に分かれ、「身体外部」では、和語が78語と最も多く、漢語が23語、外来語が6語、混種語が1語のみであった。

一方、「身体内部」では、漢語が59語と最も多く、和語が24語、外来語は見当たらなかった。混種語が1語あった。

次に、「②軀体部」に所属する身体語彙を語種から分析した結果を<表 12-2>に示す。

「軀体部」でも「頭部」と同様に、「身体外部」では、和語が35語で、全体の71語の半分を占めており、漢語は31語、外来語は5語であった。混種語は見られなかった。

一方、「身体内部」では、漢語が72語で、全体の75.8%に上り、和語は19語、外来語は「ハート」の1語のみであった。混種語が3語あった。

<表 12-2> 語種による「一次身体語彙-②」の分類

分類項目		所属語彙										
躯体部 (166語)	身体外部 (71語)	(3和語)	肩	胸	胸毛	懐	脇	前脇	小脇	わき毛	乳	乳(ちち)
		(5漢語)	乳(にゅう)	おっぱい	乳首	乳房	背	背中	脊	腰	小腰	臀
		(1漢語)	尻	おいど	尾	尾ひれ	しっぽ	尾っぽ	尾羽	腋	腹(はら)	おなか
		(5外来語)	臍	臍(ほぞ)	隠し所	ちんちん	男根					
		(0混種語)	軀幹	胸部	胸腔	胸板	胴	腋	乳頭	けつ	肛門	臍帯
	身体内部 (95語)	(1和語)	痔	陰毛	陰唇	局所	局部	秘部	恥部	陰部	外陰部	陰核
		(1漢語)	会陰	龟头	陰茎	包茎	金玉	女陰	陰門	恥丘	陰阜	辜丸
		(1外来語)	恥毛									
		(5外来語)	ショルダー	バスト	ウエスト	ヒップ	ペニス					
		(0混種語)										
躯体部 (166語)	身体内部 (95語)	(1和語)	胸	懐	背筋	背骨	肋	あばら	あばら骨	肋骨	肋膜	腰骨
		(1漢語)	心	心(しん)	はらわた	腹(はら)	おなか	横っ腹	中っ腹	下腹	肝	
		(7漢語)	鎖骨	胸腔	胸腺	乳脂肪	乳腺	腰椎	椎骨	脊椎	脊髓	椎間板
		(7漢語)	尾骨	尾てい骨	心房	心室	心臓	心筋	肺	肺尖	肺門	胆
		(7漢語)	胆嚢	輸胆管	腸	十二指腸	小腸	盲腸	大腸	直腸	原腸	腸壁
	身体内部 (95語)	(1漢語)	食道	胃	胃壁	腑	膝	膝臓	腹筋	腹膜	骨盤	臓
		(1漢語)	肝臓	脾	脾臓	腎	腎臓	副腎	内分泌腺	消化腺	前立腺	膀胱
		(1漢語)	尿道	尿路	輸尿管	幽門	括約筋	肋間神経	噴門	丹田	泌尿器	気管
		(1漢語)	気管支	気囊	痔	輸精管	輸卵管	卵管	卵巣	精巣	子宮	産道
		(1漢語)	胎盤	羊膜								
身体内部 (95語)	(1外来語)	ハート										
	(3混種語)	貝殻骨	横隔膜	胃袋								

さらに、「③四肢部」に所属する身体語彙を語種の面から分析した結果を<表 12-3>に示す。

<表 12-3> 語種による「一次身体語彙-③」の分類

分類項目		所属語彙										
四肢部 (92語)	上四肢 (49語)	(3和語)	膊	羽	羽根	腕	かいな	右腕	左腕	腕首	腕っ節	手
		(0漢語)	手首	左手	右手	手先	手筋	手の平	掌	たなごころ	手もと	指
		(1漢語)	親指	人差し指	中指	たかたか指	薬指	紅差し指	小指	指先	拳	爪
		(8漢語)	上膊	下膊	前膊	肘	臂	肢	四肢	上肢	前肢	翼
		(0外来語)	上腕	手腕	虎口	母指	食指	無名指	指紋	掌紋		
	下四肢 (43語)	(1混種語)	手の甲									
		(2和語)	股	股関節	小股	外また	内また	大腿	太腿	膝	ひざもと	ひざ頭
		(6漢語)	脛	はぎ	踵	きびす	かかと	くびす	踝	くるぶし	足	足の裏
		(3漢語)	前足	後足	後ろ足	足首	足もと	足毛				
		(1漢語)	下肢	後肢	腿	大腿部	大腿骨	膝皿	膝蓋骨	膝蓋腱	脛骨	腱
下四肢 (43語)	(0外来語)	脚部	脚	半月板								
	(4混種語)	ひざ小僧	膝窩	アキレス腱	足の甲							

「四肢部」では「上四肢」と「下四肢」に分かれ、どちらも和語のほうが多かった。

「上四肢」では、和語が30語、漢語が18語で、外来語が見当たらなかった。混種語は1語のみであった。

「下四肢」では、和語が 26 語、漢語が 13 語、外来語が見当たらなかった。混種語は 4 語であった。

最後に、「④全身部」に所属する身体語彙を語種の面から分析した結果を<表 12-4>に示す。

<表 12-4> 語種による「一次身体語彙-④」の分類

分類項目		所属語彙										
全身部 (83語)	身体外部 (26語)	(1和語)	体	身	裸	軀	毛	毛(もう)	毛穴	皮	肌	はだえ
		(4漢語)	鱗	骸	傷	ほくろ	いぼ	こぶ	しみ	痣	殻	
		(3外来語)	ボディー	ヌード	スキン							
		(0混種語)	—									
	身体内部 (57語)	(7和語)	腺	椎	筋	骨	骨(こつ)	脂	こぶ			
		(4漢語)	汗腺	皮脂腺	関節	皮下組織	肉	筋肉	髄	骨髄	神経	運動神経
			感覚神経	末梢神経	副交感神経	自律神経	迷走神経	神経細胞	交感神経	血管	血清	毛細血管
			毛細管	毛管	赤血球	白血球	血小板	脈	静脈	大静脈	動脈	大動脈
			骨節	筋骨	軟骨	硬骨	膜	粘膜	弁膜	皮膜	結膜	骨膜
		(2外来語)	脂肪	体脂肪	内臓脂肪	皮下脂肪						
(4混種語)	ニューロン	リンパ										
(4混種語)	リンパ腺	リンパ節	リンパ管	リンパ球								

「全身部」でも「頭部」と「軀体部」と同様に、「身体外部」では、和語が 19 語、漢語が 4 語、外来語が 3 語であった。混種語は見られなかった。

また、「身体内部」では、漢語が 44 語と圧倒的に多く、和語が 7 語、外来語が 2 語であった。混種語は 4 語あった。

3.3.2 「語種」の面からの「二次身体語彙」に関する考察

「二次身体語彙」の語種による分類を<表 13-1>～<表 13-3>に示す(<表 10-1>～<表 10-3>の記載順)。

まず、「①身体部位活動そのものを表す語」の語種による分類結果を<表 13-1>に示す。

<表 13-1> 語種による「二次身体語彙①」の分類

分類項目	所属語彙									
和語 (141)	(喘)/あえぎ/ーぐ	あくび	仰ぐ	あざける	(焦)/あせり/ーる	暴れる	歩/ある-き/く/あゆみ/ーむ	慌てる	言う	(憤)/いきどお-り/ーる
	怒/ーり/ーる	息	抱く	いただく	嘶く	(祈)/いのり/ーる	いびき	いらだつ	飲(いん)	動/ーき/ーく/ーかす
	うごめ/ーく/ーかす	歌う	疑/ーい/ーう	打つ	(唖)/うな-り/ーる	(呻)/うめ-き/ーく	恨/うら-み/ーむ	羨む	うろちよろする	(起)/ーきる/ーこす
	おしっこ	(踊)/おど-り/ーる	驚/ーき/ーく	おなら	慄/ーき/ーく	おびえる	覚える	思/ーい/ーう	お漏らし	泳ぐ
	書く	嗅ぐ	がくがくする	がたがたする	(傾)/ーく/ーける	語/ーり/ーる	悲/ーしみ/ーしむ	(嗜)/ーじる/ーむ	(駈)/ーける/ーる	渴/ーき/ーく
	考/ーえ/ーえる	感/ーじ/ーじる	聞/ーく/ーかす	きよときよとする	きよるときよする	(食)/く-う/ーわす/ーらう/ーらす/た-べる	くしゃみ	狂/ーい/ーう	答える	転/ーがる/ーがす/ーげる/ーばす/ーび/ーぶ
	さえず/ーり/ーる	(叫)/さけ-び/ーぶ	ささやく	覚める	(駭)/さわ-ぎ/ーぐ	触/ーり/ーる	焦れる	(知)/ーる	しゃべる	吸う
	噎る	(座)/ーり/ーる	咳(せき)	咳/ーく	(嫉)/そね-み/ーむ	ぞくぞくする	(倒)/たお-す/ーれる	哮ける	尋ねる	叩く
	楽/ーしみ/ーしむ	黙/ーり/ーる	つぶやく	問う	(怒鳴)/どな-り/ーる	飛/ーび/ーぶ	どろどろする	眺める	眺める	泣/ーき/ーく
	敵める	悩/ーみ/ーむ/ーます	鳴/ーり/ーる/ーらす	憎/ーしみ/ーむ	逃げる	睨/ーみ/ーむ	願/ーい/ーう	(妬)/ねた-み/ーむ	眠/ーり/ーる	寝/ーる/ーかす
	望/ーみ/ーむ	ののしる	飲/ーむ/ーます	這う	吐く	走/ーり/ーる	(弾)/はず-む/ーます/ひ-く	駆/ーせる/ーける	話/ーす	跳/ーねる/ーぶ
	ひくひくする	びくびくする	びくびくする	びびる	吹く	踏む	振る	(震)/ーい/ーう/ーえる	ぶるぶるする	へいへいする
	べこべこする	吠/ーえる	微笑/ーみ/ーむ	舞う	(惑)/ーい/ーう	瞬/ーき/ーく	見る	むかつ/ーき/ーく	(咽)/ーぶ/ーる	持つ
	休む	揺/ーれる	酔/ーい/ーう	読む	喜/ーび/ーぶ/ーばす	忘れる	煩/ーい/ーう/ーわす	戦慄き	詫びる	わめく
	笑/ーい/ーう									
漢語 (34)	開眼	合掌	渴(かつ)	感(かん)	泣(きゅう)	拱手	睨(げい)	げつぶ	考(こう)	恨(こん)
	思(し)	嫉妬	笑(しょう)	触(しよく)	想	憎(ぞう)	走行	ため息	嘆(たん)	涕泣
	怒(ど)	動(どう)	動悸	慟哭	呐喊	悩(のう)	悲鳴	聞(ぶん)	へど	歩行
	鳴(めい)	落涙	慮	攀縮						
(15) 外来語	ウイック	オナニー	キス	キッス	キャッチ	セックス	チョップ	ネッキング	ハードリン	パンチ
	ベーゼ	ベッティン	ホルモン	マスター	モーション					
混種語 (48)	握手/ーする	(詠)/えい-じる/ーずる	エスケープ	怨/ーずる	嗚咽/ーする	嘔吐/ーする	お辞儀する	喚呼する	吟ずる	痙攣/ーする
	喧嘩/ーする	呼吸/ーする	号泣/ーする	叩首/ーする	叩頭/ーする	講/ーずる/ーじる	しゃっくり/ーする	ジャンプ(する)	小便/ーする	(信)/しん-じる/ーずる
	呻吟/ーする	スキップ(する)	ステップ(する)	スライディング(する)	スライド(する)	スリップ(する)	戦慄/ーする	咀嚼/ーする	ダッシュする	脱糞する
	嘆/たん-じる/ーずる/なげ-き/ーく	嘆息/ーする	談/ーじる/ーずる	吐瀉/ーする	吐乳/ーする	悩乱する	徘徊する	排尿する	拍手/ーする	墮暈/ーする
閉眼/ーする	睥睨/ーする	放屁/ーする	彷徨する	咆哮する	ホップ(する)	黙/ーする	論/ーじる/ーずる			

「①身体部位活動そのものを表す語」では、和語が 141 語と最も多く、漢語が 34 語であり、外来語が 15 語見られた。混種語は 48 語あった。

次に、「②身体部位の生理作用を表す語」の語種による分類結果を<表 13-2>に示す。「②身体部位の生理作用を表す語」では、「①」の結果と反対に、漢語が 93 語と最も多く、和語が 75 語、少数であったが、外来語が 6 語見られた。また混種語は 12 語であった。

<表 13-2> 語種による「二次身体語彙-②」の分類

分類項目	所属語彙										
身体部位の生理作用を表す語(186語)	和語(75)	垢	あくび	瘧	汗	跡	息	いびき	いぼ	膿	うんこ
		うんち	液	おしっこ	おなら	お漏らし	おわい	瘡	痂	がくがくする	がたがたする
		くそ	糞	尿	くしゃみ	げろ	こぶ	しこり	皸(しぼ)	しみ	腫
		白癬(しろくも)	白癬(しろなまず)	しわ	精子	精液	咳	ぞくぞくする	そばかす	血	乳(ちち)
		月の物	唾	つわり	手あか	とらふ	鳥肌	涙	にきび	乳(にゅう)	熱
		膿(のう)	歯ぐそ	吐く	涙	鼻ぐそ	鼻水	鼻血	斑紋	ひくひくする	びくびくする
		びくびくする	ふけ	(震) / -い / -う / -える	ぶるぶるする	ふん	ほくろ	瞬く	耳あか	耳ぐそ	耳かす
	夢精 / -する	目ぐそ	めまい	涎	戦慄き						
	漢語(93)	汗疹	痘痕	胃液	胃酸	遺尿	嘔吐	潰瘍	瘍	脚気	筋腫
		経水	月経	血圧	血液	血漿	結石	下痢	口臭	子宮筋腫	歯垢
		歯石	湿疹	死斑	紫斑	腫瘍	腫物	消化液	小水	小用	初経
		初潮	疹	荨麻疹	陣痛	膝液	水痘	早漏	体液	体臭	大便
		唾液	痰	胆液	胆汁	胆石	腸液	天然痘	動悸	痘疹	凍瘡
		痘瘡	癬	肉腫	乳汁	尿	尿石	粘液	膿汁	膿疱	膿瘍
排尿		白斑	麦粒腫	破水	疥	鼻汁	斑	斑点	秘結	皮膚	
便秘		糞尿	糞便	屁	閉経	へど	便	疱	疱疹	疱疹	
放尿		水泡瘡	眩暈	痘	痒疹	羊水	落涙	卵子	卵巣嚢腫	溜飲	
攀縮		老人斑	腋臭								
(6) 外来語	インスリン	ステロイド	パルス	ブルス	ホルモン	メンズ					
	(12) 混種語	遺精 / -する	呼吸 / -する	射精 / -する	しゃっくり / -する	受精 / -する	授精 / -する	小便 / -する	戦慄 / -する	排卵 / -する	排尿する
		放屁 / -する	リンパ液								

最後に、「③身体部位活動の生成結果を表す語」の語種による分類結果を<表 13-3>に示す。

<表 13-3> 語種による「二次身体語彙-③」の分類

分類項目	所属語彙									
身体部位活動の生成結果を表す語(16語)	(6) 和語	息	音	けが	声	力	やけど			
	(4) 漢語	傷	秋波	傷(しょう)	脈					
	(6) 外来語	スタミナ	スマイル	バイタリティー	パワー	プーイング	ボイス			
	(0) 混種語	—								

「③身体部位活動の生成結果を表す語」では、和語が6語、漢語が4語、外来語が6語であった。一方、混種語が見られなかった。

3.3.3 「語種」の面からの「三次身体語彙」に関する考察

「三次身体語彙」の語種による分類を<表 14-1>~<表 14-4>に示す(<表 11-1>~<表 11-4>の記載順)。

まず、「①心理活動そのものを表す語」の語種による分類結果を<表 14-1>に示す。

<表 14-1> 語種による「三次身体語彙-①」の分類

分類項目		所属語彙									
心理活動そのものを表す語 (109語)	和語 (81)	倦む	飽きる	懂れる	(焦)/あせり /ーる	暴れる	慌てる	哀れ/ーがる /ーむ	(憤)/いき どおーり/ー る	怒/ーり/ー る	いやいや
		いらだつ	うきうきす る	疑/ーい/ー う	恨/うらーみ/ ーむ/ーまし がる	羨む	愛/うれーい /ーえる	愁/うれーい /ーえる	うろつく	怖/おーじ る/ーじける/ こわーがる	おぞおぞ
		恐る恐る	恐/ーれる/ ーるしがる	驚/ーき/ー く	慄/ーき/ー く	おめおめ	おびえる	思/ーい/ー う	悲し/ーみ/ ーむ/ーがる	考え/ーる	嫌う
		悔/くーい/く やーむ	くつろぐ	ぐらぐらす る	狂/ーい/ー う	苦し/ーむ/ ーめる	恋/ーう/ー しがる	志す	媚び/ーる	困る	こわごわ
		さばさばする	寂しがる	さまよう	(騒)/さわぎ /ーぐ/ーがす	しおしお	慕/ーう	しぶしぶ	焦れる	(嫉)/そね み/ーむ	そわそわす る
		楽し/ーみ/ ーむ/ーがる	ためらう	疲れる	つくづく	つらつら	どきどきす る	戸惑う	泣/ーき/ー く	悩/ーみ/ ーむ/ーます	憎/ーしみ/ ーむ
		睨/ーみ/ーむ	願/ーい/ー う	(妬)/ねた み/ーむ	望/ーみ/ーむ	のめめ	恥/はじーら う/ーる/は ずかしーが る/ーむ	びくびくす る	びびる	震/ーい/ー う/ーえる	微笑/ーみ/ ーむ
		(惑)/まど ーい/ーう/ー わす	(迷)/まよ ーい/ーう	むかつ/ーき /ーく	(咽)/むせ ぶ/ーる	(酔)/よ ーい/ーう	よくよく	喜/ーび/ー ぶ/ーばす	わくわくす る	(煩)/わづ らーい/ーう /ーわす	戦慄き
	笑/ーい/ーう										
	(5) 漢語	想	憎(ぞう)	悲鳴	慮	攀縮					
(1) 外来語	ドリーム										
(2) 混種語	安堵する	怨/ーずる	嗚咽/ーする	感/ーじ/ーじ る/ーずる	危惧する	気はる	恐縮する	緊張する	懸念する	信/ーじる/ ーずる	
	心配する	戦慄/ーする	嘆/たんーじ る/ーずる/ なげき/ー る	嘆息/ーする	躊躇する	動揺する	念/ーじる/ ーずる	悩乱する	徘徊する	疲弊する	
	睥睨/ーする	彷徨する									

「①心理活動そのものを表す語」では、和語が81語と最も多く、漢語が意外と5語のみで、外来語は1語のみであった。混種語は22語で、2番目に多かった。

「②身体部位を通じて発せられる心理的状态を表す語」分類結果を<表 14-2>に示す。

<表 14-2> 語種による「三次身体語彙-②」の分類

分類項目		所属語彙									
身体部位を通じて発せられる心理的状态を表す語 (141語)	和語 (98)	飽きる	(焦)/あせり /ーる	哀れ/ーがる /ーむ	(憤)/いき どおーり/ー る	怒/ーり/ー る	いそいそ	萎靡	いやいや	いらいら	いらだつ
		うかうかする	うずうずす る	うきうきす る	疑/ーい/ー う	うはうは	羨/うらーみ/ /ーむ/ーまし がる	羨む	愛/うれーい /ーえる	愁/うれーい /ーえる	怖/おーじ る/ーじける/ こわーがる
		恐/ーれる/ ーるしがる	恐る恐る	おたおたす る	落ち着き	おどおど	驚/ーき/ー く	慄/ーき/ー く	おびえる	おろおろす る	がたがたす る
		かちかち	悲し/ーみ/ ーむ/ーがる	がぶがぶ	かりかりする	嫌う	くさくさす る	くしゃく しゃ	悔/くーい/ くやーむ	くよくよす る	ぐらぐらす る
		狂/ーい/ー う	苦し/ーむ/ ーめる	恋/ーう/ー しがる	こせこせする	こちこち	困る	さばさばす る	寂しがる	さまよう	しおしお
		しぶしぶ	そわそわす る	慕/ーう	じりじり	焦れる	しゃあしや あ	すごすご	せかせかす る	(嫉)/そね み/ーむ	楽し/ーみ/ ーむ/ーがる
		ためらう	つくづく	つらつら	戸惑う	疲れる	どきどきす る	悩/ーみ/ ーむ/ーます	憎/ーしみ/ ーむ	睨/ーみ/ー む	ぬげぬげ
		(妬)/ねた み/ーむ	のうのうす る	のびのびす る	恥/はじーら う/ーる/は ずかしーが る/ーむ	はらはらす る	びくびくす る	びびる	ぷりぷり	ふわふわす る	ほくほく
	ぼろぼろ	まごまごす る	(惑)/まど ーい/ーう/ー わす	(迷)/まよ ーい/ーう	むかつ/ーき /ーく	むくむく	むしゃく しゃ	むずむずす る	むらむら	もそもそ	
	もぞもぞ	もだえ	もやもやす る	やきもきする	(酔)/よ ーい/ーう	喜/ーび/ー ぶ/ーばす	わくわくす る	(煩)/わづ らーい/ーう /ーわす			
(1) 漢語	鬱	懊惱	興奮	困惑	失心	嫉妬	憔悴	消沈	心配	衰弱	
	喪心	頹廃	頹唐	憂鬱							
(1) 外来語	エキサイト	エクスタ シー	エンジョイ	ジェラシー	ショック	スリル	ダメージ	デリカシー	ノスタルジ ア	パッション	
	ヒス	フィーバー	フラスト レーション	ペーソス	ホームシ ック	メランコ リー					
(1) 混種語	怨/ーずる	危惧する	気はる	恐縮する	緊張する	倦怠する	躊躇する	動揺する	悩乱する	疲弊する	
	睥睨/ーする	彷徨する	茫然自失す る								

「②身体部位を通じて発せられる心理的状态を表す語」では、「①」と同様に、和語が98語と最も多く、漢語が14語、外来語が16語の順であった。混種語は13語あった。

外来語、漢語、混種語に、あまり大差が見られなかったが、漢語よりも外来語のほうが数が多いことに筆者が注目する。

さらに、「③身体部位が関与した感覚によって生じた概念を表す語」の分類結果をく表14-3>に示す。

<表 14-3> 語種による「三次身体語彙-③」の分類

分類項目	所属語彙									
身体部位が関与した感覚によって生じた概念を表す語(83)	哀れ/ーがる/ーむ	いじいじする	(憤)/いきどお/ーり/ーる	怒/ーり/ーる	痛/ーみ/ーむ/ーましき	いらだつ	恨/うら/ーみ/ーむ/ーましがる	羨む	飢え	うじうじする
	うとうとする	怖/お/ーじる/ーじける/こわ/ーがる	恐/ーれる/ーろしがる	落ち着き	衰え	悲し/ーみ/ーむ/ーがる	がらがら	痒/ーみ	がんがんする	ぎすぎすする
	嫌う	きりきりする	ぐうぐう	ぐずぐずする	くたくた	ぐたぐた	悔/く/ーい/くや/ーむ	くつつぐ	くらくらする	くるくる
	苦し/ーむ/ーめる	こりこりする	ころころする	ごろごろする	寂しさ	ざらざらする	慕わしさ	しょぼしょぼ	じんじん	好き
	ずきずきする	(嫉)/そね/ーみ/ーむ	楽し/ーみ/ーむ/ーがる	だらだらする	ちくちくする	疲れる	でれでれする	とろとろする	懐かしさ	悩/ーみ/ーむ/ーます
	憎/ーしみ/ーむ	にこにこする	にたにたする	にやにやする	(妬)/ねた/ーみ/ーむ	熱(ねつ)	眠り	はあはあ	はきはきする	恥/は/ーらう/ーる/は/ーずか/ーし/ーがる/ーむ
	ひやひやする	ひりひりする	びりびりする	びりびりする	ふうふう	ふらふらする	ぶるぶるする	ふわふわする	へとへと	へらへらする
	ぼやぼやする	ぼんぼん	(怒)/まど/ーい/ーう/ーわす	(迷)/まよ/ーい/ーう	むか/ーつ/ーき/ーく	むかむかする	めまい	眩暈	もじもじする	(酔)/よ/ーい/ーう
喜/ーび/ーぶ/ーばす	(煩)/わず/ーら/ーい/ーう/ーわす	戦慄き								
(2)漢語	哀歎	畏縮	遺憾	悦	懊惱	喜(き)	倦怠	興奮	恨(こん)	困惑
(1)外来語	嫉妬	痛(つう)	痛痒	怒(ど)	動悸	悲(ひ)	悲喜	痒(よう)	楽	攀縮
(4)混種語	アンニュイ									
	安堵する	恐縮する	躊躇する	疲弊する						

「③身体部位が関与した感覚によって生じた概念を表す語」では、和語が83語と最も多く、漢語が20語、外来語が1語の順であった。混種語は4語あった。

最後に、「④身体全体や部位を通じて発せられる雰囲気を表す語」の語種による分類結果をく表14-4>に示す。

<表 14-4> 語種による「三次身体語彙-④」の分類

分類項目	所属語彙										
身体全体や部位を通じて発せられる雰囲気(78)	(8)和語	勢い	うそ	影	媚び	姿	血	力	情け		
	(3)漢語	意	威勢	嫌気	形	気	勘	気宇	機嫌	気色	気配
		気風	気分	気骨	志	根気	根性	性	情(じょう)	神	心性
		精	勢威	相	態	魂	調子	度胸	熱	念	魄
		恥	貌	脈	面目	容	欲	霊			
	(1)外来語	インスピレーション	エゴ	エスプリ	エネルギー	オーラ	ガッツ	コケットリー	コンディション	コンプレックス	スタイル
		ストレス	センス	センセーション	テクスチャ	テレパシー	テンション	ニュアンス	パーソナリティ	バックボーン	パワー
		パンチ	フィーリング	プライド	プレッシャー	ポーズ	ムード	メンツ	メンタリティ	リビドー	リラックス
(2)混種語	ルックス										
	感じ	気持ち									

「④身体全体や部位を通じて発せられる雰囲気を表す語」では、漢語が 37 語で、それに続いて、外来語が 31 語、和語が 8 語であった。混種語は 2 語のみであった。

3.3.4 「語種」の面からの「身体語彙」に関する考察のまとめ

ここまでに考察した「一次～三次」の各レベルに所属する「身体語彙」について、「語種」の面から考察した結果の比較を<表 15>に整理して示すことにする。

<表 15> 語種による「一次～三次」身体語彙の分類の対照表

分類項目		各項目に所属する語種の数				
一次 身体 語彙	頭部 (192語)	身体外部(108語)	和語 (78)	漢語 (23)	外来語 (6)	混種語 (1)
		身体内部(84語)	和語 (24)	漢語 (59)	外来語 (0)	混種語 (1)
	躯体部 (166語)	身体外部(71語)	和語 (35)	漢語 (31)	外来語 (5)	混種語 (0)
		身体内部(95語)	和語 (19)	漢語 (72)	外来語 (1)	混種語 (3)
	四肢部 (92語)	上四肢(49語)	和語 (30)	漢語 (18)	外来語 (0)	混種語 (1)
		下四肢(43語)	和語 (26)	漢語 (13)	外来語 (0)	混種語 (4)
	全身部 (83語)	身体外部(26語)	和語 (19)	漢語 (4)	外来語 (3)	混種語 (0)
		身体内部(57語)	和語 (7)	漢語 (44)	外来語 (2)	混種語 (4)
	総数(533語)		和語 (238)	漢語 (264)	外来語 (17)	混種語 (14)
	分類項目		各項目に所属する語彙の数			
二次 身体 語彙	①身体部位活動そのものを表す語 (239語)		和語 (141)	漢語 (34)	外来語 (15)	混種語 (48)
	②身体部位の生理作用を表す語 (186語)		和語 (75)	漢語 (93)	外来語 (6)	混種語 (12)
	③身体部位活動の生成結果を表す語 (16語)		和語 (6)	漢語 (4)	外来語 (6)	混種語 (0)
	総数 (441語)		和語 (222)	漢語 (131)	外来語 (27)	混種語 (60)
分類項目		各項目に所属する語彙の数				
三次 身体 語彙	①心理活動そのものを表す語 (109語)		和語 (81)	漢語 (5)	外来語 (1)	混種語 (22)
	②身体部位を通じて発せられる心理的状态を表す語 (141語)		和語 (98)	漢語 (14)	外来語 (16)	混種語 (13)
	③身体部位が関与した感覚によって生じた概念を表す語 (108語)		和語 (83)	漢語 (20)	外来語 (1)	混種語 (4)
	④身体全体や部位を通じて発せられる雰囲気を表す語 (78語)		和語 (8)	漢語 (37)	外来語 (31)	混種語 (2)
	総数(436語)		和語 (270)	漢語 (76)	外来語 (49)	混種語 (41)

表で分かるように、「一次～三次」身体語彙を「語種」の面から分類すると、「一次身体語彙」では、漢語が 264 語、和語が 238 語で、拮抗している。外来語は 17 語、混種語は 14 語であった。

これに対して、「二次身体語彙」では、和語が 222 語、漢語が 131 語で、外来語が 27 語であった。混種語は 60 語であった。

また、「三次身体語彙」では、和語が 270 語と最も多く、それに続いて、漢語が 76 語で、外来語が 49 語であった。混種語は 41 語であった。

「二次身体語彙」と「三次身体語彙」の語種による分類では、和語の多さが特徴的であった。これは、「二次・三次」身体語彙の表す具体的な身体部位活動や生理作用、あるいは心理活動や、心理状態、感覚などには、日本語では、漢語よりも、固有の和語が多用されていると言える。

さらに、外来語の数を見ると、「一次」（17語）→「二次」（27語）→「三次」（49語）とほぼ和語と同じ傾向の増加傾向を見えている。和語同様の背景があるようにも考えられる。

3.4 品詞性による身体語彙特徴についての考察

本節では、「一次～三次」身体語彙の「品詞性」を検証する。そのため、〈表 9-1〉～〈表 11-4〉の「リスト」の各レベルに所属する身体語彙を整理することから始める。

次の〈表 16-1〉～〈表 16-3〉は、「リスト」の分類項目に基づき、各分類に該当する所属語彙を整理した結果を表したものである。

なお、調査は「Web 茶まめ」（国立国語研究所）をもとに行ったものである。

3.4.1 「一次身体語彙」の品詞性

「一次身体語彙」の品詞による分類結果を〈表 16-1〉に示す（リスト〈表 9-1〉～〈表 9-4〉の記載順）。

「一次身体語彙」は具体的な身体部位を表す語彙であるため、所属している語彙はすべて「名詞（普通名詞）」からなっている。

<表 16-1> 品詞性による「一次身体語彙」の分類

分類項目	所属語彙									
	髪	ヘア	前髪	後ろ髪	後れ髪	旋毛	頭髪	頭	頭(かしら)	頭(かぶり)
一次身体語彙 普通名詞	頭(こうべ)	ヘッド	頭(ず)	頭(つむり)	かぶり	頭角	前頭	後頭	頭頂	頭皮
	頭蓋	角	額	おでこ	こめかみ	鬢	小鬢	人中	顔	顔(かんばせ)
	べそ	頬	ほお	ほっぺた	ほっぺ	鰓(えら)	面	面(おも)	面(おもて)	面(つら)
	フェース	プロフィール	ボーカール フェイス	眉	まゆ毛	睫	目	眼	眼(まなこ)	目先
	目角	目頭	目尻	目もと	目玉	眼球	眼窩	瞳	瞳孔	まなじり
	まぶた	眼瞼	睛	眸	眸子	鼻	鼻先	鼻梁	鼻面	小鼻
	鼻溝	鼻孔	鼻毛	耳	耳垂れ	耳たぶ	耳殻	外耳	小耳	耳袋(じだ)
	耳もと	口	口(こう)	口もと	口先	口腔	唇	上唇	下唇	くちばし
	ひげ	口ひげ	ほおひげ	あごひげ	鬚髯	顎	上顎	下あご	えくぼ	鰭
	首	小首	首根っこ	ネック	喉くび	喉もと	頭	うなじ	三叉神経	頭骨
	頭蓋骨	脳	脳幹	間脳	中脳	大脳皮質	脳下垂体	大脳	小脳	脳髄
	脳細胞	脳漿	脳みそ	脳膜	前頭葉	側頭葉	頬骨	角膜	網膜	涙腺
	視床	鼻筋	鼻柱	鼻腔	中耳	内耳	鼓膜	口蓋	軟口蓋	硬口蓋
	口蓋垂	喉	のど	喉頭	咽頭	咽喉	のどちんこ	のどひこ	口蓋扁桃	扁桃
	扁桃腺	声門	声帯	舌	べろ	歯	きば	歯茎	歯肉	歯根
	歯槽	歯槽	しぎん	八重歯	前歯	奥歯	門歯	犬歯	糸切り歯	臼歯
	親知らず	乳歯	知歯	知恵歯	永久歯	牙	舌端	舌先	舌頭	舌尖
	舌の根	顎骨	甲状腺	頸髄	頸骨	頸椎	頸動脈	首筋	視神経	聴神経
	中枢神経	脳幹	肩	ショルダー	胸	胸部	胸毛	胸腔	胸板	バスト
	胴	懐	脇	前脇	小脇	わき毛	腋	乳	乳(ちち)	乳(にゅう)
	おっぱい	乳首	乳房	乳頭	背	背中	脊	腰	小腰	ウエスト
	臀	尻	けつ	ヒップ	おいど	肛門	尾	尾ひれ	しっぽ	尾っぽ
	尾羽	腋	尻	腹(はら)	おなか	臍	臍(ほぞ)	臍帯	痔	陰毛
	陰唇	局所	局部	秘部	恥部	陰部	外陰部	陰核	隠し所	会陰
	亀頭	ちんちん	陰茎	包茎	男根	ペニス	金玉	女陰	陰門	恥丘
	陰阜	辜丸	恥毛	鎖骨	貝殻骨	胸腔	胸腺	乳房	乳腺	背筋
	背骨	肋	あばら	あばら骨	肋骨	肋膜	横隔膜	腰骨	腰椎	椎骨
	脊椎	脊髄	椎間板	尾骨	尾てい骨	心	心(しん)	ハート	心房	心室
	心臓	心筋	肺	肺尖	肺門	胆	胆嚢	輸胆管	腸	はらわた
	十二指腸	小腸	盲腸	大腸	直腸	原腸	腸壁	食道	胃	胃袋
	胃壁	腑	脾	脾臓	腹筋	横っ腹	中っ腹	下腹	腹膜	骨盤
	臓	肝	肝臓	脾	脾臓	腎	腎臓	副腎	内分泌腺	消化腺
	前立腺	膀胱	尿道	尿路	輸尿管	幽門	括約筋	肋間神経	噴門	丹田
	泌尿器	気管	気管支	気嚢	輸精管	輸卵管	卵管	卵巣	精巣	子宮
	産道	胎盤	羊膜	臍	上臍	下臍	前臍	肘	臂	肢
	四肢	上肢	前肢	羽	羽根	腕	腕	かいな	右腕	左腕
	腕首	腕っ節	上腕	手	手首	左手	右手	手先	手筋	手の平
	掌	たなごころ	手の甲	手腕	手もと	虎口	指	親指	母指	人差し指
	食指	中指	たかたか指	薬指	紅差し指	無名指	小指	指先	指紋	掌紋
	拳	爪	下肢	後肢	股	股関節	小股	外また	内また	大腿
腿	太腿	大腿部	大腿骨	膝	ひざもと	ひざ頭	ひざ小僧	膝窩	膝皿	
膝蓋骨	膝蓋腱	脛	はぎ	脛骨	踵	きびす	かかと	くびす	踝	
くるぶし	踵	アキレス腱	足	足の裏	足の甲	前足	後足	後ろ足	足首	
足もと	脚部	脚	足毛	半月板	体	身	ボディ	裸	スード	
軀	毛	毛(もう)	体毛	毛穴	毛根	皮	表皮	皮膚	スキン	
肌	はだえ	殻	鱗	骸	傷	ほくろ	いぼ	こぶ	しみ	
痣	腺	リンパ腺	汗腺	皮脂腺	関節	椎	皮下組織	肉	筋	
筋肉	髄	骨髄	神経	運動神経	感覚神経	末梢神経	副交感神経	自律神経	迷走神経	
神経細胞	ニューロン	交感神経	リンパ	リンパ節	リンパ管	リンパ球	血管	血清	毛細血管	
毛細管	毛管	赤血球	白血球	血小板	脈	静脈	大静脈	動脈	大動脈	
骨	骨(こつ)	骨節	筋骨	軟骨	硬骨	膜	粘膜	弁膜	皮膜	
結膜	骨膜	脂	脂肪	体脂肪	内臓脂肪	皮下脂肪				

3.4.2 「二次身体語彙」の品詞性

「二次身体語彙」の品詞による分類結果を<表 16-2>に示す(リスト<表 10-1>~<表 10-3>の記載順)。

拓殖大学大学院言語教育研究科博士後期課程

<表 16-2> 品詞性による「二次身体語彙」の分類

分類項目		所属語彙									
二次身体語彙	動作性のある普通名詞(159語)	喘ぎ	握手	あくび	焦り	歩/-き/-み	憤り	怒り	息	祈り	いびき
		飲(いん)	ウインク	動き	疑い	唸り	呻き	恨み	嘔吐	怨	嗚咽
		お辞儀	おしっこ	踊り	驚き	オナニー	おなら	慄き	思い	お漏らし	開眼
		合掌	語り	渴(かつ)	悲しみ	渴き	考え	感じ	感(かん)	キス	キス
		キャッチ	泣(きゆう)	拱手	くしゃみ	狂い	睨(げい)	痙攣	喧嘩	げっぷ	考(こう)
		呼吸	号泣	叩首	叩頭	恨(こん)	さえずり	叫び	騒ぎ	触り	思(し)
		嫉妬	しゃっくり	笑(しょう)	触(しよく)	小便	呻吟	スマイル	座り	咳	セックス
		戦慄	想	憎(ぞう)	走行	咀嚼	嫉み	楽しみ	黙り	ため息	嘆(たん)
		嘆息	チョップ	涕泣	怒(ど)	動(どう)	動悸	憫哭	吐瀉	吐乳	嗚咽
		怒鳴り	飛び	泣き	悩み	鳴り	憎しみ	願ひ	妬み	妬み	ネッキング
	眠り	悩(のう)	望み	ハードリング	拍手	走り	パンチ	悲鳴	罽毘	プーイング	
	震い	聞(ぶん)	閉眼	睥睨	ペーゼ	ベッディング	へど	放屁	歩行	微笑/-み	
	マスターベーション	惑い	瞬き	むかつき	鳴(めい)	モーション	酔い	喜/-び	落涙	慮	
	鬱縮	煩い	戦慄き	笑い	遺精	遺尿	胃酸	下痢	射精	受精	
	授精	小水	小用	陣痛	遺漏	大便	つわり	排尿	排卵	破水	
	秘結	便秘	放尿	夢精	眩暈	めまい	溜飲	けが	やけど		
	垢	痣	汗	汗疹	跡	痘痕	胃液	いぼ	インスリン	膿	
	うんこ	うんち	液	おわい	潰瘍	瘡	瘍	痴	脚氣	傷	
	筋腫	くそ	糞	尿	経水	月経	血圧	血液	血漿	結石	
	げろ	口臭	瘤	子宮筋腫	歯垢	歯石	湿疹	死斑	紫斑	皸(しぼ)	
腫	腫瘍	腫物	消化液	初経	初潮	白癬(しろくも)	白癬(しろなまず)	しわ	疹		
蕁麻疹	膝液	水痘	スタミナ	ステロイド	精子	精液	そばかす	体液	体臭		
唾液	痰	胆液	胆汁	胆石	血	乳(ちち)	腸液	月の物	唾		
手あか	天然痘	痘疹	凍瘡	痘瘡	とらふ	鳥肌	癩	涙	にきび		
肉腫	乳(にゅう)	乳汁	尿	尿石	粘液	熱	膿(のう)	膿汁	膿疱		
膿瘍	歯くそ	白斑	麦粒腫	疥	バイタリタイ	潰	鼻くそ	鼻水	鼻汁		
鼻血	パルス	パワー	斑	斑点	斑紋	皮癬	ふけ	ブルス	ふん		
糞尿	糞便	屁	閉経	便	ボイス	疱	疱疹	疱疹	ホルモン		
水疱瘡	耳あか	耳くそ	耳かす	目くそ	メンス	痘	痒疹	羊水	涎		
卵子	卵巣嚢腫	リンパ液	老人斑	腋臭	音	傷	声	秋波	傷(しょう)		
力	脈										
分類項目		所属語彙									
二次身体語彙	動詞(185語)	喘ぐ	握手する	仰ぐ	あざける	焦る	暴れる	歩/ある-く/あゆ-む	慌てる	言う	憤る
		怒りる	抱く	いただく	嘶く	祈る	いらだつ	動/-く/-かす	うごめ/-く/-かす	歌う	疑う
		打つ	唸る	呻く	恨む	羨む	うろちよろする	詠/-じる/-ずる	エスケープする	怨ずる	嗚咽する
		起/-きる/-こす	お辞儀する	嘔吐する	踊る	驚く	慄く	おびえる	覚える	思う	泳ぐ
		がくがくする	書く	嗅ぐ	がたがたする	(傾)/-く/-ける	語る	悲しむ	(嘔)/-じる/-む	(駆)/-ける/-る	渴く
		考える	喚呼する	感じる	開/-く/-かす	きよときよとする	きよるときよるする	吟ずる	(食)/-く-う/-わす/-らう/-らす/-た-べる	狂う	痙攣する
		喧嘩する	呼吸する	号泣する	叩首する	叩頭する	講/-ずる/-じる	答える	転/-がる/-がす/-げ-る/-ばす/-ぶ	さえずる	叫ぶ
		ささやく	覚める	騒ぐ	触る	焦れる	知る	しゃっくり/-する	しゃべる	ジャンプ(する)	小便する
		信/-じる/-ずる	呻吟する	吸う	スキップ(する)	吸る	ステップ(する)	スライディング(する)	スライド(する)	スリップ(する)	座る
		咳く	戦慄する	ぞくぞくする	咀嚼する	嫉む	(倒)/たお-す/-れる	睨ける	叩く	ダッシュする	脱糞する
		楽しむ	黙る	嘆/たん-じる/-ずる/なげ-き/-く	嘆息する	談/-じる/-ずる	つぶやく	問う	吐瀉する	吐乳する	尋ねる
		唱える	怒鳴る	飛ぶ	どろどろする	眺める	泣く	舐める	悩/-む/-ます	鳴/-る/-らす	憎しむ
		逃げる	睨む	願う	妬む	眠る	寝/-る/-かす	悩乱する	望む	ののしる	飲/-む/-ます
		徘徊する	排尿する	這う	吐く	拍手する	走る	(弾)/はざ-む/-ます/ひ-く	駆/-せる/-ける	話す	跳/-ねる/-ぶ
		ひくひくする	びくびくする	びくびくする	びびる	痙攣する	吹く	踏む	振る	震/-う/-える	ぶるぶるする
		閉眼する	睥睨する	へいへいする	べこべこする	放屁する	彷徨する	吠える	咆哮する	微笑む	舞う
		(惑)う	瞬く	見る	むかつく	黙する	(咽)/むせ-ぶ/-る	持つ	ホップ(する)	休む	揺れる
		酔う	読む	喜/-ぶ/-ばす	論/-じる/-ずる	忘れる	(煩)/わす-らう/-わす	詫びる	わめく	笑う	遺精する
		射精する	受精する	授精する	排卵する	夢精する					

「二次身体語彙」は「名詞」と「動詞」の2種類の品詞からなっている。その品詞による分類にあたって、名詞については、それぞれの語彙の持つ「動作性」に着目し、「名詞」>「普通名詞」をさらに「動作性のある/ない普通名詞」に分け、「あくび、息、いびき」のような「動作性のある普通名詞」の159語と、「しわ、涙、ふけ」のような「動作性のない普通名詞」の142語の2種類が見られた。

なお、「二次身体語彙」>「動作性のない普通名詞」は、身体部位の生理作用を表す語であるため、その背後に体の自主的な「動作性」が隠されていると見なすことができる。

また、「二次身体語彙」の「動詞」は脳や、目、鼻、口、舌、手、体全体の具体的な身体部位が関与する具象的な活動によって生じた動作を表す語である。例えば、

「脳」の活動を表す語には「疑う、恨む、羨む」

「目」の活動を表す語には「開眼、閉眼、見る」

「鼻」の運動を表す語には「嗅ぐ」

「口」の活動を表す語には「喘ぐ、言う、嘶く」

「舌」の運動を表す語には「舐める」

「手」の活動を表す語には「握手する、合掌、拱手」

「体全体」の動作によって生じた語には「焦る、暴れる、慌てる」などがある。

本調査では、これらの、身体部位の具象的な活動によって生じた動作そのものを表す語数は185語であった。

なお、「焦る、狂う」などは「脳」の活動と「体全体」動作の双方の意味を持つ。

3.4.3 「三次身体語彙」の品詞性

「三次身体語彙」の品詞による分類結果を<表 16-3>に示す（リスト<表 11-1>～<表 11-4>の記載順）。

「三次身体語彙」に身体部位を通じて発せられる心理的状态や、身体部位が関与した感覚によって生じた概念を表すオノマトペが含まれているため、品詞性の分類にあたっては、「一次・二次」に現れた「名詞」、「動詞」のほかに、「副詞」、「形状詞（ママ）」も加え、4種類に分析をした。

名詞については、それぞれの語彙の持つ「動作性」と「状態性」に着目し、「普通名詞」をさらに「焦り、怒り」のような「動作性のある普通名詞」と、「オーラ、根性」のような「動作性のない普通名詞」、さらに「鬱、ショック」のような「状態性を表す普通名詞」に分けた結果、「動作性のある普通名詞」が69語、「動作性のない普通名詞」が71語、「状態を表す普通名詞」が52語であった。また、「動詞」は134語であった。

さらに、オノマトペの「副詞」（いやいや、おずおずなど）と、「形状詞」（うはうは、

へとへと) がそれぞれ 40 語と 4 語であった。

なお、「普通名詞」と「形状詞」の双方に該当する語は「いらいら」の 1 語のみであった。

<表 16-3> 品詞性による「三次身体語彙」の分類

分類基準		所屬語彙										
三次身体語彙	名詞	動作性のある普通名詞 (69語)	焦り	哀れ	意	勢い	憤り	怒り	疑い	恨み	憂/ーい/ーえ	愁/ーい/ーえ
			怨	嗚咽	驚き	慄き	思い	悲しみ	勘	考え	感じ	悔/くーい/くやーみ
			狂い	気配	志	媚び	恨(こん)	困惑	騒ぎ	嫉妬	心配	戦慄
			想	憎	楽しみ	嘆息	踟躕	怒(ど)	動悸	ドリーム	泣き	悩み
			憎しみ	睨み	願い	嫉み	妬み	眠り	念	望み	恥	悲(ひ)
			悲喜	震い	睥睨	微笑み	惑い	迷い	むかつき	めまい	眩暈	酔い
			欲		喜び	慮	ルックス	攀縮	煩い	戦慄き	笑い	
			痛/ーみ/ーまし しさ	嫌気	インスピレ ーション	うそ	エゴ	エスプリ	エネルギー	オーラ	影	形
			気	気宇	機嫌	気色	気風	気分	気骨	気持ち	根気	根性
		コンプレッ クス	ガッツ	コケツトリ ー	コンディシ ョン	寂しさ	慕わしさ	情(じょう)	神	心性	姿	
		スタイル	ストレス	精	性	勢威	センス	センセーシ ョン	相	態	魂	
		血	力	調子	テクスチャ	テレパシー	テンション	度胸	情け	懐かしさ	ニュアンス	
		熱(ねつ)	パーソナリ ティ	魄	恥	バックボ ー	パワー	パンチ	フィーリン グ	プライド	プレッシャ ー	
		貌	ボエジー	脈	ムード	メンツ	メンタリテ ィー	面目	容	リビドー	リラックス	
		壺										
状態を表す普通名詞 (52語)	萎靡	いらいら	鬱	エキサイト	エクスタシ ー	エンジョイ	懊悩	落ち着き	興奮	困惑		
	ジェラシー	失心	ショック	憔悴	消沈	衰弱	スリル	喪心	ダメージ	デリカシー		
	頹廃	頹唐	ノスタルジ ア	パッション	ヒス	フィーバー	フラストレ ーション	ペーソス	ホームシッ ク	メランコリ ー		
	憂鬱	哀歎	哀れ	アンニュイ	畏縮	憤り	怒り	恨み	遺憾	飢え		
	悦	衰え	痒/ーみ	喜(き)	倦怠	好き	痛	痛痒	悲(ひ)	悲喜		
痒(よう)	楽											
副詞(40語)	いやいや	おずおず	恐る恐る	おめおめ	こわごわ	しおしお	しぶしぶ	つくづく	つらつら	のめめめ		
	よくよく	いそいそ	いらいら	おどおど	かちかち	がぶがぶ	くしゃくしゃ	しゃあしゃあ	じりじり	すごすご		
	ぬけぬけ	ぶりぶり	ほくほく	ぼろぼろ	ぼんぼん	むくむく	むしゃくしゃ	むらむら	もそもそ	もぞもぞ		
	がらがら	ぐうぐう	くたくた	くるくる	しょぼしょぼ	じんじん	はあはあ					
形状詞(4語)	うはうは	こちこち	ぐたぐた	へとへと								
	倦む	飽きる	憧れる	焦る	暴れる	慌てる	衰れ/ーが る/ーむ	安堵する	憤る	怒る		
	いじいじする	いらだつ	うかうかする	うきうきする	うじうじする	うずうずする	疑う	うとうとする	恨/ーむ/ーましがる	羨む		
	憂える	愁える	うろつく	怨ずる	嗚咽する	怖/おーじ る/ーじけ る/こわー がる	恐/ーれる/ ーろしがる	おたおたする	驚く	慄く		
怯える	思う	おろおろする	がたがたする	悲し/ーむ/ ーがる	かりかりする	考える	がながんする	感/ーじる ーずる	危惧する			
ぎすぎすする	きりきりする	気はる	恐縮する	嫌う	緊張する	くさくさする	ぐずぐずする	くつろぐ	悔む			
くよくよする	くらくらする	ぐらぐらする	狂う	苦し/ーむ/ ーめる	懸念する	恋/ーう/ ーしがる	志す	こせこせする	媚びる			
困る	こりこりする	こころする	ごろごろする	さばさばする	寂しがる	さまよう	ざらざらする	(騒)/さわ ーぐ/ーが す	慕う			
焦れる	信/ーじる/ ーずる	心配する	ずきずきする	せかせかする	戦慄する	そわそわする	嫉む	楽し/ーむ/ ーがる	ためらう			
だらだらする	嘆/たん ーじる/ーず る/なげ き/ーく	嘆息する	ちくちくする	踟躕する	疲れる	でれでれする	動揺する	どきどきする	戸惑う			
とろとろする	泣く	悩/ーむ/ ーます	憎む	にこにこする	にたにたする	にやにやする	睨む	願う	妬む			
念/ーじる/ ーずる	のうのうする	望む	悩乱する	のびのびする	徘徊する	はきはきする	恥/はじ ーらう/ーる/ はずかし ーがる/ーむ	はらはらする	びくびくする			
びびる	ひやひやする	ひりひりする	びりびりする	びりびりする	ふうふう	ふらふらする	ぶるぶるする	震/ーう/ ーえる	ふわふわする			
疲弊する	睥睨する	へらへらす	彷徨する	微笑む	ぼやぼやする	惑/ーう/ ーわす	迷う	むかつく	咽/ーぶ/ ーる			
酔う	喜/ーぶ/ ーばす	煩/ーう/ ーわす	笑う									

3.4.4 「品詞性」による「身体語彙」に関する考察のまとめ

ここまでに考察した「一次～三次」身体語彙と所属する品詞の比較を<表 17>に整理して示すことにする。

<表 17> 品詞性による「一次～三次」身体語彙の分類の対照表

品詞 身体語彙のレベル	名詞			動詞	副詞	形状詞
	動作性のある普通名詞	動作性のない普通名詞	状態を表す普通名詞			
一次身体語彙	—	○	—	—	—	—
二次身体語彙	○	○	—	○	—	—
三次身体語彙	○	○	○	○	○	○

「一次～三次」身体語彙を「品詞性」の面から分類すると、「一次身体語彙」は、全て「動作性のない普通名詞」からなっているのに対して、「二次身体語彙」には「動作性のない普通名詞」に、「動作性のある普通名詞」と「動詞」が加わった。

また、「三次身体語彙」には、「動作性のある普通名詞」、「動作性のない普通名詞」、「動詞」に加え、「状態を表す普通名詞」と、心理的状态や感覚によって生じた概念を表すオノマトペの「副詞」、「形状詞」が見られた。

そこで、「二次身体語彙」と「三次身体語彙」の品詞性の違いは、「状態を表す普通名詞」の有無と「副詞」、「形状詞」に当てはまるオノマトペの語彙の有無であると言えよう。

3.5 本章のまとめ

本章では、先行研究を踏まえて立てた「一次身体語彙」、「二次身体語彙」、「三次身体語彙」の3類型を基準に、身体語彙をより広範に採集することを目的として、『分類語彙表』に対象範囲を拡げて身体語彙を採集した。

次に、3類型にそれぞれ、「一次身体語彙」については、その所在位置、「二次身体語彙」・「三次身体語彙」については、その語の「発現要因」という分類基準を設け、それぞれに所属する身体語彙数を確認した。

また、「語種」の面から、「リスト」の分類項目に基づき、「一次～三次」身体語彙に該当する所属語彙を整理し、「和語」、「漢語」、「外来語」、「混種語」の四つの分類から考察を試みた。

最後に、「品詞性」の観点から、「リスト」の分類項目に基づき、「一次～三次」身体語彙に該当する所属語彙を整理し、考察を試みた。

第4章 日本語の慣用表現に関する先行研究

日本語の慣用表現に関する先行研究の発展については、呉（2016・2017）の「萌芽期、模索期、確立期、成長期、発展期」という時代区分が、これまでの中で網羅的で各時代の特徴を表していると言う点で最も適当なものであると筆者は考えるが、慣用表現に関する研究の歴史は、呉（同上）の指摘したものより、さらに以前に遡ることができる。従って、本研究では呉（同上）の主張した5つの時期を踏まえた上で、さらに慣用表現の研究史を遡り、各時期の区切りとそれぞれの代表的な研究を挙げて、再検討してみたい。

4.1 呉（2016・2017）の区分についての検討

呉（2016）は、「時系列に沿って、日本語における慣用句研究の対象が時代が下るにつれてどのように変化してきたのか」を整理し、慣用表現研究の歴史が大きく「萌芽期・模索期・確立期・成長期・発展期」の5つの時期に分けられるとしている。

1) 萌芽期（1942年～）：

呉（2016）は、この時期の代表として、白石（1942・1950・1969）による一連の研究を取り上げて検討し、白石（1942・1950）の研究について、

白石は一連の研究で慣用句の問題を取り扱っており、慣用句の研究に主導的な役割を果たした。しかし、一連の研究には慣用句研究への萌芽は認められるものの、慣用句の本質規定があいまいになっているため、開花するに至らなかったように思われる。（中略）当時の研究と現在の研究との関連性と区別を明確にする必要があると考えられる。
(p. 89)

として、さらに、白石（1969）が取り上げている慣用句について、

現在慣用句として扱わないものが散見していることを、垣間見ることができる。（中略）後に待遇表現やオノマトペに統合されるものが多い。
(p. 90)

と述べている。

2) 模索期（1970年代～）：

呉（2016）は、70年代からは「慣用句の認定に関する研究が行われたが、慣用句研究の模索期というべき時期である。」とし、

この段階においても依然として「慣用句」「慣用語句」という呼び名が使用されている。また、「慣用的ないいまわし」「感応的なくみあわせ」という呼び名を使う研究者も

いる。しかし、その中でも「慣用句」という用語が多用され、一般的な言い方になる傾向が見られる。そして、この段階で最も議論がなされたのは、慣用句と周辺概念との区別についてである。(pp. 90-91)

と述べている。この時期の代表として、宮地 (1974)、高木 (1974) を取り上げて検討し、ほかに主な研究として白石 (1977a)、白石 (1977b)、宮地 (1977) などを挙げ、

この段階の研究では、慣用句の本質規定は日本語体系の一部に限定され、慣用句と周辺概念との区別化が試みられた。(p. 91)

としている。

3) 確立期 (1980 年代～) :

呉 (2016) は、80 年代に、「初期に取り上げられた問題が整理され、慣用句の定義に対してもようやく共通の認識に至った」(p. 92) とし、最も功績の大きな研究として宮地 (1982) をあげて、高く評価している。

また、慣用句の構成や品詞性に着目した研究として、国広 (1985) や、村木 (1985)、森田 (1985)、西尾 (1985)、大坪 (1985) などをあげている。

4) 成長期 (1990 年代～) :

呉 (2016) は、この時期に「慣用句は複数の分野の問題として一躍脚光を浴びるようになった」(p. 93) ため、90 年代を「慣用句研究の成長期」(p. 93) と呼んでいる。中村 (1977・1985)、坂本 (1982)、靱山 (1997) などを代表的な研究としてあげて

80 年代の認知言語学が意味論を飛躍的に発展させたため、それ以降は認知言語学による慣用句に関する研究が始まった。(p. 93)

としている。

また、この時期の慣用句研究には、考察対象として身体語彙を構成要素として持つものが多いとして、例えば、有菌 (2013) を挙げ、「身体部位詞はどのようなプロセスを経て基本義から派生義に拡張したのか、派生した意味同士には関連性が見られるものかなどの問題」(p. 94) について「身体部位詞が行為のフレームに基づくメトニミーによって複数の意味に拡張している」(p. 94) とした点について高く評価している。

それに加えて、小野ほか (1999)、韓 (2005)、薛・呉 (2004) などの研究を例にして、この時期に、「外国人学習者向けの慣用句教育が国語における慣用句教育とともに検討さ

れるようになってきた」(p. 94) ことや、支・吉田 (2003) などをあげて、「外国語の慣用句との対照研究も増えている」(p. 95) ことにも言及し、

このような研究の多くは意味・用法にまで考察が及ぶことがまれで、ややもすれば慣用句の羅列にとどまる恐れがある。 (p. 95)

と懸念を示している。

5) 発展期 (2000 年以降) :

2000 年以降の慣用句研究について、呉 (2016) は慣用句データベースの作成やコーパスを用いた慣用句研究が多く、「まず、井門 (2012) や岡田・井門 (2014) などによって、慣用句の意味解釈における語用論的推論からの議論がなされている」(p. 95) としている。

そして、「コーパスによる慣用句の分析が始まっている」(p. 96) とし、村田・山崎 (2011) の「慣用句を指標として文章資料のジャンルが判別できることを実証した」研究や、佐々木 (2013)、岡田 (2014) などの「個別の慣用句を取り上げ、コーパスに基づく意味変化の研究」(p. 96) を挙げている。

呉 (2016) の時代区分を次の<表 18>にまとめた。

<表 18> 呉 (2016) の慣用表現の研究史時代区分 (筆者作成)

	年代区分	代表研究	呉 (2016) の見解
萌芽期	1942年～	白石 (1942・1950・1969)	現在慣用句として扱わないものが散見しており、後に待遇表現やオノマトペに統合されるものが多い。
模索期	1970年代～	宮地 (1974)、高木 (1974)、白石 (1977a)、白石 (1977b)、宮地 (1977)	この段階の研究では、慣用句の本質規定は日本語体系の一部分に限定され、慣用句と周辺概念との区別化が試みられた
確立期	1980年代～	国広 (1985)、村木 (1985)、森田 (1985)、西尾 (1985)、大坪 (1985) など	初期に取り上げられた問題が整理され、慣用句の定義に対してもようやく共通の認識に至った
成長期	1990年代～	中村 (1977・1985)、坂本 (1982)、靱山 (1997) など	慣用句は複数の分野の問題として一躍脚光を浴びるようになった。このような研究の多くは意味・用法にまで考察が及ぶことがまれで、ややもすれば慣用句の羅列にとどまる恐れがある。
発展期	2000年代以降	井門 (2012)、岡田・井門 (2014)、村田・山崎 (2011)、佐々木 (2013)、岡田 (2014) など	慣用句データベースの作成やコーパスを用いた慣用句研究が多く、コーパスによる慣用句の分析が始まっている

日本語の慣用句に関する先行研究の発展については、この呉 (2016) の「萌芽期、模索期、確立期、成長期、発展期」という時代区分が最も適切であると思われるが、呉 (同上) が「慣用句の研究史を遡れば白石 (1942) に行き着くと言われるが、現在行われている研究が本格的に始まったのは 1970 年代のことである (p. 88)」としている点については、それよりさらに歴史を遡ることによって、身体語彙研究史に属する芳賀 (1911)、横山 (1935) の研究について触れておきたい。

また、「模索期・確立期・成長期・発展期」の4つの区分についても、呉(2016)の触れていない研究をあげて、検討する。

4.2 本研究における区別の試み

1) 萌芽期(1911年～1940年代):

呉(2016)は、この時期を「1942～」としているが、管見では、日本語における慣用表現の研究は芳賀(1911)に遡る。

芳賀(1911)は、「慣用表現」を「Idiom」や「言廻し」と呼んで、次のように述べている。

風を引いたといふことを I have drawn sine といつたり、煙草を呑むなどいふことを Don't drink to tobacco といつたりして、笑はれた事はよく耳にする話である。日本では煙草を呑むといふが、支那流にいへば喫煙で、たべるのであり、西洋流の Smoke はくゆらす、ふかすの義である。かやうに国々それぞれの言ひ廻し方が違ふ。外國語を學んで一番むづかしいのはこの言廻し即ち Idiom を呑込む(これも一種の日本の Idiom) ことで、われわれが平生なんの氣もなく使つてゐる言廻しの中にも、よく考へて見れば、随分に面白いことが多い。(p. 36)

さらに、「頭と顔」、「眼」、「鼻」、「口」、「耳」、「胸」、「腹」、「腰」、「尻」など各身体部位の役割や重要性、及び本研究 2.1 で詳述するこれらの「一次的身体部位語彙」を構成要素として持つ身体に関する慣用表現を挙げて、その意味や用法について論じた¹¹。

芳賀(1911)は、この「日本の Idiom」(p. 36)の取扱範囲や内容については、言及していないが、「鼻様」、「口車」、のような熟語、「目眦皆裂く」のような成句、「目は口程に物をいふ」、「口は禍の門」のようなことわざを例にあげており、現代から見るとやや広い捉え方と言えるものである。

また、横山(1935)は、国語において、身体の部分的名称「頭・顔・面・目・耳・口・齒・鼻・手・足(脚)・腹」等を応用したイディオムを例にして、熟語の研究を検討した。横山(1935)は、

言語の意義用法及びその變化を取扱ふには先づ語源と語意との關係に就いて考へて見なければならない。

語詞は原義のまま後代に傳はることなく、その間必ず變遷が伴ふものである。即ち言語が思想交換の具たる以上は慣用にしたがはなければならない、而も慣用には必ず變遷があるのである。(p. 512)

¹¹ 芳賀(1911)の取り扱う身体部位語彙に関する慣用表現の詳しい検討は「2.3 身体語彙慣用表現に関する先行研究」で行うことにする。

として、「意義変化」について、単語及び連語の意義を「表象方面」と「感情方面」との2つに分けた。

その「表象方面」には、「狭くなる（意義の縮小又は特殊化）」、及び「廣くなる（意義の擴張又は一般化）」、「推し移る（意義の轉置）」があり、それぞれに「家内」、「子や孫」、「留守」などの語例を挙げている。

また、「感情表面」には「向上」と「下落」が有り、それぞれに「あなた」、「百姓」などの語例を挙げて、述べている。これには現代の慣用句論の一つである比喩研究などに近い意義が見受けられる。

この時期には、芳賀（1911）・横山（1935）のように、身体語彙を構成要素として持つ慣用表現を意味や、用法・起源から分析した研究が現れてきたが、用語は英語の「Idiom」を借りて、「日本の Idiom」としており、慣用表現の取り扱うべき範囲に関する言及も見られなかった。

なお、上記2氏の他に、横山（1935）に

藤岡先生が昭和五年8月の「ことばの講座」で「意味の變遷」といふ題で八月二十日、二十一日の二日間話された中に、「目」「耳」「足」等のついたことばについて觸れられてあるだけのやうである（「ことばの講座」第一 JI 所載一五二一三頁） (p. 2)

さらに、白石（1942）に

この種のものに就いては既に芳賀矢一博士、藤岡勝二博士、横山辰次氏の研究がある (p. 158)

という記載があり、藤岡勝二氏の研究に言及しているが、現在のところ未確認であることを付言しておく。

2) 模索期（1940年代～70年代半ば）：

芳賀（1911）、横山（1935）らの身体諸器官を含む慣用表現の研究をもとに、初めて慣用表現の定義や、取り扱うべき範囲について言及したのは白石（1942）である。

白石(1942)は、まず慣用について、

慣用は習慣の固定であり、文法的であるか否かに關せず、用法の定まつたものである。 (p. 152)

と述べ、従来の「慣用語」の一般的な捉え方について検証した後に、

慣用語は一般的な日常語であつても、一般用語であつても、又特殊語・學術用語であつても、習慣的に用ゐられ、固定され、特殊な語感意味内容を持つてゐるもの (p. 154)

を指すとした。

また、白石(1942)は、慣用語の形・意味・職能について、主要な四種の英語辞書の「Idiom」の語義を検討し、「慣用語」「慣用語句」に当たるものを、「ウェブスター(筆者注:Webster's Dictionary)」の

その全體としての意味が、その構成要素の合はさつた意味から引き出すことの出来ない表現 (p. 157)

あるいは、「エヌ・イー・ディー (筆者注: (A New English Dictionary、略称 NED))」の

一言語の慣用語によつて是認された、しかも、多くの場合、文法的・理論的な意味とは異なる意味を持つてゐる、言葉遣いの特異性 (p. 158)

であるとした。

また、「慣用語 (句)」の研究課題として、

- 一、慣用語 (句) と文法との關係を理論的に考究する。
- 二、慣用語 (句) 中の各構成要素の當代語との關係を考察する。
- 三、慣用語の品詞性を考察し、或は各品詞に相當した慣用語 (句) を品詞別に取り扱ふ。
- 四、慣用語句がどういふ環境に由來を持つか調査分類する。
- 五、慣用語 (句) には、どういふ身體諸器官に關したのものがあるか、分類したりする。
- 六、慣用語句がその語原的起原をどういふ時代の語や外國語に持つかを考察する。
- 七、或思想には一般にどういふ慣用語 (句) を用ゐるか、或思想を表現的にいふのはどういふ慣用語 (句) を用ゐればいかといふやうな面から取り扱ふ。
- 八、慣用語が、その表現價值を強めるためなどの理由から、どういふ構成を持つてゐるかを考察する。 (pp. 158-159)

などの点を挙げ、「文法論、語原論、文體論の上から種々の取り扱ひが可能である」とした。

さらに、白石 (1942) は實際の慣用語 (句) を四種類に分けて例示している。

- 1) 対になって二語が一緒に用いられる慣用語句 (例「猫も杓子も」「手八丁口八丁」)
 - 2) 「ない」を含む慣用語句 (例「眼がない」「仕方がない」「腑に落ちない」)
 - 3) 一字からなる漢語を含む慣用語句 (例「意に介しない」「悦に入る」)
 - 4) 動詞の連用形から転成した名詞を含む慣用語句 (例「睨みが利く」「見えをはる」)
- (pp. 160-167)

また、その後白石(1950・1961)は、意味の構成法を中心に、改めて「慣用語句」を以下の4種類に分けた。

- 1) 句全体の意味が、構成要素の語の意味からだけでは理解できないもの。(例「骨が折れる (苦勞がいる)」「腹が立つ (怒る)」)
 - 2) 全体の意味が、構成要素の語の意味から理解できるものではあるが、構成要素に意味が抽象的で曖昧なものがある、全体が結びついて初めて意味のはっきりするもの。(例「気がつく」「力がつく」)
 - 3) 全体の意味は、構成要素の語の意味から理解できなくはないが、構成要素の一方の意味が語源的にはたとえから来たようなものがある、全体が結びついて初めて意味のはっきりするもの。(例「肩をそびやかす (肩などをことさら高く上げる)」)
 - 4) 句の表す動作自身に、目的・理由・結果を暗示する意味があるため、句にも自然構成要素の語の意味以上のものが加わってくるもの。(例「頭をかく」「骨を折る」)。
- (pp. 43-44)

このように、白石は「Idiom」の訳語として用いられているこれらのものを、「イディオム」「慣用語」「慣用句」「慣用語句」などと呼び、決まった名称は定めなかったが、白石(1942)の指摘した、いかに慣用語句を考えるべきかという論点、また文法論、語源論、文体論から慣用句を取り扱った論述、および意味の構成法を中心に、慣用句を分類したこと、どれを取っても、その後の研究に大きな影響を与え、現在においてもなお十分に通用する先駆的なものであったと筆者は考える。

これに対して横山(1955)は、それまでの慣用語研究をふりかえって、慣用語の「研究部面」(p. 1)を立てた(<表 19>)上で、そのうち項目(A)、(B)、(C)、(J)を取り上げて検討を加えたものである

こうして横山(1955)がイディオムに関する先行研究をまとめ、「研究部面」を明らかにしたことによって、その後の慣用表現研究において、取り扱うべき範囲の議論の方向性が示されたと言えよう。

<表 19>横山 (1955) の国語の慣用語の研究部面についてのまとめ (pp. 1-3 を基に筆者が作成)

A	意味を強めるため、いつも習慣的に対になって二つの語がいっしょに用いられる慣用語を慣用語を集めて分類する	類義の語を2つ重ねたもの
		反対の意味の語を2つ重ねたもの
B	常に否定語「ない」を含む慣用語を集めて分類する	形容詞「ない」のついたもの
		助動詞「ない」のついたもの
		「ない」という語がなくとも意味がわかるのに、「ない」をつけないと落ち着かなくなったもの
C	隠喩的慣用語	特にかなる環境に由来するかを調査分類する
		どの身体部分名を用いたものがあるかを調査分類する
D	方言からきたもの	
E	外来語からきたもの、特に表現上及び構文上どんな影響を国語に与えているかを調査する	
F	慣用語と文法との関係を理論的に考究する	
G	慣用語の事実を広く調査し、それらの一つ一つについて文法との関係を理論的に考究する	
H	慣用語の品詞性を考察し、あるいは各品詞（特に副詞・動詞）に相当した慣用語を品詞別に取り扱う	
I	慣用語の中の構成要素のおのおのと当代語との関係を考察する	
J	慣用語がその語源的起源をどういふ時代の語や外国語に持つかを考察する	
K	ある思想にはどういふ慣用語を用いるか、ある思想を表現的に言うのにはどういふ慣用語を用いればよいかという面から取り扱う	
L	常に受身に用いられる言い方を集めてみて、どういふ場合に、またどうしてそう用いられるかを考察する	
M	作家が特に文体的にどういふ慣用語を使って効果を表しているかを調べる。	

また、森田 (1966) は、「慣用的な言い方」はある言語社会において生きた表現として、日常生活において多用され、定着しているものであるとして、これらの慣用的な言い方を「語の特殊な意味での使用や特定の語の組み合わせ」、あるいは「文法や語彙の知識のみでは解決がつかない」という性格のものとして捉え、大きく

- 1) 挨拶語・応答語 (例「ありがとう (ございます)」「いい加減にしてください」など)
- 2) 慣用化された特定の言い回し (例「～してあまりがある」「何はさておき～」)
- 3) 慣用化されている文語表現
- 4) 叙述の語が慣用として固定しているもの (例「汗をかく」「よだれを出す (たらす)」)
- 5) 比喩が慣用化したもの (例「腹が立つ」「鼻が高い」)

という五つの類型に分けて提示した。

その後、白石 (1969) は、森田 (1966) よりさらに慣用語の取り扱う範囲を広げて、

- 1) 挨拶語・応答語 (例「おはようございます」「すみません」)
- 2) ことわざ・格言 (例「牛は牛連れ馬は馬連れ」)
- 3) 連語 (例「汗をかく」「将棋を指す」)

- 4) 狭義の慣用句 (例「鼻にかける」「火をたく」)
- 5) 複合語・単語 (例「大通り」「恐れる」)
- 6) 擬声語・擬態語 (例「にこにこ」「すたすた」)

の6種類であるとした。

この時期は、慣用表現がいかなるものかを試行錯誤しながら研究を進めている感があり、「模索期」と呼ばれることに十分な根拠があるのではないと思われる。

白石 (1942) や森田 (1966) は、慣用表現をかなり幅広いものとして捉えていて、用語の使用にあたって、統一的な名称は未だ定まっておらず、統一性を欠いている点は問題と言わざるを得ないが、慣用句と関わる研究分野や文法との関係、また、具体例に対する用法の特殊性などにもふれており、取り扱う範囲もかなり幅広いものであったため、慣用の問題を探っていく上で手がかりになる点も多く、その後の慣用句研究に大きな影響を与え、主導的な役割を果たしたといえる。

ところが、白石 (1942) や森田 (1966) が指摘した「挨拶語・応答語、連語、ことわざと格言、複合語、擬声擬態語」などの広義の分類が、後に「広すぎる」と指摘されるようになるが(例えば、高木 (1974) など)、こうした流れが慣用句研究を次の段階へと押し進める契機となっていくのである。

3) 確立期 (1970年代半ば～1990年代) :

この時期は、慣用句の構成や品詞性に着目した研究や、認知言語学による慣用句の意味に関する研究も現れ、数多くの研究成果が生み出されてきた。この時期の代表としては、高木 (1974)、宮地 (1975・1982・1999)、国広 (1985・1989) などが挙げられる。

高木(1974)は、それまでの白石等の分類が「広すぎる」と指摘した後、

ことわざは一つの文で独立語として成立し、格言、教訓や皮肉、物事の法則を含ませているものであり、品詞では名詞に区分されるのに対して、慣用句は独立した単語の複合により、異なった意味を持つように成った定型句で、一種の比喩表現でもあり、意味は固定化している。通常、独立語として扱わない。(pp. 158-159)

と主張し、ことわざや格言などを慣用句に入れるべきではない理由としている。

また、高木 (同上) は典型的な慣用句の特徴について

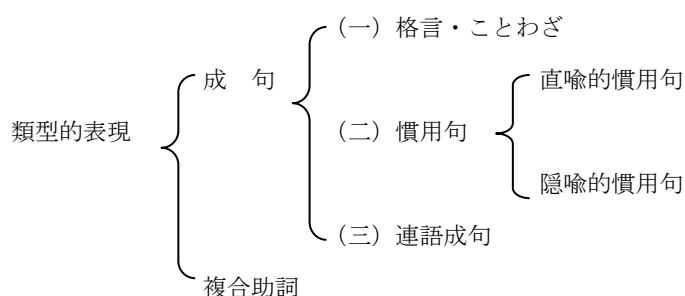
- 1) 名づける意味のひとまとまり性
- 2) 表現手段の固定性
- 3) 使用におけるできあい性(既成品性)

4) 表現＝文体論的な特徴

という4つの側面から記述している。

宮地(1975)は「言語の特性、言語による表現の特性も、そこに見られるさまざまな類型の認識なしには明らかにすることができない」と述べ、慣用によって成り立つ類型的表現を大きく、文あるいは句相当の「成句」と助辞相当の「複合助辞」とに大別し、「成句」をさらに文的レベルでは「格言・ことわざ」に、句的レベルでは「慣用句」と「連語成句」に分類し、さらに「慣用句」を「直喩的慣用句」と「隠喩的慣用句」とに二分した(〈図2〉)。

〈図2〉 宮地(1975)による分類 (pp. 97)



また宮地(1982)¹²は、

慣用句は、一般の連語句(語の連結体で句としてのまとまりを持つもの)よりも結合度が高いものだが、格言・ことわざと違って、歴史的・社会的な価値観を表すものではない。一般の連語より結合度が高いだけのものを「連語成句的慣用句」と呼び、そのうえに比較的是っきりした比喩的意味を持つものを「比喩的慣用句」と呼ぶ。(p. 238)

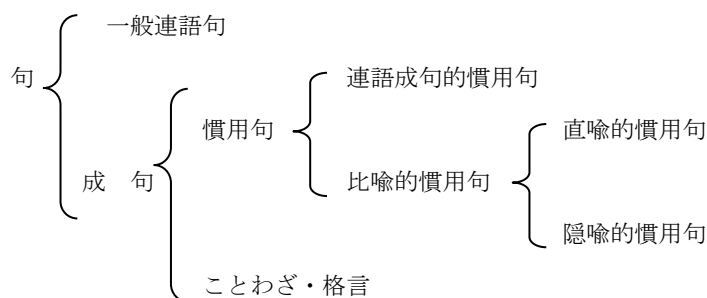
として、宮地(1975)に基づき、「句」(「連語句」とも)を「一般連語句」と「成句」に分類し、後者をさらに「慣用句¹³」、「格言・ことわざ」に分けている。続けて慣用句につ

¹² 宮地(1982)は日本の児童生徒の学習用の五冊の辞書から、拾った慣用句計1279例を「常用慣用句一覧」に作成し、文例、意味、文法、類義語句及び参考の五つの項目に分けて、そのうちの171例の慣用句を詳しく解説した。本調査によって、その1279例の「常用慣用句」のうち、身体語彙慣用表現が712例もあり、全体の56%を占めているの対して、詳しく解説した171例の慣用句には身体語彙に関する慣用句は112例ほどあって、総数の65%であることが分かった。

¹³ 慣用句は「句の一種であって、日本語の学習上・研究上、重要なものであるが、その調査・研究には未開拓なところが大きい。(略)。一般の連語句(語の連結体で句としてのまとまりを持つもの)よりも結合度が高いものだが、格言・ことわざと違って、歴史的・社会的な価値観を表すものではない。」と指摘し、「品詞別の特徴」、「語彙的な特徴」、「形式上の特徴」「形式上の制約から見た特徴」の4つの特徴から分析を試みた。

いては、「連語成句的慣用句¹⁴」と「比喩的慣用句¹⁵」に二分するとともに、後者を「隠喩的慣用句¹⁶」と「直喩的慣用句¹⁷」に下位分類している（<図 3>）。

<図 3>宮地（1982）による分類（p. 238）



そして、慣用句の文法的・意味的特性として、

慣用句は「きまりもんく」の一種だから、表現上の制約が多いもので、一般に、修飾語の添加や挿入がむずかしいものが多いとか、語順の変更はほとんど許されないとか、肯定・否定、あるいは受身・使役などの表現に制約を負うものが少なくないとか、制約の面が目につくものである。（p. 240）

と指摘し、「品詞別の特徴」、「語彙的な特徴」、「形式上の特徴」、「形式上の制約から見た特徴」の4つの特徴に分けて、慣用句の分析を試みた（<表 20>）。

その後、宮地（1985）では「連語成句的慣用句」を「連語的慣用句」に呼び方を変更した。

また、宮地（1999）は、

「成句」は、しかし、言語の象徴的・比喩的用法として解明しようとばかり言えないいくつかの側面を持っている。（中略）いくつかの方向からアプローチされるべき対象でもあり、多面的な性質を持つ課題だともいえる。（p. 214）

¹⁴ 一般連語句よりその構成要素間の結び付きが強く、結合度が高いものをいう。例えば、「うそをつく」「手を出す」など。

¹⁵ 結合度が高い上に、句全体が比較的明確に比喩的意味を持つものをさす。例えば、「頭に来る」「口が重い」など。「比喩的慣用句」の意味は、個々の構成要素の意味が単にたされたものではなく、「派生的・比喩的意味」を持っているものになる。

¹⁶ 「肩を持つ」「手を焼く」「肝に銘じる」などのような、原義は生きていなく、語句の意味が派生的・象徴的になっていて、全体として比喩的意味をあらわすに至っている慣用句のことである

¹⁷ 「赤子の手をひねるよう」「手に取るよう」「断腸の思い」のようなもので、典型的には「～（の）よう」「～（の）思い」などを伴って、比喩表現であることを明示するものことである。

<表 20>宮地 (1982) による慣用句の分析 (pp. 242-265 を基に筆者が作成)

品詞別の特徴	動詞慣用句	ヲ格のもの	
		ニ格のもの	
		ガ格のもの	
		その他の格のもの	
		受身形をとるもの	
		使役的他動形をとるもの	
	形容詞慣用句	主格助詞「が」を解するものが一番多い	
		名詞の部分に「頭」「口」「手」などの身体語彙が使われているものは50%ぐらい占める	
		形容詞の部分に、否定表現の「ない」が使われているものは50%を上回る	
	名詞慣用句	A B型	
A=B型			
A/B型		ある程度、構成要素それぞれの意味から慣用句の意味が予想できるもの	
		構成要素の意味からは、慣用句の意味が導き出せないもの	
その他の格のもの			
語彙的な特徴	身体語彙の慣用句		
	心情語彙の慣用句		
	漢語語彙の慣用句		
	洋語語彙の慣用句		
形式上の特徴	比喩形式の慣用句	直喩の形式	
		隠喩の形式	動物の比喩を使う慣用句
			自然現象の比喩を使う慣用句
	否定形式の慣用句	否定の形でのみ用いられる慣用句	
		肯定・否定いずれかの形に固定している慣用句	
	かさね形式の慣用句	形の上から	A+Bモナイ
			A+B
			その他の格のもの
		意味の上から	重ね言葉のそれぞれが対義語か、あるいは対照的な意味を持つ語で、対になって初めて句としての意味をなすもの
	重ね言葉の片方だけでも意味をなすが、強意のため類義語、あるいは関連語が加わったもの 重ね言葉の片方の語義がはっきりせず 今日では語呂合わせのように感じられるもの		
形式上の制約から見た特徴	命令表現について		
	意志表現について		
	受身表現について		
	否定表現について		
	敬語表現について		
	連体修飾の受け方について		
副詞の受け方について			

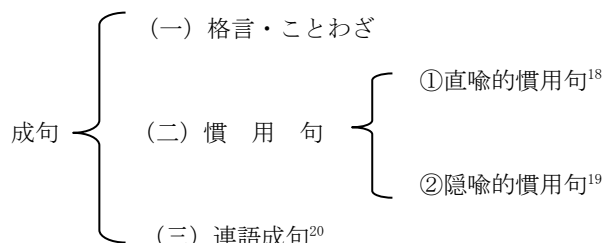
とし、「形態から語へ、語から文と、言語単位帯の構成論を考究するにあたっての「成句」の位置づけ」(p. 214) に注目して、

「成句」と関連する意味を持つ用語は「慣用句」であり、その意味で外来語の「イディオム」を使うこともあるが、原語 Idiom との間にも、概念に多少のずれがあり、「成

句」と「慣用句」との意味概念の広狭も、はっきりしてはいない。……類型的形式として二文節以上からなる句や文などを成句という。 (p. 215)

としており、「成句」の分類を<図4>のように示している。

<図4>宮地 (1999) による分類 (p. 216)



この分類法は、宮地 (1975) の分類法に回帰して、「連語成句」を慣用句の下位分類ではなく、「成句」の下位分類に入れるようにしたものである。

また、宮地 (1975) は、格言・ことわざ、慣用句、連語成句について次のように述べている。

格言・ことわざの定義や、具体例についてのその範囲は、確定にくいところがあるけれども、「歴史的・社会的に安定した価値観を持つ成句」としたい。……創始者は個人でも、その社会全体のものとして、歴史の波に洗われて安定するのであれば格言とは言えない。形式上も一文として完結している。……格言とことわざとは峻別されうるものではないが、相対的に言えば、ことわざは教訓的の真実より叙述的事態を内容とすると言えよう。 (pp. 216-217)

これに対して、「慣用句」は

格言・ことわざほどの価値観を伴うものではない。その中の語句が比喩的・象徴的に用いられ、全体としても単なる連語句ではなくて、派生的な意味を持つにいたった成句

¹⁸ 宮地 (1982) の指摘をもとに、「… (の) よう」「… (の) 思い」に「… (ん) ばかり」の形を付け加えたうえ、形上では「よう」や「ばかり」などが見られないが、つけて使うこともできるようなものなので、「直接的慣用句」にも準じてよいものとしている。例えば、『血を吐く思い』『断腸の思い』などや、『泣かんばかりの』『死なんばかりの思い』のように、「ばかりの」と「思い」の複合した形がとれるものである。

¹⁹ 例えば、「肩を持つ」「肝に銘じる」「羽をのばす」「裏目に出る」「恨みを飲む」など言語からの派生的・象徴的意味を持っていたり、その成句全体としてそのような意味を持っているときものをいう。中に、「気に食わない」などのような「否定的形式で用いられるもの」と、「頭に来る」などのような「一般に否定的形式で用いられにくいもの」があると主張している。

²⁰ 例えば、「地をはらう」「恥をかく」「鼻先であしらう」など、総じて和語によるものが圧倒的であって、漢語を含むものは多くないとしている。

である。……「直喩的慣用句」と「隠喩的慣用句」とに分ける。これも峻別しがたいものであるが、前者は、ことわざにちかいし、後者は連語成句にちかい。 (p. 219)

また、「連語成句」は

一般の連語句より凝結度の高い成句である。連語句というのは、普通いう二語以上の連結体としての連語のうち、述語的部分を持つ句となっているものの意である。凝結度の高い低いということは相対的なもので、明確には規定しにくいだが、一般の連語句より相対的に安定した類型的形式をなすものを「連語成句」と称したのである。 (p. 222)

と、これらの違いを論じている。

さらに、品詞性別の慣用句の用法上の特徴についても

一般にその品詞の文法的機能に対応するから、変容の多様な動詞慣用句に比すれば、形容（動）詞慣用句は変容が少なく、副詞相当慣用句・連体詞相当慣用句は変容がないという大局がみとめられる。 (p. 238)

とし、慣用句の意味・用法上の制約は、次の<表 21>のように設定している。

<表 21>宮地（1999）の設定した慣用句の意味・用法上の制約（pp. 242-243 を基に筆者が作成）

第一に、syn. の関係で、 連結・共起の制約	(1) 連体修飾を受けうるか
	(2) 連用修飾を受けうるか
	(3) 句中に連用修飾語を挿入しうるか
	(4) 連体修飾句に立ちうるか
第二に、para. の関係で、 置き換えの制約	(5) 肯否の表現は自由か
	(6) 命令表現を取りうるか
	(7) すすめ・たのみの表現を取りうるか
	(8) 質問・疑問の表現を取りうるか
	(9) 直接・間接の受身表現を取りうるか
	(10) 使役表現を取りうるか
	(11) アスペクトの諸相をどれぐらい取りうるか
	(12) 指示語で置き換えうるか
	(13) 敬語表現を取りうるか
第三に、trans. の関係で、 語順転換の制約	(14) 名詞句に転換しうるか
	(15) 倒置文に転換しうるか

この表から分かることは、「自由度の高い慣用句は、必ずしも多くはない」(p. 238) ことと、「慣用句は文脈上、その一部分を指示語で指示することは出来ないのが原則であり、大きく慣用句を一般連語句と分かつ指標の一つとすることができる」(p. 241) こと、そして、「語順の転換は、慣用句のばあい一般に自由ではない。文脈や場面にもよるだろうが、概して制約が大きくて転換は困難だ」(p. 242) ということなどである。

宮地の一連の研究はその後の慣用句研究に大きな影響を与え、現在にまで至っている。

村木(1985)は、日本語の慣用句の意味と統語の関係性を慣用句の「固定性」(統語性)の問題として捉え、以下のように3つのレベルで説明している。

1) 意味の非分解性

単語の意味が失われて、全体で新たな一つの意味を表す。

2) 統語上の拘束

構成要素の間に他の言語形式が入りにくい、名詞と動詞を入れ替え不可能、名詞が自由に連体修飾を受けない、構成要素の一つを類義語や対義語で置き換えないなど。

3) 形式上の拘束

一部の慣用句のみに現れる一定した形式であるが、他の助詞に取り立てることができない。また、助詞以外には、動詞の語形もある特定のもの(例えば、否定形)に制限されることがある。(pp. 15-27)

さらに、この時期に、慣用句全体の意味と構成要素の個々の意味との関係を取り扱っているものには、国広(1985・1989)がある。

国広(1985・1989)は、宮地の分類基準とは少々異なり、言語の学習など、何らかの実験的な目的のために分類する立場から、慣用句を大きく「解釈型²¹⁾」と「表現型²²⁾」の二つのタイプに区別し、慣用句における語結合が表す意味と、語結合を構成する要素の意味との関係に着目して、前者を「狭義の慣用句」、後者を「広義の慣用句」とした。

「狭義の慣用句」とは「二語(以上)が常に連結して用いられるもので、全体の意味が構成要素の意味の総和から出てこないもの」とし、以下の3つの下位タイプを立てた。

- 1) 構成要素の意味が不透明の場合(例えば、「お目に掛かる」や「羽目をはずす」)
- 2) 比喩的意味が発達した場合(例えば、「手を切る」、「顔をつぶす」など)

²¹⁾「解釈型慣用句」というのは、性格上、『受信型』と呼ぶことができるもので、初めて接したときは意味解釈不可能であり、誰かから教えてもらわなければならないもの」である

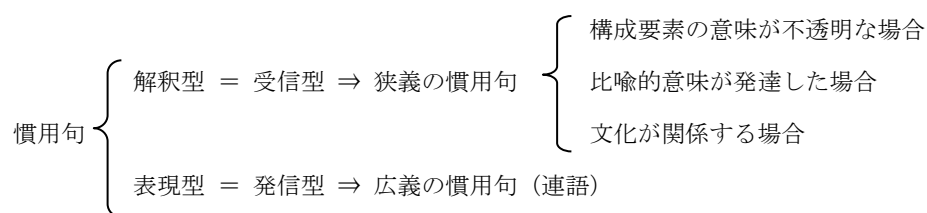
²²⁾「表現型慣用句」は『発信型』とも呼べるが、初めて接したとき意味は理解できるが、それに接する前は自分で考え出すことはできないようなもの」である。従来の慣用句観では、「ある固定した意味を表す」ことが主な中心になっており、これに十分に注意が向けられて来なかったと指摘している。

3) 文化が関係する場合（例えば、「顎を出す」、「白羽の矢を立てる」など）

(p. 14)

また、後者の「広義の慣用句」を「連語」とも呼び、「二語（以上）の連結使用が構成要素の意味によってではなく、慣用によって決まっているもので、全体の意味は構成語個々の意味から理解できるもの（例えば、「傘をさす）」を指すとしている（<図 5>）。

<図 5>国広哲弥（1985）による分類（筆者作成）



宮地や国広の、慣用句全体の意味と構成要素の個々の意味との関係という視座から慣用句を取り扱った一連の研究は、慣用句に関する研究を新たな方向に導くもので、今なお評価できるものであると思われる。

その点については、その後、石田（1999）によって

宮地や国広がこのように慣用性の高い慣用句（「比喩的慣用句」、「慣用句」）と慣用性の低い慣用句（「連語的慣用句」、「連語」）を区別していることは評価できるが、いくつかの問題点が残されている。例えば、宮地は「比喩的意味」を分類の基準にしているが、こういった基準の定義を示していない上、個別の慣用句が何故「連語的慣用句」、あるいは「比喩的慣用句」とされているのかは明らかでない場合がある。（中略）国広の分類の基準にも明確でないところがある。 (p. 70)

と指摘されているといった点はあるとしても、語彙論・意味論の立場からの慣用句に関する研究のさらなる発展につながっているものとなったものと言えよう。

この時期にはそのほかに、80年代の認知言語学が意味論を飛躍的に発展させたことを受けて、認知言語学による慣用表現の意味に関する研究も現れてきた。例えば坂本(1982)は、慣用句と比喩がいかんして関連づけられるかを考察しており、萩山(1997)²³は隠喩・換喩・提喩に基づく慣用句の意味の成立を分析することにより、慣用句の体系的分類を行っている。

またこの時期に、それまで白石・森田ら多くの研究者が「イディオム」、「慣用語」、「慣

²³ 萩山の研究に関しては、「7章」で詳述することとする。

用句」、「慣用語句」などと呼んで、定まらなかった用語使用は、多くの研究者によって統一的な呼称として「慣用語」が用いられるようになった。

一方、慣用語研究の取り扱う範囲については、さまざまな見方が現れ、「広義の慣用語」に含まれる「あいさつ語や、ことわざ、格言」などを慣用語に入れるべきかどうかについて議論され、例えば、高木（1974）、宮地（1975・1982・1999 など）、国広（1985・1989 など）が、慣用語の範囲が大幅に絞られ、研究分野が確定されるようになった。

ここまでの、慣用語表現の取り扱う範囲についての先行研究を<表 22>にまとめる。

<表 22>慣用語表現の取り扱う範囲についての先行研究のまとめ（筆者作成）

	挨拶語・応答語	ことわざ・格言	連語	慣用語（狭義）	複合語・単語	擬声語・擬態語
白石	○	○	○	○	○	○
森田	○	—	○	○	—	—
高木	—	—	○	○	—	—
宮地	—	—	○	○	—	—
国広	—	—	○	○	—	—

4) 成長期（主に 1990 年代～2000 年代初め）：

この時期に入ると、慣用語の定義や範囲に関する議論は収束に向かった。一方、確立期から続く認知言語学の視点からの研究とともに、新たに様々な視点、立場からの研究が現れた。

具体例をあげれば、靱山（2010、2014）、田中（2004、2005）、有菌（2006、2007）、宋（2007）、王（2013）、モラディ（2014）などによる認知言語学の視点からの研究、石田（1999、2002、2004）などの意味論・語彙論の視点からの研究などに加え、支・吉田（1999、2003）、林（2002）、宋（2007）、加藤（2007）、王（2013）、モラディ（2014）、李（2015）、呉（2014、2015）、SURENJAV OYUNZUL（2014）、石田（2015）などによる他言語との対照研究がある。以下に、順を追って検討して行く。

① 認知言語学の視点からの研究

第 3 期に入ってから、認知言語学の視点からの慣用語表現研究は引き継がれた。ここでは、有菌（2006、2007）、宋（2007）、王（2013）、モラディ（2014）を例にして検討し、靱山、田中の研究に関しては、第 7 章で詳述することとする。

有菌（2006）は、認知言語学に基づき、身体部位詞を構成要素に持つ日本語の慣用語表現を取り上げて、分解不可能な慣用語表現（「慣用語」）と、分解可能な慣用語表現（「慣用的連結句」）に分類し、これらの慣用語表現を「慣用的意味がどのように成立するか」に基づいて、次のように下位分類をしている（<表 23>）。

<表 23>有園 (2006) による慣用表現の分類 (pp. 242-243 を基に筆者が作成)

慣用表現	慣用句	メタファーに基づく慣用句
		メトニミーに基づく慣用句
		メトニミーとメタファーに基づく慣用句
		メトニミーとシネクドキーに基づく慣用句
	慣用的連結句	名詞と動詞 (或いは形容詞) それぞれが意味拡張した慣用的連結句
		名詞のみが意味拡張した慣用的連結句

有園(2007)は、

統語的凍結性 (固定性) はその表現がいかに慣用的であることを示すイディオム性の程度を測る一つの手段となるが、このイディオム性の程度は慣用表現の意味の成立過程からも影響を受ける。表現の形式が固定していること (統語的特徴) とその表現の意味が成立する過程 (意味的特徴) は、一つの表現の別の側面であるが「イディオム性という観点から見ると、両者は相関関係にある。」 (p. 139)

と主張し、名詞句に関与する操作、動詞に関与する操作、名詞句・動詞の両方に関与する操作に分けて、合わせて 10 の文法操作を適用させ (<表 24>)、意味解釈の統語的振る舞いへの関わり方とその程度について分析し、慣用表現の意味解釈がどのように、またどの程度統語的特徴に関わり、影響を及ぼしているかを明らかにした²⁴。

<表 24>有園 (2007) による検証のための文法操作 (pp. 141-148 を基に筆者が作成)

名詞句に関与する操作	1) 取り立て詞の付加	取り立ての助詞 (「も」「さえ」「こそ」など) を、表現全体でなく、名詞句のみが作用行となるように付加する操作
	2) 関係節化	名詞句を後置し、助詞を削除する操作
	3) 名詞修飾要素付加A	名詞に「有情物+の」で成り立つ修飾要素を付加する操作
	4) 名詞修飾要素付加B	名詞に「無情物+の」で成り立つ修飾要素を付加する操作
	5) 名詞の言い換え	表現中の名詞を別の語に置き換える操作
動詞に関与する操作	6) 動詞修飾要素付加A	動詞句の句頭に副詞的要素を付加する操作
	7) 動詞修飾要素付加B	動詞句の内部に副詞的要素を付加する操作
名詞句・動詞の両方に関与する操作	8) 自他置換	「NがV」形式の表現に自動詞を他動詞に、「NをV」形式の表現では他動詞を自動詞に置換する操作
	9) 受動化/使役化	受動化では動詞に (r) are、使役化では (s) ase を付加し、助詞を交代する操作
	10) 連用名詞化	助詞を置き換え、動詞を連用形にする操作

²⁴ 有園の検証によって、慣用表現の各タイプに対する文法操作の適用可能性の順は、次のようになる。
 慣用句：動詞修飾要素付加 A>名詞修飾要素付加 A>取り立て>動詞修飾要素付加 B>自他置換>名詞修飾要素付加 B>受動化/使役化>関係節化>言い換え>連用名詞化
 慣用的連結句：動詞修飾要素付加 A>取り立て>言い換え>名詞修飾要素付加 A>動詞修飾要素付加 B>名詞修飾要素付加 B>自他置換>受動化/使役化>関係節化>連用名詞化

有菌のこれらの研究によって、認知言語学的な慣用表現の分析が大きく進むようになり、先行研究で検証されていない「意味解釈の統語的振る舞いへの関わり方とその程度」について具体的に分析し、明らかにしたことは高く評価される。

宋 (2007) は、第二言語の習得において、「母語の習慣が転移し、干渉することによって誤りが生ずることがある」(p. 1)、「特に慣用表現は、その言語を母語とする人々の思考様式や伝統などが反映されているもので、たとえ、人間が共通に有する感情の表出であっても、異なる言語文化においてはその伝達形態が違ってくる」(p. 1) とし、日本語の慣用表現の学習における母語干渉による誤りの実態やその教授法を新たな問題として考える必要があると述べている。

また、宋 (2007) は、人間の基本感情のうち「怒」の下位範疇を「憤怒・悔恨・叱責・興奮」として、この「怒」の感情を表す慣用表現を「日韓の共通表現・日本語の固有表現・韓国語の固有表現」に分けて、日本語母語話者 72 名および韓国人学習者 180 名を対象として、アンケート調査を行った。

その結果を用いて日韓両国語の慣用表現における異同を考察し、日本語母語話者と韓国人学習者が両国の慣用表現をどのように受け入れるのかを比較分析して、「慣用表現における母語の干渉的誤りを減らすためには、構成語彙の統語的な特徴よりも、各々の慣用表現にこもっている感情構造を比較分析することが必要」で、「初級者と中級者との間の母語転移の傾向差を用いることは学習効果を高めるためにも必要である」としている。

王 (2013) は、

慣用表現とは、その構成語の基本的な意味から直接に予測される意味とは多少とも異なる意味を表現全体として表すもので、しかもその意味と形式の結びつきが慣習的に定着している表現を指す (p. 5)

とし²⁵、中国の大学で使われる初級日本語教材²⁶を調査し、慣用表現の導入が重視されていないことを指摘している。

また、「口」「手」「足」などの身体部位詞 11 語と、「堅い」「長い」「広い」などの基本形容詞 16 語からなる 24 の日本語の慣用表現を採集し、これらの慣用句の意味について、中国在住の中国人初級・中級日本語学習者と、日本語母語話者である中学生を対象に、多肢選択法で理解度調査を行ない、その結果に基づき、中国人日本語学習者がどのように未知の慣用表現の意味を考えるのかを認知意味論の立場から分析し²⁷、

中国人日本語学習者が考えた日本語表現の「意味成立²⁸」は、ほぼ日本語と一致し、

²⁵ 田中 (2002) を参考にしている。

²⁶ 大連外国語大学の日本語専攻の学習者が使っている教材は『新大学日本語』(大連理工大学出版社)を調査対象にしている。

²⁷ 王 (2013) の分析は有園 (2006) で提唱された慣用表現の意味的分解可能性に基づいたものである。

²⁸ 王 (2013) は研究対象の 24 の慣用表現は、意味成立の形式によって、大きく「構成要素の拡張義で全

未知の日本語慣用表現の意味成立に対しても、中国人日本語学習者は理解可能だ (p. 125)

と主張している。

モラディ (2014) は、「慣用句の意味が結びつく前にあった一つ一つの単語の意味とは、大きく異なり、フレーズ全体としての意味を持つようになり、ほとんどの場合は意味の予測が不可能になる」(p. 32) と述べ、慣用句を次のように分類している。(〈表 25〉)

〈表25〉モラディ (2014) による慣用句の分類²⁹ (pp. 32-34を基に筆者が作成)

品 づ 詞 別 て の 特 徴 に 基	動詞慣用句	「名詞＋助詞＋動詞」の形を成し、慣用句の中で、最も多く使用されるもの。目が届く、鼻にかける、骨を折るなど。
	形容詞慣用句	「名詞＋助詞＋形容詞」の形を成し、名詞と形容詞の間の意味関係はその間の助詞によって違う。手が早い、口が軽い、虫がいいなど。
	名詞慣用	形式的に主に「名詞＋名詞」「名詞＋に＋名詞」「名詞＋の＋名詞その他から成る。寝耳に水、一糸まとわぬ裸など。
基 語 づ 彙 い て の 特 徴 に	身体語彙の慣用句	身体語を含んだ慣用句を指す。「胃」「肺」「腸」などのような身体の内部の分かりにくく、目に見えないものほうが目に見えるものに比べて少ない。手も足も出ない、鼻の下を長くする、舌を巻くなど。
	心情語彙慣用句	心情や心理を表す句である。例えば、気が重い、息をのむ、気に入る、気を楽にするなど。
	漢語語彙の慣用句	構成は「名詞＋名詞」「名詞＋動詞」で、漢語＋漢語、漢語＋和語、和語＋漢語の形で現れる。例えば、肝に銘ずる、歯牙にかけるなど。
	洋語語彙慣用句	ヨーロッパ諸言語から借用された語が含まれる慣用句、「洋語＋和語動詞」の形で用いられる。例としては、ブレーキをかけるなど。
形 式 上 に 基 づ い て の 分 類	比喩形式の慣用句	主に直喩的慣用句と隠喩的慣用句に分けられる。直喩的慣用句では「よう」「思い」などの比喩指標が明示される。隠喩的慣用句では、比喩指標が明示されず、句の全体が比喩的な意味を表す。隠喩のタイプはさらに、動物の比喩を使う慣用句、自然現象の比喩を使う慣用句、体の部分を使う比喩等々に分類される。「手も足も出ない」など。
	否定形式の慣用句	日本語では多く見られる。「そりが合わない」、「腹が減ってはいくさができぬ」など。
	かさね形式の慣用句	類義語や関連語、対義語をならべたものなどによって意味が強調される慣用句、日本語で多いと言える。「あの手この手」「言わず語らず」など。

また、モラディ (2014) は、身体部位語彙「目」「手」「口」「身」を含む日本語とペルシア語の慣用句を取り上げ、認知言語学の枠組みを用いて、その意味拡張のあり方を分析対照し、日本語とペルシア語における意味拡張の違いが³⁰母語から「負の転移」「干渉」という現象や、「第二言語習得を悪い方向に働く」性を生み、日本語学習者にとって障害になることを論じた。

有菌 (2006、2007)、宋 (2007)、王 (2013)、モラディ (2014) らは、日本語と母国語の慣用句を対照研究するにあたり、認知言語学の立場から母語習慣の移転・干渉という新しい

体の意味が成立する表現」と、「構成要素の拡張義に基づき、全体で拡張する表現」と、「全体で拡張する表現」の3つのグループに分けられると主張している。

²⁹ 同分類は、宮地 (1982) と酷似しているが、モラディによる言及はない。

³⁰ モラディ (2014) は、「目」「手」「口」を含む慣用句では、日本語はメトニミーによる意味拡張が主であるのに対して、ペルシア語ではメタファーによるものが多い、また、それぞれを含む語の拡張された範囲から言えば、日本語はペルシア語より広いと主張している。

視点に立って学習者の慣用句理解を分析した。

② 意味論・語彙論の視点からの研究

石田（2002）は木村（1985）らの定義に従い、一般連語句と慣用句の違いについて

一般連語句は個々の構成要素の意味とそれらの構成要素を結ぶ統語的な関係によって意味が定まるのに対し、慣用句の意味は構成要素の意味の積み重ねとは異なり、句全体に固有のものなのである (p. 69)

として、「つくばに来る（一般連語句）／頭に来る（慣用句）」、「手を焼く（一般連語句）／肉を焼く（慣用句）」の例を示している。また、慣用句のこのような特性を「慣用性」と呼び、「目」「耳」「鼻」「口」「顔」「足」「手」などの身体語彙を含む動詞慣用句³¹を対象に、慣用句性の度合いを客観的に計る基準について、検討した。

石田（2002）は、慣用句の「慣用性」とその「統語的固定性」の間に相関関係があるとし、慣用句には文レベルで様々な用法・統語上の制約³²を受けるという「統語的固定性」があるが、

この「統語的固定性」は慣用句によってその度合いが異なっており、慣用句の中には統語的制約が強いものもあれば、逆に弱いもの（つまり、様々な統語的操作を許すもの）もある (p. 71)

として、この慣用句に加えられる統語的操作は、慣用句に対する制約の強さによって 6 つのレベルに分けられ、<図 6>のように「階層関係」(p. 71) をなすものであると主張している。

また、「上の方のレベルに属する慣用句は統語的固定性の度合いが比較的 low、下の方のレベルに属するものは統語的固定性の度合いが比較的高い」、「統語的固定性が低い慣用句は、その意味も完全に固定していない」(p. 72) とし、「名詞句への転換」、[命令・意志表現]、「連体修飾語の付加」、「連用修飾語の挿入」、「肯定・否定表現」、「その他の操作」（「受身表現」、「敬語表現」、「連用修飾語の付加」）などをそれぞれ分析し、

個別の慣用句について個々の操作の可否を調べていけば、多くの統語的操作を受けら

³¹ 石田（1999）の取り扱っている「慣用句」とは、宮地の主張している「比喩的慣用句」のことであると考えられる。

³² 「制約」とは、例えば動詞句から名詞句に転換されたり、連体修飾語が付加されたり、連用修飾語が挿入されたりすることが許されないということである。

れる慣用句は慣用性の度合が比較的 low、あまり受けられない慣用句は慣用性の度合いが比較的高いという具合に、慣用性の度合を明らかにすることが可能である。(p. 80)

と指摘した。

<図 6> 石田 (2002) による動詞慣用句に対する統語的操作の階層関係³³(p. 69 による)

慣用句に各操作が容認される度合い	低	統語的操作のレベル	統語的操作
		①句の再構成	(1) 名詞句へ転換する
		②文の再構成	(2) 受身表現にする
		③構成要素の置き換え[1]	(3) 命令表現にする, (4) 意志表現にする
		④構成要素への付加	(5) 連体修飾語を付加する, (6) 敬語表現にする, (7) 連用修飾語を挿入する
		⑤構成要素の置き換え[2]	(8) 肯定・否定表現にする
		⑥慣用句全体の関わる付加	(9) 連用修飾語を付加する, (10) 慣用句を修飾成分にする
	高		

石田 (2002) は、慣用句の構成要素の意味とその全体の意味との関係に注目し、慣用句の慣用性を計るために、有効な手段である統語的操作を提案し、宮地 (1982 など)、国広 (1985) の研究で不足が指摘されていた個別の慣用句の分類基準を明らかにしたと言えよう。

③他言語との対照研究

慣用句の対照研究には、さまざまな言語との比較が見られるが、そのほとんどが身体部位語彙を含む慣用表現を対象としたものである。

それらの中には、潘 (1998)、支・吉田 (1999、2003)、方 (2011a、2011b)、王 (2013)、李 (2015)、呉 (2014、2015)、鄭 (2016) の日本語と中国語との対照研究、林 (2002)、宋 (2007) の日本語と韓国語との対照研究、加藤 (2007) の日本語とドイツ語との対照研究、モラディ (2014) の日本語とペルシア語との対照研究、橋本 (1999)、SURENJAV OYUNZUL (2014) の日本語とモンゴル語との対照研究、石田 (2015) の日本語と英語との対照研究などがある。

ここからは、林 (2002)、石田 (2015) を中心に検討し、それ以外の身体部位語彙を構成要

³³ 上の方のレベルに属する慣用句は統語的固定性の度合が比較的 low、その意味も完全に固定していない、構成要素の意味が慣用句全体の意味の中にそのまま残っており、二つの意味の間にある程度の規則性が見出せると考えられるが、一方、下の方のレベルに属するものは統語的固定性の度合が比較的高く、構成要素の意味が慣用句の意味の中にほとんど残っていない、慣用句の意味がひとつの塊として固定しており、構成要素の意味に基づいて導き出されないと主張している。

素として持つ慣用句の対照研究については、「5.1 身体語彙慣用表現の先行研究」において詳しく述べることにしたい。

林(2002)は、慣用的表現の概念規定については、

あるひとまとまりの表現体が、慣用的表現として成り立つためには、基本的に、意味あるいは形態・結合の面で、慣用性ないしは固定性が認められなければならない、

意味の面では、構成要素の単なる文字通りの意味にとどまらず、それ以上のものとして働くことが必要である。次に、形態の面では、構成要素の結合ないしは複合の形がほぼ固定的で、全体でひとまとまりをなさなければならない。

(中略) 少なくともどちらか一方を満たさないと、基本的に、慣用的表現として成り立たないことは言うまでもない。(p. 57)

として、使用上の一般性・普遍性という観点から、「慣用的表現」を大きく「広義の慣用的表現」と「狭義の慣用的表現」に分けて、前者は位相上の制約はなく、広く世間一般の言語生活の中で行われ認識されるものであって、後者は特定の地域や分野、集団、職業、個人等限られた社会でのみ行われるもので、位相上の制約があり、特殊な性格のものを指すと述べている。

また、「広義の慣用的表現」を、それ自体、意味・用法のうえで実質的なものとして、自立できるものであるか、あるいは、実質的なものあとについて、付属的にしか使われることのない、非自立的なものであるかによって、「自立的慣用表現」と「付属的慣用表現(複合助辞)」とに分けている。

さらに前者を文的レベルの「あいさつ言葉」、「格言・ことわざ」と、句的レベルの「慣用句」に分け、「慣用句」はさらに「比喩的慣用句」と「連語的慣用句」とに分けられるとした(<表 26>)。

<表 26> 林(2002)による現代日本語の慣用的表現の類型化 (p. 92 による)

自立的慣用表現	文	あいさつ言葉	
		格言・ことわざ	
	句	慣用句	比喩的慣用句
			連語的慣用句
付属的慣用表現	助辞 複合助辞	単独形式	
		連立形式	呼応
			並列
		反覆	

林(2002)は、「慣用句」は「慣用的表現」の類型の中のひとつであるとしたうえで、「あいさつ言葉」「慣用句」について、日本語と韓国語との比較対照を行った。

林(2002)は、現代日本語の慣用的表現を「自立的慣用表現」と「付属的慣用表現」とに分け、これまでの先行研究における分類法とは違った視点を示した。また、「あいさつ言葉」や「格言・ことわざ」を「慣用句」と同列にして、「自立的慣用表現」の枠内に収めたのも、「慣用的表現」の範囲をこれまでの研究に比して、拡大したものと言えるであろう。

石田(2015)は、具体例を挙げて、日本語と英語の慣用句の本質に関わる3つの性質、即ち、「形式的性質、(形式的固定性)」、「文法的性質(統語的固定性)」、「意味的性質(意味的固定性)」を検討し、日本語の慣用句と英語などその他の言語の慣用句の共通点と相違点を対照比較する方法を明らかにすることを試みた。

前段である第3段階の「確立期」には、慣用句の呼称に関する議論が落ち着き、慣用句研究の取り扱う範囲についても大幅に絞られ、研究範囲が確立されたため、この時期には、議論は収束に向かった。

一方、この時期は、確立期から続く認知言語学の視点からの研究とともに、意味論・語彙論の視点からの研究、他言語との対照研究など様々な視点、立場からの研究が、慣用句研究に新たな風を吹き込み、多くの研究成果が報告されて、研究範囲も広がったため、慣用句研究の歴史上重要な成果が蓄積された時期であると言えよう。

5) 発展期(2000年代以降～) :

この時期に入ると、確立期から続く認知言語学の視点からの研究や、他言語との対照研究が引き継がれるとともに、新たに様々な立場、視点からの研究(特にコーパスを用いた研究)が現れた。

コーパスを用いた日本語慣用句の代表的な研究としてモラディ(2014)、呉(2017)が挙げられる。

モラディ(2014)は、日本語の身体語彙慣用句の使用頻度を明らかにするために、書き言葉のデータとして新聞社説「朝日新聞天声人語」の3年分(2009、2010、2011)を、話し言葉のデータとして日本語母語話者の自然会話に最も近いテレビドラマや映画のシナリオを採り上げ、慣用句の頻度分布を調査し、頻繁に使用される身体語彙慣用句を明らかにした。

呉(2017)は、「慣用句とは2つ以上の語が結合したもので、さらに次のいずれかの特徴に該当する語彙的単位のことである」(p.6)とした。

- (1) 普通のレンゴとは異なり、構成要素を自由に類義語や反義語に置き換えることができず、形式的に定まっている(例「油を売る」)

(2) 普通の連語ほど統語的操作の可否が均一ではない、つまり、受けられる統語的操作と受けられない操作が限定されている(例「相槌を打つ」)

(3) 全体の意味が定まっており、それぞれの構成要素の意味から導き出されない(例「足を洗う」) (p. 6)

その上で、(1)～(3)のすべての要件を満たす場合が典型的な慣用句であるとした³⁴。また、「慣用句全体を対象とした数量的・意味的分析はまだない。慣用句の研究が盛んに行われてきた中で、量的研究と定性的研究が日本語慣用句の研究にとって重要な意味を持つこと」(p. 1)と指摘し、慣用句をめぐる先行研究を時系列に沿って「萌芽期」「模索期」「成立期」「成長期」「発展期」の5つの段階に区分している。

さらに、「1) 慣用句の使用度数と意味分野の把握、2) 現代日本語における基幹慣用句³⁵の選定、3) 慣用句の通時的変化に見られる類型や要因の発現、4) 個別の慣用句の意味・用法に関する記述」(p. 1)の4点をめぐって『大系本文(日本古典文学、断本)データベース』『青空文庫』『近代語コーパス』『現代日本語書き言葉均衡コーパス』などを用いて現代日本語における慣用句の使用度数を考察し、現代日本語における基幹慣用句を選定した。

一方、2000年代以降、確立期から続く認知言語学の視点からの研究や、他言語との対照研究が引き継がれるとともに、国立国語研究所を中心とするコーパスの開発に伴い、モラディ(2014)や、呉(2017)のような、コーパスを用いた研究が増えてきている。コーパスの膨大なデータを用いて、慣用句の史的研究や、使用頻度の調査、さらに、個別の慣用句の意味・用法の変遷に関する研究等が容易になり、慣用句研究の新たな分野を切り拓いた。

4.3 本研究で取り扱う慣用表現の定義と範囲

以上、呉(2016・2017)の区分に倣って、芳賀(1911)から始まる慣用表現に関する研究を「萌芽期」、「模索期」、「確立期」、「成長期」、「発展期」の5つに時期に分けて検討した。

本論文では、「慣用表現」や取り扱う範囲に関しては、宮地の一連の研究に従う。また、複数の単語が社会習慣によって比較的固定的に結びついて、全体で一つの単語相当となっているものを「慣用表現」と見做し、宮地(1985)に従って、構成要素が結合度が高く、常に結びついて用いられているが、慣用表現全体の意味が構成要素である各語の意味から理解することができるものを「連語的慣用表現」と呼び、比較的是っきりした比喩的意味を持ち、慣用表現全体の意味が構成要素である各語の意味から理解することができないものを「比喩的慣用表現」と呼ぶことにする。

³⁴ 形式的、統語的、意味的に固定した2つ以上の語が結合した表現となったものであるとする。

³⁵ 呉(2017)は、「慣用句という集合の中で基幹部として存在するもの」としている。(p. 54)

第5章 日本語の「身体語彙」を構成要素として持つ慣用表現に関する先行研究

5.1 日本語の「身体語彙」慣用表現に関する先行研究

日本語には、身体語彙慣用表現が多数存在し、日本人の日々の言語生活の中に深く根を下ろしている。日本語の文献、新聞や文学作品に止まらず、ネットメディアなどでも目にする事が多いことの所以である。このことから、身体語彙慣用表現が、人間の基本的で、かつ、素朴な心理や感情、思考といったものと深く結びついていることが窺われる。

現代日本語の「身体語彙慣用表現」を対象とした先行研究には、意味や用法の立場から、身体語彙が表現上果たす比喩的・抽象的な役割や、該当表現の示す感情やものの捉え方について論じるものがある。また、他言語と対照しながら、日本語の身体語彙慣用表現と他言語の身体語彙慣用表現の異同を比較し、考察したものもある。

5.1.1 日本語の身体語彙慣用表現のみの先行研究

管見では、身体語彙慣用表現についてもっとも早い時期に研究を開始したのは芳賀(1911)である。〈表 27〉に示す。

〈表 27〉芳賀(1911)における身体語彙慣用表現例(pp. 36-39 に基づいて筆者作成)

身体語彙	慣用表現				
頭と顔	頭がいい	頭がしっかりして居る	つぶりを縦に振る・横に振る	頭が高い	顔が広い
	顔を隠したり	顔を背向けて	顔が出されませぬ	面目が無い	おもて伏せ
	面下げてきやがった	面の皮が厚い	鐵面皮	面の皮千枚張	顔を立てる
	顔に免じてさうしやう	顔が立たぬ	顔が潰れる	顔をよごす	面よごし
	地藏顔	閻魔顔	知らぬ顔	泣きつ面	顔に泥を塗る
眼	目を塞ぐ	目を細くする	目を怒らす	目に角を立てる	目を逆立てる
	目眦皆裂く	目が大きくなる	大目玉を食ふ	目を丸くする	目の色を變へる
	目がすわる	目は口程に物をいふ	目立つ	目安い	
鼻	あぐらをかいだ鼻	鼻にかける	鼻を高くする	鼻をうごめかす	鼻の先で人をあしらふ
	鼻を指す	鼻を以て	鼻様	鼻白	鼻が白くなる
	鼻につく	鼻つまみ			
口	口に合はぬ	口が驕る	口が悪い	口が重い	口すぎは糊口
	口車	口は禍の門	口を塞がう	人の口には戸は立てられぬ	
耳	耳を傾ける	耳を塞ぐ	耳立つ	耳安い	耳よりの話
	耳を切るやうな寒さ	耳にたこの出来る程聞いた			
胸	胸が痛い	胸がつかへる	胸が開いた	胸が透いた	胸算用
	胸勘定	胸が潰れる	胸の火の燃える		
腹	腹が減る	腹がふくれる	腹が立つ	腹に据かねる	腹がある
	腹いせ	臍をつぶす	腹黒	腹で味って見ろ	切腹
	腹筋をよる	腹の皮をよる	臍で茶を湧かす	臍が西國	腰がすわらなければ
	腰抜け武士				
尻	尻餅をつく	尻に目薬			

芳賀(1911)は、「頭と顔」、「眼」、「鼻」、「口」、「耳」、「胸」、「腹」、「腰」、「尻」など

の「一次身体語彙」、及びこれらを構成要素として持つ慣用表現を挙げて、各身体部位の役割や重要性、これらの身体部位語彙を含む慣用表現の意味、用法について論じた (pp. 36-39)。

ただ、芳賀 (1911) は、最も早い時期の身体語彙慣用表現についての論述だが、その意味や用法を簡単に紹介しただけにとどまっている。

その後、横山 (1935) は、自らが「身体の諸部分」(p. 514)と呼んだ「頭・顔・面・目・耳・口・歯・鼻・手・足(脚)・腹等」を含むイディオムを対象にして考察した。

横山 (1935) は、身体部位語彙を含むイディオムは、

身體の諸部分の名稱が色々な意義に用ゐられるのはどの變化の中に入るかといふと、頭・面(顔)・目・口・手・足・腹等が色々な用ゐられるのは、觀念の内容に親しみ又は似通ひがあると、形・大きさ・役目・作用・位置・運動等色々なことを縁にして、意義を變らせて用ゐられるので、聯想で縁がついて一方から一方へ移るのであるから、意義の轉置に入るのである。而も、同時にいろいろな方面に用ゐられるのである。(p. 514)

と述べ、「頭」「顔、おも、つら」「目」を例にして、読み方の違いによるこれらの「一次身体語彙」を用いる慣用表現の意味・用法の異同について分析した (<表 28>)。

横山 (1935) は、「意義變化」について、単語及び連語の意義を「表象方面」と「感情方面」との2つに分けている。さらに、その「表象方面」には、「狭くなる(意義の縮小又は特殊化)」、及び「廣くなる(意義の擴張又は一般化)」、「推し移る(意義の轉置)」があり、また、「感情方面」には「向上」と「下落」があるとしており、これには現代の慣用句論の一つである比喩研究などに近い意義が見受けられるが、芳賀 (1911) と同じように、その分析は「一次身体語彙」にとどまっている。

森田 (1966) は、慣用表現の中心となる語の調査を行い、身体語彙による慣用句の割合が大きいことを調査データによって示したうえで、慣用的な言い方を五つの類型に分けて提示した³⁶。

そのうち、「3. 慣用句化されている文語表現」に「骨を折る、腹が立つ、鼻が高い、顔が広い」などの比喩が慣用化したもののほかに、「汗をかく、涙を流す(出す、落とす)、よだれを出す(たらす)」などの「ある事柄に対して叙述する言葉」が一定しているものも慣用表現の類に含めてもよいと指摘しているところは筆者が注目した点である。

³⁶ 「4.2 本研究における区分の試み—2) 模索期」を参照。

<表 28> 横山 (1935) における身体語彙慣用表現例 (pp. 514-574 に基づいて筆者作成)

身体語彙	用法		
「頭」を用いたもの	「かしら」と讀むとき	かうべ(首・頭)と同じ意に用みられる	
		髮の意に用みられる	
		物事の最も上、或は前或は先の部分にいふ	
		上・前・先に居る人、即ち長のことをいふ	
	「あたま」と讀むとき	刀の柄頭にいふ	
		佛像又は大名などを数へるに云ふ語	
		初めは頭の前頂・小児の時、「ひよめき」とか「をどりこ」といつた處、即ち腦天のことをいつたのである	
		轉じて首から上又は前全部即ち「かしら」「かうべ」の意に用みられる様になった	
		人ひとりや数へるに用みられる	
		頭腦のはたらき。かんがへ。腦力	
		物事の上、又は初のところ。てっぺん、最初の意	
		物のはし。末端。	
		頭立つ者。長首領の意	
		髮、頭髮の意	
髮の結風			
「顔・おも・つら」を用いたもの	顔	先づ第一に「顔」そのもの、即ち頭の前面の、眉・目・鼻・口のある處で、「おも」「おもて」「つら」ともいふ	
		物の面、表面などにいふ	
	面「おも」と讀むとき	人を表示するに云ふ	
		みえ。ほまれ。面目。名譽	
	面「おもて」と讀むとき	其風の顔色をすること	
		顔。かほつき。おもわ。容貌	
	面「つら」と讀むとき	おも、かほ、つら、面體の意	
		面目、面皮の意に用みられる	
	面「めん」と讀むとき	其物の表面に書いた文、文面の意に用みられる	
		「おもてがた」の略。假面	
「目」を用いたもの	日本國語辭典による二十の用法	動物體の物を見る器官。まなこ。	熟語
		めづかひ。まなざし。めつき。	諺
		眼球の状をなすもの。	
		見えること。見ること。	熟語
		文字を讀み得ること。	諺
		見張ること。監視すること。	
		縦横に相交はるもの間隙をなしたところ。	
		物の間隙となつたところ。のぞき見られる空孔。あな。	
		端と端との相合ふ處。縁と縁と相接する處。	
		度をはかるため物につけたしるし、これは刻み目といふ意で使つたもの。	
	秤及び桁ではかる量。		
	もんめの異稱。轉じて目方の意。		
	紋所の名。		
	隻六などの采の面の點。		
基盤などに盛つたしるしの線。			
ならんだ筋、又はならんだ齒の形したもの。			
もくめ、木理、即ちこれは細かい筋になつてゐるものに「目」を應用したものである。			
「もく」と讀む時	幕の名所。		
	其の部分、其の箇所を示すに用ゐる語。		
	其の時、其の事に合ふこと。場合。境遇。		
	め。	語頭についたもの	
	かど。條項。こわけ。	語尾についたもの	
	となへ。稱號。	語尾についたもの	
	しなさだめ。	語頭についたもの	
	國司の圭典	語尾についたもの	
	動物の分類上、網を分けたもの。		
	豫算の編成上、最下級の區別。		
(接尾語として) 基盤の目を数へるにいふ語。			
「眼」の字を用いたもの	語頭についたもの		
	語尾についたもの		

星野 (1976) は、身体語彙として捉える対象に、「一次身体語彙」だけではなく、そこから派生した動作、感覚、作用なども含まれるとし、さらに、身体語彙による表現を「身体部位の名称による分類」、「語種による分類」、「形態による分類」、「音節による分類」、「意味による分類」の5つに下位分類を試みた (<表 29>)。

<表 29> 星野 (1976) による身体語彙表現の分類 (筆者作成)

身体語彙による表現	身体部位の名称による分類	咀嚼器・言語発生器：口、歯など	脳：顔、首など
		内臓収納器及び体幹直立器：背、肩など	内臓：心臓、胃など
		上肢・手運動器：肘、手など	下肢・前進運動器：股、膝など
		頸：首、頸など	
	語種による分類	大和言葉：め、吐くなど	和製漢語：目算など
		漢語：頭角、面目など	外来語：スタミナなど
	形態による分類	一形態語：頭、腹など	二形態語：怒髪、肩身など
		三形態語：鉄面皮など	四形態語：異口同音など
	音節による分類	一音節：目、手など	二音節：髪、顔など
		三音節：頭、額など	四音節：手に汗など
		五音節：肩代わりなど	
	意味による分類	元の部位の意味はほとんど意識されずない場合：頭目、目算など	元の意味は半ば意識され場合：体を振る、首になるなど

このように、星野 (1976) が身体語彙による表現を「身体部位の名称による分類」だけでなく、「語種」、「形態」、「音節」、「意味」によって分類した点は、身体語彙慣用表現の研究に新たな範囲と視点を示した点で、その後の研究に大きな影響を与えたものと思われる。

倉持他 (1982) は、日常の言語生活で使用頻度が高いと考えられる慣用句を、約 3500 項目収録した。このうち、身体語彙の慣用句は、約 785 例もあり、全体の 22.4% を占めていることから、日常的な言語生活における身体語彙慣用表現の重要性を主張した。

国広 (1982) は、「意味に基づく」「慣用句」の分類をさらに「不透明語を含むもの」、「比喩的意味によるもの」、「身振りの意味が関係しているもの」、「故事来歴に基づくもの」の 4 つに下位分類をした。さらに、「首をかしげる」「肩を持つ」「胸を張る」などの身振りや動作が示す心理状態に基づく「身振りの意味が関係しているもの」も加えた。

しかし、国広 (1982) は、身振りや動作が示す心理状態を表す慣用句を取り入れているにも関わらず、「二次身体語彙」、「三次身体語彙」を構成要素として持つものは取り上げていない。

2000 年以降、身体語彙及びその慣用表現を取り上げて、意味拡張や、使用範囲などを論じた研究が盛んになった。例えば、有菌 (2007・2013) が該当する。

有菌 (2007) は、身体部位詞「手」「口」「腹」「頭」を含む慣用表現を、分解不可能な慣用表現 (慣用句)³⁷ (例えば、「口を開く」「口を閉ざす」と、分解可能な慣用表現 (慣

³⁷ Idiomatic phrase、それぞれの構成要素に全体の意味に寄与する意味を与えることができないものを指す。

用的連結句)³⁸ (例えば「口が立つ」「口を出す」とに分類し、「統語的凍結性」³⁹の観点からイディオム性の程度を分析した。その程度の相違を生じさせる要因として、意味解釈がどのように、またどの程度「統語的凍結性」に関わるかを明らかにした⁴⁰。

その後、有菌(2013)では、「目」、「耳」「鼻」を含む慣用句を取り上げながら、身体部位詞が行為のフレームに基づくメトニミーによって複数の意味に拡張していることを論じた。このことにより、「身体部位詞」がどのようなプロセスを経て意味拡張され、また拡張された意味同士にどのような関連性が見られるのかを明らかにした。

5.1.2 先行研究における日本語の身体語彙慣用表現の採録状況調査

本研究では、先行研究の中から、宮地(1982)、白石(1995)、宮園(1999)、国広(2010)、西谷(2016)、林(2002)、木原(2014)を対象にして、慣用句研究文献や慣用句辞典(書)における身体語彙慣用表現の出現数について年代順・文献別、「一次～三次」のレベル別に調査した。その結果を<表 30>に記す。

<表 30>先行研究における身体語彙慣用表現の収録状況(筆者作成)

著者 & 書作名	慣用表現の異なり数			
	一次	二次	三次	総数
宮地(1982)『慣用句の意味と用法』	508例	71例	141例	720例
白石(1995)『国語慣用句大辞典』	1230例	131例	242例	1603例
宮園(1999)『慣用句の意味と使い方』	51例	19例	22例	92例
国広(2010)『日本語誤用・慣用小辞典』	35例	2例	12例	49例
西谷(2016)『勘違い慣用表現の辞典』	159例	23例	52例	234例
林(2002)『日・韓両国語の慣用的表現の対照研究』	745例	40例	—	785例
木原(2014)『身体名イディオム和英辞典』	406例	—	—	406例

研究者別の慣用表現の総数は、白石(1995)が最も多く、林(2002)、宮地(1982)がそれに続く。

また、全体的には、前述の「身体語彙」と同じように、いずれの先行文献や辞典(書)においても、「一次身体語彙」を構成要素として持つ慣用表現の総数が、「二次身体語彙」、「三次身体語彙」慣用表現を大きく上回っているが、「二次・三次」身体語彙数も無視できない数であることが分かる。

しかしながら、林(2002)では「二次身体語彙」として取り上げているのは、「血」を構

³⁸ Idiomatic combination、それぞれの構成要素に、文字通りであれ、比喩的であれ意味を与えることができる慣用表現のことを指す。

³⁹ 「4.2 本研究における区分の試み—4) 成長期」を参照。

⁴⁰ 「4.2 本研究における区分の試み—4) 成長期」を参照。

成要素として持つ慣用表現のみであり、さらに木原(2014)では、「一次身体語彙」を取り上げるのみであった。

林(2002)、木原(2014)を除き、採録語例にそれぞれ違いが見られるとはいえ、その大半は「一次身体語彙」にとどまらず、「二次身体語彙」や「三次身体語彙」も取り上げており、それらの語彙を構成要素として持つ慣用表現をも取りあげていることがわかった。

その各身体語彙慣用表現の詳細に関しては、第6章で詳述する。

5.1.3 他言語の身体語彙慣用表現との対照研究

2000年以降には、さまざまな言語との比較が試みられた。そのほとんどが「一次」身体語彙及びその慣用表現を中心としたものであったが、以下のような数多くの成果が生み出されてきた。

- a. 韓国語との対照研究：林(2002)、宋(2007)
- b. 中国語との対照研究：支・吉田(1999、2003)、方(2011a、2011b)、王(2013)、穆(2013)、李(2015)、呉(2016)
- c. ドイツ語との対照研究：加藤(2007)
- d. ペルシア語との対照研究：モラディ(2014)
- e. モンゴル語との対照研究：橋本(1999)、SURENJAV OYUNZUL(2014)、
- f. 英語との対照研究：石田(2015)

以下順を追って検討していきたい。

5.1.3.1 韓国語との対照研究

林(2002)は、「あいさつ言葉」「慣用句」について、日本語と韓国語との比較対照を行ったうえで、「頭部(7語)」、「胴体部(5語)」、「四肢部(4語)」、「全身部(3語)」の四種類に分けた身体部位語彙を取り上げて、韓国語と日本語におけるそれらの語彙を構成要素として持つ慣用句の比較研究を行い、以下の1)~4)を結論としてまとめた(pp. 341-347を筆者が要約した)。

- 1) 日本語の「あいさつ言葉」が省略形として成立し定型的なものが多いため、原義とはある程度独立で、文字通りの意味自体は薄れてしまい、一種の儀礼的な取り決めとして機能する。これに対して、韓国語では定型的な性格が薄く、表現そのものはより具体的、事実的であり、内容も実質的に働いていて、場面や状況によって種々の形が使われる。
- 2) 日本語の「慣用句」はさらに「比喩的慣用句」と「連語的慣用句」とに分けられ、

いずれも共通して、全体が常にほぼひとまとまりを成すという表現上の慣用句性がある。これに対して、韓国語は「慣用句」に対する概念規定や具体的な分類については、あまり明確ではなく、基本的には、英語の「Idiom」に関する記述を引用、解釈している程度にとどまっている。

- 3) 日本語と韓国語に於いて、慣用句と結ばれる各身体部位名は、必ずしも一致して現れるとは限らず、また一定した部位に対しても、具体的な慣用句表現の中で、一方の言語では部位によって細部にわたって捉えられたり、あるいは、同じ部位の対象についてもいろいろな名称で表現されたりすることがある。
- 4) 両言語において、目立って慣用句例の多い項目の順位は、各部の下位のほうで多少の変動は見られるものの、共通して出揃っているという特徴も見られる。

林(2002)のこの研究は、これまでの個別的な身体語彙とその身体語彙を構成要素として持つ慣用表現の対照研究と異なり、総合的に日本語と韓国語との対照研究を行い、両言語における異同を分析したものである。対照研究に新たな視点を提示したと言えよう。

宋(2007)は、人間の基本感情のうち「怒」の下位範疇を「憤怒・悔恨・叱責・興奮」として、この「怒」の感情を表す慣用表現を「日韓の共通表現・日本語の固有表現・韓国語の固有表現」に分けて、日本語母語話者72名および韓国人学習者180名を対象とした。アンケート調査を行ない、日韓両国語の慣用表現における異同を考察した。その結果、「慣用表現における母語の干渉的誤りを減らすためには、構成語彙の統語的な特徴よりも、各々の慣用表現にこもっている感情構造を比較分析することが必要である」としている。

5.1.3.2 中国語との対照研究

支・吉田(1999)は、日本語の「頭」と中国語の「头(頭)」の意味について、また支・吉田(2003)は日本語の「目」と中国語の「眼」の意味について、慣用句のニュアンスによって、プラスとマイナス、中立に分類し、そこから日中両言語の異同を検討した(第7章で詳述)。

王(2013)は、

身体部位詞と形容詞からなる慣用表現を分析するには、各構成要素の意味を多義語という観点から把握する必要がある。(p. 28)

として、「口」「手」「足」などの身体部位詞11語と、「堅い」「長い」「広い」などの基本形容詞16語からなる24の日本語の慣用表現を採集し、これらの慣用句の意味について、中国在住の中国人初級・中級日本語学習者と、日本語母語話者である中学生を対象に、多肢選択法で理解度調査を行なった(<表31>)。

<表 31>王 (2013) 取り扱う身体部位詞とその慣用表現(筆者作成)

身体部位詞	慣用表現						
頭	頭がかたい						
顔	顔がひろい						
目	目がない	目が黒いうち	目が高い				
鼻	鼻が高い	鼻の下が長い					
口	口がうまい	口がおおい	口がおもい	口がかるい	口がかたい	口がさびしい	口がわるい
耳	耳がとおい	耳がはやい					
手	手がはやい						
足	足がはやい						
腰	腰がつよい	腰がひくい					
腹	腹がふとい						
尻	尻がかるい	尻がながい	尻があおい				

また、その結果から 24 の慣用句を 3 グループに分けて、示した(<表 32>)。

<表 32>王(2013)の調査結果 (pp. 141-148 を基に筆者が作成)

1) 中国語に同型表現がある項目	「口が重い」「口が軽い」「口がかたい」「目がない」 「手がはやい」「足がはやい」「尻がかるい」
2) 中国語に類似表現がある項目	「顔がひろい」「目が高い」「鼻が高い」「腹がふとい」 「口がうまい」「口が悪い」
3) 中国語に同型また類似表現がない項目	「頭がかたい」「口が多い」「口がさびしい」「腰がつよい」 「腰がひくい」「耳がとおい」「耳がはやい」「尻があおい」 「尻がながい」「目の黒いうち」「鼻の下が長い」

穆(2013)は、日中両言語における「手」または「足」を構成要素として持つ慣用句を例にして、先行研究を踏まえたうえで、意味拡張の日中対照研究を行い、中国語では「足」が次第に「脚」に変わり、広く使われているのに対して、日本語では「脚」だけではなく、「腿」の意味としても使われていると結論を付けた。

李(2015)は、「認知言語学においては、身体部位を表す身体部位語彙が身体以外の物体部分や抽象物にまで意義が拡張されている。身体部位語彙をモト領域とするメタファー表現はほとんどの場合、類似性に基づく拡張であり、その類似性は、構造的な位置づけ、形状(形、大きさ)、機能から定義される。」として、2010年度の『朝日新聞』と中国語の『人民日報』の社説から漢語語彙全体のメタファー用例を取り出し、身体部位語彙ごとに、対照研究を行った。

呉(2016)は、『大系本文(日本古典文学、断本)データベース』、『青空文庫』、『近代語コーパス』、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』などから、「足を洗う」、「鳥肌が立つ」、「まんじり」の3つの表現を取り上げ、その歴史的変遷や意味用法の分類、共

起する要素などについて検討し、学習者向けの慣用句辞典記述への応用を検討した。

中国語との比較研究はこの他にも、潘(1998)、曹(2008)、方(2011a)、方(2011b)、蔣(2012)、張(2012)、桂(2012)、蔣(2013)、卓(2013)、朱・劉・葛(2014)などの研究がある。

また、鄭(2016)は、多くが「一次身体語彙」を対象とする日中対照研究の中で、「三次身体語彙」の「気」を構成要素として持つ慣用表現を対象とした数少ないものの一つである。

5.1.3.3 その他の言語との対照研究

モラディ(2014)は、慣用句の「語彙的な特徴に基づいての分類」を「身体語彙の慣用句」と「心情語彙慣用句」、「漢語語彙の慣用句」、「用語語彙の慣用句」の4つに下位分類した。

その中で、「心情語彙とは心情や心理を表す語彙」のことであるとして、そこに「二次身体語彙」の「息」や、「三次身体語彙」の「気」を含めている。(＜表 33＞)

＜表 33＞モラディにおける身体語彙数とその慣用表現の異なり数の収録状況

語彙的な特徴類に基づいて	身体語彙の慣用句	身体語を含んだ慣用句を指す。「胃」「肺」「腸」などのような身体の内部分かりにくく、目に見えないものの方が目に見えるものに比べて少ない。手も足も出ない、鼻の下を長くする、舌を巻くなど。
	心情語彙慣用句	心情や心理を表す句である。例えば、気が重い、息をのむ、気に入る、気を楽にするなど。
	漢語語彙の慣用句	構成は「名詞＋名詞」「名詞＋動詞」で、漢語＋漢語、漢語＋和語、和語＋漢語の形で現れる。例えば、肝に銘ずる、歯牙にかけるなど。
	洋語語彙慣用句	ヨーロッパ諸言語から借用された語が含まれる慣用句、「洋語＋和語動詞」の形で用いられる。例としては、ブレーキをかけるなど。

モラディ(2014)は、認知言語学のメタファー、メトニミーの視点から、日本語とペルシア語における身体語彙慣用句、主に身体部位語彙の「目」「手」「口」「身」を構成要素として持つ慣用句に対する対照を行い、両国における身体語彙慣用句がどのように捉えられ、また、その基本義と派生義の表現の間どのような意味関係が存在しているのかを考察した(p.7)。

SURENJAV OYUNZUL(2014)は、「目」を構成要素として持つ慣用句を中心に、日本語とモンゴル語の比喩表現や感情表現、モンゴル語独特に現れる統語的な構成要素(共同格・所有接辞・再帰所有接合語・所有接辞)の用法や意味に着目し、慣用句の意味成立に貢献できる可能性を検討した(p.6)。

さらに、SURENJAV OYUNZUL(2014)は、慣用句の意味が成立する文化的な背景を考察し、日本語とモンゴル語の慣用句の意味成立における相違点を統語的・文化的な面から検討して、「モンゴル語は感情や他人への評価などを直接的に表す傾向であることが言語表現から伺われる(ママ)ことを促している。」「さらに、同じアジア大陸の国(ママ)であり、言語構造が同じと見なされる日本語とモンゴル語の慣用句において、異なる統語的な構成要

素により表現の意味が異なり、さらに独特な文化・社会により表現の意味解釈や意味成立立には相違点が生じる」ことを指摘した (p. 143)。

石田 (2015) は、言語学の観点から日本語と英語両言語の慣用句を考察し、慣用句の本質に関わる「形式 (語彙構造) 的性質」、「文法的性質」、「意味的性質」を検討し、日本語の慣用句と英語などその他の言語の慣用句の共通点と相違点を対照比較する方法を明らかにすることを試みた⁴¹。

ここまで見てきたように、身体語彙及びそれらの語彙を構成要素とする慣用句を取り上げた、認知言語学や対照言語学の立場に立った研究は、そのほとんどが「一次身体語彙」による慣用表現を対象にしたものであった。「二次身体語彙」や、「三次身体語彙」、並びにそれらの語彙を構成要素として持つ慣用表現を対象としたものも僅かながら見受けられるが、体系的な研究は進展を見せていない。

5.2 日本語の身体語彙慣用表現先行研究のまとめ

現代日本語には、身体語彙慣用表現が多数存在する。その「身体語彙慣用表現」を対象とした先行研究には、さまざまな立場のものがあり、本節ではその詳細について述べた。

5.1.1 では、まず身体語彙の重要性や同慣用表現の意味・用法について論じた芳賀 (1911) を出発点とする身体語彙慣用表現研究の黎明期から、横山 (1935) のイディオム論までをまとめた。

次に 1960～80 年代の動向について触れた。森田 (1966) は慣用表現の中心となる語の調査を行い、慣用的な言い方を 1) 挨拶語・応答語、2) 慣用化された特定の言い回し、3) 慣用化されている文語表現、4) 叙述の語が慣用として固定しているもの、5) 比喩が慣用化したものという分類法を提示し、比喩の慣用化についても論じた。

星野 (1976) は、「一次身体語彙」だけではなく、そこから派生した動作、感覚、作用なども身体語彙慣用表現に含まれるとし、さらに身体語彙による表現を「身体部位の名称による分類」、「語種による分類」、「形態による分類」、「音節による分類」、「意味による分類」の 5 つに分類した。

倉持他 (1982) は、日常の言語生活で使用頻度が高いと考えられる慣用句を収録し、日常的な言語生活における身体語彙慣用表現の重要性を主張した。

国広 (1982) は、「胸を張る」のように、身振りそれ自体と動作が示す心理状態の二つの意味を表わす慣用句を取りあげたが、二次、三次語彙を構成要素として持つものは取り上げていない。

また、2000 年以降、身体語彙及びその慣用表現の研究には意味拡張や、使用範囲などを論じたものが現れてきた。例えば、有菌 (2007・2013) が該当する。

また、5.1.3 では、a) 林 (2002)、宋 (2007) らの日韓対照研究、b) 支・吉田 (1999、2003)、

⁴¹ 「4.2 本研究における区分の試み—5) 発展期」を参照。

王(2013)、穆(2013)、李(2015)、呉(2016)らの日中対照研究、c) 加藤(2007)の日本語とドイツ語との対照研究、d) モラディ(2014)の日本語とペルシア語との対照研究、e) SURENJAV OYUNZUL (2014) の日本語とモンゴル語との対照研究、f) 石田(2015)の日英の対照研究を取り上げ、日本語とさまざまな言語との比較対照研究と、その成果について述べた。

5.3 日本語の身体語彙慣用表現先行研究の問題点

ここまで見てきたように、身体語彙及びそれらの語彙を構成要素とする慣用句を取り上げた研究成果は数多い。

しかし、筆者の調べた限りでは、これらの従来の研究は、ほとんどが「一次身体語彙」による慣用表現を対象にしたものであった。特にこれまでの日中対照研究では、その傾向が顕著であり、ほとんどが意味や変遷の視点から行ったものであった。

先行研究の中には、和田(1969)、星野(1976)、林(2002)、モラディ(2014)のように、「二次身体語彙」も研究対象に含んでいるものや、鄭(2016)のように「三次身体語彙」と、それを構成要素として持つ慣用表現を対象にしたものも僅かながら見受けられるが、体系的な研究の蓄積は端緒に就いたばかりである。

したがって、「二次身体語彙」、「三次身体語彙」を構成要素として持つ慣用表現の全体像について、さらに検討が加えられなければならないことは明らかであろう。

5.4 本研究の課題

本研究は、次の点を課題とするものである。

第一に、先行研究を踏まえ、「身体語彙」の全体像を従来の「一次身体語彙」に「二次身体語彙」、「三次身体語彙」を加えたものとしたうえで、その整理を行うことである。

第二に、身体語彙慣用表現の書き言葉における使用実態を分析して、一次～三次「身体語彙慣用表現」の全体像を迫ってみることである。

第三に、「身体語彙慣用表現」の日中両言語の比較対照を行い、そのことを通して、それぞれの言語の持つ特徴を検討し、中国語母語話者の日本語習得を促進する役割を果たすことである。

第6章 身体語彙慣用表現に関する調査

本章では「一次～三次」に分類した「身体語彙」を構成要素として持つ慣用表現について2つの調査を行った。

まず、第2章と第5章での先行研究の調査で触れた七種の慣用句辞典・研究書に収録された身体語彙慣用表現の詳細について、調査を行った。

次に、『分類語彙表』に収録されている身体語彙慣用表現を採集した。

さらに、先行研究の慣用句辞典・研究書に収録された身体語彙慣用表現と、『分類語彙表』に収録されている身体語彙慣用表現について比較し、「一次～三次」身体語彙慣用表現に含まれるそれぞれ上位3位の身体語彙を確認した後、これらの採集結果をもとに、「身体語彙慣用表現リスト」を作成し、統語的分析を試みた。

6.1 七種の慣用句辞典・研究書における身体語彙慣用表現について

本節では、宮地（1982）、白石（1995）、宮園（1999）、国広（2010）、西谷（2016）、林（2002）、木原（2014）を対象にして、第2章で先行研究に関する調査で取り上げた「身体語彙」計147語⁴²を構成要素として持つ慣用表現を採集した。

〈表34-1〉～〈表34-7〉には、各慣用句辞典・研究書における各レベルの身体語彙とともに、それらの語彙を構成要素として持つ慣用表現の数を示した（採集した慣用表現のリストは巻末に掲げた）。

先行研究の慣用句辞典や研究書から採集した身体語彙慣用表現数を「一次～三次」別にみると、そのうちの宮地（1982）、白石（1995）、宮園（1999）、国広（2010）、西谷（2016）の五冊は、いずれも「一次身体語彙」を構成要素として持つ慣用表現を多く採録しており、それに続いて、「三次身体語彙」慣用表現、「二次身体語彙」慣用表現の順であった。

〈表34-1〉宮地（1982）における「身体語彙」と「身体語彙慣用表現」数の一覧表

レベル	分類項目	身体語彙と身体語彙慣用表現の数									
		身体語彙	目	口	耳	鼻	顔	頭	首	歯	
一次 (48語 / 508語句)	a. 頭部 (18語/226語句)	身体語彙	目	口	耳	鼻	顔	頭	首	歯	
		慣用表現数	88	35	19	16	15	11	10	9	
		身体語彙	面	舌	紫	眉	瞳	顎	額	眼	
		慣用表現数	5	4	3	2	2	2	2	1	
	b. 軀体部 (15語/125語句)	身体語彙	喉	角							
		慣用表現数	1	1							
		身体語彙	心	胸	腹	肩	腰	肝	尻	尾	
		慣用表現数	30	23	20	11	7	7	6	4	
	c. 四肢部 (8語/111語句)	身体語彙	羽	背	腸	脇	股	脛	膝		
		慣用表現数	3	3	3	3	2	2	1		
	d. 全身部 (7語/46語句)	身体語彙	手	足	腕	指	脚	爪	脛	膝	
		慣用表現数	66	27	7	3	2	2	2	2	
二次 (17語 / 71語句)	e. 身体部位活動そのものを示す語	身体語彙	身	骨	筋	皮	体	毛	肌		
		慣用表現数	32	6	3	2	1	1	1		
	f. 身体部位の生理作用を示す語(7)	身体語彙	見る	寝る・眠る	言う	囁む	あぐら				
		慣用表現数	9	6	2	1	1				
	g. 身体部位活動の生成結果を示す	身体語彙	血	力	涙	跡・痕	汗	屁			
		慣用表現数	12	6	4	2	1	1			
	h. 身体部位が関与した感覚によつ	身体語彙	息	声	音	脈					
		慣用表現数	12	8	4	2					
	三次 (33語 / 141語句)	i. 心理活動そのものを示す語(5語)	身体語彙	恨み	愁	感	考	癢	痛	恥	悔い
			慣用表現数	2	2	2	2	1	1	1	1
		j. 身体部位が関与した動作によつ	身体語彙	痺れ	喜び	喧嘩	泣き	遺精			
			慣用表現数	1	1	1	1	1			
k. 身体全体や部位を通じて発せられる心理的概念を示す語(15語)		身体語彙	歩み	想・想像	願	笑	鳴り				
		慣用表現数	5	3	3	2	1				
l. 身体全体や部位を通じて発せられる心理的概念を示す語(15語)		身体語彙	気	意	思	精	影	念	志	形	
		慣用表現数	63	13	9	3	3	2	2	2	
m. 身体全体や部位を通じて発せられる心理的概念を示す語(15語)		身体語彙	性	嘘	調子	瘦せ	機嫌	希望	情		
		慣用表現数	2	1	1	1	1	1	1		

⁴² 「一次身体語彙」69語、「二次身体語彙」27語、「三次身体語彙」51語である。

<表 34-2>白石 (1995) における「身体語彙」と「身体語彙慣用表現」数の一覧表

レベル	分類項目	身体語彙と身体語彙を慣用表現の数									
		身体語彙	目・眼	口	頭	耳	顔	鼻	首	面	
白石 (1995)	一次 (49語 / 1・2・3・0語句)	a. 頭部 (19語/632語句)	身体語彙	目・眼	口	頭	耳	顔	鼻	首	面
			慣用表現数	206	80	73	57	48	45	17	17
		b. 軀体部 (16語/318語句)	身体語彙	歯	あご	頬	舌	髪	喉	肩	角
			慣用表現数	16	13	12	10	8	6	6	5
	c. 四肢部 (8語/190語句)	身体語彙	髭	額	えくぼ						
		慣用表現数	4	4	1						
	d. 全身部 (6語/90語句)	身体語彙	心	胸	腹	尻	肝	腰	懐	臍	
		慣用表現数	110	57	43	37	21	17	11	6	
	e. 身体部位活動そのものを示す語 (8語/190語句)	身体語彙	乳	尾	背	脇	肺	腑	胃	胆	
		慣用表現数	4	3	3	2	1	1	1	1	
	f. 身体部位が関与した感覚によつて示す語 (5語)	身体語彙	手	足	肩	膝	指	腕	拳	肘	
		慣用表現数	104	50	19	7	5	3	1	1	
	g. 身体部位活動の生成結果を示す語 (16語)	身体語彙	身・体	毛	骨	皮・膚	神経	脂			
		慣用表現数	64	9	5	4	2	1			
	二次 (18語)	e. 身体部位活動そのものを示す語 (8語)	身体語彙	言う	いびき	あくび	咳	あくら	おなら		
			慣用表現数	11	3	2	2	1	1		
三次 (36語 / 2・4・2語句)	f. 身体部位の生理作用を示す語 (8語)	身体語彙	涙	汗	力	血	小便	唾	糞	垢	
		慣用表現数	25	10	7	5	3	2	1	1	
三次 (36語 / 2・4・2語句)	g. 身体部位活動の生成結果を示す語 (16語)	身体語彙	声	息	音	脈					
		慣用表現数	26	23	6	2					
三次 (36語 / 2・4・2語句)	h. 身体部位が関与した感覚によつて示す語 (5語)	身体語彙	愛い	感	喜び	恥	沈黙	痛み	恥	悔い	
		慣用表現数	9	8	5	5	1	1	1	1	
三次 (36語 / 2・4・2語句)	i. 心理活動そのものを示す語 (3語)	身体語彙	怒り	泣き	恨み	疑い	願い				
		慣用表現数	4	3	2	2	1				
三次 (36語 / 2・4・2語句)	j. 身体部位が関与した動作によつて示す語 (9語)	身体語彙	笑い	折り	鳴り	歩み	喧嘩	嘆き			
		慣用表現数	8	2	2	1	1	1			
三次 (36語 / 2・4・2語句)	k. 身体全体や部位を通じて発せられる心理的概念を示す語 (16語)	身体語彙	気	嘘	思い	情	機謙	欲	精	跡	
		慣用表現数	102	11	9	8	8	7	7	6	
三次 (36語 / 2・4・2語句)	k. 身体全体や部位を通じて発せられる心理的概念を示す語 (16語)	身体語彙	影	念	意	勢い	性	勘	姿	度胸	
		慣用表現数	6	6	4	3	2	2	1	1	

<表 34-3>宮園 (1999) における「身体語彙」と「身体語彙慣用表現」数の一覧表

レベル	分類項目	身体語彙と身体語彙を慣用表現の数									
		身体語彙	目・眼	口	頭	舌	面	牙	顔	耳	
宮園 (1999)	一次 (30語 / 5・1語句)	a. 頭部 (14語/26語句)	身体語彙	目・眼	口	頭	舌	面	牙	顔	耳
			慣用表現数	6	3	2	2	2	2	2	1
		b. 軀体部 (6語/10語句)	身体語彙	眉	頬	角	髪	えくぼ	あご		
			慣用表現数	1	1	1	1	1	1		
	c. 四肢部 (6語/10語句)	身体語彙	心	腹	胆	胸	臍	背			
		慣用表現数	5	1	1	1	1	1			
	d. 全身部 (4語/5語句)	身体語彙	足・脚	手	羽	爪					
		慣用表現数	4	3	2	1					
	二次 (8語 / 1・9語句)	e. 身体部位活動そのものを示す語 (3語)	身体語彙	骨	身	鱗	皮				
			慣用表現数	2	1	1	1				
	三次 (15語 / 2・2語句)	f. 身体部位の生理作用を示す語 (3語)	身体語彙	聞く	言う	呼吸	思う				
			慣用表現数	2	1	1	1				
三次 (15語 / 2・2語句)	g. 身体部位活動の生成結果を示す語 (3語)	身体語彙	力	涙	垢						
		慣用表現数	1	1	1						
三次 (15語 / 2・2語句)	h. 身体部位が関与した感覚によつて示す語 (3語)	身体語彙	声								
		慣用表現数	1								
三次 (15語 / 2・2語句)	i. 心理活動そのものを示す語 (3語)	身体語彙	愛い								
		慣用表現数	2								
三次 (15語 / 2・2語句)	j. 身体部位が関与した動作によつて示す語 (9語)	身体語彙	笑い	虚	泣き						
		慣用表現数	1	1	1						
三次 (15語 / 2・2語句)	k. 身体全体や部位を通じて発せられる心理的概念を示す語 (9語/13語)	身体語彙	歩	喧嘩							
		慣用表現数	2	2							
三次 (15語 / 2・2語句)	k. 身体全体や部位を通じて発せられる心理的概念を示す語 (9語/13語)	身体語彙	気	影	志	念	姿	容	嘘	情け	
		慣用表現数	2	2	2	2	1	1	1	1	
三次 (15語 / 2・2語句)	k. 身体全体や部位を通じて発せられる心理的概念を示す語 (9語/13語)	身体語彙	勢い								
		慣用表現数	1								

<表 34-4> 国広 (2010) における「身体語彙」と「身体語彙慣用表現」数の一覧表

レベル	分類項目	身体語彙と身体語彙を慣用表現の数											
		身体語彙	目・眼	頭	舌	耳	眉						
国広 (2010)	一次 (13語/35語句)	a. 頭部(6語/15語句)	身体語彙										
		慣用表現数	5	3	3	2	2						
	b. 軀体部(1語/1語句)	身体語彙	心										
		慣用表現数	1										
	c. 四肢部(5語/16語句)	身体語彙	手	脚・足	羽	指							
		慣用表現数	7	5	2	2							
	d. 全身部(1語/3語句)	身体語彙	体										
		慣用表現数	3										
/ 二次 語(2語)	f. 身体部位の生理作用を示す語(1語/1語句)	身体語彙	唾										
	慣用表現数	1											
g. 身体部位活動の生成結果を示す語(1語/1語句)	身体語彙	息											
	慣用表現数	1											
三次 (6語/12語句)	h. 身体部位が関与した感覚によって生じた概念を示す語(1語/2語句)	身体語彙	痛み										
		慣用表現数	2										
	i. 心理活動そのものを示す語(1語/2語句)	身体語彙	怒り										
		慣用表現数	2										
k. 身体全体や部位を通じて発せられる心理的概念を示す語(4語/8語句)	身体語彙	気	意	念	情け								
	慣用表現数	4	2	1	1								

<表 34-5> 西谷 (2016) における「身体語彙」と「身体語彙慣用表現」数の一覧表

レベル	分類項目	身体語彙と身体語彙を慣用表現の数										
		身体語彙	目	口	頭	顔	歯・牙	耳	首	舌		
西谷 (2016)	一次 (41語/159語句)	a. 頭部(14語/75語句)	身体語彙	目	口	頭	顔	歯・牙	耳	首	舌	
			慣用表現数	14	13	10	7	6	5	4	4	
		b. 軀体部(13語/29語句)	身体語彙	面	角	髪	あご	眉	鼻			
			慣用表現数	3	2	2	2	2	1			
		c. 四肢部(7語/31語句)	身体語彙	心	尾	胸	腹	肝	背	腰	臍	
			慣用表現数	7	4	3	3	2	2	2	1	
	d. 全身部(8語/24語句)	身体語彙	乳	脇	羽	尻	腸					
		慣用表現数	1	1	1	1	1					
	二次 (12語/23語句)	e. 身体部位活動そのものを示す語(5語/8語句)	身体語彙	手	足・脚	指	膝	肘	踵			
			慣用表現数	17	8	3	1	1	1			
		f. 身体部位の生理作用を示す語(4語/7語句)	身体語彙	身	骨	体	肉	肌	鱗	脂	毛	
			慣用表現数	8	6	5	1	1	1	1	1	
g. 身体部位活動の生成結果を示す語(3語/8語句)		身体語彙	言う	反吐	あくび	咳	呼吸					
		慣用表現数	4	1	1	1	1					
三次 (28語/52語句)	h. 身体部位が関与した感覚によって生じた概念を示す語(1語/1語句)	身体語彙	血	唾	涙	涎						
		慣用表現数	2	2	2	1						
	i. 心理活動そのものを示す語(6語/9語句)	身体語彙	声	息	脈							
		慣用表現数	4	3	1							
	j. 身体部位が関与した動作によって生じた概念を示す語(5語/10語句)	身体語彙	憂い									
		慣用表現数	1									
k. 身体全体や部位を通じて発せられる心理的概念を示す語(16語/32語句)	身体語彙	怒り	恨み	思い	嘆き	怒り	慮					
	慣用表現数	2	2	2	1	1	1					
身体語彙	身体語彙	鳴き	響き	笑い	想	喧嘩						
	慣用表現数	3	2	2	2	1						
身体語彙	身体語彙	気	影	意	念	感	情け	勘	魄			
	慣用表現数	8	4	4	2	2	2	1	1			
身体語彙	身体語彙	機嫌	精	恥	沈黙	志	嘘	態	瘦せ			
	慣用表現数	1	1	1	1	1	1	1	1			

<表 34-6> 林 (2002) における「身体語彙」と「身体語彙慣用表現」数の一覧表

レベル	分類項目	身体語彙と身体語彙を慣用表現の数									
		身体語彙	目	口	顔	耳	頭	鼻	首		
林 (2002)	一次 (18語/745語句)	a. 頭部(7語/376語句)	身体語彙	目	口	顔	耳	頭	鼻	首	
			慣用表現数	139	76	43	37	33	28	20	
	b. 軀体部(7語/147語句)	身体語彙	胸	腹	尻	腰	肩	肝	腸		
		慣用表現数	38	28	28	19	17	10	6		
	c. 四肢部(2語/148語句)	身体語彙	手	足							
		慣用表現数	100	48							
	d. 全身部(2語/74語句)	身体語彙	身	骨							
		慣用表現数	60	14							
/ 二次 (40語/1語句)	f. 身体部位の生理作用を示す語(1語/40語句)	身体語彙	血								
		慣用表現数	40								

<表 34-7> 木原 (2014) における「身体語彙」と「身体語彙慣用表現」数の一覧表

レベル	分類項目	身体語彙と身体語彙を慣用表現の数									
		身体語彙	目	口	顔・面	頭	首	耳	鼻	舌	
木原 (2014)	一次 (34語/406語句)	a. 頭部(15語/235語句)	身体語彙	目	口	顔・面	頭	首	耳	鼻	舌
			慣用表現数	70	39	29	20	17	15	13	8
			身体語彙	眉	歯	あご	額	頬	喉	唇	
			慣用表現数	5	5	5	3	3	2	1	
	b. 軀体部(10語/70語句)	身体語彙	胸	腹	肩	腰	尻	臍	けつ	脇	
		慣用表現数	19	16	12	11	5	2	2	1	
		身体語彙	背	股							
		慣用表現数	1	1							
	c. 四肢部(7語/84語句)	身体語彙	手	足	腕	肘	脛	踵	爪		
		慣用表現数	57	13	10	1	1	1	1		
	d. 全身部(2語/17語句)	身体語彙	骨	毛							
		慣用表現数	14	3							

林 (2002) は「一次身体語彙」を 18 語取り上げ、それらの語彙を構成要素として持つ慣用表現も数多く取り上げているのに対して、「二次身体語彙」は「血」の一語しか取り上げておらず、「三次身体語彙」に関しては、一語も取り上げていなかった。

また、木原 (2014) は「一次身体語彙」と、それらの語彙を構成要素として持つ慣用表現のみを対象にしており、「二次」、「三次」の身体語彙及びそれらの語彙を含む慣用表現について触れていなかった。

さらに、「一次身体語彙」を含む慣用表現の数から見ると、七種の慣用句辞典・研究書のうち、「目」を構成要素として持つ慣用表現が 1 位となっているのは 5 冊 (宮地、白石、宮園、林、木原) で、それに続いて「手」を含む慣用表現、「口」を含む慣用表現は、慣用句辞典・研究書により 2 位、または 3 位という違いが見られたが、「目、手、口」を構成要素として持つ慣用表現の多さは明らかであった。

「二次身体語彙」を構成要素として持つ慣用表現数は、慣用句辞典・研究書により、異

なっていたが、「三次身体語彙」では「気、意」を構成要素として持つ慣用表現数ほどの慣用句辞典・研究書の場合も上位を占めた。

「二次」に比べて、「三次」に多数の慣用表現が見られたのは、「三次」語彙の心理的な活動や、感情表現に用いられる意味特性に、その理由が求められるかもしれない。

6.2 『分類語彙表』における身体語彙慣用表現について

本節では、『分類語彙表』をもとに3類型に分類した「一次～三次」身体語彙を構成要素として持つ慣用表現を採集した。なお、その際、以下の2点に留意した。

- 1) 身体語彙を構成要素として持つ熟語を構成要素として持つ慣用表現も対象とした。
- 2) 四字熟語を慣用表現の研究対象から除外した（第4章で既述）。

<表 35>に採集元である『分類語彙表』の項目、及びその項目に所属する各レベルの身体語彙を構成要素として持つ慣用表現の数を示す。

<表 35> 身体語彙慣用表現の採集元の『分類語彙表』項目&所属する慣用表現の数

類	部門	中項目	各レベルの身体語彙を含む 慣用表現の数			中項目	各レベルの身体語彙を含む 慣用表現の数		
			一次	二次	三次		一次	二次	三次
1. 体の類	1.1 抽象的關係	[1.10 事柄]	4	1	0	[1.13 様相]	3	3	0
		[1.14 力]	0	1	5	[1.15 作用]	32	3	0
		[1.16 時間]	6	0	0	[1.17 空間]	5	0	0
		[1.18 形]	2	0	0	[1.19 量]	2	0	0
	1.3 人間活動—精神 及び行為	[1.30 心]	33	15	30	[1.31 言語]	4	5	0
		[1.33 生活]	1	0	0	[1.34 行為]	2	0	0
		[1.35 交わり]	1	1	0	[1.36 待遇]	3	1	0
	1.5 自然物及び自然 現象	[1.50 自然]	0	1	0	[1.56 身体]	2	4	3
[1.57 生命]		2	5	2					
2. 用の類	2.1 抽象的關係	[2.11 類]	3	10	6	[2.12 存在]	21	6	7
		[2.13 様相]	15	0	5	[2.14 力]	0	9	3
		[2.15 作用]	60	6	4	[2.16 時間]	7	0	2
		[2.17 空間]	9	0	0				
	2.3 精神及び行為	[2.30 心]	382	56	204	[2.31 言語]	69	6	4
		[2.32 芸術]	2	0	0	[2.33 生活]	186	14	4
		[2.34 行為]	58	1	0	[2.35 交わり]	73	11	10
		[2.36 待遇]	67	5	22	[2.37 経済]	16	2	0
		[2.38 事業]	9	3	0				
	2.5 自然現象	[2.50 自然]	8	6	1	[2.56 身体]	6	0	0
		[2.57 生命]	47	52	8				
3. 相の類	3.1 抽象的關係	[3.11 類]	5	1	0	[3.12 存在]	3	1	2
		[3.13 様相]	21	3	5	[3.14 力]	0	0	4
		[3.15 作用]	6	2	1	[3.16 時間]	5	10	4
		[3.18 形]	6	2	0	[3.19 量]	10	0	1
	3.3 精神および行為	[3.30 心]	77	30	62	[3.31 言語]	19	12	0
		[3.33 生活]	11	1	4	[3.34 行為]	38	5	17
		[3.35 交わり]	4	1	1	[3.36 待遇]	8	0	4
		[3.37 経済]	8	1	1				
	3.5 自然現象	[3.50 自然]	5	1	1	[3.56 身体]	4	0	0
		[3.57 生命]	9	1	2				
4. その他の類		[4.31 判断]	2	1	1				

第3章で示した身体語彙の採集元である『分類語彙表』の項目は「1. 体の類」、「2. 用の類」のみであったが、各レベルの身体語彙を構成要素として持つ慣用表現の採集元は「1. 体の類」、「2. 用の類」、「3. 相の類」、及び「4. その他の類」の全ての中項目に及んでいた。

また、これらの慣用表現の採集は、「一次～三次」のいずれも、「1. 体の類」では「1.3 人間活動—精神及び行為」部門、「2. 用の類」では「2.3 精神及び行為」部門、「3. 相の類」では「3.3 精神及び行為」部門に多かった。

次に、『分類語彙表』から採集した身体語彙慣用表現についてまとめた結果を次の<表 36>に示す。

『分類語彙表』から採集した身体語彙慣用表現を「一次～三次」別に出現する身体語彙の回数をみると、「一次身体語彙」では73語、「二次身体語彙」では44語、「三次身体語彙」では54語である。

また、慣用表現の数をみると、「一次身体語彙」を構成要素として持つ慣用表現が1,349語句もあり、最も多く、それに続いて、「三次身体語彙」慣用表現(380語句)、「二次身体語彙」(299語句)慣用表現の順であった。

さらに、<表 36>を分類項目ごとに検討してみると、「一次 a.」では「目、口、顔」を、「一次 b.」では「身、腹、胸」を、「一次 c.」では「手、足、膝」を、「一次 d.」では「骨、皮、毛」を構成要素として持つ慣用表現がそれぞれ上位3位である。また、全体をみると、「手(180)、目(170)、口(68)」を構成要素として持つ慣用表現が多かった。

「二次 e.」では「言/-う、食/-べる/-う/-わす、見/-る」を、「二次 f.」では「血、力、涙」を、「二次 g.」では、「声、息、音」を構成要素として持つ慣用表現がそれぞれ、上位3位である。また、全体をみると、「血(34)、声(34)、息(33)」を構成要素として持つ慣用表現が多かった。

また、「三次 h.」では「恥、苦し/-む/-める、恨/-み」を、「三次 i.」では「思/-い/-う、感/-じ、笑/-い/-う」を、「三次 j.」では「思/-い/-う、想、慮」を、「三次 k.」では「気、意、情/-け」を構成要素として持つ慣用表現がそれぞれ、上位3位である。特に「気(104)、意(34)、思/-い/-う(28)」を構成要素として持つ慣用表現が合わせて236語句であり、全体の428語句の半数以上を占めている。

「二次」より「三次」のほうが慣用表現が多かったのは、「二次」の身体部位活動そのものや、その活動により生じた生成結果を表す語彙より、「三次」の心理的な活動や、その活動により生じた概念を表す語彙のほうが、本来表す意味特性からも、感情表現により適切なものと言えるのではないかと考える。

<表 36> 『分類語彙表』の「身体語彙」と「身体語彙慣用表現」数の一覧表

レベル	分類項目	身体語彙と身体語彙を慣用表現の数								
一次 (73語 / 1,394語句)	a. 頭部 (27語/550語句)	身体語彙	目	口	顔	頭	鼻	耳	首	面
		慣用表現数	170	68	45	38	38	35	25	22
		身体語彙	歯	舌	眉	髪	角	眼	牙	頬
		慣用表現数	22	15	12	11	7	5	5	5
		身体語彙	顎	額	くちばし	喉	唇	脳	まなじり	瞳
		慣用表現数	5	4	4	4	2	2	1	1
	b. 軀体部 (18語/290語句)	身体語彙	腹	胸	心	肩	腰	尻	肝	背
		慣用表現数	48	45	44	28	27	24	21	13
		身体語彙	尾	懐	臍	腑	腸	尻尾	胆	肺
		慣用表現数	7	6	6	5	5	4	3	2
		身体語彙	臂	脇						
		慣用表現数	1	1						
	c. 四肢部 (13語/297語句)	身体語彙	手	足	膝	腕	根	指	股	羽
		慣用表現数	180	41	15	14	13	12	5	5
		身体語彙	きびす	爪	脚	脛	肘			
		慣用表現数	4	2	2	2	2			
		身体語彙	身	骨	皮	毛	肌	筋	傷	体
		慣用表現数	60	23	18	12	12	11	7	5
	d. 全身部 (15語/161語句)	身体語彙	肉	鱗	髄	こぶ	神経	骸	脂	
		慣用表現数	4	3	2	2	2	1	1	
		身体語彙	言/う	食/～べる/～う ～わす	見/～る	笑/～い/～う	泣/～き/～く	聞/～き/～く	吐/～く	鳴/～り/～る
		慣用表現数	26	10	10	7	6	6	4	4
		身体語彙	覚え/～る	知/～る	寝/～る	眠/～り/～る	めまい/～する	飛/～ぶ	喧嘩/～する	語/～る
		慣用表現数	4	4	3	2	2	2	2	1
e. 身体部位活動そのものを示す語 (21語/98語句)	身体語彙	吹え/～る	踏む	飽く	疑/～い/～う	黙る				
	慣用表現数	1	1	1	1	1				
	身体語彙	血	力	涙	汗	しわ	唾	歩	咳	
	慣用表現数	34	20	9	9	5	4	4	4	
	身体語彙	涎	糞	屁	しゃっくり	いびき	くしゃみ	痰	漬	
	慣用表現数	3	3	2	1	1	1	1	1	
f. 身体部位の生理作用を示す語 (18語/104語句)	身体語彙	呼吸	瘡							
	慣用表現数	1	1							
	身体語彙	声	息	音	脈	秋波				
	慣用表現数	34	33	10	9	1				
	身体語彙	恥	苦し/～む/～める	恨/～み	憂/～い	熱	痛/～い	痒/～い	癩	
	慣用表現数	11	6	5	3	3	2	2	2	
g. 身体部位が関与した感覚によって生じた概念を示す語 (16語/43語句)	身体語彙	睨/～み	愁/～い	怒/～り	悦	悲/～しむ	媚/～び	酔い	悔い	
	慣用表現数	2	1	1	1	1	1	1	1	
	身体語彙	思/～い/～う	感/～じ	笑/～い/～う	泣/～き/～く	嘆/～き	喧嘩/～する	疑/～い/～う	黙る	
	慣用表現数	28	8	7	6	4	2	1	1	
	身体語彙	悲/～しむ	酔い	喜/～び	考/～考え					
	慣用表現数	1	1	1	1					
h. 心理活動そのものを示す語 (12語/61語句)	身体語彙	思/～い/～う	想	感	嘆/～き	喜/～び	蟹	喘/～ぎ		
	慣用表現数	28	8	5	4	1	1	1		
	身体語彙	気	意	情/～け	勢い	恥	影	調子	念	
	慣用表現数	104	34	17	11	11	7	6	6	
	身体語彙	うそ	跡	志	機嫌	精	欲	魂	神	
	慣用表現数	6	4	4	4	4	3	3	1	
i. 身体全体や部位を通じて発せられる心理的概念を示す語 (19語/228語句)	身体語彙	霊	瘦/～せる	望み						
	慣用表現数	1	1	1						

※表中の「鳴-/り-/る」形式の表示の慣用表現の数には、活用形も含む（例：「鳴かず飛ばず」、「喉が鳴る」）。また、漢熟語の部分のみを使っているもの（例：「悲鳴をあげる」）も含む。

6.3 七種の慣用句辞典・研究書と『分類語彙表』の慣用表現に含まれる身体語彙の比較

<表 37>は七種の慣用句辞典・研究書と『分類語彙表』で採集した慣用表現に含まれて、上位を占めている身体語彙を示したものである。異なる点も見られたが、共通するところも見られた。

<表 37>七種の慣用句辞典・研究書と『分類語彙表』の「身体語彙慣用表現」上位3位の比較

身体語彙慣用表現総数	各項目の上位3位の慣用表現に含まれる身体語彙				各項目全体の上位3位の慣用表現に含まれる身体語彙
一次	a.	b.	c.	d.	全体
宮地 (1982)	目(88)、口(35)、耳(19)	心(30)、胸(23)、腹(20)	手(66)、足(27)、腕(7)	骨(6)、筋(3)、皮(2)	目、口、手
白石 (1995)	目(208)、口(80)	心(110)、胸(57)、腹(43)	手(104)、足(50)、肩(19)	体(64)、毛(9)、骨(5)	目、心、手
宮園 (1999)	目(6)、口(3)、頭(2)	心(5)、腹(1)、胆(1)	足(4)、手(3)、羽(2)	身(1)、鱗(1)、皮(1)	目、心、足
国広(2010)	目(5)、頭(3)、舌(3)	心(1)	手(7)、足(5)、羽(2)	体(3)	手、目、足
西谷(2016)	目(14)、口(13)、頭(10)	心(7)、尾(4)、胸(3)、腹(3)	手(17)、足(8)、指(3)	身(8)、骨(6)、体(5)	手、目、口
林(2002)	目(139)、口(76)、顔(43)	胸(38)、腹(28)、尻(28)	手(100)、足(48)	身(60)、骨(14)	目、手、口
木原(2014)	目(70)、口(39)、顔(29)	胸(19)、腹(16)、肩(12)	手(57)、足(13)、腕(10)	骨(14)、毛(3)	目、手、口
『分類語彙表』(2004)	目(170)、口(66)、顔(45)	腹(45)、胸(45)、心(44)	手(150)、足(41)、膝(15)	身(60)、骨(23)、皮(15)	目、手、口
二次	e.	f.	g.	—	全体
宮地 (1982)	見る(9)、寝る・眠る(6)、言う(2)	血(12)、力(6)、涙(4)	息(12)、声(8)、音(4)	—	血、息、見る
白石 (1995)	言う(11)、いびき(3)、あくび(2)	涙(25)、汗(10)、力(7)	声(26)、息(23)、音(6)	—	声、息、涙、
宮園 (1999)	聞く(2)、言う(2)、呼吸(1)	力(1)、涙(1)、赤(1)	声(1)	—	聞く、言う、力、声
国広(2010)	—	唾(1)	息(1)	—	息、唾
西谷(2016)	言う(4)、へど(1)、あくび(1)	血(2)、唾(2)、涙(2)	声(4)、息(3)、脈(1)	—	声、言う、息
林(2002)	—	血(40)	—	—	血
木原(2014)	—	—	—	—	—
『分類語彙表』(2004)	言う(26)、食べる/食わす(10)、見る(10)	血(34)、力(20)、涙(9)	声(34)、息(33)、音(10)	—	血、声、息
三次	h.	i.	j.	k.	全体
宮地(1982)	恨み(2)、愁(2)、感(2)	痺れ(1)、喜び(1)、喧嘩(1)	歩み(5)、想(3)、願(3)	気(63)、意(13)、思(9)	気、意、思
白石(1995)	憂い(9)、感(8)、喜び(5)	怒り(4)、泣き(3)、恨み(2)	笑い(8)、祈り(2)、鳴り(2)	気(102)、うそ(11)、思い(9)	気、うそ、憂い
宮園(1999)	憂い(2)	笑い(1)、慮(1)、泣き(1)	歩(2)、喧嘩(2)	気(2)、影(2)、志(2)、念(2)	気、影、志、念、憂い、歩、喧嘩
国広(2010)	痛み(2)	怒り(2)	—	気(4)、意(1)、念(1)、情(1)	気、怒り、痛み、意、念、情
西谷(2016)	憂い(1)	怒り(2)、恨み(2)、思い(2)	泣き(3)、嚙噬(2)、笑い(2)	気(8)、影(4)、意(4)	気、影、意
林(2002)	—	—	—	—	—
木原(2014)	—	—	—	—	—
『分類語彙表』(2004)	恥(11)、苦しむ(6)、恨み(6)	思い(28)、感じ(8)、笑い(7)	思い(28)、想(8)、慮(6)	気(104)、意(34)、情(17)	気、意、思い

※表中の（ ）にある数字は、その身体語彙を含む慣用表現の数のことである。

この表から分かるように、慣用表現に含まれる「一次身体語彙」の中では、「目、手、口」がその上位3位である。

一方、「二次身体語彙」、「三次身体語彙」の順位は慣用句辞典・研究書によりそれぞれ異なり、共通性がなかったが、「二次」では、「血、息、力、声」が多数であった。また、「三次」では「気」が最も多く、次に「意、念」が多かった。

なお、本論文は、これらの採集結果をもとに、本節で扱った「二次」・「三次」に「一次」も含めて、身体語彙慣用表現リストを<付録2>として、巻末に掲げた。

6.4 身体語彙慣用表現の統語的分析

6.4.1 品詞分類による考察

先行研究では、日本語の慣用表現の統語的構造による分類は、慣用表現の品詞性に基づくものが一般的である。例えば、SURENJAV OYUNZUL (2014) が「目」を構成要素として持つ慣用句を巡って、日本語とモンゴル語の品詞性を対照しているのがそれにあたる。

本項では、SURENJAV OYUNZUL (2014) に倣って、前節で作成した「身体語彙慣用表現リスト」に収録した、各レベルの上位3位の身体語彙⁴³を構成要素として持つ慣用表現について、「語彙的構造による品詞分類」を行い、動詞句、形容詞句、名詞句、その他などによる慣用表現の数と、その全体に占める割合を<表38>に示した。

<表38>身体語彙慣用表現の品詞分類

レベル	身体語彙	動詞句 慣用表現	形容詞句 慣用表現	名詞句 慣用表現	その他	合計の数
一次	目	141	9	12	2	164
	手	120	4	4	0	128
	口	57	9	2	0	68
	合計	318	22	18	2	360
	%	88.3	6.1	5	0.6	100
二次	血	92	9	11	0	112
	息	63	7	3	3	76
	力	51	4	3	0	58
	合計	206	20	17	3	246
	%	83.7	8.1	6.9	1.2	100
三次	気	156	21	9	0	186
	意	61	6	3	0	70
	念	51	2	2	0	55
	合計	268	29	14	0	311
	%	86.2	9.3	4.5	0	100

「一次～三次」身体語彙慣用表現の上位3位を例にすると、日本語では、いずれも「身

⁴³ 「一次」：目、手、口、「二次」：血、息、力、「三次」：気、意、念である。

体語彙名詞（以下、N）＋助詞＋動詞」の動詞句慣用表現が多数であった。「N＋助詞＋形容詞」の形容詞句慣用表現、「N＋助詞＋名詞」の名詞句慣用表現は僅かであった。以下にその一部を例示する。

- 1) 「N＋助詞＋動詞」：目を盗む、手を焼く、心が沈む（一次）
血を注ぐ、息が詰まる、力を持つ（二次）
気をつける、念に念を入れる、意を込める（三次）
- 2) 「N＋助詞＋形容詞」：目が高い、手が早い、心が広い（一次）
血は水よりも濃い、息が荒い、力が強い（二次）
気が重い、念力が強い、意地が悪い（三次）
- 3) 「N＋助詞＋名詞」：目と鼻の先、濡れ手で粟、心の丈（一次）
血の涙、力の限り（二次）、
気の毒、念のため（三次）
- 4) 「その他」：夜のみも寝ずに、差す手引く手に、心行くまで（一次）
息がびったり、本音も建前も（二次）
未必の故意（三次）

1)～4)は SURENJAV OYUNZUL (2014) の検証結果と同じであったが、本論文で取り扱う慣用表現では、「一次」の「目」、「二次」の「息」を構成要素として持つ慣用表現のほかは、「その他」が見られなかった。これは、身体語彙を構成要素として持つ慣用表現の末尾の品詞は限定的であると言えるであろう。

また、「動詞句慣用表現」の構造には、

- ①自動詞・他動詞の両方と共起できるもの 例：「恨みが晴れる」、「恨みを晴らす」
- ②受身の形で使われるもの 例：「身につまされる」、「身を切られる思い」
- ③使役の形で使われるもの 例：「目を光らせる」、「血を騒がせる」
- ④否定の形で使われるもの 例：「腑に落ちない」、「手に負えない」、「気に食わない」

などがあった。

そして、「名詞句慣用表現」の構造には、

- ①名詞が対等な関係で「並列」する場合 例：「血と肉」、「血も涙もない」
- ②中心になる名詞が他の語句に「修飾」される形

の二種類が見られ、「修飾」にはさらに、

- ①名詞が名詞を修飾する形 例：「雀の涙」、「鶴の一声」、「緑の髪」
- ②形容詞が名詞を修飾する形 例：「黄色い声」
- ③動詞が名詞を修飾する形 例：「身を切られる思い」

などがあった。

さらに、本論文では「形容詞慣用表現」について、身体語彙と共起する形容詞を「感覚を表す形容詞」、「状態を表す形容詞」、「評価を表す形容詞」の三種類に分けて考察した。その結果を<表 39>に示す。

<表 39> 身体語彙と共起する形容詞の分類(筆者作成)

感覚を表す形容詞	状態を表す形容詞	評価を表す形容詞
痛い	大きい／小さい 厚い／薄い 濃い／薄い 重い／軽い	いい／悪い
冷たい	広い／狭い 長い／短い	
熱い	強い／弱い 鈍い／鋭い	高い／低い
痛々しい	汚い／きれい 黒い／白い／赤い	
こわい	荒い 太い ない	

身体語彙と共起する形容詞は、「状態を表す形容詞」が一番多く、次に「感覚を表す形容詞」で、「評価を表す形容詞」は少数であった。

6.4.2 身体語彙に後接する助詞の使用状況の考察

前項では、身体語彙慣用表現の構成において、「末尾語」⁴⁴が動詞であるものが最も多かったが、「末尾語」が形容詞、名詞であるものも少数確認した。

本項では、これらの身体語彙慣用表現において、身体語彙名詞と「末尾語」の動詞・形容詞・名詞と結びつける助詞の使用状況について考察し、その結果を<表 40>に示す。

身体語彙を構成要素として持つ日本語の慣用表現においては、総計 176 語の身体語彙に後接する助詞の使用数は、「一次～三次」共に、ほとんどの場合「を」が最も多く、次に「が」、「に」が続いた。

⁴⁴ SURENJAV OYUNZUL (2014) は、慣用句の句末の語を「末尾語」と呼んでおり、本論文ではそれに従うこととする。

また、「を」、「が」、「に」以外にも格助詞「から」、「で」、「と」、「の」、「へ」、「より」、係助詞「は」、「も」、副助詞「まで」が現れるが、以下に、その例を示す。

- 1) 後接する助詞が「から」である例：
「嘘から出たまこと」、「根から鳴かぬ」、「言う口の下から」など。
- 2) 後接する助詞が「で」である例：
「鼻先で笑う」、「影で支える」、「嘘で固める」など。
- 3) 後接する助詞が「と」である例：
「屁とも思わない」、「血となり肉となる」、「面と向かう」など。
- 4) 後接する助詞が「の」である例：
「血の涙」、「気の毒」、「恥の上塗り」など。
- 5) 後接する助詞が「へ」である例：
「痺れ京へ上れ」、「耳へ入る」、「寝耳へ水が入る」など。
- 6) 後接する助詞が「より」である例：
「色気より食い気」、「言うより速い」、「心より外に」など。
- 7) 後接する助詞が「は」である例：
「血は水よりも濃い」、「情けは人の為ならず」、「百聞は一見に如かず」など。
- 8) 後接する助詞が「も」である例：
「血も肉もない」、「血も涙も出ない」、「思いも寄らない」など。
- 9) 後接する助詞が「まで」である例：
「喉元まで出る」、「いうまでもない」、「耳の付け根まで真っ赤になる」など。

これらの助詞使用の例は少数であるが、その用法や意味機能については後述する。

6.4.3 「身体語彙」に後接する助詞の用法や意味機能に関する考察

白石(1995)は、慣用表現における助詞「を」を例にして、

日本語は、同じ「を」の格助詞であっても、上の名詞と下の動詞との関係で、その機能が違う。同じ動詞句であっても、そういう機能の違う一連の言い方を精査することによって、日本語の成句の特色を見極めることができる。(p. 18)

と述べている。身体語彙と後接する助詞の使用状況や、その助詞の用法や機能の違いを検討することによって、慣用表現の意味を理解する助けになり、日本語の身体語彙慣用表現の特色をさらに把握することができると考えられる。

そこで、本節では、<付録2>「身体語彙慣用表現リスト」に掲げる身体語彙慣用表現

をもとに、これらの慣用表現に使用されている助詞が、どのような用法や意味機能を持つかについて考察する。

6.4.3.1 後接する助詞「を」の使い方について

『日本国語大辞典』では、格助詞「を」の意味機能は<表 41>に示すように、9つに分かれている（以下も参照先は同辞典とする）。

<表 41> 『日本国語大辞典』による助詞「を」の使い方の分類(筆者作成)

種類	使い方・働き	
格助詞	一. 働きかけの対象となるものや事柄を表す。	①状態を変化させる動作の対象となるものや事柄を表す。 ②第一の対象を第二の対象に取り付けたり、そこから取り除いたりする動作の、第一の対象となるものを表す。 ③空間的な位置を変化させる動作の対象となるものを表す。 ④接触の対象となるものを表す。 ⑤ある動作によって作り出されるものを表す。 ⑥表現したり感じたりすることによって出現する抽象物を表す。
	二. 働きかけの対象となる人を表す。	①物理的な状態の変化や空間的な位置の変化を引き起こす動作の対象となる人を表す。 ②心理的な状態の変化を引き起こす動作の対象となる人を表す。 ③社会的な状態の変化を引き起こす動作の対象となる人を表す。 ④呼びかけやさそいかけの対象となる人を表す。
	三. 所有の対象や所有関係の変更の対象を表す。	①授受・貸借の対象を表す。 ②入手の対象や手放す対象を表す。
	四. ある意図のもとに行われる動作の対象を表す。	①ある人・場所に接近しようとする態度で行われる動作の対象を表す。 ②ある人・場所・物事から離れようとする態度で行われる動作の対象を表す。 ③あるものを相手に提示しようとする動作の対象を表す。 ④ある人や物を他の働きかけから守ろうとする動作の対象を表す。 ⑤問いただしたり、調べたりする動作の対象を表す。 ⑥ある物・事を描写・表現しようとする動作の対象を表す。 ⑦崇拜する気持ちで行われる動作の対象を表す。 ⑧ある特定の態度で行われる動作の対象を表す。
	五. 認知活動や言語活動の対象やその内容を表す。	①視覚・聴覚・嗅覚など感性的な知覚活動の対象を表す。 ②抽象的な認識の思考活動の対象やその内容を表す。 ③発見の対象やその内容を表す。 ④話す・聞く・書く・読むなどの言語活動の対象やその内容を表す。
	六. 物事に対するある態度や活動の対象、またその内容を表す。	①感情や評価の対象を表す。 ②希望の対象を表す。 ③意志的行為や要求的行為の対象となる内容を表す。 ④経験する物事の内容を表す。 ⑤(下の動詞と同意の体言をのせて)動作・作用の内容を表す。
	七. 移動動作が成り立つ空間的な状況や周りの状況を表す。	①移動動作が行われる範囲を表す。 ②通過する場所を表す。 ③出発する場所を表す。 ④動作が行われる周りの状況を表す。
	八. 動作が行われる時間を表す。	
	九. 主体の変化がどんな側面で起こるかを表す。	

本研究で収集した身体語彙慣用表現においては、身体語彙に後接する助詞「を」はどの

レベルの慣用表現でも使用数が最も多く、その用法や意味機能には次の1)～10)の10種類が見られた。

- 1) 「一. ①状態を変化させる対象となるものや事柄を表す」 例：「心を動かす」、「身を削る」、「血を流す」など。
- 2) 「一. ③空間的な位置を変化させる動作の対象となるものを表す」 例：「涙を落とす」、「汗を滴らせる」など。
- 3) 「一. ④接触の対象となるものを表す」 例：「汗を拭く」、「目を覆う」など。
- 4) 「一. ⑤ある動作によって作り出されるものを表す」 例：「傷をつける」、「跡を残す」。
- 5) 「一. ⑥表現したり感じたりすることによって出現する抽象物を表す」 例：「気を配る」、「念を込める」、「意を抱く」など。
- 6) 「五. ①視覚・聴覚・嗅覚など感性的な知覚活動の対象を表す」 例：「血のにおいを嗅ぐ」、「息を鳴らす」など。
- 7) 「五. ②抽象的な認識の思考活動の対象やその内容を表す」 例：「思いを馳せる」、「望みを持つ」など。
- 8) 「五. ④話す・聞く・書く・読むなどの言語活動の対象やその内容を表す」 例：「うそをつく」など。
- 9) 「七. ①移動動作が行われる範囲を表す」 例：「額に汗を流す」、「背中をかく」。
- 10) 「七. ②通過する場所を表す」 例：「筋を通す」、「口を滑らす」など。

6.4.3.2 後接する助詞「が」の使い方について

『日本国語大辞典』では、格助詞「が」の意味機能は、「連体格用法」、「形容詞＋さ」の形に続く用法、「連用格用法」の3つに分かれている。〈表42〉に示す。

〈表42〉『日本国語大辞典』による助詞「が」の使い方の分類(筆者作成)

種類	使い方・働き		
格助詞	一、連体格用法 受ける体言が、 下の体言に対し て修飾限定の関 係に立つことを 示す。現代語で は「の」が用い られる。	1. ①下の実質名詞を、所有・所属その他の種々の関係において限定、修飾する。	
		②下の実質名詞を省略したもの。	
		③数詞を受け、下に来るべき「もの」「所」などの名詞を省略したもの。～に相当するの意を表す。	
		2. 下の形式名詞「から」「こと」「むた」「まにま」「ため」などの実質、内容を示す。	
	二、「形容詞＋さ」の形に続き、感動を表す。		
	三、連用格用法 受ける体言が、 下の用言に対し て修飾限定の関 係に立つことを 示す。	1. 主格用法	①従属句、条件句の主語を示す。
			②連体形で終止し、余情表現となる文の主語を示す。
			③言い切り文の主語を示す。
		2. 対象格用法。希望、能力、好悪などの対象を示す。	

本調査で採集した身体語彙慣用表現における助詞「が」の意味用法には、「格助詞」の「三、1. ①従属句、条件区の主語を示す」という使い方のみが見られた（例：「血が上る」、「気が狂う」、「膝が笑う」）。

6.4.3.3 後接する助詞「に」の使い方について

格助詞「に」の意味機能は『日本国語大辞典』によれば、＜表 43＞に示すように 18 の用法に分かれている。

＜表 43＞『日本国語大辞典』による助詞「に」の使い方の分類(筆者作成)

種類	使い方・働き	
格助詞	一、動きや状態の成り立つ状況を表す。	①動作や状態の成り立つ時を表す。
		②動きや状態の成り立つ場所を表す。
		③動きや状態がその中で成り立つ環境、情勢を表す。
		④動きや状態が成り立つ原因、理由、機縁などを表す。
	二、動作や作用の結果生ずるものや、状態を表す。	①「なる」「なす」「す(する)」など、実質概念を欠く動詞による結果の状態を表す。
		②物を作り出す動きによってできるものを表す。
	三、「思う」「聞く」「知る」「見る」などの心理活動、感覚活動の内容を表す。	
	四、動きのありさまを詳しく表す。	①動きの様態を詳しく表す。
		②(動詞の連用形を受け、「～に～」の形で同じ動詞を繰り返し用いて)動きの程度が十分すぎることを、また甚だしいことを強調する。
		③動きの方法を詳しく表す。
	五、動きの目的を表す。	①移動、動作の目的を表す。
		②動きの用途や資格を表す。
	六、移動の行く先や方向を表す。	
	七、表面についたり、中に入り込んだりする対象を表す。	
	八、話したりあったり与えたりなど、ある動作を行う相手を表す。	
	九、動作、態度の関わる対象を表す。	①心理的な活動の対象を表す。
		②ある態度を示す動作の対象を表す。
	十、状態や性質に関して比較する基準を表す。	
十一、ある動作・作用を行う道具や材料を表す。		
十二、使役動詞で示される動作の働きかけが及ぶ対象を表す。		
十三、受身表現での動作の主体を表す。		
十四、成否、巧拙、好悪などを問題にする対象を表す。		
十五、ある属性や能力を持っている対象を表す。		
十六、ある物事の有無を問題にする対象のものを表す。		
十七、あり場所を示すことによって、婉曲にそこにいる人が動きの主体であることを表す。		
十八、似合いのものを添加したり、物事を並べ挙げたりする意を表す。		

本調査で採集した身体語彙慣用表現における格助詞「に」の意味用法は次の 1) ～6) の 6 種類であった。

- 1) 「一、②動きや状態の成り立つ場所を示す」 例：「心がない」、「身に余る」、「念に念を入れる」など。
- 2) 「一、④動きや状態が成り立つ原因、理由、機縁などを表す。」 例：「血に狂う」、「鳴

咽に咽る」、「涙に濡れる」など。

- 3) 「二. ①「なる」、「なす」「す (する)」など、実質概念を欠く動詞による結果の状態を表す」 例：「身二つになる」、「力になる」など。
- 4) 「六. 移動の行く先や方向を表す」 例：「念頭に置く」、「目に留める」、など。
- 5) 「九. ②ある態度を示す動作の対象を表す」 例：「意に逆らう」、「予想に反する」、「怨みに報ゆるに徳を以てす」など。
- 6) 「十三. 受身表現での動作の主体を表す」 例：「沈黙に包まれる」、「情に流される」など。

6.4.3.4 後接する助詞「から」の使い方について

格助詞「から」の意味機能は『日本国語大辞典』によれば、<表 44>に示すように、5つに分かれている。

<表 44> 『日本国語大辞典』による助詞「から」の使い方の分類(筆者作成)

種類	使い方・働き
格助詞	一. 動作の経由地を示す。～のままに。～に従って。～に沿って。
	二. 動作の起点を示す。時間的起点を示す場合と、空間的起点を示す場合とがある。
	三. 手段を示す。～によって。～で。
	四. (二. の用法から転じて)体言または接続助詞「て」を受け、「～から後」「～以上」の意を表す。
	五. (二. の用法から転じて)体言を受け、「～からはじめて」「～をはじめとして」の意を表す。「からして」の形で用いられることもある。

本調査で採集した身体語彙慣用表現における助詞「から」の意味用法には、「二. 動作の起点を示す」のみであった(例：「目から火が出る」、「嘘から出たまこと」、「額から汗がでる」)。

また、「一次～三次」身体語彙慣用表現においては、「から」を構成要素として持つ慣用表現は、そのほとんど「一次」に集中しており、「二次」・「三次」では、上述の「嘘から出たまこと」のみであった。

6.4.3.5 後接する助詞「で」の使い方について

格助詞「で」の意味機能を『日本国語大辞典』によれば、「一. 場所・時間を示す」、「二. 手段・方法・材料などを示す」、「三. 理由・根拠を示す」、「四. 主格助詞によらないで、動作・状態の主体を示す」の4つの用法に分かれている。<表 45>に示す。

本調査で採集した身体語彙慣用表現における助詞「で」の意味用法には、「二. 手段・方法・材料などを示す」が最も多かった(例：「嘘で固める」、「目で物を言う」)。

<表 45> 『日本国語大辞典』による助詞「で」の使い方の分類(筆者作成)

種類	使い方・働き
格助詞	一. 場所・時間を示す。
	二. 手段・方法・材料などを示す。
	三. 理由・根拠を示す。
	四. 主格助詞によらないで、動作・状態の主体を示す。

一方、少数ではあるが、「一. 場所・時間を示す」、「三. 理由・根拠を示す」の使い方も見られた(例:「心で褒めて口でけなす」、「手放して喜ぶ」)。

6.4.3.6 後接する助詞「と」の使い方について

格助詞「と」の意味機能は『日本国語大辞典』によれば、<表 46>に示すように、「1. 連体関係を表すもの。」と、「2. 連用関係を表すもの。」の2つの用法に分かれている。

<表 46> 『日本国語大辞典』による助詞「と」の使い方の分類(筆者作成)

種類	使い方・働き
格助詞	1. 連体関係を表すもの。体言、又は、体言と同資格の語句を承け、それが同種の語句に対して並立関係にあることを示す。
	①(1. の用法から転じて)共同の相手を表す。～とともに。
	②引用を表す。文或いは文相当の語句や擬声語を承け、下の動詞(「思う」「いう」「聞く」などの場合が多い)の内容を表す。
	③体験を承けてそれを状態性概念とし、また、擬態語を承けて、状態性副詞を構成し、動作概念を修飾する。体言を承けた場合、比喩的修飾となることがある。
	2. 連用関係を表すもの。
	④形式用言の実質を示す。
	⑤比較の基準を表す。
	⑥同じ動詞、又は形容詞の間に用いて、強調を表す。動詞の場合は連用形を承けて「し」が下接することが多く、形容詞の場合は終止形を承け「も」が下接する。
⑦(打消しの言い方を伴って)その限度を表す。	

本調査で採集した身体語彙慣用表現で、格助詞「と」を構成要素として持つものは少数であったが、「1. 連体関係を表すもの。体言、又は、体言と同資格の語句を承け、それが同種の語句に対して並立関係にあることを示す」に使用例が見られた(例:「目と鼻の先」、「骨と皮になる」、「口と心が違う」)。

6.4.3.7 後接する助詞「の」の使い方について

格助詞「の」の意味機能は『日本国語大辞典』によれば、<表 47>に示すように、「一.

連体格を示す格助詞「二. ～であって」「三. 体言を受け、形容詞語幹に体言的接尾語『さ』
 についたものを修飾する」「四. 主格を表す助詞」「五. 他の格助詞の用法に通ずると言われ
 るもの」の5つの用法に分かれている。

<表 47> 『日本国語大辞典』による助詞「の」の使い方の分類(筆者作成)

種類	使い方・働き		
格	一. 連体格を示す格助詞。 体言または体言に準ずるものを受けて下の体言にかかる。	1. 下の実質名詞を種々の関係(所有・所属・同格・属性その他)において限定・修飾する。	①修飾される実質名詞が表現されているもの。 ②修飾されるべき下の実質名詞を省略したもの。 ③下の名詞(人を表す体言)を省略して、呼びかけに用いる。
		2. 下の形式名詞の実質・内容を示すもの。	①形式名詞が表現されているもの ②実質を示されるべき、下の形式名詞「如(ごと)」を省略したもの。～のように。
	二. [(一) 1②の同格を表す用法から転じて]～であって。		
	三. 体言を受け、形容詞語幹に体言的接尾語「さ」のついたものを修飾する。		
助詞	四. 主格を示す助詞。	1. ①従属句や条件句等、言い切りにならない句の主語を示す。 ②連体形で終わる詠嘆の文や疑問・反語・推量文中の主語を示す。 ③言い切り文の主語を示す。	
		2. 好悪の感情や希望・可能の対象を示す。	
助詞	五. 他の格助詞の用法に通ずると言われるもの。		

本調査で採集した身体語彙慣用表現で、格助詞「の」の使用例として、「破竹の勢い」、「血肉の争い」、「緑の黒髪」等が挙げられる。

このうち、「破竹の勢い」の「の」は「一. 連体格を示す格助詞の 2. 下の形式名詞の実質・内容を示すものの②～のような。」の用法である。

「血肉の争い」の「の」は「四. 主格を示す助詞の 1. ①句の主語を示す。」用法である。

「緑の髪」の「の」は「一. 連体格を示す助詞の 1. 下の実質名詞を種々の関係において限定・修飾する」用法である。

6.4.3.8 後接する助詞「へ」の使い方について

格助詞「へ」の意味機能は『日本国語大辞典』によれば、「一. 移動性の動作の目標を示す。」「二. 動作・作用の帰着点を示す。」「三. 動作・作用の及ぶ対象・方向を示す。」「四. 物を移動させるときの帰着点を示す。」「五. 動作の結果を示す。」の5つの用法に分かれている。<表 48>に示す。

本研究で調査した身体語彙慣用表現で、「二次」・「三次」身体語彙慣用表現には、格助詞「へ」の用法は見当たらなかった。

一方、「一次」身体語彙慣用表現には、「一. 移動性の動作の目標を示す。」「二. 動作・作用の帰着点を示す。」に使用例が見られた(例:「足元へ寄りつけない」、「口へ入る」、

「寝耳へ水が入る」)。

<表 48> 『日本国語大辞典』による助詞「へ」の使い方の分類(筆者作成)

種類	使い方・働き
格助詞	一. 移動性の動作の目標を示す。
	二. 動作・作用の帰着点を示す。
	三. 動作・作用の及ぶ対象・方向を示す。
	四. 物を移動させるときの帰着点を示す。
	五. 動作の結果を示す。

6.4.3.9 後接する助詞「より」の使い方について

格助詞「より」の意味機能は『日本国語大辞典』によれば、<表 49>に示すように、「体言または体言に準ずるものを受ける」用法として、さらに5つに分かれている。

<表 49> 『日本国語大辞典』による助詞「より」の使い方の分類(筆者作成)

種類	使い方・働き	
格助詞	体言または体言に準ずるものを受ける	①時間的・空間的の起点を示す場合。～から。
		②ある動作・作用が起点となる場合。それにすぐ続いて。～とすぐに。
		③ある物や人の働きかけが起点となる場合。～の働きで。それがもとで。～のために。
	二. 動作が行われる場所・経由地を示す。	
	三. 動作や作用の手段・方法を示す。～によって。～で。	
四. 比較の基準を示す。		
五. 事柄や範囲を限定する意を示す。		

本調査で、「より」を含む「二次」・「三次」身体語彙慣用表現は「色気より食い気」の一つのみであった。「一次」でも、「心より外に」の一つのみであった。「色気より食い気」の「より」は「四. 比較の基準を示す。」の用例で、「心より外に」は「一. ①時間的・空間的の起点を示す場合。～から。」の用例である。

6.4.3.10 後接する助詞「は」の使い方について

係助詞「は」の意味機能は『日本国語大辞典』によれば、「一. 文中の連用語を受け、述語との結びつきを強める。」「二. 連体修飾の文節を受け、対比的に被修飾語との関係を強める。」の2つに分かれている。<表 50>に示す。

本研究で調査した身体語彙慣用表現で、係助詞「は」の用例には、「目は口ほどものと言ふ」、「背に腹は代えられぬ」、「血は水よりも濃い」などがあり、いずれも「一. 1. ③対比すべき事柄を言外におくことにより強める。」用法である。

<表 50> 『日本国語大辞典』による助詞「は」の使い方の分類(筆者作成)

種類	使い方・働き	
係助詞	一. 文中の連用語を受け、述語との結びつきを強める。排他的な気持の含まれる場合がある。	1. 体言・体言に準ずる語句およびこれらに助詞の付いたもの、副詞などを受けける。
		① 叙述の題目を提示する。
		② 連用語を対比的に提示する。
		③ 対比すべき事柄を言外におくことにより強める。
		④ 「Aが…する(である)一方、BはBで…する(である)」の形で、Aの行為・状態に対して、Bが独自に類似した行為を行なう(類似した状態である)ことを表わす。
	2. 複合動詞の中間に入り、あるいは活用語の連用形・副詞などを受けて強調し、打消または逆接の表現に続く。	
3. 「ずは」の形で用いられた上代の特別用法。		
4. 「…は(には・ことは)…」の形で同じ形容詞・形容動詞・動詞をうけて、その観点・次元については…であるということが認められるが、その意義を減少させるような要素もある、ということを示す。「…は…が」の形では、形容動詞は初めのは語幹、後ののは終止形を用いる。		
5. 形容詞および打消の助動詞「ず」の連用形を受け、仮定条件を表わす。		
二. 連体修飾の文節を受け、対比的に被修飾語との関係を強める。		

6. 4. 3. 11 後接する助詞「も」の使い方について

係助詞「も」の意味機能は『日本国語大辞典』によれば、「文中用法」と「文末用法」の2つに分かれ、さらに、「文中用法」を5つに分かれている。<表 51>に示す。

<表 51> 『日本国語大辞典』による助詞「も」の使い方の分類(筆者作成)

種類	使い方・働き	
係助詞	一. 文中用法	1. 文中の種々の連用語を受ける。
		① 同類のものが他にあることを前提として包括的に主題を提示する。したがって多くの場合、類例が暗示されたり、同類暗示のもとに一例が提示されたりする。類例が明示されれば並列となる。短文の場合は活用語を終止形で結ぶ。
		② 主題を詠嘆的に提示する。
		③ 願望の対象を感動的に提示する。
		2. 同じ語の間に挟み、強調の意を表す。
	① 「AもA(だ)」の形で同じ語(名詞又は形容動詞の語幹)を受けて、一般的なAではなく、特別な程度の甚だしいAである、ということを表す。	
	② 「AもAだが(なら)BもBだ」の形で、人を表す名詞を受けて、AもBも共に常軌を逸して飽きられるほどである、の意を表す。	
	③ 「～も～たり」「(たり)は完了の助動詞」などの形で、同じ動詞の連用形を受けて、その動作が激しく、或いは長時間にわたって行われた、ということ、驚きの気持ちをこめて言う。	
	3. 対照的な二つの語に添えて強調の意を表す。	
	① 「～も～ないもない」の形で同じ語(動詞・形容詞)を受け、～するか(～であるか)どうかを論ずるまでもない、ということを表す。	
② 「AもBもない」の形で対照的な意味の二つの語を並べて、AとBの区別をする場面・状況ではない、という意を表す。		
③ 「Aもへったくれ(くそ)もない」「Aもなにもない」などの形で、この状況ではAなぞ本来の意味・価値を持たない、また、Aが存在しない、必要ない、ということ、強めて言う。		
4. 詠嘆を表わし、間投助詞的に用いられる。		
① 間投助詞に上接して軽い詠嘆を表わす。		
② 形容詞の連用形・副詞・数詞・接続助詞「て」などを受け、また複合動詞の中間に介入して詠嘆的強調を表す。		
5. 係助詞に上接して副助詞的に用いられる。		
二. 文末用法	文末の終止形(文中に係助詞があるときはそれに応ずる活用形)及びク語法を受けて詠嘆を表わす。体言を受ける場合は同じく詠嘆を表わす他の係助詞が上接してかも」「はも」「そも」などの形となる。終助詞とする説もある。	

本研究で調査した身体語彙慣用表現における「も」では、「一.3.②「AもBもない」の形で対照的な意味の二つの語を並べて、AとBの区別をする場面・状況ではない、という意を表す。」の用例が多かった（例：「身も世もない」、「足も立たず目も見えず」、「血も涙もない」）。

また、「一.1.①同類のものが他にあることを前提として包括的に主題を提示する。」の用例もあった（例：「心も及ばず」、「猫の手も借りたい」、「ぐうの音も出ない」）。

6.4.3.12 後接する助詞「まで」の使い方について

副助詞「まで」の意味機能は『日本国語大辞典』によれば、〈表 52〉で示すように、6つの用法に分かれている。

〈表 52〉『日本国語大辞典』による助詞「まで」の使い方の分類(筆者作成)

種類	使い方・働き
副助詞	一. 体言・活用語の連体形・助詞などを受けて、事態の至り及ぶ時間的・空間的・数量的限界を示す。格助詞とする説もある。
	二. 活用語の連体形・副詞や体言を受け、事態の及ぶ程度を表す。ほど。
	三. 体言や体言に助詞のついたものなどを受けて、極端的な例を挙げて、極端なものがそうであるのだから、普通の水準のものは、言うまでもなくそうである、という類推の意味を表わす。さえ。
	四. 体言または活用語の連体形を受け、それ以上には及ばず、それに限られる意を表す。だけ。～にすぎない。
	五. (四. から転じて)文末にあつて確認・強調の意を表し、終助詞的に用いられる。
	六. 動作の相手を示す。

本研究で調査した身体語彙慣用表現で、「二次」・「三次」身体語彙慣用表現には、「まで」を含む使用例は見当たらなかった。

これに対して、「一次」身体語彙慣用表現では「心いくまで」、「耳の付け根まで真っ赤になる」、「喉元まで出る」の3例を採集した。「心いくまで」は「一. 体言・活用語の連体形・助詞などを受けて、事態の至り及ぶ時間的・空間的・数量的限界を示す」の用例で、残りの2つは「二. 活用語の連体形・副詞や体言を受け、事態の及ぶ程度を表す。ほど。」に該当する。

6.4.4 後接助詞を伴わない「身体語彙」慣用表現

さらに、「一次～三次」身体語彙を構成要素として持つが、後接する助詞を伴わない身体語彙慣用表現も確認された。

これらの慣用表現には、「大泣き」のように身体語彙が接頭辞と結びついてできたものもあれば、「もらい泣き」や「力不足」などのような、2つの言葉の結びつきでできた連

語的慣用句もある。また、身体語彙が連体修飾語となる「聞く耳を持つ」や「見る目がない」の類もある。

6.5 本章のまとめ

本章では、まず、七種の慣用句辞書、研究書を対象にして調査を行い、「一次～三次」身体語彙を構成要素として持つ慣用表現を採集した。

次に、『分類語彙表』に収録されている慣用表現を採集し、七種の慣用句辞書、研究書と比較した結果、二次語彙では「血、息、力」、三次語彙では「気、意、念」を持つ慣用表現が多く使用されていることが分かった。

さらに、採集した「一次～三次」身体語彙慣用表現をもとに、本論文で取り扱う「慣用表現リスト」を作成し、品詞性分類や、統語的構造の分析を行った結果、品詞性分類では、「N+助詞+動詞」が圧倒的に多く、「N+助詞+形容詞」、「N+助詞+名詞」の慣用表現は少数であった。

最後に、身体語彙慣用表現における身体語彙と、後接する助詞の共起状況について調べ、日本語の身体語彙慣用表現の特色を考察した。

第7章 比喩形式と比喩的慣用表現研究

本章では、比喩形式の概念と、日本語の比喩的慣用表現に関する先行研究、並びに中国語における慣用表現の先行研究について概観し、本研究における日中慣用表現の対応関係を検討する。

7.1 比喩形式の概念

語がしばしば比喩的な意味に用いられることはよく知られている。それにも関わらず、ウンゲラー、シュミット（1998）が述べているように、「この言語現象の研究は長いこと文学研究者と修辞学や文体論に興味がある変わり者の言語学者の手にもっぱら委ねられてきた（p. 139）」。比喩の概念について、松本（2003）は

語の最も基本的な意味から、類似したものに意味が拡張したり、より特殊な、個別的な意味を表すようになったり、また、その語が本来指示するものと隣接するものに指示がずれる場合がある。このような現象は比喩(*figure of speech*)と言われる。（p. 75）

として、先行研究の佐藤（1992 [1978]）、池上（1993）、瀬戸（1986, 1997）、靱山（1997、1998、2002）などを踏まえて、「メタファー、メトニミー、シネクドキー」という3種の主要な比喩を成り立たせている認知能力の基盤について検討した。

また、靱山（2010）は

ある言葉（＝語・句・文）を本来の意味とは異なる意味に用いることを「比喩」と言います。 (p. 35)

と述べ、「メタファー、メトニミー」について言及し、さらに靱山（2014）では、「メタファー、シネクドキー」について論じている。

本節では、ウンゲラー、シュミット（1998）、松本（2003）、靱山（2010、2014）を基に、比喩形式について論じる。

7.1.1 メタファー：

靱山（1997、2010）は、「メタファー」を比喩の主要タイプの一つとして、次のように定義をしている。（松本（2003）の定義は、靱山（1997）の引用に拠る（pp. 76－78））。

メタファー： 隠喩（metaphor）、類似性（similarity）に基づく比喩。

2つの事物・概念の何らかの類似性に基づいて、本来は一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩。

（靱山 1997, p. 35）

また、ウンゲラー、シュミット（1998）では、「メタファーは表現の字義通りの意味と比喩的意味の間の「類似性」や「比較」に基づく（中略）身体部位を表す語の多くはメタファーによって拡張された用法を数多く持つ」と主張している（p. 142）。松本（2003）と異なる点は「比較」の有無である。

さらに、ウンゲラー、シュミット（1998）は、「慣習化されたメタファー（「死んだ」メタファー）」という概念を提示し、

ことばの形式と意味の結びつきが慣習化され、語彙化され、語が持つ「メタファー」としての力がもはや感じられなくなった「メタファー」のことで、「具象化メタファー」、「アニミズムメタファー」、「擬人化メタファー」、「共感覚メタファー」がその最もよくあるタイプである。 (pp. 143－144)

としている。

一方、靱山（2010）はメタファーの具体例として、

①形や（身体における）位置などの外見の類似性に基づくもの、例：「マウス」、「猫

- 背]、「目玉焼き」など、
- ②より抽象的な類似性に基づくもの、例：「故障」、「歯車」、「充電」など、
- ③メタファーに基づく基本的な動詞の意味、(例：「非難を浴びる」、「戦慄が走る」、「精神的に支える」など (pp. 36-37)

を挙げている。

7.1.2 メトニミー：

靱山 (1997、2010)、松本 (2003)、ウンゲラー、シュミット (1998) は、「メトニミー」についても、次のように定義をしている。

靱山 (1997) は、

メトニミー：換喩 (metonymy)、隣接性 (contiguity)、さらに広く「関連性」に基づく比喩。

2つの事物の外界における隣接性、さらに広く2つの事物・概念の思考内・概念上の「関連性」に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩 (靱山 p. 44)

と定義している。(松本 (2003) の定義は、靱山 (1997) の引用に拠る (p. 83))。

また、靱山 (2010) は、「メトニミー」の認知基盤に関しては、2つの事物の空間における隣接性とその最も基本的な基盤であるとし、「空間上の隣接」と「時間上の隣接」、及び「様々な関連性」の3つに分けて、それぞれについて次のように説明している。

「空間上の隣接」：

- ①空間において、2つのものが隣接していることに基づくもの。本来は一方のものを表す表現でもう一方の物を表すケース、例：「テーブルを片付ける」、「黒板を消す」など、
- ②空間的な隣接の特殊な場合、「部分と全体の関係」に基づくもの。例：「扇風機が回っている」、「手が足りない (から手伝って)」など。これはさらに、次のA、Bに分けられるとしている。
- A. 本来あるものの一部分を表す語でそのもの全体を表す (部分→全体) 場合、例：「手が足りない (から手伝って)」における「手」は、< (手を部分として含む) 人間の体全体を表している >。
- B. 本来、全体を表す語で部分を表す (全体→部分) 場合、例：扇風機が回っている」における「扇風機」は扇風機の部分である<羽根>を指している。

「時間上の隣接」:

- ①2つの出来事の動作が同時に生じることに基づくもの、例:「頭を抱える」、「胸をなでおろす」、「首を傾げる」、「頭が下がる」など。
- ②2つの出来事が時間的に連続して生じる場合、例:「言うことを聞く」、「お手洗い」、「骨を埋める」など。

「様々な関連性」:

- ①「原因と結果の関係」にあることに基づくもの、例:「くちがきたい」、「二の句が継げない」など。
- ②「モノとコトの関係」に基づくもの、本来<もの>を表す語で、<そのものに関わること>を表す場合、例:「やっと原稿が終わった」など。
- ③「作者と作品の関係」、「生産者と製品の関係」に基づくもの、本来<人>を表す語で<その人の作品>を表す場合、例:「漱石を読む」、「トヨタに乗っている」など。

また、この点について、ウンゲラー、シュミット(1998)は、「メトニミーは語の字義通りの意味によって指示されるものと比喩的な意味によって指示されるもの間に「近接性」の関係がある」(p. 141)とし、その近接関係の典型的な諸タイプについて、次のように示した。

- ①「部分で全体を表す」
 - ②「全体で部分を表す」
 - ③「容器で内容物を表す」
 - ④「材料で物体を表す」
 - ⑤「生産者で生産物を表す」
 - ⑥「場所で機関を表す」
 - ⑦「場所で出来事を表す」
 - ⑧「被管理物で管理者を表す」
 - ⑨「原因で結果を表す」
- (p. 141)

7.1.3 シネクドキー:

「シネクドキー」について言及しているのは、靱山(1997)である。(松本(2003)の定義は、靱山(1997)の引用に拠る(p. 79))。

シネクドキー: 提喩(synechdoche)、より一般的な意味を持つ形式を用いて、より特

殊な意味を表す、あるいは逆により特殊な意味を持つ形式を用いて、より一般的な意味を表す比喻。 (靱山 p. 31)

と述べ⁴⁵ている。

また、松本 (2003) は、「シネクドキー」を以下の「特殊化」と「一般化」に分けた。

特殊化 (specialization) : 「より一般的な意味からより特殊な意味への拡張 (類から種への意味の拡張)」の場合を指す。例 : 「花見に行く」、

「B さんはおめでただそうだ」、 「A 選手は足がある」 など

一般化 (generalization) : 「より特殊な意味を表す語・句が、より一般的な意味を表すようになる (種から類への意味の拡張) 場合を指す。例 :

「A さんは本当に酒飲みだ」、 「内弁慶」、 「ドン・キホーテ」 など

さらに、靱山 (2014) は、

ある語 (などの表現) が、本来の意味よりも狭い意味あるいは広い意味を表すことを「シネクドキー」(提喩 synechdoche) という。シネクドキーは、カテゴリーを伸縮することができるという認知能力を基盤としている。

なお、シネクドキーは、メタファー (隠喩)、メトニミー (換喩) とともに、比喻の重要な種類の 1 つである。 (p. 45)

と述べて、「意味の縮小 (類から種への転用)」(例 : 「花見に行く」、「卵を買う」) と、「意味の拡大 (種から類への転用)」(例 : 「ちょっとお茶を飲みに行かない?」、「内弁慶」) とに分けて、例を挙げながら説明している。

松本 (2003)、靱山 (2014) のシネクドキーに関するこの分類は、第 4 章で既述した横山 (1935) の身体の部分的名称を応用したイディオムの「意味変化」に関する分析における「狭くなる (意義の縮小または特殊化)」、及び「広くなる (意義の拡張または一般化)」の分類に類似しているものと思われる。

7.1.4 「メタファー、メトニミー、シネクドキー」の関係

ウンゲラー、シュミット (1998) は、認知論において、「メトニミー」がどのように「メ

⁴⁵なお、「より一般的な意味」と「より特殊な意味」について、松本(2003)は、前者は「相対的に外延が大きい (指示範囲が広い)」で、「類 (genus)」と呼び、後者は「外延が小さい (指示範囲が狭い)」、「種 (species)」と呼んで、この「類と種の関係に基づく場合に限ってシネクドキーという」(p. 79)としている。

タファー」と区別されるか、両者がどのように協働するかについて、

両者とも概念を構成するという性格を持ち、慣習化（つまり自動的で、意識にのぼらず、努力を要しなく、思考のモデルとして一般的に確立）され得、言語の持つ可能性を拡張する手段であり、写像のプロセスとして説明され得る。

両者の主な相違点は、メタファーが異なる認知モデル間の写像であるのに対して、メトニミーは単一の認知モデル内の写像であるという点である。 (p. 159)

と述べている。

松本（2003）は、3種の比喩「メタファー、メトニミー、シネクドキー」の関係について、

メタファーとシネクドキーは同種の比喩であるが、（中略）メタファーの場合には、2つの意味が食い違う意味要素を有するのに対して、シネクドキーの場合は、一方の意味は他方がない意味要素を余分に持っている。 (p. 89)

メトニミーはメタファーとシネクドキーとは「基本的な性格が異なるものである。（中略）、メトニミーは、空間的隣接性、さらには多様な関連性に基づく比喩であることから、ある表現の本来の意味とメトニミーによって拡張した意味との間に共通の意味要素が存在することを必要としない。 (p. 89)

と述べている。

靱山（2014）は、「シネクドキー」と「メトニミー」について、

（ある種の）メトニミーは、「AはBの一部である」という関係に基づくのに対して、シネクドキーは「AはBの一種である」という関係に基づき、両者は明らかに異なる。さらに確認すると、メトニミーは、（現実）世界における2つの事物間の関係を基盤とするのに対して、シネクドキーは、2つのカテゴリーの大小を基盤としているのである。 (p. 56)

と指摘している。

これらの3種の主要な比喩形式「メタファー」、「メトニミー」、「シネクドキー」を<表53>に示した。

<表 53> ウンゲラー、シュミット (1998)、松本 (2003)、靱山 (2010・2014) に基づく主要な比喩形式についてのまとめ (筆者作成)

	種 類	概 念	主 張 者	主 張 内 容				
比 喩	メタファー	隠喩 (metaphor)	類似性 (similarity) に 基づき意味を拡張 する比喩	F. ウンゲラー/ H.-J. シュミット (1998)	慣習化されたメタファー (「死んだ」メタファー)			
				松本 (2003)、 靱山 (2010)	①形や(身体における)位置などの外見の類似性に基づくもの			
					②より抽象的な類似性に基づくもの			
	メトニミー	換喩 (metonymy)	隣接性 (contiguity)、 さらに広く「関連 性」に基づく比喩	松本 (2003)、 靱山 (2010)	「空間上の隣接」	空間において、2つのものが隣 接していることに基づくもの	部分→全体	
				F. ウンゲラー/ H.-J. シュミット (1998)、松 本 (2003)、靱 山 (2010)		「部分と全体の関係」に基づく もの	全体→部分	
				松本 (2003)、 靱山 (2010)	「時間上の隣接」	2つの出来事の動作が同時に生 じることに基づくもの		
				F. ウンゲラー/ H.-J. シュミット (1998)、松 本 (2003)、靱 山 (2010)		2つの出来事が時間的に連続し てい生じる場合		
					「様々な関連性」	「モノとコトの関係」に基づく もの		
						「作者と作品の関係」、「生産 者と製品の関係」に基づくもの		
						「原因と結果の関係」にあるこ とに基づくもの		
						「容器で内容物を表す」		
						「材料で物体を表す」		
「場所で機関を表す」								
シネクドキー	提喩 (synechdoche)	より一般的な意味 を持つ形態素・語 で、より特殊な意 味を表す(あるいは その逆)比喩	松本 (2003)		特殊化 (specialization)	より一般的な意味からより特殊 な意味への拡張	類から種への転用	
			靱山 (2014)	一般化 (generalization)	より特殊な意味を表す語・句が 、より一般的な意味を表す	種から類への転用		
				意味の縮小	より広い意味からより狭い意味 に転用される	類から種への転用		
				意味の拡大	より狭い意味からより広い意味 に転用される	種から類への転用		

7.1.5 シミリ (simile) :

「シミリ」については、靱山 (2014) で取り上げられているが、明確な定義がなされていない。

参考までに、『デジタル大辞泉』の記事を引用すると、

シミリ：直喩、明喩 (simile)、比喩法の一。「ようだ」、「ごとし」、「似たり」などの語を語を用いて、2つの事物を直接に比較して示すもの。「雪のような肌」、「蜜に群がる蟻のごとく集まる」の類。(「シミリー」とも)。

と記述されている。

以上、先行研究を踏まえて、比喩的形式の種類「メタファー」、「メトニミー」、「シネクドキー」、「シミリ」について検討してきたが、本研究では、基本的に靱山 (1997、2010、2014)、松本 (2003) の定義に従うこととする。

7.2 比喩的慣用表現に関する先行研究

日本語の慣用表現に関する研究は、多くの研究者によって行われてきていることについては、既に第4章で述べた。本節では、その中における、「比喩的慣用表現」に関する研究について検討する。

日本語の比喩的慣用表現に関する先行研究は、主に「意味論に基づく研究」、「認知言語学に基づく研究」、「他言語との対照研究に扱われる研究」の視座から行われており、本節では、代表的な研究について、順を追って見ていきたい。

7.2.1 意味論に基づく先行研究

意味に基づく比喩的慣用表現に関する研究は、横山(1935)に遡る。その後、森田(1966)、宮地(1975、1982、1985、1999)の一連の研究に続き、近年では国広(1982、1985)、石田(1999、2002、2004)などが挙げられる。

横山(1935)は身体の部分的名称「頭・顔・面・目・耳・口・歯・鼻・手・足(脚)・腹」等を応用したイディオムを例にして、その「意味変化」について、「表象方面」と「感情方面」との2つに分けて、さらに「表象方面」には、「①狭くなる(意義の縮小または特殊化)」、及び「②広くなる(意義の拡張または一般化)」、「③推し移る(意義の転義転置)」があるとしている。

本研究で調べた限りでは、横山のこの分類(上の①～③)は慣用表現の意味に基づく研究の発端だと思われ、後に、松本(2003)、靱山(2014)に「シネクドキー」に関する分類に引き継がれているが、横山(1935)には、「比喩」という概念に関する言及は見当たらない。

その後、横山(1955)は、「国語の慣用語の研究部部面(ママ)」を立てて、慣用表現の意味の研究を行った。その中に、「隠喩的慣用語」が初めて現れる。これを嚆矢として、慣用表現研究の新たな方向性が示された。

横山に続き、森田(1966)が「慣用的な言い方」の5つの分類として「比喩が慣用化したもの」を、宮地(1975、1982、1985、1999)が一連の研究に「比喩的慣用句(直喩的慣用句と隠喩的慣用句を構成要素として持つ)」を、国広(1985)が「狭義の慣用句」に「比喩的意味が発達した場合の慣用句」を、相次ぎ提出してきた。

なお、宮地の一連の研究や、国広の研究に関しては、本論文の第4章において既に述べたため、ここでは、慣用表現に関する定義のみを記すこととする。

宮地(1982)は、「一般連語句」、「連語成句的慣用句」、「比喩的慣用句」という概念を導入し、

一般の連語句より結合度が高いだけのものを「連語成句的慣用句」と呼び、その上に比較的はっきりした比喩的意味を持つものを「比喩的慣用句」と呼ぶ。(p. 238)

と述べている。

また、宮地(1982)は、「比喩的慣用句」をさらに「直喩的慣用句」と、「隠喩的慣用句」とに下位分類をしている。前者は「「～(のよう)」、「～(の)思い」などを伴って、比喩表現であることを明示するもの」(例:「水を打ったよう」)を指し、後者は「語句の意味が派生的、象徴的で、全体として比喩的な意味を表すもの」(例:「腹が立つ」)を指すとしている(pp. 238～240)。

国広(1985)は、宮地(1982)を踏襲したが、宮地の分類基準とは少々異なり、「慣用句」を以下のように「表現型(広義の慣用句=連語)」と「解釈型(狭義の慣用句)」の2つに大きく下位分類している。

広義の慣用句:「連語」とも呼び、二語(以上)の連結使用が構成要素の意味によってではなく、慣用によって決まっているもので、全体の意味は構成語個々の意味から理解できるもの(例:「傘をさす」)

狭義の慣用句:二語(以上)が常に連結して用いられるもので、全体の意味が構成要素の意味の総和から出てこないもの(例:「顎を出す」) (p. 7)

さらに、「狭義の慣用句」に「構成要素の意味が不透明な場合」、「比喩の意味が発達した場合」、「文化が関係する場合」の3つのタイプを立てた。(注:第4章で既述)

宮地と国広の、慣用句全体の意味と構成要素の個々の意味との関係という視座から慣用句を取り扱った一連の研究は、後に石田(1999)に「基準の定義を示していない上、個別の慣用句が何故「連語的慣用句」、あるいは「比喩的慣用句」とされているのかは明らかでない場合がある。」と指摘されることになるとはいえ、慣用句に関する研究を新たな方向に導いたものと思われる。

石田(1999)は、村木(1985)の定義(注:第4章で既述)に従い、慣用句の構成要素の意味とその全体の意味との関係に注目し、

個別の慣用句について個々の操作の可否を調べていけば、多くの統語的操作を受けられる慣用句は慣用性の度合いが比較的低く、あまり受けられない慣用句は寛容性の度合いが比較的高いという具合に、慣用性の度合いを明らかにすることが可能である。(p. 80)

と述べている。その後、石田(2002)は、統語的操作を用いて、動詞慣用句の意味的固定性を計ることとし、個々の慣用句について検討し、宮地(1982など)、国広(1985)の研究で不足が指摘されていた個別の慣用句の分類基準を明らかにした。

7.2.2 認知言語学に基づく先行研究

80年代からの認知言語学の進展が意味論を飛躍的に発展させたことに伴い、認知言語学に基づく比喩的慣用表現に関する研究も現れてきた。靱山（1997、2010、2014）、有菌（2006、2007）、宋（2007）、王（2013）、モラディ（2014）などの一連の研究が挙げられる。

靱山（1997）は慣用句の定義を、

複数の語の連結使用が固定しており、全体の意味は、個々の構成語がその連結の一部でない時に持つ意味の総和からは導き出せないもの。 (p. 30)

とし、表現全体の意味が構成語の意味の総和から導き出せない場合のみが慣用表現であり、構成語の一部が元々の意味でない場合は慣用表現に含まれていないとしている。この点は宮地(1982)、国広（1985）と同様の見方をしている。

また、靱山（1997）は宮地（1982、1985）と国広(1985)に対して、意味的な分類の不十分さを指摘し（例：宮地は「目が高い」を慣用表現に分類しているが、靱山はこれが連語の部類に属すると主張）、隠喩・換喩・提喩に基づく慣用句の意味の成立を分析し、慣用句の体系的分類を行った。

靱山（1997）は慣用句を大きく「構成語の意味の総和としての意味が成立しない」と、「構成語の意味の総和としての意味が成立する」とに二分している。そのうえで、前者を「①意味不明語を含む」と、「②解釈不能」なものに下位分類し、後者を「①構成語の意味の総和としての意味から、比喩に基づき慣用的意味が成立」するものと、「②構成語の意味の総和としての意味と、慣用的意味の比喩に基づく関連付けが不能」なものに下位分類し、さらに、後者「構成語の意味の総和としての意味が成立する」>「①構成語の意味の総和としての意味から、比喩に基づき慣用的意味が成立」を「隠喩に基づく慣用句」、「換喩に基づく慣用句」、「提喩に基づく慣用句」、「二つの種類の比喩の複合に基づく慣用句」の4つに分けて述べている。（<表 54>）

<表 54> 靱山（1997）比喩に基づく慣用句の分類（筆者作成）

慣用句	構成語の意味の総和としての意味が成立しない	①意味不明語を含む、例：あっけにとられる	
		②解釈不能、例：腹が立つ	
	構成語の意味の総和としての意味が成立する	①構成語の意味の総和としての意味から、比喩に基づき慣用的意味が成立	隠喩に基づく慣用句、例：足を洗う
			換喩に基づく慣用句、例：言うことを聞く
			提喩に基づく慣用句、例：煮え湯を飲まされる
②構成語の意味の総和としての意味と、慣用的意味の比喩に基づく関連付けが不能、例：手を焼く		二つの種類の比喩の複合に基づく慣用句、例：尻が重い	

靱山 (1997、2010、2014) は、隠喩(メタファー)、換喩(メトニミー)、提喩(シネクドキー)の視座を用いて、比喩の形式による意味成立の観点から慣用句の意味分類を行うことを提案したのだが、これは慣用句研究に新たな風を吹き込んだものと考えられる。

有菌 (2006、2007) もこうした潮流を受け継ぐものである。第4章に於いて既に触れているため、ここでは、要点のみを記す。

有菌 (2006) は、意味的分解可能性に注目し、「身体部位詞」を持つ日本語の慣用句を「慣用的意味がどのように成立するか」によって、「分解不可能な慣用表現(「慣用句」)」と、「分解可能な慣用表現(「慣用的連結句」)」に分類している。さらに前者を「メタファーに基づく慣用句」、「メトニミーに基づく慣用句」、「メトニミーとメタファーに基づく慣用句」、「メトニミーとシネクドキーに基づく慣用句」の4つに分け、後者を「名詞と動詞(あるいは形容詞)それぞれが意味拡張した慣用的連結句」と「名詞のみが意味拡張した慣用的連結句」に分けている。

また、有菌 (2007) は、

統語的凍結性の観点からイディオム性の程度を分析し、その程度の相違を生じさせる一因として、意味解釈がどのように、またどの程度統語的凍結性に関わるかを明らかにする (p. 139)

と述べ、慣用表現の意味解釈がどのように、またどの程度統語的特徴に関わり、影響を及ぼしているかを明らかにしたが、この点は高く評価されるものと思われる。

またこの他に認知言語学に基づく比喩的慣用表現には、宋 (2007)、王 (2013)、モラディ (2014) などがあるが、本論文の第4章において既に述べたため、ここでは省略することとする。

7.2.3 他言語との対照研究で扱われた比喩的慣用表現

90年代後半、特に2000年代以降、慣用表現研究の中で、他言語との対照研究が盛んに行われている。その代表例として、ここでは、田中 (2004、2005) の日本語とロシア語との対照研究、宋 (2007) の日本語と韓国語との対照研究、支・吉田 (2003)、方 (2011a、2011b)、王 (2013)、穆 (2013)、李 (2015) の日本語と中国語との対照研究、モラディ (2014) の日本語とペルシア語との対照研究、橋本 (1999)、SURENJAV OYUNZUL (2014) の日本語とモンゴル語との対照研究、石田 (2015) の日本語と英語との対照研究を取り上げる。

ここでは、既に本論文の第4章で述べた先行研究について割愛し、田中 (2004、2005)、支・吉田 (2003)、方 (2011a、2011b)、橋本 (1999) について順を追って、記述することとする。

田中 (2004) は、精神の知的側面としての「頭」を取り上げ、認知言語学的な言語観に

より、ロシア語および日本語の概念体系における身体と精神の関係について考察した結果、ロシア語では、社会生活上の知恵や判断から出発して感情、道徳へと進み、そこからさらに高尚なもの、理想的なものへと向かう理想主義的傾向が顕著であるのに対して、日本語の概念体系にはロシア語のような「現実」と「理想」の対立や理想主義的傾向は見られないことから、理想に重点を置くロシア語話者と違って、日本語話者は現実的な社会の中の個人のあり方に重点を置いていると主張している (p. 81)。

また、田中 (2005) は、人間の身体中最も顕著な部分である「顔」を取り上げて、日本語とロシア語におけるそれぞれの意味・用法について考察し、両言語に対応する用法と、対応しない用法を明らかにし、同じ身体部位・顔の持つ特徴のうち、日本語とロシア語が重視する側面が異なり、日本語は他者に向けた表側としての側面に、ロシア語は個人の内的特徴の現れという側面に焦点を当てていることを指摘している (p. 103)。

支・吉田 (2003) は日本語と中国語の身体部位名称 (ママ) を含む慣用句の中の「目」を取り上げ、日本語の 155 句、中国語の 101 句を対象とした、国語辞典によって弁別された「目」の多義的な意味、及びその慣用句の語彙の由来について検討し、中国語は日本語と比べ、目を構成要素として持つ慣用句においては、マイナスの意味が多く、プラスの意味が少ないことが特徴であると述べている。

方 (2011a, 2011b) は、日本語と中国語における「鼻」(2011a) と「首」(2011b) を含んだ慣用句を取り上げ、認知言語学の概念メタファーと概念メトニミーの手法を用いて、それぞれの基本義から拡張された意味を比較し、その構成要素である「鼻」と「首」の意味が慣用句全体の意味成立にどのように影響するのかを論じた。方 (2011a, 2011b) は、両言語とも基本義の機能に基づくものは少なく、メタファーやメトニミーのプロセスによって成立する用法もあると主張している。

橋本 (1999) は、日本語とモンゴル語の「目」を構成要素とした慣用句を対象に、認知言語学の立場から目を構成要素として持つ慣用句の概念メタファーを考察し、両言語共通のメタファーと日本語、モンゴル語それぞれ特有のメタファーを指摘し、概念メタファーとして「目は○○である」と指摘して、慣用句の比喩が生み出される基盤を検討した。結果として、認知的なプロセスによる拡張の中で、日本語の「場所」や「移動」のメトニミーが特徴的で、モンゴル語には文化的な要因を媒介にした「所有物」と連結しているなどの異なる点があるが、両言語ともに人間の概念による類似性に動機づけられているという結論にたどり着いている。

以上のように、認知言語学の立場から、比喩的慣用表現に関する先行研究、特に日本語と他言語との対照研究は数多くみられるが、ほとんどが具体的な身体部位を表す「一次」身体語彙を構成要素として持つ慣用表現に関する研究であり、身体部位による「二次」・「三次」身体語彙を構成要素として持つ研究は殆ど見られなかった。

そこで、本研究では、これらの先行研究を踏まえ、日中両言語の「二次」・「三次」身体

語彙を構成要素として持つ比喩的慣用表現に関する比較を行う。

7.3 中国語における「慣用表現」の先行研究

中国語で、最初に「慣用語」という言葉を提唱したのは呂淑湘と朱德熙であるとされる。1951年に呂淑湘と朱德熙が出版した《语法修辞讲话》というの第五講で「慣用語」という用語を提出していた。

その後、60年代の馬国凡（1982）に遡ることができるが、日本語に関する研究と比べたら、まだ比較的遅いほうだと言わざるを得なく、80年代初期まで、慣用句についての研究書あるいは論文はあまり見られなかった。「80年代から盛んになってきたと言われている」⁴⁶（楊 2008）。

また、「慣用表現」の定義と範囲については、定説がなく、普通、慣用句は一定の形で固定されている語句で、形は様々であるが、主に三つの音節からなっており、強い修辭的な色彩を持っているとされていた。最近、「慣用語」という概念が導入され、陳(2007)は、

慣用語は、成語、ことわざ、歇後語など熟語の一つであり、現代中国語の重要な言語単位としている。慣用語は民間口語からなっており、人々の日常生活の中から取材されて造られた簡潔なものである。それ故、口語的、現代的、地方色彩が濃いなどの特徴がある。

と述べている⁴⁷。

王（2013）は

中国語には「慣用句」や「慣用表現」という言語学の述語は存在しない。（中略）、そのため、日本語の慣用句に対応する範囲ははっきりしているとは言えない。（p. 23）

と述べて、魯・彭(2002)の中日「熟語」の対応関係と非対応関係の分類を踏まえて、

中国語でも日本語でも「慣用句的な表現」(ママ)について、定義と分類をする際、その周辺にあるものから孤立してはいけない。（p. 24）

とし、中国語と日本語との「慣用的表現」(ママ)の対応関係を、〈表 55〉のようにまとめて、「中国語と日本語の慣用的な言い方は、包含関係が複雑である。そのため、中国語と日本語慣用句との対照研究は、対照する範囲が多様である。」(p. 25)と述べている。

⁴⁶ 王(2013)より転用 p. 23

⁴⁷ 王(2013)より転用 p. 23

<表 55> 中日「慣用的表現」の対応関係 (p. 25 に基づいて筆者作成)

		中国語		日本語
固定短語	熟語	成語	部分	四字熟語
		格言		格言
		諺語		諺
		歇後語		俗語
		慣用語		俚言
		(習慣用語)		
		常用語		慣用句
一般短語				

注：「固定短語」とは、2つ以上の語から結合した定形フレーズで、構成は比較的かたい(ママ)。

王(2013)のこの分類は、日中両言語の「慣用表現」が含む範囲を概観して、まとめている点は評価できるが、中国語の「成語」(≠日本語の「四字熟語」)から除外している点や、「諺語」(=日本語の「諺」)を「慣用表現」の中から除外しているのにも関わらず、「歇後語」を「慣用表現」に入れている点は再検討が必要だと思われる。

その理由を述べると、第一に、日本語では慣用表現であるが、中国語で「成語」として用いられているものが少なくないことが挙げられる。例えば、

日本語	中国語
「気が散る」	⇔ 「心不在焉 (拙訳 ((以下、「訳」とする) : 心ここにあらず)」
「呆気にとられる」	⇔ 「目瞪口呆 (訳 : 目を丸くし口をぽかんと開ける)」
「血が沸く」	⇔ 「热血沸腾 (訳 : 熱い血が沸騰する)」
「気が抜ける」	⇔ 「无精打采 (訳 : 意気消沈する)」
「血の気が引く」	⇔ 「面如土色 (訳 : (驚いて) 顔が青ざめる、(病気で) 顔が土色である)」
「気が気でない」	⇔ 「坐立不安 (訳 : 居ても立っても居られない)」

などの対応関係が考えられる。

第二に、「歇後語」について、『漢語大辞典オンライン版』では、

由两部分组成的固定语句,前一部分多用比喻,后一部分是本意,通常只说前一部分,后一部分不言而喻。

(訳 : 二つの部分によってできた固定された語句である。)

前半部分では比喩的な表現法を使い、後半部分では本意について説明する。通常、前半部分のみを言い、後半部分を言わなくても、推測や予測ができるものである。）

と定義し、また、『辞海』では、

熟語の一種。流行在人民群众口头上的诙谐而形象的语句。由前后两部分组成，常以前句作譬况，后句作释义。运用时可隐去后句，以前句示义，也可以前后句并列。

（訳：熟語の一種。民間に流行しているユーモアと分かりやすさに富んでいる語句である。前後2つの部分から成り立っており、通常前半部分で比喩を使い、後半部分で解釈している。実際に使うとき、後半部分を略して、前半部分のみで意味を示したり、前半部分と後半部分を並べて使ったりすることができる。例えば、

①前半が比喩で、後半が結果を表すもので、例：「哑巴吃黄连——有苦说不出」

（訳：口のきけない人が黄連を呑む—苦くても言えない）、

②似ている音を使ったもので、例：「炒了的虾米——红人（仁）⁴⁸」

（訳：炒めたエビ—モテる人（炒めたエビが赤くなっていることからの喩え）。

と記述している。2種類のどちらも日本語の「しゃれ言葉」に相当する一種の言葉遊びである。

このことから、「歇後語」も「諺」も、「二つ以上の単語が決まった結びつきをしており、はっきりした比喩的意味を持っている」（王 p.23）のものであると言えるであろう。

したがって、「慣用表現」に一方の「歇後語」を入れて、もう一方の「諺」を除外する分け方には再検討する必要があると思われる。

第三に、「慣用語」について、『辞海』では、

熟語の一種。習慣上作为完整的意义单位来运用的带有口语色彩的固定词组。多数由三个字组成。其整体意义往往不是各个字表面意思的叠加，而是通过比喻，借代等手段造成的深层意思。如：“炒冷饭”，喻指重复已经做过的事。

（訳：熟語の一種。習慣上、完全に整っている意味を持つ、且つ口語的特徴のある決まり文句のことを言う。三文字からなっているのが多い。文全体の意味は、個々の文字の意味の組み合わせではなく、比喩や、借喩などの手段を用いて、深い意味を持たせている。例、「炒冷饭（冷めたご飯を炒める）」、やったことのあることをもう一度繰り返してやることの喩え。

⁴⁸中国語では、「人」と「仁」は同じく「rén」と発音する。

と記述していることから、「慣用語」は本研究で取り扱う「比喩的慣用表現」に該当するものと思われる。

7.4 本研究における日中慣用表現の対応関係

以上の先行研究と定義を踏襲して、本論文では、日本語の「慣用表現」と中国語の「慣用語」との対応関係を次のように考えることにする。(＜表 56＞)

＜表 56＞日本語の「慣用表現」と中国語の「慣用語」の対応関係

言語	慣用表現			
	日本語	連語的慣用表現	比喩的慣用表現	四字熟語
中国語	常用語、成語	慣用語、成語	成語	諺語・格言

本研究では次章から、日本語の「二次」・「三次」身体語彙を構成要素として持つ慣用表現における「連語的慣用表現」(＝中国語の「常用語」、「成語」)と、「比喩的慣用表現」(＝中国語の「慣用語」、「成語」)を対象として、その意味・用法について、日中両言語における異同を検討していきたい。

第 8 章 「二次」・「三次」身体語彙及びその慣用表現の日中対照

前章では、比喩的形式の 4 つの種類の定義、及び意味論、認知言語学、他言語との対照研究に基づく比喩的慣用表現に関する先行研究について述べた。

本章では、まず、方(2011)、王(2013)で行われた「(一次)身体語彙」の分析に倣って、日中両言語における「二次」・「三次」身体語彙を、両言語の辞書の記述から、基本義、拡張義について検討する。

次に、「二次」・「三次」身体語彙を構成要素とする日中の比喩的身体語彙慣用表現を対象に、これらの慣用表現の意味用法や使用範囲について、日中両言語の異同を対照し、この比較を通して、その異同を検討すると同時に、両言語の持つ文化、習慣的な特徴の一端を探ってみたい。

8.1 「二次」身体語彙(血、息、力)の基本義及び拡張義の日中対照

身体語彙慣用表現を分析するにあたって、まず、各構成要素である身体語彙の「基本義」と、比喩的な用法による「拡張義」に関する分析が必要になると思われる。

そこで、本節では、6.2 で触れた身体語彙慣用表現数の「二次」の上位 3 位までの語「血、息、力」を対象に、日本語と中国語における基本義、及びこれらの語彙を構成要素とした熟語や、慣用表現における比喩的形式による拡張義について、用例を挙げて記述する。

なお、各身体語彙の日本語の意味は、複数の国語辞典⁴⁹の記述を基に定めた。同様に、中国語の意味は、複数の中国語辞書⁵⁰を基に定めた（以下も参照先は同辞典とする）。

8.1.1 「血」の意味

8.1.1.1 日本語の「血」の意味

日本語の「血」は「ケツ」、または「ち」の2つの読み方を持つ。それぞれの国語辞典の記述内容をもとに、日本語の「血」の基本義と拡張義について、次のように定めることとした。

1) 「血」の基本義：

日本語の「血」の基本義について、『日本国語大辞典』、『デジタル大辞泉』、『例解新国語辞典』では、それぞれ、

動物の血管内を循環する体液（『日本国語大辞典』）、動物の血管内を流れる体液（『デジタル大辞泉』）、動物の体内を流れるち（『例解新国語辞典』）。

とされている。このことから、「血」は血液、生きている動物のからだの中の血管内を循環する赤い体液のことであるとした。例：血が出る、血が流れる

2) 国語辞典の記述をもとに、「血」の比喩的形式による拡張義を、次の①～③のように定めることとした。

①同一の先祖に繋がる関係、同じ先祖から出た人間関係、血のつながり、ちすじ。

例：血は争えない、血を継ぐ、血を忘れる

②人間の持つ感情や、(暖かい)思いやり。

例：血が通う、血がたぎる、血に燃える

③程度が激しい、きびしい。

例：、血の涙、血の海に浸す、血を吐く思い、血の出るよう、血のにじむよう

「血」の拡張義には、「人間の持つ暖かい思いやり」というプラスイメージの意味を表わす場合(例：「血がたぎる」、「血に燃える」と、「程度がきびしい」というマイナスイメージの意味を表わす場合(例：「血の涙」、「血を吐く思い」、「血のにじむよう」と)がある。

⁴⁹ オンライン版『日本国語大辞典』、『デジタル大辞泉』、『小学館全文全訳古語辞典』、『例解新国語辞典(第四版)』

⁵⁰ オンライン版『漢語大字典』、『辞典修訂版』、『大辞海』

8.1.1.2 中国語の「血」の意味

中国語の「血」は「xiě」、または「xuè」の2つの読み方を持つ。それぞれの中国語辞書の記述内容もとに、中国語の「血」の基本義と拡張義について、次のように定めることとした。

1) 「血」の基本義：

中国語の「血」の基本義について、『大辞海』では、

经脉中流动的赤色不透明液体。

(訳：経脈に循環して流れる不透明な赤色の液体のことをいう。)

とされている。このことから、中国語の「血」の基本義は、「指人或动物体内循环系统流动的赤色不透明液体。(訳：人や動物の体内に循環して流れる不透明な赤色の液体)のことをいうとした。例：血豆腐、血糊糊、血淋淋。

2) 中国語の辞書の記述をもとに、「血」の比喩的形式による拡張義を、次の①～⑧のように定めることとした。

①人类因生育而自然形成的关系、有血缘关系的近亲。表同一祖先的。

(訳：人類が生育により自然に形成した関係、血縁関係のある親戚。同じ先祖を持っていること)

例：血性、誓将付孱孙，血绝然方已。(杜牧《感怀》诗)

②指妇女的月经。

(訳：女性の生理のことを指す)

例：今常见怀胎七八个月而生子者、但以血止为度。(张介宾《景岳全书》)

③悲痛的泪水

(訳：悲しい涙)

例：血泪、老夫哭爱子，日暮千行血(唐·顾况《伤子》诗)

④劳力、精神。

(訳：労力、精神)

例：心血、血汗、血本无归

⑤比喻刚强，热烈

(訳：強くて、情熱であることの喩え)

例：血性、血气方刚、铁血丹心、热血沸腾

⑥喻赤诚

(訳：忠実であることの喩え)

例：血气之勇

⑦ 喻红色

(訳：赤い色の喩え)

例：杜鹃灿烂，血艳夺目。(《徐霞客游记》)、血旗(指红旗)

⑧ 谓鲜血涂沾、染

(訳：赤い血で染める)

例：有木焉，其状如穀而赤理，其汗如漆，其味如飴，食者不饥，可以释劳，其名曰白蓉，可以血玉。(《山海经南山经》)

日本語の「血」の意味と同様に、中国語の「血」の意味にも、マイナスイメージを喚起する比喩的慣用表現と、プラスイメージを喚起する意味の両者が存在している。例えば、③の「血泪(血の涙)」、④の「血本无归(元手が無に帰す)」がマイナスイメージを喚起する比喩的慣用表現であり、⑤の「血气方刚(血気盛んである)」、「铁血丹心(赤誠を尽くすことの喩え)」、「热血沸腾(血が滾る)」などがプラスイメージを喚起する慣用表現の例である。

8.1.1.3 「血」の日中対照

「血」の基本義は、日中両言語とも「動物の体内に循環して流れる液体のことである」とされており、大きな違いは見られない。

一方、拡張義について比較した結果、両言語ともに「血」を感情の表現と関連させて、マイナスイメージと、プラスイメージを喚起する点は同様だが、日本語より、中国語のほうが意味が多様である。

8.1.2 「息」の意味

8.1.2.1 日本語の「息」の意味

日本語の「息」は「いき」、または「ソク」の2つの読み方を持つ。それぞれの国語辞典の記述内容をもとに、日本語の「息」の基本義と拡張義について、次のように定めることとした。

1) 「息」の基本義：

日本語の「息」の基本義について、『日本国語大辞典』、『デジタル大辞泉』、『例解新国語辞典』では、

- ① 口や鼻を通して吐いたり吸ったりする気体、呼気と吸気(上記三冊)
- ② 空気を吐いたり吸ったりすること、呼吸(『日本国語大辞典』、『デジタル大辞泉』)
- ③ 音声学で、声帯の振動を伴わない呼気(『日本国語大辞典』)

とされている。このことから、日本語の「息」の基本義は口や鼻を通して吐いたり吸ったりする気体や、空気を吐いたり吸ったりすることであると定めることとした。例：息が荒い、息が切れる、息が詰まる。

2) 国語辞典の記述をもとに、「息」の比喩的形式による拡張義を、次の①～⑥のように定めることとした。

①二人以上で何かをする場合の、相互の気持ちのかね合い。

例：息がぴったりだ、息が合う

②勢い、けはい。

例：息を殺す、息が漂う

③いのち。

例：息の緒、息を失う、息を吹き返す、息を引き取る

④芸術などの深い要領。

例：息を盗む

⑤人からの圧力や影響。

例：息が掛かる

⑥風や火の勢いなどが強くなったりする作用。

例：息を盛り返す

日本語の「息」の基本義は名詞の使い方のみならず、身体部位動作そのものを表す「息をする」のような使い方も見られる。一方、拡張義は、名詞としての用例のみであった。

8.1.2.2 中国語の「息」の意味

中国語の「息」は「xī」と読む。それぞれの中国語辞書の記述内容をもとに、中国語の「息」の基本義と拡張義について、次のように定めることとした。

1) 「息」の基本義：

中国語の「息」の基本義について、『大辞海』では、

①呼吸时进出的气

(訳：呼吸するときはいたり吸ったりする気体。)

②呼吸。一呼一吸谓之一息。

(訳：呼吸。呼と吸をあわせて、息という。)

とされている。このことから、中国語の「息」の基本義は呼吸するときはいたり吸ったりする気体、またはその動作自体のことであると定めることとした。例：叹息、奄奄一息、一息尚存。

2) 中国語の辞書の記述をもとに、「息」の比喩的形式による拡張義を、次の①～⑦のように定めることとした。

①音信

(訳：音信、メッセージ)

例：消息、信息

②形容时间短暂、迅速。

(訳：時間が短いことの喩え)

例：瞬息万变

③叹气。

(訳：ため息をつく)

④繁殖、滋生、滋息、生长。

(訳：繁殖、成長する)

例：休养生息、有国之君，不息牛羊(《荀子·大略》)

⑤停止，停息。消失。

(訳：停止する、消える)

例：止息、息怒、川流不息、息事宁人

⑥休息。放松身心。

(訳：休憩する、リラックスをする)

例：歇息、自强不息、饥者弗食，劳者弗息(《孟子·梁惠王下》)

⑦通“熄”，灭。

(訳：同「熄」。消える、消滅する)

例：水火相息

8.1.2.3 「息」の日中対照

「息」の基本義は、日中両言語ともに「口や鼻を通して吐いたり吸ったりする気体、呼吸。」とされており、大きな違いは見られない。

一方、拡張義について比較した結果、日本語にある「勢い、けはい」、「いのち」、「芸術などの深い要領」、「人からの圧力や影響」、「風や火の勢いなどが強くなったりする作用」などの意味が、中国語にはまったく見当たらず、その代わりに、「叹气(ため息をつく)」「繁殖、滋生、滋息、生长(繁殖、成長する)」「停止，停息，消失(停止する、消える)」

「休息、放松身心（休憩する、リラックスをする）」など、動作そのものを表す意味が用いられていることが分かった。

また、中国語では、「息」は動詞としての用法や、ほかの構成要素と結びついて形容詞としての用法も存在している。例を挙げると、「息事宁人」、「自强不息」中の「息」は動詞で、「瞬息万变」中の「息」は形容詞としての用法例である。

さらに、「息事宁人」は以下のように、2つの意味を持っている。

息事宁人：①争いを調停して穏便に処理し双方を落ち着かせる。

②みずから一定の譲歩をし穏便に済ませる。

(『日中中日辞典』から引用)

②の場合、「穏便に済ませる」にマイナスイメージが付与されている。

8.1.3 「力」の意味

8.1.3.1 日本語の「力」の意味

日本語の「力」は「ちから」、「リキ」、「リョク」の3つの読み方を持つ。それぞれの国語辞典の記述内容をもとに、日本語の「力」の基本義と拡張義について、次のように定めることとした。

1) 「力」の基本義：

日本語の「力」の基本義について、『日本国語大辞典』、『デジタル大辞泉』では、

- ①他に作用する筋肉などの働き。人や生物のもっている物理的なエネルギーの作用。
- ②静止している物体が運動を開始し、等速運動している物体が加速度を生ずる原因となる作用。
- ③体力。

とされている。このことから、「力」の基本義は、筋肉などのはたらき、人や生物のもっている物理的なエネルギーの作用、体力、または物体間の相互作用のことであるとした。

例：力が強い、力が弱い

2) 国語辞典の記述をもとに、「力」の比喩的形式による拡張義を、次の①～⑨のように定めることとした。

- ①人の精神的なはたらきをさしていう。気力。精神力。
- ②物事をするときに助けとなるもの。助力。頼みとなるもの。よりどころ。恩恵。

例：金の力で政界に進出する、力をつける、力を借りる、力になる。

- ③ある目的に向かっての集中したはたらきかけ、努力、骨折り。
例：力を尽くす、力を惜しむ
- ④あるはたらきかけをした影響、ききめ。
例：彼の発言には力がある
- ⑤学問・技芸などの能力。身につけた学力、学識。
例：国語の力が不足だ
- ⑥気力。迫力。事に当たっての勢力。いきおい。
例：力のある文章、力が抜ける
- ⑦身につけた資財による勢力、資力、財力。
例：家をもつ力がない、娘を大学にやる力がない
- ⑧地位や立場による威力、またはその影響力、権力
例：親の力、政治の力、
- ⑨抑えつける力。他を攻撃して、思い通りに従わせるために働く腕力、暴力。
例：力で事を解決する、力に訴える

「力」の基本義は人や動物に元々備わっている、他に作用するときの肉体的、物理的なエネルギーの作用だが、拡張義は、そこから拡張された精神的なもの、或いは何かを抑えつけようとするときの抽象的なものや、それらの影響力、勢いなどに及ぶ。

8.1.3.2 中国語の「力」の意味

中国語の「力」は「lì」と読む。それぞれの中国語辞書の記述内容をもとに、中国語の「力」の基本義と拡張義について、次のように定めることとした。

1) 「力」の基本義：

中国語の「力」の基本義について、『大辞海』では、

- ①物质之间的相互作用。凡能使物体获得加速度或者发生形变的作用
(訳：物質の間の相互作用。物体に加速度を与えたり、形を変えさせたりする作用)
- ②人和动物体内筋肉运动所产生的效能。
(訳：人間や動物の体内筋肉の運動によって生み出された効能)

とされていることから、中国語の「力」の基本義を、人や生物の筋肉などの運動によって生み出された物理的なエネルギーの作用、または物体間の相互作用のことであるとした。

例：動力、体力、有力如虎，执轡如组。－《诗经·邶风·简兮》

2) 中国語の辞書の記述をもとに、「力」の比喩的形式による拡張義を、次の①～⑥のよう

に定めることとした。

①才能、能力。

(訳：才能、能力)

例：智力、實力、量力而为

②威力，权势。

(訳：威力、権力)

例：权力、以力服人者，非心服也。—《孟子・公孙丑上》

③尽力、拚力的、用极大的力量。

(訳：全力であること、極めて大きい力でやること)

例：力战、力争上游、据理力争、力挽狂澜

④功劳。

(訳：功績、貢献)

例：与有力焉

⑤有力度或功力的。

(訳：力がある、影響力がある)

例：力作

⑥勤；致力，努力；从事于。

(訳：～に力を入れる、～に従事する)

例：古训是式，威仪是力。—《诗・大雅・烝民》，力周公正先天下。—《汉书・王莽传》。

8.1.3.3 「力」の日中対照

「力」の基本義は、日中両言語ともに「他に作用する筋肉などはたらき」や、「物質の間の相互作用。」とされており、大きな違いは見られなかった。

一方、拡張義について比較した結果、両言語とも「物事をするときに助けとなるもの。助力。頼みとなるもの」、「学問・技芸などの能力」、「勢力、いきおい」、「資力、財力」、「影響力、権力」、「腕力、暴力」の意味を持つことが分かったが、異なっているところも見られた。例えば、

日本語の「力」の持つ「①人の精神的なはたらきをさしていう。気力。精神力。」という意味は中国語に見られず、中国語の持つ「④功劳。(訳：功績、貢献)」、「⑥勤；致力，努力；从事于。(訳：～に力を入れる、～に従事する)」という意味の用法は日本語には見られなかった。

8.2 「三次」身体語彙（気、意、念）の基本義及び拡張義の日中対照

本節では、6.2 で触れた身体語彙慣用表現数の「三次」の上位3位までの語「気、意、

念」を対象に、日本語と中国語における基本義、及びこれらの語彙を構成要素とした熟語や、慣用表現における比喩的形式による拡張義について、用例を挙げて記述する。

なお、各身体語彙の日本語の意味は、複数の国語辞典の記述を基に定めた。同様に、中国語の意味は、複数の中国語辞書を基に定めた。

8.2.1 「気」の意味

8.2.1.1 日本語の「気」の意味

日本語の「気」は「き」と読む。それぞれの国語辞典の記述内容をもとに、日本語の「気」の基本義と拡張義について、次のように定めることとした。

1) 「気」の基本義：

日本語の「気」の基本義について、『日本国語大辞典』、『デジタル大辞泉』では、「変化、流動する自然現象。または、その自然現象を起こす本体。」「風雨、寒暑など、天地間に現われる自然現象」、「天地に生じる自然現象。空気・大気や、水蒸気などの気体」とされている。

このことから、日本語の「気」の基本義を変化、流動する自然現象。または、その自然現象を起こす本体であると定めることとした。例：やまの気。

2) 国語辞典の記述をもとに、「気」の比喩的形式による拡張義を、自然の気と関係性が予想される「生命・意識・心などの動き」とし、具体的に、次の①～⑥のように定めることとした。

①いき、呼吸、吸ったり吐いたりする息。

例：気が詰まる

②物事に対する反応、心の動きや働き。

例：気を静める、気を高める、気をつかう、気が利く

③気分、気持ち、感情。

例：気が乗らない、気が急ぐ

④氣勢、精神の盛り上がり。

例：気が強い、気がみなぎる、気が長い

⑤物事への興味、関心、または配慮、好意。

例：気がある、

⑥意識。

例：気を失う、気がつく

また、国語辞典の記述に拠れば、日本語の「気」は名詞としての用法のみである。

8.2.1.2 中国語の「气（氣）」の意味

中国語の「气（氣）」は「qì」と読む。それぞれの中国語辞書の記述内容をもとに、中国語の「气（氣）」の基本義と拡張義について、次のように定めることとした。

1) 「气（氣）」の基本義：

中国語の「气」の基本義について、『大辞海』では、

本指云气，引申为一切气体的通称。也特指空气。

（訳：本来気雲を指していたことからひいて、すべての気体の通称である。特に空気を指す）

とされている。このことから、中国語の「气」の基本義を、空気など気体や、自然界の冷熱曇晴れなどの現象のことであるとした。例：秋高气爽、气谓嘘吸出入者。—《礼记・祭义》、山气日夕佳。——晋・陶渊明《饮酒》诗。

2) 中国語の辞書の記述をもとに、「气」の比喩的形式による拡張義を、次の①～⑪のように定めることとした。

①呼吸、气息。

（訳：呼吸、息）。

例：一气呵成

②声气, 语气

（訳：声の抑揚、語調）

例：理直气壮，气竭声嘶

③气运、指人的元气、精神状态。

（訳：運氣、人が元気である様子、またはその精神状态）

例：勇气，朝气，垂头丧气

④气派; 气概、人的才华或行为风度。

（訳：氣勢、気概、人の才能や振る舞い）

例：意气高傲、气势凌人

⑤气焰; 权势

（訳：氣勢、気炎、権勢）

例：一鼓作气、气吞山河

⑥习气或气质。

（訳：よくない習慣、習わしや、気質）

例：孩子气，市儉气

⑦气氛。

（訳：雰囲気）

例：喜气洋洋

⑧味道

(訳：におい)

例：臭气冲天

⑨使生气;使气恼

(訳：人を怒らせること)

例：忍气吞声

⑩愤怒;气恼;生气

(訳：怒る、頭にくる)

例：气狠狠, 气闹, 气恼

⑪用在形容词后, 相当于“样子”。

(訳：形容詞に後接し、「～の様子」を表す)

例: 秀气、俊气、美气

中国語の「气」には、名詞のみならず、「⑨使生气;使气恼 (訳：人を怒らせること)」、
「⑩愤怒;气恼;生气 (訳：怒る、頭にくる)」のような動詞としての用法や、「⑪用在形容
词后、相当于“样子”。(訳：形容詞に後接し、「～の様子」を表す)」のような形容詞に後
接する接尾語としての用法も見られた。

8.2.1.3 「氣/气」の日中対照

日本語の「氣」と中国語の「气」の基本義は、日中両言語とも「空気など気体や、自然
界の冷熱曇晴れなどの現象のことである」とされおり、大きな違いは見られなかった。

一方、拡張義について比較した結果、日本語では、名詞としての用法のみであったが、
中国語では意味が多様であるとともに、名詞、動詞、さらに形容詞に後接する接尾語とし
ての用法も見られた。

また、中国語で、「气」が形容詞に後接する接尾語として用いられる場合は、ほとんど
プラスイメージを喚起する表現である。秀气 (訳：上品で美しい、すっきりしている、端
麗である)、俊气 (訳：上品である、あか抜けしている) などがその例である。

これに対して、動詞として用いられる場合は、忍气吞声 (訳：黙って怒りをこらえる)、
气狠狠 (訳：非常に怒っている) のように、マイナスイメージを喚起する表現が多数存在
していることが分かった。

8.2.2 「意」の意味

8.2.2.1 日本語の「意」の意味

日本語の「意」は「い」と読む。それぞれの国語辞典の記述内容をもとに、日本語の「意」

の基本義と拡張義について、次のように定めることとした。

1) 「意」の基本義：

日本語の「意」の基本義について、『日本国語大辞典』では、

仏語。あれこれと考える心のはたらき。また、心の意にも用いる。そのはたらきのよりどころを意根、意処、意界ともいう。

とされている。本研究では、これらの記述を引用して、日本語の「意」の基本義は心の中で思うこと、心の働きであることとした。

2) 国語辞典の記述をもとに、「意」の比喩的形式による拡張義を、次の①～②のように定めることとした。

①わけ。意味。また、文章などで言おうとしている点。主旨。

例：読書百遍意おのずから通ず

②好意。愛情。

8.2.2.2 中国語の「意」の意味

中国語の「意」は「yi」と読む。それぞれの中国語辞書の記述内容をもとに、中国語の「意」の基本義と拡張義について、次のように定めることとした。

1) 「意」の基本義：

中国語の「意」の基本義について、『大辞海』では「心愿，意向（心の願い、意向）」とされている。

これらの記述をもとに、中国語の「意」の基本義を、心の思い、考え、願いであると定めることとした。例：意在笔先、意在言外、词不达意、称心如意、差强人意

2) 中国語の辞書の記述をもとに、「意」の比喩的形式による拡張義を、次の①～⑤のように定めることとした。

①胸怀、内心、情趣

（訳：胸襟、心中、風情）

例：意气超迈、宽仁爱人，意豁如也。—《汉书·卷一·高帝纪上》、诗情画意

②意气；气势

（訳：意气込み、気概）

例：意气风发，春风得意

③ 見解、看法。

(訳：見解、意見)

例：乃封小弱弟于唐。吾意不然。一唐・柳宗元〈桐叶封弟辨〉

④ 料想，猜想

(訳：予測する、推量する)

例：出其不意

⑤ 怀疑

(訳：疑う)

例：意意似似、为计而使诸侯有意伐之心，至殆也。－《韩非子・存韩》

8.2.2.3 「意」の日中対照

「意」の基本義は、日中両言語ともに「心に思う、心の思い、考え、願いである」とされており、大きな違いは見られなかった。

一方、拡張義について比較した結果、日本語より、中国語のほうが意味が多様で、動詞としての用法に関する記述もあった。

また、中国語の「意」の意味に「⑤ 怀疑 (訳：疑う)」のような、マイナスイメージを喚起する表現があったが、日本語には見当たらなかった。

8.2.3 「念」の意味

8.2.3.1 日本語の「念」の意味

日本語の「念」は「ネン」と読む。それぞれの国語辞典の記述内容をもとに、日本語の「念」の基本義と拡張義について、次のように定めることとした。

1) 「念」の基本義：

日本語の「念」の基本義について、『日本国語大辞典』では「かんがえ。思慮。また、心から離れにくい思い」、『デジタル大辞泉』では「思い。気持ち」、『例解新国語辞典』では、「心に強く感じられて、忘れられない思い」とされている。

これらの記述を基に、本研究では、日本語の「念」の基本義を、心に強く感じられ、離れにくい思いのことであると定めることとした。例：感謝の念、望郷の念。

2) 国語辞典の記述をもとに、「念」の比喩的形式による拡張義を、次の①～②のように定めることとした。

① 心くばり。注意。また、確認。

例：念を入れる、念に及ばない

② かねての望み。念願。

例：念が叶う、一念、執念

ほかに、国語辞典には、「念」が仏教用語として用いられているとの記述もあったが特定の分野での用法であるため、本研究では対象外とする。

8.2.3.2 中国語の「念」の意味

中国語の「念」は「niàn」と読む。それぞれの中国語辞書の記述内容をもとに、中国語の「念」の基本義と拡張義について、次のように定めることとした。

1) 「念」の基本義：

中国語の「念」の基本義について、『大辞海』では「思念，記念（訳：思い考える、記念する）」とされているのを基に、本研究では、中国語の「念」の基本義は心に強く思う、離れにくい気持ちや、心配することであるとした。例：惦念、怀念、念头。

2) 中国語の辞書の記述をもとに、「念」の比喩的形式による拡張義を、次の①～③のように定めることとした。

①引申为忧虑

（訳：憂慮する、思い煩う、気遣う、不安がるという意に派生する）

例：报国心皎洁，念时涕泛澜。—唐・韩愈《龔龔》

②哀怜，可怜

（訳：哀れむ、悲しみ哀れむ）

例：念窦城身首不完全。—关汉卿《窦城冤》

③想法；念头

（訳：考え、心づもり）

例：一念之贞。—清・袁枚《祭妹文》、意念、一念之仁、私心杂念

ほかに、中国語の辞書には、日本の国語辞典と同様に、「念」の「说，读，诵读（言う、読む、唱える）」という動詞としての用法についての記述も見られる。

また、『辞典修訂版』には「念」の動詞用法として「学习（学校に通う）」、形容詞用法として「极短的时间（ごく短い時間で）」が記されている。例：念书、一念顷、念念分明。

8.2.3.3 「念」の日中対照

「念」の基本義は、日中両言語ともに「心に強く思う、心より離れにくい気持ち、心配する」とされており、大きな違いは見られなかった。

一方、拡張義について比較した結果、日本語より、中国語のほうが意味が多様であるこ

とが分かった。

8.3 「二次」・「三次」身体語彙の日中対照のまとめ

本節では、身体語彙慣用表現の分析にあたって、各構成要素である身体語彙の意味に関する分析が必要であるとし、複数の国語辞典と複数の中国語辞書を基に、「二次」身体語彙の「血、息、力」、「三次」身体語彙の「気、意、念」を対象に、それぞれの語の日本語と中国語における基本義、及び比喩的形式による拡張義について論じた。

「二次」・「三次」身体語彙のそれぞれ上位3位までの語、計6つについて考察した結果、日中両言語におけるこれらの基本義には、大きな違いは見られなかったが、拡張義に関しては、いずれも日本語より、中国語のほうが意味が多様で、名詞としての用法のみならず、動詞、形容詞としての用法、並びに語によって、接尾語や副詞としての用法も見られた。

また、これらの6つの身体語彙の拡張義には、いずれもプラスイメージを喚起する表現と、マイナスイメージを喚起する表現があることが分かった。

8.4 「二次」身体語彙（「血」）・「三次」身体語彙（「気」）を構成要素として持つ慣用表現の日中対照

5.1 で触れたように、「二次」・「三次」身体語彙を構成要素として持つ慣用表現に関する対照研究は、これまでにあまり蓄積のない分野であるが、これらの慣用表現には、日中両言語の背景としての文化面での相違が直接・間接に影響を与えているように思われる。

そこで、本節では、この「二次」・「三次」それぞれの代表的な語彙である「血」（二次）、「気」（三次）を構成要素とする日中の身体語彙慣用表現を対象に、両言語におけるこれらの慣用表現の基本義、拡張義について対照し、その相違を検討すると同時に、両言語に見られる文化、習慣的な異同、特徴を考察することにする。

なお、日本語の身体語彙慣用表現の例は、『BCCWJ』から採集したものを、中国語の身体語彙慣用表現の例は、『BCC』から採集したものを、用いることとした。また、分析にあたって、日本語では、『日本国語大辞典』、『デジタル大辞泉』、『成語林 故事ことわざ慣用句』（1992）、『日本語慣用句辞典』（2006）、『三省堂 故事ことわざ・慣用句辞典（第2版）』（2010）、及び第2章、第5章で触れた先行研究の7冊の慣用句辞書⁵¹を、中国語では『日中辞典（第二版）』『中日辞典（第二版）』を基にした。

8.4.1 日中両言語における「血」を構成要素として持つ比喩的慣用表現

本項では、日本語における「二次身体語彙」の「血」を構成要素として持つ比喩的慣用表現と、対応する中国語の表現と、それぞれにどのような相違点があるのかを検討する。

まず、本論文で採集した日本語の「血」を構成要素として持つ慣用表現の中における、

⁵¹ 詳細はく付録1>を参照のこと。

第6章の考察によって比喩的慣用表現と見なされるものの一部と、その中国語訳の対応関係を<表57>に示す（並びは日本語慣用表現の五十音順）。

<表57>日本語の「血」の比喩的慣用表現とその中国語訳及び対応する中国語慣用表現

日本語の慣用表現	慣用表現の意味	対応する中国語の表現
生き血をしぼる	冷酷なやり方で他人から利益を搾り取る。	剥削血汗, 吮人膏血
生き血を吸う	冷酷なやり方で他人から利益を搾り取る。	剥削血汗, 吮人膏血
血気に逸る	一時の情熱に任せて、激しい行動に走ろうとする。	意气用事
血が頭に上がる	興奮する。かっとなる。	冲昏了头, 眩晕
血が騒ぐ	やりたくてうずうずし、または興奮して落ち着かない様子。	热血沸腾
血が滾る	血が沸き立つかのように感情が強く沸き起こるさま	热血沸腾
血がつながる	同じ血統、血筋を引く。血縁関係にある。	血脉相连, 骨肉相连
血が沸く	興奮する。気が高ぶる。情熱がほとばしる。	热血沸腾
血で血を洗う	(血に塗れた体を洗うのに血を用いるということで、ますますよごれることから) 悪を除くのに悪を持って、暴力を除くのに暴力をもってするたとえ。	以血洗血
血と汗	なみなみならぬ努力と忍耐のたとえ。	血汗
血となり肉となる	(栄養分がからだによく吸収されるように) 知識や技能がじゅうぶんに自分のものとなる。	—
血に飢える	傷つけたり殺したりして他人の血を流したいというさ殺伐とした動物的な欲望が起こる。	嗜杀成性
血の雨が降る	殴り合いや撃ち合いなどで、多くの人を殺傷し、血を大量に流す結果になる。また、そのようにすさまじく戦う。	血雨腥风, 血肉横飞
血の雨を降らす	殴り合いや撃ち合いなどで、多くの人を殺傷し、血を大量に流す結果になる。また、そのようにすさまじく戦う。	血雨腥风, 血肉横飞
血の海	(血で海のようになるの意から) 多量に流れ出た血液のたとえ。	血流成河, 血海
血の気が頭へ上る	気持ちが高ぶって、ちょっとしたことでも興奮するようになる。	冲昏了头, 眩晕
血の筋は七代	先祖から先天的に受け継いだ体質、性格は、七代あとの子孫にまで影響を及ぼすということ。	—
血の出るよう	①きわめて苦しい目にあうさま。②大変な努力をするさま。	命根子一样, 拼命得来的
血の涙	悲しみの極みや激しい憤りのあまり出てくる涙のこと。	血泪
血眼になる	(「血眼」は、激しい感情のために血走った眼)①逆上して、狂ったような行動に出る。②目的を遂げようと夢中になる。	①红眼, 急眼; ②一门心思
血は争えない	血統上の特質がはっきりと表れている。子孫の性格が父祖のそれに大変似通っている。	血浓于水
血は水より濃い	血縁のつながりのあるもののほうが、他人よりも結びつきが強い。他人よりも血族のほうが頼りになる	血浓于水
血も凍るような	あまりの恐怖に戦っているさま	吓得要命, 吓丢了魂
血も涙も無い	思いやりの気持ちがなく、冷淡な態度や言葉で応ずることのたとえ。人間らしい感情にかけていて、冷酷であるさま。	冷酷无情
血を受ける	性格や体の特徴を父母や先祖から受け継いでいる。	血脉传承, 至亲骨肉
血を受け継ぐ	性格や体の特徴を父母や先祖から受け継いでいる。	血脉传承, 至亲骨肉
血を継ぐ	性格や体の特徴を父母や先祖から受け継いでいる。	血脉传承, 至亲骨肉
血を引く	①祖先や親の家系につながる。②祖先や親の性格・気質などの特徴を受け継ぐ。	血脉传承, 至亲骨肉
血を見る	激しい争いのために血が流される。けんかや暴動で、流血するものが出る。	见血
血を以て血を洗う	(血に塗れた体を洗うのに血を用いるということで、ますますよごれることから) 悪を除くのに悪を持って、暴力を除くのに暴力をもってするたとえ。	以血洗血
血を分ける	実の親子や兄弟姉妹など、同じ血のつながりを持つ肉親関係にあることを言う。	血脉传承, 至亲骨肉
膏血を絞る	人の苦労して得た利益や財産を取りあげる。重税を取り立てることなどのたとえ。	剥削血汗, 吮人膏血
血道を上げる	(「血道」は血管のこと)色恋にのぼせて分別を失う。また、道楽などの物事に異常なほど夢中になる。	忘我, 神魂颠倒, 迷了心窍
血沸き肉躍る	心が高ぶって、体全体に力がわいてくるような感じがする。	摩拳擦掌, 跃跃欲试, 热血沸腾

※注：表中の「-」は対応する意味の慣用表現がないことを示す。

日本語の「血」を構成要素として持つ比喩的慣用表現と、対応する中国語の表現を比較すると、日本語の慣用表現と同様の意味の表現が中国語にもある場合と、中国語にない場合とに2大別される。また、

1) 日本語の慣用表現と同様の意味の表現が中国語にもある場合には、「身体語彙、他の自立語（中国語学では一般に「独立語」）要素、統合的構造」の組み合わせの型によって、さらに次の①～⑦のタイプが考えられる。

①構成要素である身体語彙、他の自立語（独立語）要素に加え、統語的構造も日本語とほぼ一致しているもの。例えば、

「血は水よりも濃い」（形容詞句）⇔「血浓于水（訳：血は水より濃い）」（形容詞句）
「血を以て血を洗う」（動詞句）⇔「以血洗血（訳：血を以て血を洗う）」（動詞句）
「血を見る」（動詞句）⇔「见血（訳：血を見る）」（動詞句）

がそうである。日中両語の意味的差異も見られない。

②構成要素である身体語彙、他の自立語（独立語）要素、統語的構造は一致するが、日本語には現れない「独立語」要素があるもの。例えば、

「血が沸く」（動詞句）⇔「热血沸腾（訳：熱い血が沸騰する）」（動詞句）

中国語には、「血」を形容する「热（訳：熱い）」が加わり、日本語よりも強い表現になっている。

③構成要素である身体語彙及び統語的構造は一致するが、他の自立語（独立語）要素が異なるもので、且つ日本語には現れない「独立語」要素があるもの。例えば、

「血が騒ぐ」（動詞句）⇔「热血沸腾（訳：熱い血が沸騰する）」（動詞句）
「血が滾る」（動詞句）⇔「热血沸腾（訳：熱い血が沸騰する）」（動詞句）

などである。

日本語、中国語とも「血」を構成要素とし、統合的構造も同様だが、その他の内部構成要素が異なっている。上記の2例は、日本語においては、意味の差が見られるが、中国語

では意味の違いは現れない。「热（訳：熱い）」については、②と同じである。

- ④構成要素である身体語彙は一致するが、他の自立語（独立語）要素と統語的構造が異なるもの。例えば、

「血は争えない」（動詞句）⇔「血浓于水（訳：血は水より濃い）」（形容詞句）
「血の海」（名詞句）⇔「血流成河（訳：）」（動詞句）

などである。

日本語、中国語とも「血」を構成要素とするが、その他の自立語（独立語）要素と統語的構造の違いによって想定するイメージの違いなどが見られる。

- ⑤構成要素である身体語彙は異なるが、他の自立語（独立語）要素、統語的構造が一致するもの。例えば、

「血がつながる」（動詞句）⇔「血脉相连（訳：血脈がつながる）」（動詞）

などである。

- ⑥構成要素である身体語彙、他の自立語（独立語）要素が日本語と異なるが、統語的構造がほぼ同じであるもの。例えば、

「血気に逸る」（動詞句）⇔「意气用事（訳：分別なく何かをする）」（動詞句）
「血も凍るような」（動詞句）⇔「吓丢了魂（訳：怖がり魂を捨てる）」（動詞句）
「血道をあげる」（動詞句）⇔「迷了心窍、神魂颠倒（訳：無我夢中になる、神魂転倒する）」（動詞句）
「血湧き肉躍る」（動詞句）⇔「摩拳擦掌（訳：腕を鳴らし手ぐすねを引く）」（動詞句）
「血も涙もない」（形容詞句）⇔「冷酷无情（訳：残酷で情けがない）」（形容詞句）

などである。

このタイプに属する慣用句はの統語構造は、両言語とも同様であるが、構成要素として持つ「身体語彙」は異なり、共起する他の自立語（独立語）要素も日本語の場合とは異なる。日本語の「血」は「二次身体語彙」だが、中国語では異なった次元の「意气（三次用事）、「吓丢了魂（三次）」、「迷了心（一次）窍、神（三次）魂（三次）颠倒」、「摩拳（一

次) 擦掌 (一次)」「冷酷无情 (三次)」を用いている。

⑦構成要素である身体語彙、共起する他の自立語 (独立語) 要素、さらに統語的構造も日本語と異なるもの。例えば、

「血眼になる」 (動詞句) ⇔ 「一门心思 (訳: ひたすら何かをする)」 (名詞句)

などである。

「血眼になる」は「二次身体語彙」の「血」を構成要素として持つ動詞句慣用表現であるが、中国語では「三次身体語彙」の「心思 (訳: 考え、思い)」を構成要素として持つ名詞句である。

2) 日本語の慣用表現と同様の意味の表現が中国語にない場合:

このような対応関係は少数であるが、存在する。例えば、「血となり肉となる」、「血の筋は七代」などである。

これらの慣用表現に対応する中国語表現は、管見の限り見られなかった。

前者は、「(栄養分がからだによく吸収されるように)知識や技能が完全に身につき、将来の活動に役立つようになる。」という意味で用いられている。

例: 入門以来の血の滲むような稽古が血となり肉となって立派な力士に成長した。

(『成語林 故事ことわざ慣用句』)

中国語には、「知识就是财富 (訳: 知識は財産となる)」、「书到用时方恨少 (訳: (「本」は知識のこと) から、知識は使うときにはじめて足りないとわかる)」のような格言があるが、身体語彙に全く関係のないものを構成要素として持つ慣用表現である。

また、後者は「先祖から先天的に受け継いだ体質、性格は、七代後の子孫にまで影響を及ぼす。」という意味で用いられている。中国語には「家风传三代 (訳: 素晴らしい家柄が三代後の子孫にまで影響を及ぼす)」という慣用表現があり、類似しているように見えるが、中国語では、個人の体質や性格より、家柄のほうに注目し、しかも「七代後」ではなく、「三代後」としている。

8.4.2 日中両言語における「血」を構成要素として持つ比喩的慣用表現の対照

8.1 では、日本語と中国語における「血」の基本義と拡張義について検討した。

本項ではそこから進んで<表 75>に記載した日本語の「血」を構成要素として持つ比喩的慣用表現における比喩形式と、中国語における対応する表現の比喩形式の有無と、使

用範囲について考察することとし、前述の国語辞書、中国語辞書、さらに慣用句辞書⁵²及び『BCCWJ』、『BCC』から採集した用例を取り上げながら検討していく(用例の下線は筆者)。

その際、考察対象とする日本語の比喩的慣用表現を、それぞれの比喩形式の用いられ方にしたがって分類し、提示する。

なお、基本義に基づく用例は「基本例①、基本例②」のように、拡張義に基づく用例は「拡張例①、拡張例②」のように記すこととする。

8.4.2.1 基本義に基づくもの

〈表 58〉に日本語の各慣用表現の比喩形式と中国語の対応表現について記載する。

〈表 58〉 日本語の「血」の各慣用表現の基本義の比喩形式と中国語の対応表現

日本語の慣用表現	比喩形式	対応する中国語の慣用表現	比喩形式の有無
生き血をしぼる	ミトニミー	剥削血汗	ミトニミー
生き血を吸う	ミトニミー	吮人膏血	ミトニミー
血気に逸る	ミトニミー	意气用事	—
血が頭に上がる	ミトニミー	冲昏了头, 眩晕	ミトニミー/—
血が騒ぐ	ミトニミー	热血沸腾	ミトニミー
血が滾る	ミトニミー	热血沸腾	ミトニミー
血が沸く	ミトニミー	热血沸腾	ミトニミー
血で血を洗う	メタファー	以血洗血	メタファー
血と汗	ミトニミー	血汗	ミトニミー
血となり肉となる	メタファー	—	—
血に飢える	ミトニミー	嗜杀成性	—
血の雨が降る	ミトニミー	血雨腥风, 血肉横飞	ミトニミー/ミトニミー
血の雨を降らす	ミトニミー	血雨腥风, 血肉横飞	ミトニミー/ミトニミー
血の海	ミトニミー	血海, 血流成河	—/ミトニミー
血の気が頭へ上る	ミトニミー	冲昏了头, 眩晕	ミトニミー/—
血の出るよう	メタファー+シミリ	命根子一样的	シミリ
血の涙	ミトニミー	血泪	ミトニミー
血眼になる	ミトニミー	①红眼, 急眼; ②一门心思	—/—
血も凍るような	メトニミー+シミリ	吓得要命, 吓丢了魂	—
血を見る	ミトニミー	见血	ミトニミー
血を以て血を洗う	メタファー	以血洗血	メタファー
膏血を絞る	ミトニミー	剥削血汗, 吮人膏血	ミトニミー
血道を上げる	メタファー	忘我, 神魂掉到, 迷了心窍	—/メタファー/メタファー
血沸き肉躍る	ミトニミー	摩拳擦掌, 热血沸腾	—/ミトニミー

⁵² 『日本国語大辞典』、『デジタル大辞泉』、『成語林 故事ことわざ慣用句』(1992)、『日本語慣用句字典』(2006)、『三省堂 故事ことわざ・慣用句字典 (第2版)』(2010)、及び第2章、第5章で触れた先行研究の7冊の慣用句辞書、中国語では『日中辞典 (第二版)』『中日辞典 (第二版)』を基にした。

本論文では、複数の辞書の記述を基に、8.1 では日本語の「二次身体語彙」の「血」の基本義は、すでに「血液、生きている動物のからだの中の血管内を循環する赤い体液のこと」としたが、以下に基本義と見なされる「血」を構成要素とした慣用表現に、どのような比喻形式が用いられ、それに対応する中国語表現がどのようなものであるかを考察する。

A. メトニミー形式

1) 生き血をしぼる、生き血を吸う、膏血を絞る

「生き血、膏血」は「概念上の関連性」の下位分類である「部分が全体を示す」（以下、「概念上の関連性>部分が全体を示す」）メトニミーを用いて、部分である「生き血」で、その所有者である「生きている人」自体を表している。

したがって、「生き血をしぼる、生き血を吸う、膏血を絞る」はメトニミーを用いた比喩的慣用表現で、「冷酷なやり方で無理やりに他人から財産や、利益を搾り取る。」という意味である。日本語では通常、悪質な行為の場合にのみ用いる。

基本例①：あくどい金融業者から金を借りると生き血をしぼられかねないぞ。

（『成語林 故事ことわざ慣用句』）

中国語には対応する慣用表現「剥削血汗，吮人膏血」がある。

「血汗（訳：血と汗），膏血（訳：膏血）」は、ここでは、日本語の「生き血」と同様の「概念上の関連性>部分が全体を示す」メトニミーを用いて、「人間の努力した得た利益や財産」のことを表している。

したがって、「剥削血汗（訳：血汗を絞る），吮人膏血（訳：他人の血を吸い取る）」は、日本語と同様に、「残酷なやり方で他人から利益を搾り取る」という意味で、悪質な行為の場合にのみ用いる。（基本例②、基本例③）。

基本例②：酒宴，每次耗费千金，都要附近各县分摊。郭永上任后，认为这是吸膏血，坚决反对。 （《科技文献》）

（訳：宴会を開くたびに、かかる大金を各県に分担させている。郭永が就任後、これは血汗をしぼる行為であると考え、強く反対している。）

基本例③：这样自春到夏，自夏到秋，罌粟花就算是长成了。它吸了数百年间的人的膏血，以人的精神魂魄凝聚而成，所以价钱比金子还要昂贵。

（《红处方》 毕淑敏）

（訳：このように、春から夏へ、夏から秋へと、大麻の花が大きくなりつつある。何百年間人間の膏血を吸い取り、人間の精や魂を凝結してできたものだから、

金より高くなっているのだ。)

また、僅かであるが、次の基本例④のような用法もあった。

基本例④：胎儿是在娘肚子里长大的，是吸取了母亲的膏血骨髓才发育的。

（《永别了，古利萨雷！》 钦吉斯·艾特玛托夫）

（訳：胎児がお母さんのおなかの中で、母親の血（の中の栄養）を吸収して成長して行くのである。）

この例は「血」のマイナスイメージを喚起するだけではなく、母への感謝の気持ちが現れている。

2) 血が頭に上る、血の気が頭へ上る

慣用表現「血が頭に上る、血の気が頭へ上る」は、その現象の後に生じる「イライラして、落ち着きを失い、冷静さを失う」という「時間的隣接性」の下位分類である「先行することで後続することを示す」（以下、「時間的隣接性」>先行することで後続することを示す）メトニミーによる表現である。

したがって、「血が頭に上る、血の気が頭へ上る」は、「のぼせてぼうっとなる。気持が高まる。夢中になる。また、ふだんの落ち着きを失う。逆上する」という意味であり、「冷静さを失う、逆上する」という用例が多い。一例を挙げる。

基本例⑤：また三度たたく。お国はかっとなり逆上した。全身の血が頭に上がって、目の前が真っ赤になった。（『二本の銀杏』海音寺潮五郎）

一方、中国語では、「冲昏了头（訳：頭がおかしくなる）、眩晕（訳：ふらふらする）」がこれにあたり、前者は「頭」を構成要素として持つ慣用表現であり、後者は慣用表現もなく、比喩表現も用いない一般的な語彙である。

「冲昏了头」は、日本語と同様に、「頭がおかしくなる」という現象の後に、「落ち着きを失う」という「時間的隣接性>先行することで後続することを示す」メトニミーによる表現である。

ただし、「冲昏了头」は、日本語の「逆上する」とは異なり、「落ち着きを失う。冷静さを失う」程度の意味で用いられる用例が多い。

基本例⑥：这几种情况之中，最令人觉得羡慕的，大概还是“爱情冲昏了头”的那些。

（《我看婚前难题》 罗兰）

(訳：このような状況の中で、最も羨ましがられるのは、おそらく「愛情が溢れて、落ち着きを失ってしまう」ことであろう。)

基本例⑦：“太棒了，维箴下课回来一定会高兴得团团转。”陆双丝被强烈的欢喜心冲昏了头。 (《茂盛少女心》凌淑芬)

(訳：「それは良かった、維箴が学校から戻ってきたら、きっと大喜びでしょう」、陸双糸は溢れる喜びに冷静さを失ってしまった。)

3) 血気に逸る

「血気に逸る」は、「勇みたって、思いがけない方向へ向かう」現象の後に、「激しい行動に走ろうとする」意欲が生じるという「時間的隣接性>先行することで後続することを示す」メトニミーによる表現である。

したがって、日本語の「血気に逸る」は「一時の情熱に任せて、激しい行動に走ろうとする」という意味である。

基本例⑧：血気に逸ってことをし損じる。 (『成語林 故事ことわざ慣用句』)

基本例⑨：若者たちは色ぬきだった。王都には青年党の他にも、血気に逸る若手集団がいくつか存在している。 (『聖刻群龍伝』千葉 暁)

中国語では、日本語では「三次身体語彙」に当たる「意気」を用いた慣用表現「意气用事(訳：分別なく何かをする)」が対応する。意味用法は日本語と同様であるが、比喻形式は用いられていない。

基本例⑩：人真的不可以在愤怒当中做决定，因为那真的是一时的意气用事。(微博)
(訳：怒っているときは絶対に何かを決めてはいけない。それは一時の分別のない行為となってしまうからだ)

基本例⑪：剧中，沈皓这个人物沉着、坚毅又不失儒雅，但有时也会意气用事、固执己见。(《用心演绎英雄的内心世界—访话剧：共和国不会忘记》文汇报)
(訳：ドラマの中で、沈皓という人物は、剛毅であり、上品であるが、たまには分別なく何かをしてしまうこともあり、頑固なところもある。)

4) 血と汗

「心血を注いで頑張って努力する」ことの後に、「疲れ切ってあせをかく」ことが連続

する「時間的隣接性」の下位分類である「後に生じる表現で先行することを示す」(以下、「時間的隣接性>後に生じる表現で先行することを示す」)メトニミーによる表現である。

「血と汗」は、何かに心血を注いだり、汗をかいたりして、努力する様子から、「並々ならぬ努力と忍耐」のたとえに用いられている。

基本例⑫：彼が築き上げた今日の地位は、長年にわたる血と汗のたまものである。
(『成語林 故事ことわざ慣用句』)

一方、中国語でも類似の意味の表現「血汗」があり、日本語と同様の比喻形式を用いている慣用表現である。

基本例⑬：虽然被偷的庄稼为数不多，但把自己曾经付出血汗、倾注爱情抚育了的东西白白被人拿走了，这对那些抚育的人来说是非常恼火的一件事。
(《贫穷的人们》宫本百合子)

(訳：盗まれた農作物はあまり多くないが、自分が心血を注いで、愛情を込めて育てたものが、取られることは、本当に怒らずにはいられないことだ。)

5) 血の雨が降る、血の雨を降らす

「血の雨が降る、血の雨を降らす」は、「激しい殴り合いや撃ち合い、多くの人を殺傷する」行為と、「血が雨のように大量に出る」ことが同時に発生することによる「時間的隣接性」の下位分類である「動作が同時に生じることを示す」(以下、「時間的隣接性>動作が同時に生じることを示す」)メトニミーによる表現である。

したがって、「血が雨が降る、血の雨を降らす」は、「殴り合いや撃ち合いなどで、多くの人を殺傷し、血を大量に流す結果になる。また、そのようにすさまじく戦う」という意味である。

基本例⑭：うかつに事実を話せば、陸海軍の間に血の雨が降るであろう。
(『帝国海軍軍令部総長の失敗』 生出 寿)

中国語にも「血雨腥风(訳：血の雨、生臭い風)／血肉横飞(訳：血と肉があちこちに飛ばされる)」という同形式の比喻を用いた慣用表現があり、日本語と同様の意味を持つ。

ただし、「血雨腥风」を皮肉の意味で、大変なこと、容易に乗り越えられないことの意味で用いられる例も見られる。

基本例⑮：今天第一次感觉到... 图书馆抢座的血雨腥风。(微博)

(訳：今日のはじめて経験した…図書館の席奪いの大変さ)

図書館の席の奪い合いの大変さを経験したことを皮肉を込めて述べる用例である。

6) 血の涙、血の海

「血の涙」は、「非常に悲しい」状態から、涙が血のようになるという「概念上の関連性」の下位分類である「原因と結果の関係を示す」(以下、「概念上の関連性>原因と結果の関係を示す」)メトニミーによる表現である。

したがって、「血の涙」は、涙が「血のように悲しさを伴っている」の意で、「悲しみの極みや激しい憤りのあまり出てくる涙」のたとえである。

また、「血の海」も、「血がたくさん流れ出た」結果、海のようになるという「概念上の関連性>原因と結果の関係を示す」メトニミーによる表現である。

したがって、「血の海」は「海のように大量に流れ出た血」のたとえである。

基本例⑩：地上のすべての人びとが苦しみ、血の涙を流した。平和、平和、平和！人びとは、そう願ひ続けた。 (『最後の奇跡』 青山 圭秀)

基本例⑪：ベッドの上には、まさしく血の海が広がっていた。 (『私はナース』 川辺敦)

中国語では、「血の涙」は日本語と同様に「血泪」であり、日本語と同様の比喻形式を用いている慣用表現である。

ただし、中国語の「血泪」は、「悲しみの極みや激しい憤りのあまり」という意味より、「つらさ、大変さ」の意味で使用される用例が多いように思われる。

基本例⑫：大家用心看！我完全能感受到她每字每句都暗藏血泪!!! (微博)

(訳：心を込めて読んでごらん。私には一字一句に彼女の血の涙が隠されているようなつらさが感じられるんだ。)

「血の海」に共通する表現は、「血海」、「血流成河」の2つがある。前者は一般的な語彙で、後者は日本語と同形式の比喻を用いた慣用表現である。

また、「血の海」より、「血の河」のほうが一般に用いられる。地理的条件が異なるため、中国では「海」より「河」のほうが身近であることを示す一つの例であると思われる。

基本例⑬：有的甚至扬言要让横贯马德里的卡斯特亚纳大街“尸横遍野，血流成河”。

（《“摩洛哥战斗旅”是元凶》新华社文汇报）

（訳：マドリードを縦断するカスティリャ大通りを「血の河」にすると募る声であつた。）

「血の海」は、大半は「家族や一族の人が多く殺され、憎しみが深い」という意味を表す場合に限って用いられる。

基本例⑳：那么多年的侮辱和损害，那么多族人的被摧残和死去，他背负这样的血海深仇、去不顾一切地获得了力量，（《镜・双城》沧月）

（訳：長年侮辱され、傷つけられ、多くの親族が死んでしまった。彼は血の海のような深い恨みを背負って、何も顧みずに力を得た）

「肉親が殺された憎しみ」は「河」では十分に表せない。このような場合には、「海」が用いられるようである。

7) 血に飢える

「血に飢える、血を強く求める」は、その願望行為と、その後の「他人を傷つけたい、他人を傷つける」願望や行為が時間的に連続して生じる「時間的隣接性>先行することで後続することを示す」メトニミーによる表現である。

したがって、「血に飢える」は、「他人を傷つけたいという欲望を持つ」という意味である。

基本例㉑：何の理由もなく人を殺すとは、血に飢えた男としか言いようがない。

（『成語林 故事ことわざ慣用句』）

中国語には、対応する「嗜杀成性」があり、慣用表現ではあるが、身体語彙は用いられておらず、したがって、比喩形式も存在しない。

意味は、日本語の「血に飢える」と同様に、「他人を傷つけたいという欲望を持つ」というものである。

ただし、日本語とは異なる、本当に人を傷つけるのではなく、別のやり方で、人に危害を加えるという意味に使う例が見られた。

基本例㉒：在一个嗜杀成性的集团内，碰巧你没沾上刀刃，那便是造化。（微博）

（訳：この血に飢える集団にいるのに、何もされていないのは、運がいいとしか言いようがない。）

8) 血眼になる

「血眼になる」は、興奮状態の「目が充血して赤くなる」様子と、それに伴う行為が同時に生じる「時間的隣接性>動作が同時に生じることを示す」メトニミーによる表現である。

「血眼」の意味は、血走った眼のことであり、したがって、「血眼になる」は、「a. 逆上して、狂ったような行動に出る」、「b. 目的を遂げようと夢中になる」という意味を表している。

基本例⑳：よほどの常識を破る度胸もいるし、倒産にどうでもいいことに、血眼になるのは、無駄なことだよ。 (『太郎神話』 池部 良)

基本例㉑：書類をなくしたのではと、血眼になって部屋中をさがした。 (『成語林 故事ことわざ慣用句』)

一方、中国語では、「a. 红眼, 急眼 (訳：目が赤くなる、苛立っている)」が、慣用句ではなく、一般的な語彙である。ただし、日本語と同様の意味である。

また、慣用表現に、比喩形式のない「b. 一门心思 (訳：ひたすらに何かをする)」がある。「ほかのことを考えずに、やりたいことに集中する」という意味である。

基本例㉒：他中等身材，面容清秀而稍留些土气，衣着随便甚至过于朴素，一望而知是那种一门心思专研学问的人。 (《追你到天涯》黄蓓佳)
(訳：彼は中背中肉で、顔つきも端正であるが、少し野暮ったい。服装はあまりにも地味で、ひたすら学問に専念している人だとすぐ知れる。)

9) 血を見る

「血を見る」は、「けんかや暴動、戦争のように激しく争う」行為と、「血が流される。流血するものが出る。死傷者が出る」とが同時に発生することによる「時間的隣接性>動作が同時に生じることを示す」メトニミーによる表現である。

したがって、「血を見る」は「激しい争いのために血が流される。けんかや暴動で、流血するものが出る。死傷者が出る」という意味で用いられる。

基本例㉓：敵対グループは穏やかな方法で、肅清されました。血を見ることなく、流血なしの肅清、おおいに結構だ。 (『黒豹ダブルダウン』 門田 泰明)

中国語にも対応する表現として、慣用表現ではないが、「见血 (訳：血を見る)」という

日本語と同形式の比喩を用いた一般的な語彙があり、日本語と同様の意味を持つものがある。

また、「一针見血（訳：針一本で血を見せる）」という慣用表現もある。これは、「血」が「生きている人間にとって欠かせない大切なものである」ということと、「物事にとって欠かせない大切なものである」という特性の類似性に基づくメタファーを用いており、「大切な、大事な、急所」などの意を表す表現である。

したがって、「一针見血」は、「一固まりの短い言葉で急所をずばりと言い当てる」という意味である。

基本例⑳：广告要求的不是“一针见血”的必须将极短的秒数做最大的利用吗？

（《婚姻有爱、暴力就会远离吗？》吴淡如）

（訳：広告は針一本で血を見せるのように、短い時間を最大に利用することを要求しているのではないか？）

10) 血が騒ぐ、血が滾る、血が沸く、血沸き肉躍る

「血」は、部分である「血」で、その所有者である「人」自体を表す「概念上の関連性>部分が全体を示す」メトニミーを用いている。

また、「血が騒ぐ、滾る、沸く」は、「血の流れがすばやくなる」現象と、「その持ち主の人が心や感情が高揚する、興奮する」状態と、連続して発生することによる「時間的隣接性>動作が同時に生じることを示す」メトニミーも用いられている。

これらの慣用表現はいずれも「興奮する。気が高ぶる。情熱がほとばしる」という意味である。

基本例㉑：戦国武将の血が騒ぐ。敵を前にして、討たれるわけにはいかない。

（『「里見八犬伝」外伝；万木城炎上』 野中 美弥）

基本例㉒：今回のことは完全にメイベルの予想範囲外だった。全身の血が滾るような高揚を抑えきれず、自信と意欲に満ちた。

（『デーモニックリベンジャー』 謡堂，香嶋かなめ，樹揺葉）

基本例㉓：決勝戦は、見ている我々も血沸き肉躍る思いだった。

（『成語林 故事ことわざ慣用句』）

一方、中国語には、日本語と同形式の比喩を用いた慣用表現「热血沸腾（訳：熱い血が沸騰する）」があり、意味用法も日本語とほぼ同じであるが、日本語では、動詞の違いに

よる意味の差が見られるが、中国語では意味の違いは現れない。

基本例⑳: 真正的摇滚乐就是让人忍不住的热血沸腾! (微博)

(訳: 本当のジャズは血を沸騰させる力を持っている。)

基本例㉑: 平淡的演讲, 并无激情, 但你却不得不热血沸腾, 不得不思考, 还或许你不得不哭! (微博)

(訳: ありきたりで変化に乏しい演説で、何のほとぼしる感情もなかったが、なんとなく熱い血が沸騰し、考えるようになる、泣かずに入れなくなるかもよ)

B. メタファー形式

11) 血を以て血を洗う、血で血を洗う

「血を以て血を洗う、血で血を洗う」は、「血で汚れた体を洗うのに汚い血を用いる」とことと、「悪を除くのに悪を持って、暴力(戦争など)を除くのに暴力(戦争など)をもってする」ことの類似性に基づくメタファーを用いた表現である。

したがって、「血を以て血を洗う、血で血を洗う」の意味は「悪を除くのに悪を持って、暴力を除くのに暴力をもってすること」である。

基本例㉒: 宗教改革だけの問題でなく、ヨーロッパ各地で宗教改革はやがて宗教戦争をもたらし、血で血を洗う闘いが繰り広げられていきます。

(『脳を鍛える』 立花 隆)

中国語にも「以血洗血(訳: 血で血を洗う)」という同形式の比喩を用いた慣用表現があり、日本語と同様の意味を持つ。

12) 血道をあげる

「血道」は「血管」であり、「血道をあげる」には、「頭に血をあげて、のぼせて夢中になる」状態と、「何かを夢中になって、ほかに何も考えられなくなる」状態との類似性に基づくメタファーが用いられている。

「血道を上げる」は、「常軌を逸して熱中する」という意味である。

ただし、日本語では「色恋や道楽などに夢中になる」文脈で用いられ、使用範囲や対象が「異性や利益、道楽」などに制限される。

基本例㉓: 彼はゴルフに血道を上げる。 (『デジタル大辞泉』)

一方、中国語の対応表現は「忘我（訳：我を忘れる、無我夢中になる）」であり、比喻形式を持たない一般的な語彙である。

意味は日本語の「血道を上げる」とほぼ同じであるが、対象は異性、道楽のみならず、勉強や仕事などにも用いる。

基本例⑳：从事第二职业的职工又有忘我的工作热情。

（《几家欢乐几家愁—写在“第二职业”大门开启之后》福建日报）

（訳：「第二の職業」を掛け持ちしている社員は、「我を忘れる」情熱がある。）

また、中国語には、日本語と同形式の比喻を用いた慣用表現「神魂颠倒（訳：神魂が転倒するさま）」、「迷了心窍（訳：無我夢中になる）」もある。これは日本語では「三次身体語彙」と見なされる「神、魂」、「一次身体語彙」と見なされる「心」を用いている点で日本語とは異なる。

基本例㉑：小娘们多有爱他的，奉得神魂颠倒，连家里也不思想。

（明冯梦龙《醒世恒言》卷十六 漢語大詞典オンライン版から転用）

（訳：彼に懸想する女が多く、みな無我夢中になり、うちのこともすっかり疎かになる）

13) 血となり肉となり

「血となり肉となり」は、「身体が栄養分をよく吸収し、自分の体の一部分にする」ことと、「知識や技能を十分に吸収し、自分のものにする」ことの類似性に基づくメタファーを用いた表現である。

したがって、「血となり肉となり」は「知識や技能が十分に自分のものとなる」という意味である。

基本例㉒：入門以来の血の滲むような稽古が血となり肉となって立派な力士に成長した。
（『成語林 故事ことわざ慣用句』）

中国語には、対応する慣用表現が管見の限り、見られなかった。

C. メトニミー+シミリ形式

14) 血が／も凍るような

「血」は「概念上の関連性>部分が全体を示す」メトニミーにより、部分である「血」が、その全体の「人」を表している。また、「～ような」はシミリの比喻的形式である。

したがって、「血が／も凍るような」は「メトニミー＋シミリ」による慣用表現と捉えられる。

あまりの寒さ、恐怖で血が固まるようになって、流れなくなることから、「血」の持ち主があまりの恐怖に、その場に固まって、動けなくなること表現している。

基本例③⑧：聞セダーイの話聞くだけで、血が凍るような気分になる。

（『竜王戴冠』 ロバート・ジョーダン）

基本例③⑨：あの手紙が小笠原家中の者の目に触れたらと思うと、長正は全身の血が凍るような思いであった。

（『西郷斬首剣』 森村 誠一）

中国語では、日本語では「三次身体語彙」に当たる「魂」が用いられた慣用表現「吓得要命，吓丢了魂（訳：怖がりを捨てる）」が対応するが、比喩形式は用いられていない。極端な恐怖で命まで捨ててしまうという意味である。

基本例④⑩：犬朝他扑过来，阿瑟・皮姆吓丢了魂。

（《冰島怪兽》 凡尔纳）

（訳：犬が飛びかかってきて、アシェ・ヒムは怖がって、命を失うほどだ。）

D. メタファー＋シミリ形式

15) 血の出るよう

「血の出る」は、その現象の苦しい、つらい感覚が、「極めて苦しい目にあった」ときの苦しい、つらい感覚」との類似性に基づくメタファーを用いた表現である。

また、「～よう」を用いたシミリの比喩表現も用いられており、「メタファー＋シミリ」による比喩形式で、全体が「大変な努力をするさま。非常に苦しくつらい努力をするさま」の意になっている。

基本例④⑪：彼の研究は血の出るような苦心の末に、成功を収めた。

（『成語林 故事ことわざ慣用句』）

一方、「血の出るよう」に対応する中国語表現は「命根子一样的（訳：命のような）」という一般的な語句であり、「（命をかけて得たものだから）、大切だ」となる。一般的な語句ではあるが、シミリが用いられている。意味的には、日本語よりも程度が強く感じられる。

基本例④⑫：帕盖特哪怕再穷，也从舍不得把它脱手，把它当命根子一样珍惜。

(《巴黎圣母院》 雨果)

(訳：帕盖特 [人名] は、どんなに貧しくても、手放すことができず、命のよう
に大切にしている。)

8.4.2.2 拡張義に基づくもの

本論文では、複数の辞書の記述を基に、8.1 では、「血」の拡張義をすでに定めた。以下に「血」の拡張義を構成要素とした慣用表現にどのような比喩形式が用いられ、それに対応する中国語表現がどのようなものであるかを考察する。

〈表 59〉に日本語の各慣用表現の比喩形式と中国語の対応表現について記載する。

〈表 59〉 日本語の「血」の各慣用表現の拡張義の比喩形式と中国語の対応表現

日本語の慣用表現	比喩形式	対応する中国語の慣用表現	比喩形式の有無
血が繋がる	シネクドキー	血脉相连, 骨肉相连	シネクドキー
血の筋は七代	シネクドキー	—	—
血は争えない	シネクドキー	血浓于水	
血は水より濃い	メタファー	血浓于水	メタファー
血も涙も無い	メトニミー	冷酷无情	—
血を受ける	シネクドキー	血脉传承, 至亲骨肉	シネクドキー
血を受け継ぐ	シネクドキー	血脉传承, 至亲骨肉	シネクドキー
血を継ぐ	シネクドキー	血脉传承, 至亲骨肉	シネクドキー
血を引く	シネクドキー	血脉传承, 至亲骨肉	シネクドキー
血を分ける	シネクドキー	血脉传承, 至亲骨肉	シネクドキー

A. シネクドキー形式

1) 血が繋がる、血を受ける、血を受け継ぐ、血を継ぐ、血を引く、血を分ける

これらの慣用表現は、いずれも「シネクドキー」の下位分類である「意味の拡大」(以下、「シネクドキー>意味の拡大」)による表現である。

「血」は先祖から受け継いだ性格、体の特徴、物の見方など、家族間で「同一の先祖に繋がるもの」を表している。

したがって、これらの慣用表現は先祖から実物の「血」そのものを受け継ぐのではなく、抽象的な「性格や体の特徴、またその関係、つながりなどを受け継ぐ」という意味である。

拡張例①：女優の母親の血を受けているせいか、彼女は美しく、声も魅力的だ。

(『成語林 故事ことわざ慣用句』)

拡張例②: 大津を新羅王家と倭国王家の血を引く者として、倭国の大王位を継がせる。
(『霸王不比等』黒須 紀一郎)

拡張例③: 小さな商売だけれども、自分の一生をかけて作り上げてきたものを、血を分けたものに継がせたいと話していました。
(『「父親」になるということ』辻井 正)

一方、中国語には、対応する日本語と同形式の比喩を用いた慣用表現「血脉相连 (訳: 血脈がつながる)」、「骨肉相连 (訳: 骨肉がつながる)」があり、意味用法も日本語とほぼ同じである。

ただし、中国語では、次の拡張例④～⑤のように、家族以外に、伝統的なもの、主義、主張などが後続する者に引き継がれるという意味にも用いられる。

拡張例④: 两岸都面对即将到来的新世纪科技、经济飞速发展的机遇和挑战, 两岸人民骨肉相连、利益相关, 只要携起手来, 实现国家统一, 中华民族就能昂首屹立于世界民族之林, 就能对人类社会的发展作出更大的贡献。(《人民日报》)
(訳: 来たる新世紀に、科学技術、経済の飛躍的な発展に伴う機会や挑戦を目前にして、兩岸人民は骨肉がつながっており、利益も共有する。手を繋げば、必ず国家を統一させることが実現でき、中華民族も世界の頂上に立ち、人類社会の発展にさらなる貢献ができる)

拡張例⑤: 长江、黄河哺育了中华民族和中华文明, 说明海峡两岸人民血脉相连、不可分离。(《科技文献》)
(訳: 長江、黄河が中華民族と中華文明を育てた。海峡兩岸の人民は血脈がつながっており、分割できない)

2) 血は争えない

「血は争えない」は、「シネクドキー>意味の拡大」による表現である。

「血」は、1) 同様、先祖から受け継いだ性格、体の特徴、物の見方など、家族間で「同一の先祖に繋がるもの」を表している。

したがって、「血は争えない」は「血統上の特質がはっきりと表れており、否定しようとしてもできない」という意味であり、「血の繋がりが強いため、周囲から見ると姿や中身がほとんど同じである」という文脈に用いられる。

プラスの意味(拡張例⑥)にも、マイナスの意味(拡張例⑦)にも用いられるが、親子に対してのみ用いて、兄弟やいとこなどを含む親族に対しては基本的に用いられない。

拡張例⑥：Aさんは、かつて父親が優勝したわんこ蕎麦大会で自分も勝ち、周囲の人に血は争えないと言われた。

(<https://eigobu.jp/magazine/chihaarasoenai>)

拡張例⑦：血は争えないのだから、どんなに頑張ってもこれ以上他の人みたいに上手くはならない。(<https://eigobu.jp/magazine/chihaarasoenai>)

3) 血の筋は七代

「血の筋は七代」は「シネクドキー>意味の拡大」による表現である。

「血」は、1) 2) 同様、先祖から受け継いだ性格、体の特徴、物の見方など、家族間で「同一の先祖に繋がるもの」を表している。

したがって、「血の筋は七代」は、「先祖から先天的に受け継いだ体質、性格は、七代あとの子孫にまで影響を及ぼす」という意味である。

中国語には、対応する慣用表現が管見の限り、見られなかった。

B. メタファー形式

4) 血は水よりも濃い

「血は水よりも濃い」は、「血は水より密度が高い」ことと、「家族間の繋がりが他人とのつながりより緊密である」ことの類似性に基づくメタファーによる表現である。

「血」は「血縁関係のある家族」であり、「水」は「血縁関係のない他人」のたとえである。

したがって、「血は水よりも濃い」は「血縁のつながりのあるもののほうが、他人よりも結びつきが強い。他人よりも血族のほうが頼りになる」という意味であり、「血は争えない」とほぼ同様の意味を表す。

ただし、「血は争えない」と異なり、「血は水よりも濃い」は、親子に対してのみならず、兄弟や親族に対しても用いられる。

拡張例⑧：さすが我が妹、血は水よりも濃いと、それ以来思い込んできた。

(『成語林 故事ことわざ慣用句』)

拡張例⑨：我が家は典型的な血は水よりも濃い家系です。みんなそっくりな体系をしています。(『ことわざ・慣用句の百科事典』)

中国語では、「血は争えない」、「血は水よりも濃い」に対応する慣用表現として、どち

らも「血浓于水（訳：血は水より濃い）」を用いる。これは日本語の「血は水より濃い」と同形式の比喩を用いた慣用表現で、日本語の「血は水より濃い」と同様の意味用法を持っている。

C. メトニミー形式

5) 血も涙も無い

「血」や「涙」は「概念上の関連性>部分が全体を示す」メトニミーを用いて、部分である「血、涙」で、その所有者である「人間のあらゆる感情や、思いやり」を表している。

したがって、「血も涙も無い」は、「人間の感情や思いやりがない」、「人間らしい感情にかけていて、冷酷、残酷である」という意味になる。

拡張例⑩：なんととっても篁は幼馴染で親友なのだから、いくらなんでもそんな血も涙もないようなことはすまい。

（『宿命よりもなお深く』 結城 光流）

一方、中国語では、直接「冷たくて、情がない」という意味の「冷酷无情（訳：残酷で、情けがない）」を用いる。慣用表現ではあるが、比喩形式を持っていない。

拡張例⑪：好一个利害的姑娘啊，他暗自寻思，她这话该有多么冷酷无情——扎得他心痛如绞，哪怕她并不是存心要这样。

（《美国悲剧》德莱塞）

（訳：ひどい子だなと彼は心の中でつぶやいた。彼女の話はととても冷たくて、情けがないものだ——彼の心苦痛で、何かに刺されたような気持ちになった。彼女が本気で傷つけたいと思っていなくとも。）

8.4.2.3 中国語に特有なもの

以上、日本語における「血」を構成要素として持つ比喩的慣用表現に見られる比喩形式の用法、並びにこれらの慣用表現と対応する中国語の慣用表現の意味用法や、使用範囲の相違について比較し、検討した。

ここでは、日本語には見られない中国語特有な比喩的慣用表現をメタファー、シネクドキー、メトニミーの比喩形式例をそれぞれ1例ずつ取り上げて、検討していきたい。3例とも「基本義に基づくもの」である。

A. メタファー形式

1) 含血喷人（訳：血を口にくわえて、人に吹き出す）

「血」は「きたない、見たくもないもの」という特性と、「汚い言葉、汚いもの」との

類似性に基づくメタファーが用いられている。

したがって、「含血噴人」は、「汚いと見なされる血を人に噴き出す」ことから、「ありもなしことを言いふらして人を傷つける。根も葉もない中傷」という意味を表している。

基本例①：“李小姐，你怎么可以含血噴人…”。（《诱君入瓮》艾佟）

（訳：李さん、よくその根も葉もない中傷が言えたものだね）

B. シネクドキー形式

2) 鉄血丹心、碧血丹心（訳：青い血、赤い心）

この2つは、「シネクドキー」の下位分類である「意味の縮小(特殊化)」を用いた慣用表現である。

「鉄血」は、「血のついた鉄」で「武器」を表し、「血のついた鉄の武器を持っている」ことから、「戦争に行く」という意味となる。

したがって、「鉄血丹心」は「血気盛んで犠牲精神に富む戦士たちの流した血」のことを表している。

同様に、「碧血」も、シネクドキーの「意味の縮小(特殊化)」を用いて、「忠臣などが正義の為に流した血」という意味を表している。

したがって、「鉄血丹心、碧血丹心」は、「真つ青な忠誠の心を持って、戦争に向かう」、または「自分の国や国民に忠実で、忠誠である」ことのたとえである。

基本例②：尤其是“人生自古谁无死，留取丹心照汗青”，写出了古来忠臣义士万古不灭的碧血丹心。（《科技文献》）

（訳：特に「人は古来だれも一人として死なぬ者はない、だれもが死ぬのなら、歴史に業績を残そう」は、忠人義士の永遠に消えない忠誠心を表している。）

C. メトニミー形式

3) 血气方刚（訳：血気が盛んである）

「血」や「气（筆者注：日本語の「気」）」は、「概念上の関連性>部分が全体を示す」メトニミーを用いて、部分である「血、気」で、その持ち主である「人」を表している。

したがって、「血气方刚」は、その持ち主の「人」が「元気盛りで、気骨がある」という意味である。プラスの意味で用いられる場合が多いが、基本例③、基本例④のように、「向こう見ずの勇」の意で用いられる例が見られた。

基本例③：只要你不只是个年轻人，不再“血气方刚”，你就会不知不觉变成那只大笨羊，不管你怎么努力地想赶上“流行当权者”的脚步。

《《聪明只被糊涂误》 吴淡如》

(訳：元氣盛りの若者でなくなれば、知らず知らずのうちにバカな羊のようになっていく。いくら頑張っても「流行りもの」に追いつこうとしても)

基本例④：他深悉賭徒的心理，年轻人大多都是“血气方刚”，只要几句话一激，明明知道是陷阱，还是往坑里跳。 《《千门弟子》 公孙鑫》

(訳：彼は博打打ちたちの気持ちがよく分かっている。彼らの多くは、興奮させれば「向こう見ずの勇」を奮って、落とし穴だと分かっているながらも、飛び込んでいくのだ。)

8.4.3 日中両言語における「血」を構成要素として持つ比喩的慣用表現のまとめ

本項では、日本語の「血」を構成要素として持つ比喩的慣用表現における比喩形式と、対応する中国語の表現について、その相違点を考察した。

1) 「構成要素である身体語彙、他の自立語（「独立語」）要素、統語的構造」などの組み合わせの型から、①～⑦のタイプに分け、日本語の「血」を構成要素として持つ比喩的慣用表現と、それに対応する中国語の慣用表現について、相違点を検討した。

2) 日本語の「血」を構成要素として持つ比喩的慣用表現と、対応する中国語の表現が「基本義に基づくもの」、「拡張義に基づくもの」、及び「中国語に特有なもの」のそれぞれでどのような比喩形式が用いられ、それに対応する中国語表現がどのようなものであるかを比較しながら考察し、相違点を検討した。

その結果、日本語の「血」を構成要素として持つ比喩的慣用表現と、対応する中国語の表現とでは、比喩形式、意味用法、使用範囲にほぼ違いは見られなかった。

一方、日本語では比喩を用いた慣用表現が、中国語では同じ慣用表現でも、比喩を持たずに、一般的な表現であるものも見られた。

また、日中両言語とも、「血」を構成要素として持つ慣用表現に用いられる比喩形式は、ほぼ同様であったが、日本語に特徴的なものとして、二重の形式（「メタファー＋シミリ」「メトニミー＋シミリ」）が見られた。これは本調査の範囲内では、中国語に現れなかったものである。

慣用表現「血道をあげる」のように、日本語より、中国語の表現に使用範囲が広いものが散見された。

8.4.4 日中両言語における「気/气」を構成要素として持つ比喩的慣用表現

本項では、日本語における「三次身体語彙」の中から、「気」を構成要素として持つ比喩的慣用表現と、対応する中国語の表現に、それぞれにどのような相違点があるのかを検

討する。

まず、本論文の第6章で採集した日本語の「気」を構成要素として持つ慣用表現の中で、比喩的慣用表現と見なされるものと、その中国語訳の対応関係を〈表60〉に示す（並びは日本語慣用表現の五十音順）。

〈表60〉日本語の「気」の比喩的慣用表現とその中国語訳及び対応する中国語慣用表現

日本語の慣用表現	慣用表現の意味	対応する中国語の慣用表現
気が大きい	心がゆったりとしていて、細かなことにこだわらない。	气量大
気が重い	何かをしようとしても気分が乗らない。憂鬱で積極的に取り組めない。	心情沉重
気が軽い	①気分的に負担がなくて、楽なこと。②打ち解けて気さくにふるまう。	心情舒畅
気が腐る	物事が思い通りに行かず、それ以上やろうとする気力がなくなる。行動や意志を他からはばまれて嫌になる。	—
気が沈む	憂鬱になる。ふさいだ気分になってしまい、心が晴れない。	心情郁闷, 情绪消沉
気が小さい	つまらないことにまで気をつかい、あれこれ心を労する。ささいなことを気にする。小心である。	气量小, 小心眼儿
気が散る	一つのことには注意が集中しない。いろいろなことに心が彷徨う	心不在焉, 精神涣散
気が強い	性格やものの考え方が、積極的ではっきりしている。他からの忠告や非難にも耳を傾けず、自分の意見や考えを曲げない。	争强好胜
気が遠くなる	①意識がなくなる。正気を失ってしまう。②時間や数量などが膨大で、つかみどころがない感じがするさま。	神态不清
気が長い	焦らずのんびりしている。	慢性子
気が晴れる	心配事や悩み事などで暗く閉ざされていた心が、晴れ晴れとした感じになる。	心情舒畅
気が早い	物事に落ち着いて取り組まず、先ばかり急ぐ。性急である。せっかちである。	心急
気が短い	①すぐ怒ったり、いらいらしたりする。②せっかちである。	性子急
気が向く	してみようという気持ちになる。乗り気になる。関心を持つ	心血来潮
気が弱い	性格や考え方が、消極的である。自分の気持ちや考えをはっきり表わすことができず、他人の言動に引きずられやすい。	性格懦弱
気に障る	不愉快に感じる。	令人不高兴, 令人生气
気を落とす	物事がうまく行かず、元気をなくす。失望する、落胆する。	灰心泄气
気を許す	相手を信用して警戒心や緊張を解く。油断する。	疏忽大意
気を緩める	緊張した気持ちがほぐれて、ゆったりとする、忙しく難しい仕事が無事に終わった後に、精神がゆったりとする	疏忽大意

※注：表中の「-」は対応する慣用表現がないことを示す。

まず、日本語の「気」を構成要素として持つ比喩的慣用表現と、対応する中国語の表現を比較すると、日本語の慣用表現と同様の意味の表現が中国語にもある場合と、中国語にない場合とに2大別される。

また、

1) 日本語の慣用表現と同様の意味の表現が中国語にもある場合には、「身体語彙、他の自立語（独立語）要素、統一的構造」の組み合わせの型によって、さらに次の①～⑥のタイプが考えられる。

① 構成要素である身体語彙、他の自立語（独立語）要素に加え、統一的構造も日本語

とほぼ一致しているもの。例えば、

「気が大きい」 (形容詞句) ⇔ 「気量大 (訳：気量大きい)」 (形容詞句)

「気が小さい」 (形容詞句) ⇔ 「気量小 (訳：気量小さい)」 (形容詞句)

がそうである。日中両語の意味的差異も見られない。

②構成要素である身体語彙及び統語的構造は一致するが、他の自立語 (独立語) 要素が異なるもの。例えば、

「気が早い」 (形容詞句) ⇔ 「脾气暴 (訳：気が乱暴である)」 (形容詞句)

などである。

日本語、中国語とも「血」を構成要素とし、統合的構造も同様だが、その他の内部構成要素が異なっている。

③構成要素である身体語彙及び統語的構造は一致するが、他の自立語 (独立語) 要素が異なるもので、且つ日本語には現れない独立語要素があるもの。例えば、

「気を落とす」 (動詞句) ⇔ 「灰心泄气 (訳：心が灰色になり、気が漏れる)」 (動詞句)

「気が多い」 (形容詞句) ⇔ 「心浮气躁 (訳：心が浮いていて、気もそぞろである)」
(形容詞句)

などである。

中国語では、前者は独立語要素の述語は動詞の「泄 (訳：漏れる)」で、且つ程度を強調するため、「灰心 (訳：心が灰色になる)」が加わり、日本語よりも強い表現になっている。

後者は独立語要素の述語は形容詞の「躁 (訳：そぞろである)」で、且つ程度を強調するため、「心浮 (訳：心が浮いている)」も加わり、日本語よりも強い表現になっている。

④構成要素である身体語彙は異なるが、他の自立語 (独立語) 要素、統語的構造が一致するもの。例えば、

「気が重い」 (形容詞句) ⇔ 「心情况重 (訳：心が重い)」 (形容詞句)

などである。

日本語、中国語とも自立語（独立語）である「留める」を述語動詞とし、統合的構造も同様だが、中国語では、身体語彙は「三次」の「気」ではなく、「一次」の「心」を用いている。

- ⑤ 構成要素である身体語彙、他の自立語（独立語）要素が日本語と異なるが、統語的構造がほぼ同様であるもの。例えば、

「気が早い」（形容詞句）⇔「性子急（訳：性格がせっかちである）」（形容詞句）

「気が重い」（形容詞句）⇔「心情沉重（訳：心情が重い）」（形容詞句）

「気が軽い」（形容詞句）⇔「心情舒畅（訳：心地よい）」（形容詞句）

「気を許す」（動詞句）⇔「疏忽大意（訳：意が油断する）」（動詞句）

「気を緩める」（動詞句）⇔「疏忽大意（訳：意が油断する）」（動詞句）

「気が散る」（動詞句）⇔「心不在焉（訳：心ここにあらず）」（動詞句）

などである。

このタイプに属する慣用句の統合構造は、両言語とも同様であるが、構成要素として持つ「身体語彙」は異なっている。共起する他の自立語（独立語）要素も日本語の場合とは異なる。日本語では、いずれも「三次身体語彙」の「気」を用いているが、中国語では同じく「三次身体語彙」の「性子（訳：性格）」、「心情（訳：気持ち、心地）」、「意」を用いたり、「一次身体語彙」の「心」を用いている。

- ⑥ 構成要素である身体語彙、共起する他の自立語（独立語）要素、統語的構造も日本語と異なるもの。例えば、

「気が重い」（形容詞句）⇔「心情郁闷（訳：心が鬱積する）」（動詞句）

などである。

2) 日本語の慣用表現と同様の意味の表現が中国語にない場合

このような対応関係は少数であるが、存在する。例えば、「気が腐る」、「気が立つ」などである。

これらの慣用表現に対応する中国語表現は、管見の限り見られなかった。

8.4.5 日中両言語における「気/气」を構成要素として持つ比喩的慣用表現の対照

8.2では、日本語の「気」と中国語の「气」の基本義と拡張義について検討した。

本項では、そこから進んで、<表 78>に記載した日本語の「気」を構成要素として持

つ比喩的慣用表現における比喩形式と、中国語における対応する表現の比喩形式の有無と、使用範囲について考察することとし、前述の国語辞書、中国語辞書、さらに慣用句辞書⁵³及び『BCCWJ』、『BCC』から採集した用例を取り上げながら、検討していく（用例の下線は筆者）。

その際、考察対象とする日本語の比喩的慣用表現を、それぞれの比喩形式の用いられ方にしがって分類し、提示する。

なお、基本義に基づく用例は、「基本例①、基本例②」のように、拡張義に基づく用例を「拡張例①、拡張例②」のように記すこととする。

8.4.5.1 基本義に基づくもの

本論文では、複数の辞書の記述を基に、8.1では、日中両言語とも「気／气」の基本義を「空気など気体や、自然界の冷熱曇晴れなどの現象のこと」としたが、本研究は「身体語彙」を対象としているため、基本義に基づくものを対象外にすることとした。

8.4.5.2 拡張義に基づくもの

<表 61>に日本語の各慣用表現の比喩形式と中国語の対応表現について記載する。

<表 61>日本語「気」の各慣用表現の拡張義の比喩形式と中国語の対応表現

日本語の慣用表現	比喩形式	対応する中国語の慣用表現	比喩形式の有無
気が大きい	メタファー	气量大	メタファー
気が重い	メタファー	心情沉重	メタファー
気が軽い	メタファー	心情舒畅	—
気が腐る	メタファー	—	—
気が沈む	メタファー	心情郁闷, 情绪消沉	メタファー
気が小さい	メタファー	气量小, 小心眼儿	メタファー
気が散る	メタファー	心不在焉, 精神涣散	—/メタファー
気が強い	メタファー	争强好胜	—
気が遠くなる	メトニミー	神态不消	—
気が長い	メタファー	慢性子	メタファー
気が晴れる	メタファー	心情舒畅	—
気が早い	メタファー	急性子	メタファー
気が短い	メタファー	性子急, 脾气暴躁	メタファー
気が向く	メトニミー	心血来潮	メトニミー
気が弱い	メタファー	性格懦弱	メタファー
気に障る	メトニミー	令人不高兴, 令人生气	—
気を落とす	メトニミー	灰心泄气	メタファー
気を許す	メトニミー	疏忽大意	メトニミー
気を緩める	メトニミー	疏忽大意	メトニミー

⁵³『日本国語大辞典』、『デジタル大辞泉』、『成語林 故事ことわざ慣用句』(1992)、『日本語慣用句字典』(2006)、『三省堂 故事ことわざ・慣用句字典 (第2版)』(2010)、及び第2章、第5章で触れた先行研究の7冊の慣用句辞書、中国語では『日中辞典 (第二版)』『中日辞典 (第二版)』を基にした。

本論文では、複数の辞書の記述を基に、8.1では、「気／气」の拡張義をすでに定めた。以下に、これらの拡張義としての「気」を構成要素として持つ慣用表現にどのような比喻形式が用いられ、それに対応する中国語表現がどのようなものであるかを考察する。

A. メタファー形式

1) 気が大きい／気が小さい

「気が大きい」は、「心の大きさ」と「空間の大きさ」との類似性に基づくメタファーを用いた表現である。

一方、「気が小さい」は、「心が小さい」ことと、「空間が小さい」こととの類似性に基づくメタファーを用いた表現である。

したがって、「気が大きい」は「心がゆったりとしていて、細かなことにこだわらない」、「気が小さい」は「つまらないこと、ささいなことでも気にする小心者、臆病である」という意味である。

いずれも、主体の性格の比喻として用いられる表現である。

拡張例①：酒を飲むと、気が大きくなる。(デジタル大辞泉)

拡張例②：ずいぶんとまた勇気のある女性だと思った。私なら気が小さいから、とても無理だ。(『龍臥亭事件』 島田 荘司)

「気が大きい」に対応する中国語の慣用表現は「气量大（訳：度量が大きい）、胸襟磊落（訳：度胸がおおらかである）」で、「气量大」は日本語と同様の語彙使用、比喻形式を用いた慣用表現であるが、「胸襟磊落」は「一次身体語彙」を用いているが、比喻形式は同じである。

また、「気が小さい」に対応する中国語の慣用表現は「气量小（訳：気量が小さい）、小心眼儿（訳：心が小さい）」である。「气量小」は日本語と同様の語彙使用、比喻形式であり、「小心眼儿」は「一次身体語彙」を用い、日本語と同形式の比喻を用いた慣用表現である。これらの意味用法は日本語とほぼ同じである。

ただし、「小心眼儿」は、「勘定高い、利害や損得にあくせくしている、ケチケチする」というマイナスのニュアンスが強い。

拡張例③：不会的，表哥是做大事的人，气量大。(《无怨》 严沁)

(訳：そんなことはない。従兄は大きなことを成し遂げる人間で、度量が大きい。)

拡張例④：他心中有愧，想来想去，……自己也不该以虚言谎话来欺骗别人，他本系胸

襟磊落之人，一念至此，只觉自己实在卑鄙得很。

（《彩环曲》古龙）

（訳：彼の心の中は、申し訳ない気持ちでいっぱいになっていた。どう考えても、…自分が嘘をついて人をだましたのは悪かった、と思う彼は元々は度胸の大きい人で、それに気づいたとたん、自分は本当に卑怯だったと思ったのであった。）

拡張例⑤：他曾经设法让上级把秦孝川调走，但又不愿直说，怕别人说自己气量小不能团结同事。 （《桑拿小姐》常温）

（訳：彼は自分があらゆる手段を使って、秦孝川を転勤させたことを正直に言いたがらないのは、度量が小さくて、仲間と団結できないと言われるのが怖いからだ。）

拡張例⑥：她笑吟吟地望着我，“我看得出你十分小心眼儿。” （《痴人》王朔）

（訳：彼女は微笑みながら私の顔を見て、あなたが気の小さい人だということは知っているわよと言った。）

また、「小心眼儿」はそのほかに、次の拡張例⑦のように、「ずるい、狡い」という意味としての用法も見られた。

拡張例⑦：母亲耍了个“小心眼儿”，她把手头仅有的1000元钱，让一位亲人埋在了家中院落的一角。 （《爱也温柔爱也冷酷—背后的杨沫》徐然）

（訳：母親はずるいことをした。手元にある僅か1000元しかないお金を、親戚に頼んで、庭の隅に埋めてもらった。）

2) 気が長い／気が短い、気が早い

「気が長い」は、「心の悠長さ」と、「物体・時間の長さ」との類似性に基づくメタファーを用いた表現である。「何事をして、焦らずゆっくり、のんびりして、時間を気にしない」という意味である。

一方、「気が短い、気が早い」は、「心の余裕の無さ」と、「物体の短さ、時間のはやさ」との類似性に基づくメタファーを用いた表現であり、前者は、「すぐ怒ったり、いらいらしたりする。せっかちである」という意味で、後者は「先ばかり急ぐ」の意味である。

いずれも、主体の性格の比喩として用いられる表現である。

拡張例⑧：私の小説ができるまで十年も待っていてくれるだなんて、君は気が長い編

集者だなあ

(『ことわざ・慣用句の百科事典』)

拡張例⑨：彼女は気が長い性格でめったに怒らない。

(<https://www.tedukurikotoba.com/entry/863.html>)

拡張例⑩：あんな気が短い人の下には、部下はたまったものではない。

(『成語林 故事ことわざ慣用句』)

拡張例⑪：父は気が短いから「行くぞ」って行ったら5分で出ないとならない。

(『愛犬の友』 大野 瑞絵/実著者不明/平岩 由伎子)

拡張例⑫：まだ宇宙船の形もできあがっていないというのに、少々気が早いかもしれない。だが発進間際には猛烈な忙しさが予想される。

(『星くず英雄伝』 新木伸)

一方、これらの慣用表現に対応する中国語の慣用表現は、それぞれ「慢性子（訳：性格が遅い、のんびりしている）」、「性子急（訳：性格が急いている）、心急（訳：気が早い）」である。用いられている身体語彙は、「気」ではなく、「三次身体語彙」の「性」と、「一次身体語彙」の「心」であるが、これらは日本語と同形式の比喻を用いた慣用表現であり、日本語と同様の意味を持つ。

拡張例⑬：米达麦亚并不是生来就是个慢性子、有耐性的人，不过他知道对手既然是罗严塔尔，那么所有一切的焦虑或性急都是极度危险的。

(《银河英雄传》 田中方树)

(訳：米達麦亜〔人名〕は生まれつきの気が長い、忍耐力のある人ではない、ただ、相手が羅嚴塔爾〔人名〕であることから、あらゆる焦慮や短慮が極めて危険であることはよく知っていた。)

拡張例⑭：他抽烟也抽得慢条斯理的，从不大口猛吸。这人整个儿是个慢性子。说话也慢。

(《安乐居》 汪曾祺)

(訳：彼はタバコを吸うときも、ゆったりとしておちついていて、大量に猛烈に吸ったことはない。彼は気の長い人だ。話すときものんびりとしている。)

拡張例⑮：肖赫又不是什么坏人，只不过性子急、脾气暴躁些罢了。

(《未来军团三部曲》 葛红兵)

(訳：肖赫は悪い人ではない、ただ性格がせっかちで、短気なだけだ。)

3) 気が強い／気が弱い

「気が強い」は、「性格上の強さ」と、「物の強さ」との類似性に基づくメタファーを用いた表現である。意味は、「性格やものの考え方が、積極的ではっきりしている」である。

一方、「気が弱い」は、「性格の弱さ」と、「物の弱さ」との類似性に基づくメタファーを用いた表現であり、意味は「性格や考え方が、消極的である」となる。

いずれも、主体の性格の比喻として用いられる表現である。

拡張例⑩：「まあ、何とかがんばってみるわ、おまえは気が強いから」と、信介は言った。
(『青春の門』 五木 寛之)

拡張例⑪：この猫は気が弱いくせに、下水の狭い空間をうろつく鼠を捕まえる。
(『花川戸へ』 樋口 修吉)

また、「気が強い」は「自己中心的で、他からの忠告や非難にも耳を傾けず、自分の意見や考えを曲げない」(拡張例⑩)、「気が弱い」は「何もかも遠慮し、自分の気持ちや考えをはっきり表わすことができない、他人の言動に引きずられやすい。」(拡張例⑪)という個人の性格を表すのにも用いられる。

拡張例⑫：下準備をしたり、後片づけをしたりしてる。 ママはとっっても気が強いので、完全にパパをお尻の下に敷いていて、
(『隣のお姉さん』 柳川 友里恵/樋口 真美)

拡張例⑬：「まずい！」と言われると、気が弱い人だと、、つい「ホントだね」なんて言ってしまうんだろうな。
(『究極の選択』 実著者不明)

中国語では、「気が強い」に対応する慣用表現は「争強好胜(訳：負けず嫌い)」であり、「気が弱い」に対応する慣用表現は「性格懦弱(訳：性格が軟弱である)」である。前者は身体語彙は用いられておらず、したがって、比喻形式も存在しないが、後者は「三次身体語彙」の「性」を用いた慣用表現で、日本語と同形式の比喻を用いている。

また、「争強好胜」は「積極的に何かをする」という意味より、「自分の意見を曲げないで、しっかり貫く」という意味に、「性格懦弱」は、「他人に影響されやすく、すぐ自分の主張をあきらめてしまう」という意味に用いられる場合が多い。

拡張例⑳：无论是在革命战争年代还是在和平建设时期，毛泽东的性格里面充分展示了他争强好胜、不服输的一面。（《科技文献》）

（訳：革命戦争の年代でも、平和的な建設の時期でも、毛沢東の性格にある負けず嫌いの一面が十分反映されている。）

拡張例㉑：其目的就是想告诉大家，在你们面前的是一个胆小，怕事，性格懦弱的小男孩儿（《现代聊斋》余少锺）

（訳：彼の目的は、あなたたちの前では、自分が臆病でどっちつかずの軟弱な性格の子どもであることを示すことだ。）

4) 気が軽い／気が重い

「気が軽い」は、「気持ちの軽さ」と、「物の軽さ」との類似性に基づくメタファーを用いた表現であり、「気分的に負担がなくて、気楽に、容易に打ち解けてふるまうことができる」という意味である。

一方、「気が重い」は、「気持ちの重さ」と、「物の重さ」との類似性に基づくメタファーを用いた表現であり、「何かをしようとしても、憂鬱で積極的に取り組めない」という意味である。

いずれも、主体の気持ちを表す表現である。

拡張例㉒：明日は会社が休みなので、気が軽くなって酒を飲んでいる。

（日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集 李，尚勳）

拡張例㉓：「その節はよろしく」と、敦子は微笑んだ。むしろ、今気が重いのは、明日東京へ戻ることを、母にどう言うか、であった。

（『人形たちの椅子』、赤川 次郎）

「気が軽い」に対応する中国語の慣用表現は、日本語のような「気」ではなく、「三次身体語彙」の「心情」を用いた「心情舒畅（訳：心情がのびのびして、愉快である）」である。

「気が重い」に対応する中国語の慣用表現も同様に、「心情」を用いた「心情沉重（訳：心情が重い）」である。前者は比喩を用いておらず、後者は日本語と同様の比喩形式を用いている。

ただし、「心情舒畅」は「気楽に何かをする」という意味より、通常「何かをすることで、気分がよくなる」という意味で用いられ、「心情沉重」は「心が苦しい」という意味

で用いられる場合が多い。

拡張例⑳: 松树林里空气异常清新, 人行林中可以将肺脏洗得干干净净, 使人心情舒畅
(微博)

(訳: 松の林は空気がとても新鮮で、中を歩くと、汚れている肺がきれいに洗われ、気分がよくなるのだ。)

拡張例㉑: 3月20日那天, 我率子女前往八宝山吊祭王震将军, 心情沉重、哀痛,
久久不能平静。 (《人民日报》)

(訳: 3月20日、子どもたちを連れて、八宝山へ王震将軍のお墓参りをしてきた。心が重苦しくて、悼み悲しんで、なかなか静まらない。)

5) 気が晴れる／気が沈む

「気が晴れる」は、「気持ちの明るさ」と、「空の明るさ」との類似性に基づくメタファーを用いた表現であり、「ずっとなにかに心配して、悩んで暗く閉ざされていた気持ちが開放され、晴れ晴れとした感じになる」という意味である。

一方、「気が沈む」は、「気持ちが落ち込んでいる状態」と、「船などの物が沈む状態」との類似性に基づくメタファーによる表現であり、「気持ちが塞いで、憂鬱になり、情緒のいちばん低い状態になる」という意味である。

いずれも、主体の気持ちを表す表現である。

拡張例㉒: 世事に疲れている様子だったので、司馬は、近江を歩くと気が晴れるかもしれないと、友人に薦めたそうである。

(『亥歳生まれは、大吉運の人』高橋 春成)

拡張例㉓: 歩を移しけり 青麦に降れよと思ふ地のかわき 青麦ややたらに歩み気が沈む 青麦に潮風ねばく吹き狂ふ 捨てである花菜うれしや逢はで去る
花畠に (『増補現代俳句大系』杉田久女)

「気が晴れる」に対応する中国語の慣用表現は、「気が軽い」に対応する表現と同じく、「心情舒畅 (訳: 心情がのびのびして、愉快である)」であり、「気が沈む」に対応する中国語の慣用表現も同様に、「気が重い」に対応する表現と同じく、「心情沉重 (訳: 心情が重い)」である。いずれも、異なる「三次身体語彙」が用いられているが、比喻形式、意味用法に関しては、4) と同様である。

6) 気が腐る

「気が腐る」は、「気持ちが萎える状態」と、「物が腐る状態」との類似性に基づくメタファーを用いた表現であり、「物事が思い通りに行かず、嫌になって、それ以上やろうとする気力がなくなる」という意味で用いられる。同様に、主体の気持ちを表す表現である。

拡張例⑳：こう次から次と失敗すると、気が腐って何もする気がしない
(情報&オピニオン)

これに対応する中国語の慣用表現は、管見の限り見られなかった。

7) 気が散る

「気が散る」は、「気持ちが分散される状態」と、「物事がぼらぼらになっている状態」との類似性に基づくメタファーを用いた表現であり、「一つのことに注意が集中しない。いろいろなことに心がさまよう」意味で用いられる。

拡張例㉑：晴子が持っていたテレビのリモコンをひったくった。「何なの。気が散るなら消しますよ」「すまん。ちょっと貸してくれ。」
(『ザ・ベストミステリーズ』 新野 剛志)

これに対応する中国語の慣用表現は、「心不在焉(訳：心ここにあらず)、精神涣散(訳：精神が散る)」であり、前者は「一次身体語彙」の「心」を用いているが、比喩形式を持っておらず、後者は、異なる「三次身体語彙」の「精神」を用い、日本語と同形式の比喩を用いている。いずれも日本語とはほぼ同じ意味を持っている。

拡張例㉒：中国队开场后显得心不在焉，15分钟内居然让对手连续攻入三球。
(《15分钟内卫冕梦破灭》 都市快讯)
(訳：中国チームは試合の開始直後、心ここにあらずの様子に見えて、15分以内に、相手に3球も撃たれてしまった。)

拡張例㉓：不能怪她胡言乱语。累得精神涣散、双眼酸涩蒙眬，她全身虚脱疲乏，其实已经不太能用理智思考，精神亦很难集中。
(《冷爱伯爵》猫子)
(訳：彼女があれこれとでたらめをいうのを許してあげて！きっと疲れ切っていて、気が散り、眼も痛くてはっきり見えないし、身体もだるいしで、すでに理性的に物事を考えられず、精神も集中しがたいであろう。)

B. メトニミー形式

1) 気に障る

「気に障る」は、「気持ちの邪魔になる」ことが原因で、「怒る、嫌な気持ちを起こす」という結果になるという「概念上の関連性>原因と結果の関係を示す」メトニミーによる表現である。

したがって、「気に障る」は「不愉快に感じる、しゃくに障る」という意味である。

拡張例⑳: 勝手なことしかしないと、振舞すべて気に障る母親。長男にだけ甘い母親、
そんな母親としか思ってなかったのに (『あかね空』山本 一力)

拡張例㉑: 不愉快なやつだ。自分がルールブックだといわんばかりの態度が気に障る。
玉井は寡黙で、あまり口をきかない。 (『牌がささやく』黒川 博行)

これに対応する中国語の慣用表現は、「令人不高兴(訳:人を喜ばせない)、令人生气(訳:人を怒らせる)」である。身体語彙も比喻形式も用いておらず、慣用表現でもない一般的な語彙であるが、「何かをすることによって、他人の感情を害する」という意味は、日本語とほぼ同様である。

拡張例㉒: 他那么蛮横, 那么不讲理, 这样的男人只会令人生气…… (《悍恋》艾佟)
(訳:彼はあまりに態度が横暴で筋が通らない男だから、人を怒らせるばかりだ。)

ただし、日本語の場合、「気に障る」はその主体が「怒る、不愉快に感じる」という意味で用いられるが、中国語の場合は、使役文を用いて、主体の行った行為が原因で、他人を怒らせるという意味である。

2) 気を落とす

「気を落とす」は、「気持ちを落とす」ことと、「主体の落ち込んで、やる気がなくなる」ことが、同時に発生することによる「時間的隣接性>動作が同時に生じることを示す」メトニミーによる表現である。

したがって、「気を落とす」は、「物事がうまくいかず、元気をなくす。失望する。落胆する」という意味である。

拡張例㉓: 言いながら彼はぎこちなく彼女に近寄った。「済んだことだ。仕方ないよ。
気を落とすんじゃないってば。ことによったら、こういうことになって、
(『滅びの都』佐藤 祥子(訳))

これに対応する中国語の慣用表現は、「灰心泄气（訳：心が灰色になり、気が漏れる）」である。構成要素として、日本語同様の「三次身体語彙」の「気」を用いているが、さらに「一次身体語彙」の「心」も同時に用いている。

また、「灰心泄气」は、日本語とほぼ同じ「元気をなくす、がっかりする」という意味を持つが、比喩形式は日本語と異なり、「灰心」部分は「心が暗くなる状態」と、「物事の色が灰色になる状態」との類似性に基づくメタファーを用いており、「泄气」部分も「元気がなくなる萎える状態」と、「風船などの空気が漏れてしまう状態」との類似性に基づくメタファーを用いた表現である。

したがって、日本語の「気を落とす」に対応する中国語の慣用表現「灰心泄气」はメタファーの比喩形式を用いている表現である。

拡張例⑳：有些“有志者”事不成并不奇怪，也不必因此而灰心泄气，（《人民日报》）
（訳：「志さえあれば必ず成功する」とは限らない、成功しなくても何もおかしくない、がっかりする必要はない。）

3) 気を許す、気を緩める

「気持ちを許す、気持ちを緩める」は、「警戒していた気持ちを打ち解ける」ことに伴い、「心情的にゆったりとして、油断する」ことが生じる「時間的隣接性>動作が同時に生じることを示す」メトニミーによる表現である。

したがって、「気を許す、気を緩める」は、「相手を信用して警戒心や緊張感を解く。精神がゆったりとして、油断する」という意味である。

拡張例㉑：少なくとも天武の側近たちは、天智の娘であり人質でもあった持統に気を許すことはなかったであろう。（『ひとひらの雪』渡辺 淳一）

拡張例㉒：せっかくボールを手にしても、気を緩めると、と、また、取られてしまうよ。（『新・人間革命』池田 大作）

これらに対応する中国語の慣用表現は、いずれも、「疏忽大意（訳：意が疎かになる）」であり、日本語とは異なる「三次身体語彙」の「意」を用いているが、日本語と同形式の比喩を用い、ほぼ同じ意味である。

ただし、日本語では、「気を許す」と「気を緩める」は、動詞の違いによる意味の差が見られるが、中国語の表現では意味の違いは現れない。

拡張例㉓：许多电气火灾是人为造成的，比如思想疏忽大意、不遵守防火法规、违反

操作規程等。 (《科技文献》)

(訳：数多くの電気火災は人間のせいである。例えば、気が緩み、防火規範を守らないとか、操作規定に違反したとか)

4) 気が向く

「気が向く」は、「気持ちがいかにそれらのことに向かっている」ことの後に、「そのことが好きになって、してみようという気持ちになる」という「時間的隣接性>先行することで後続することを示す」メトニミーによる表現である。

拡張例④：君も、気が向いたら僕らのグループに参加してみないか。

(『成語林 故事ことわざ慣用句』)

拡張例⑩：私の母は今でも気が向くと、独学でマスターしたピアノ曲を楽しそうに曳いています。(『おかあさんの夢づくりノート』中山 庸子)

これに対応する中国語の慣用表現は、「心血来潮 (訳：心血が潮のように急にくる、なにかの考えがふとひらめく)」である。

日本語の「気」とは異なり、「一次身体語彙」の「心」と、「二次身体語彙」の「血」を同時に用いているが、意味用法や比喻形式は日本語と同様である。

また、「心血来潮」は、通常、「突然 (訳：突然、急に)」、「一時 (訳：ふと)」などの副詞と共に用いられる。

拡張例⑪：山本老师以前突然心血来潮的话有过连续五小时上课。(微博)

(訳：山本先生は、この前急に気が向いたら、5時間も講義し続けたことがあるそうだ。)

拡張例⑫：我一时心血来潮，学起世界语来。(デジタル大辞泉)

(訳：ふっと思い立って、エスペラント語を学び始めた)

5) 気が遠くなる

「気が遠くなる」は、「気が人間の体から離れて、遠くなる」に従い、「意識がだんだん弱くなり、失っていく」という「時間的隣接性>先行することで後続することを示す」メトニミーによる表現である。

拡張例⑬：「おいぼれめ！ 気を失っている場合か！」 そう言う自分も気が遠くな

りかけていた。

(『サファイアの書』 ジルベール・シヌエ(著)/阪田 由美子(訳))

拡張例④:彼は覚えず興奮の余り身ぶるいする。突然、グラグラと眩暈がして再び気が遠くなって、… (『金色の死』谷崎 潤一郎)

これに対応する中国語の慣用表現は、「神智不清(訳:精神状態がはっきりしない)」である。

日本語と異なる「三次身体語彙」の「神(しん)」を用いた慣用表現であるが、比喩形式を用いず、直接「意識を失っている」結果を述べている。

8.4.5.3 中国語に特有なもの

孩子气, 市侩气 (訳:子供っぽい/がりがり亡者)

「孩子气」は、「大人である人間の持っている幼さ」と、「子どもの持っている幼さ」との類似性に基づくメタファーを用いた慣用表現であり、「子供のような」、「こどもっぽい」という意味である。

同様に、「市侩气」は「主体が持っているあさましい根性」と「がりがり亡者の根性」との類似性に基づくメタファーを用いた慣用表現であり、「がりがり亡者のような」という意味で用いられている。

拡張例⑤:大叔也不更新了,跟谁较劲呢这是,傻傻的孩子气, (微博)

(訳:おじさんはもう(SNSを)更新しなくなった。何をひねくれているのだろう、バカバカしくて子供っぽいなあ)

拡張例⑥:别的孩子给老师送礼,自己的孩子不送怕被人瞧不起,在校得不到关照。因此,只好随波逐流。殊不知,送礼的同时,会把“市侩气”教给孩子。

(《人民日报》)

(訳:ほかの子どもは先生に贈り物をするが、自分の子だけしないと、みんなにいじめられ、学校で面倒を見てもらえない心配がある。それで、みなと同じことをしないといけない。でも、贈り物をすることで、がりがり亡者のあさましい根性も子どもに教えているのだ。)

8.4.6 日中両言語における「気/气」を構成要素として持つ比喩的慣用表現のまとめ

本項では、日本語の「気」を構成要素として持つ比喩的慣用表現における比喩形式と、対応する中国語の表現について、その相違点を考察した。

1) 「構成要素である身体語彙、他の自立語（「独立語」）要素、統語的構造」などの組み合わせの型から、①～⑥のタイプに分け、日本語の「気」を構成要素として持つ比喩的慣用表現と、それに対応する中国語の慣用表現について、相違点を検討した。

2) 日本語の「気」を構成要素として持つ比喩的慣用表現と、対応する中国語の表現が「拡張義に基づくもの」、及び「中国語に特有なもの」のそれぞれでどのような比喩形式が用いられ、それに対応する中国語表現がどのようなものであるかを比較しながら考察し、相違点を検討した。

その結果、同様の意味を表す慣用表現でも、日本語では「三次」の「気」を用いるのに対して、対応する中国語の表現には具体的な身体部位を表す「一次身体語彙」の「心」を用いるものが多かった。

「気が散る」	⇔	「 <u>心</u> 不在焉（訳：心ここにあらず）」
「気が多い」	⇔	「 <u>心</u> 浮気躁（訳：心が浮いて、気がせつちである）」
「気が向く」	⇔	「 <u>心</u> 血来潮（訳：心血が湧く）」
「気を落とす」	⇔	「 <u>灰</u> <u>心</u> 泄气（訳：心が灰色になり、気が漏れる）」
「気が小さい」	⇔	「 <u>小</u> <u>心</u> 眼儿（訳：心が小さい）」

などである。

また、日本語の「気」を構成要素として持つ比喩的慣用表現と、対応する中国語の表現とでは、比喩形式、意味用法、使用範囲にほぼ違いは見られなかった。

一方、日本語では比喩を用いた慣用表現が、中国語では同じ慣用表現でも、比喩を持たずに、一般的な表現であるものも見られた。

日中両言語とも、「気」を構成要素として持つ慣用表現に用いられる比喩形式は、ほぼ同様で、本調査の範囲内では、メタファーとメトニミーの比喩形式のみであった。

慣用表現「気が小さい」に対応する中国語の慣用表現の「小心眼儿（訳：心が小さい）」のように、中国語の表現に使用範囲が広いものが散見された。

8.5 「一次」身体語彙慣用表現と「二次」・「三次」身体語彙慣用表現の比喩形式について

本論文では、「二次」・「三次」身体語彙の基本義と拡張義、及びそれらの意味を持つ身体語彙を構成要素とした比喩的慣用表現を対象に、日中両言語の比較をしてきたが、ここでは、先行研究で取り上げられた「一次身体語彙」を構成要素として持つ日本語の慣用表現の比喩形式の特徴と、「二次身体語彙」、「三次身体語彙」を構成要素とした慣用表現の比喩形式との比較を試みてみたい。

8.5.1 一次身体語彙「目」の慣用表現と比喩形式

橋本 (1999) は、日本語とモンゴル語の「目」を構成要素とした慣用句を対象に、概念メタファーを考察し、両言語共通のメタファーと日本語、モンゴル語それぞれ特有のメタファーがあることを指摘した。また、日本語の「場所」や「移動」に関連した「目」の慣用句の場合は、メトニミーが特徴的であるとしている。

8.5.2 一次身体語彙「鼻」の慣用表現と比喩形式

方 (2011a) は、日本語と中国語における「鼻」の意味拡張及びその慣用句を比較した。

日本語と中国語の「鼻」は、身体部位とする基本義からメタファーやメトニミーによって意味拡張されて、当該慣用句はその構成要素である「鼻」の身体部位を表す基本義とその派生義に大きく関わっているとしている。

日本語の場合に、派生義に関わる表現の場合には、「鼻が利く」しかなく、基本義に基づく場合は、特に感情と生理的影響とのメトニミー関係が働いており、構成要素である「鼻」の身体部位としての基本義がそのまま慣用句に生きていて、全体で慣用句の意味が決まるというのが特徴であるとしている。

また、中国語の場合にも感情と生理的影響のメトニミー関係に基づいて、「軽蔑」「傲慢」「不快」を表す慣用句が見られ、「鼻」の慣用句は主にマイナスなイメージを持ち、さらに、両言語とも「鼻」の慣用句は身体部位としての「鼻」の機能に基づくものは少なく、「軽蔑」「得意・自慢」などの精神活動に関わる慣用句は、メトニミーによって成立すると述べている。

8.5.3 一次身体語彙「首」の慣用表現と比喩形式

方 (2011b) は、日本語の「首」と中国語の「脖子 (bózi)」の意味拡張と慣用句の成立について比較した。

日本語の「首」の基本義は「頭と胴体をつなぐ頸部」であるが、「頸部を含めて、そこから上の部分である頭」全体を表すことや、「びんの首」のように、類似の形状や位置関係をもつものや部分を表すこと、頸部からそれに「あたる」衣服の部分である襟を表すこと、さらに、「命」に関わる意味を表すことができるのは、メタファーとメトニミーが慣用句の意味の成立においては大きな役割を果たしているからであるとしている。

また、中国語の「脖子」の慣用句は日本語の「首」の慣用句と同様に、メタファーとメトニミーのプロセスによって成立するものがほとんどだが、日本語の慣用句は「待望」「恥ずかしさ」「恐れ」「困惑」「同意」「疑問」など広範にわたって心的態度を表し、「解雇」の意味にも関与していることが中国語の慣用句には見られなかったと述べている。

8.5.4 「一次」身体語彙慣用表現の比喻形式のまとめと「二次」・「三次」の比喻形式

前項までに見たように、「一次」身体語彙慣用表現に用いられる比喻形式は、メタファーとメトニミーであった。これは、本論文が採集した慣用表現の範囲を見ると、「二次」の基本義による慣用表現の比喻形式（＜表 58＞）参照）、及び「三次」の拡張義による慣用表現の比喻形式（＜表 61＞）にも共通した特徴である。それに対して、日本語の「二次」の拡張義による慣用表現の比喻形式は、性格がやや異なり、シネクドキー（意味の拡大）による比喻形式が多さが際立っている（＜表 59＞）。

これらのことから一概に断定的なことを述べるのは早計であると思われるが、「二次」「三次」身体語彙慣用表現の実態を把握する上で、一つの鍵になるかもしれないと筆者は考えている。

8.6 本章のまとめ

本章では、身体語彙慣用表現を分析するにあたって、まず、方（2011）、王（2013）で行われた「（一次）身体語彙」の分析に倣って、日中両言語の辞書の記述から、慣用表現の構成要素である身体語彙の「基本義」と「拡張義」について検討した。

次に、第6章で採集した比喩的慣用表現の中における、「二次」の「血」、「三次」の「気」を構成要素とするものを対象に、次の＜表 62＞に示す①～⑧の「身体語彙、他の自立語（独立語）」要素、統語的構造」の組み合わせの型から相違を検討した。

＜表 62＞組み合わせの型から見る慣用表現の相違

	身体語彙、他の自立語、（「独立語」）要素、統語的構造の組み合わせの型	血	気/气
日本語の慣用表現と同様の意味の慣用表現が中国語にもある場合	①構成要素である身体語彙、他の自立語（独立語）要素に加え、統語的構造も日本語とほぼ一致しているもの	○	○
	②構成要素である身体語彙、他の自立語（独立語）要素、統語的構造は一致するが、日本語には現れない「独立語」要素があるもの	○	○
	③構成要素である身体語彙及び統語的構造は一致するが、他の自立語（独立語）要素が異なるもの	—	—
	④構成要素である身体語彙及び統語的構造は一致するが、他の自立語（独立語）要素が異なるもので、且つ日本語には表れない「独立語」要素があるもの	○	○
	⑤構成要素である身体語彙は一致するが、他の自立語（独立語）要素と統語的構造が異なるもの	○	—
	⑥構成要素である身体語彙が異なるが、他の自立語（独立語）要素、統語的構造が一致するもの	○	○
	⑦構成要素である身体語彙、他の自立語（独立語）要素が日本語と異なるが、統語的構造がほぼ同じであるもの	○	○
	⑧構成要素である身体語彙、共起する他の自立語（独立語）要素、さらに統語的構造も日本語と異なるもの	○	○
日本語の慣用表現と同様の意味の慣用表現が中国語にない場合		○	○

本調査の範囲内では、「血」を構成要素として持つ慣用表現と、対応する中国語の表現が同じ組み合わせのものが7型であり、「気」を構成要素として持つ慣用表現と対応する中国語の表現の同じ組み合わせは6型であった。＜表 62＞に示したように、「③構成要素である身体語彙及び統語的構造は一致するが、他の自立語（独立語）要素が異なるもの」の組み合わせは、「血」、「気」を構成要素として持つ慣用表現に、ともに見られなかった。

最後に、日本語の国語辞書、中国語の辞書、慣用句辞書及び『BCCWJ』、『BCC』から採集した用例をあげながら、「血」と「気」を構成要素として持つそれぞれの慣用表現にどのような比喻形式が用いられ、それに対応する中国語表現がどのようなものであるかを比較し、考察した。

第9章 本研究のまとめと今後の課題

9.1 本研究のまとめ

本論文では、次のように論文を仕上げた。

第1章で研究の背景、目的、意義及び方法と手順について述べた。

第2章では日本語の身体語彙に関する先行研究及び本研究で取り扱う「身体語彙」の定義と範囲を概観したうえで、従来の身体語彙の定義を再検討し、「身体語彙」の全体像を俯瞰して、整理を行った。

第3章では、まず、先行研究を踏襲して立てた「身体語彙」の3類型を基準に、身体語彙をより広範に採集することを目的として、『分類語彙表』に対象範囲を拡げて身体語彙を採集した。

次に、「一次身体語彙」については、その所在位置、「二次身体語彙」・「三次身体語彙」については、その語の「発現要因」という分類基準を設け、「身体語彙リスト」を作成して、それぞれに所属する身体語彙数を確認した。

また、「語種」の面から、「リスト」の分類項目に基づき、「一次～三次」身体語彙を整理し、「和語」、「漢語」、「外来語」、「混種語」の四つの分類から考察を試みた。

最後に、「品詞性」の観点から、「一次～三次」身体語彙を整理し考察した。「一次身体語彙」は全て「普通名詞」からなっているのに対して、「二次身体語彙」には「普通名詞」に、「動詞」が加わり、「三次身体語彙」ではさらに、心理的状态や感覚によって生じた概念を表すオノマトペの「副詞」、「形状詞」が見られた。

第4章では、日本語の慣用表現に関する先行研究を概観したうえで、呉(2017)の区分に倣って、芳賀(1911)から始まる慣用表現に関する研究を「萌芽期」、「模索期」、「確立期」、「成長期」、「発展期」の5つに時期に区分し、それぞれの時期の代表的な研究成果や、問題点について検討したうえで、本論文で取り扱う範囲「慣用表現」を明確に定めた。

第5章では、日本語の「身体語彙」を含む慣用表現に関する先行研究を概観し、それらの研究成果を踏まえて、身体語彙及びそれらの語彙を構成要素とする慣用表現に関する現状を検討し、「二次」・「三次」身体語彙慣用表現に関する体系的な研究は蓄積が端緒に就いたばかりで、研究対象にして、さらに検討が加える価値が十分あることを述べた。

第6章では、まず、七種の慣用句辞典・研究書を対象にして調査を行い、「一次～三次」身体語彙を構成要素として持つ慣用表現を採集した。

次に、『分類語彙表』に収録されている慣用表現を採集し、先行研究の慣用句辞典・研

究書と比較した。「一次身体語彙」では「目、手、口」、「二次身体語彙」では「血、息、力」、「三次身体語彙」では「気、意、念」を持つ慣用表現の使用が多いことが分かった。

さらに、「一次～三次」身体語彙を構成要素として持つ「慣用表現リスト」を作成し、品詞性分類や、統語的構造の分析を行った結果、品詞性分類では、「身体語彙名詞+助詞+動詞」の動詞句慣用表現が圧倒的に多く、「身体語彙名詞+助詞+形容詞」の形容詞句慣用表現、「身体語彙名詞+助詞+名詞」の名詞句慣用表現は少数であった。

最後に、身体語彙慣用表現における身体語彙と、後接する助詞の共起状況について調べ、日本語の身体語彙慣用表現の特徴を考察した。

第7章では、次章で行う比喩的慣用表現の日中対照のため、比喩形式の概念を概観し、日本語の比喩的慣用表現の先行研究、並びに中国語における慣用表現の先行研究を概観したうえで、本研究で取り扱う日中両言語の慣用表現の対応関係を検討した。

第8章では、まず、複数の国語辞書と中国語辞書の記述をもとに、第6章で触れた「二次」・「三次」身体語彙慣用表現数のそれぞれの上位3位の語である「血、息、力」(二次)、「気、意、念」(三次)の元来の意味(基本義)、及びこれらの語彙を構成要素とした熟語や慣用表現における比喩的形式によって拡張された意味(拡張義)について検討した。

次に、第6章で採集した「二次」・「三次」身体語彙で代表的な「血」と「気」を構成要素として持つ比喩的慣用表現を対象に、複数の慣用句辞書及び『BCCWJ』、『BCC』から採集した用例を用いて、それぞれの慣用表現にどのような比喩形式が用いられ、それに対応する中国語表現がどのようなものであるかを考察し、両言語の持つ特徴の一端を探ってみた。考察と結果は次の通りである。

1) 日本語の「血」を構成要素として持つ比喩的慣用表現と、対応する中国語の表現が「基本義に基づくもの」、「拡張義に基づくもの」、及び「中国語に特有なもの」のそれぞれでどのような比喩形式が用いられ、それに対応する中国語表現がどのようなものであるかを比較しながら考察し、相違点を検討した。

その結果、日本語の「血」を構成要素として持つ比喩的慣用表現と、対応する中国語の表現とでは、比喩形式、意味用法、使用範囲にほぼ違いは見られなかった。

一方、日本語では比喩を用いた慣用表現が、中国語では同じ慣用表現でも、比喩を持たずに、一般的な表現であるものも見られた。

また、日中両言語とも、「血」を構成要素としても持つ慣用表現には用いられる比喩形式は、ほぼ同様であったが、日本語に特徴的なものとして、二重の形式(「メタファー+シミリ」「メトニミー+シミリ」)が見られた。これは本調査の範囲内では、中国語に現れなかったものである。

慣用表現「血道をあげる」のように、日本語より、中国語の表現に使用範囲が広いものが散見された。

2) 日本語の「気」を構成要素として持つ比喩的慣用表現と、対応する中国語の表現が「拡張義に基づくもの」、及び「中国語に特有なもの」のそれぞれでどのような比喩形式が用いられ、それに対応する中国語表現がどのようなものであるかを比較しながら考察し、相違点を検討した。

その結果、日本語では「三次」の「気」を用いるのに対して、中国語の表現では具体的な身体部位をを表す「一次身体語彙」の「心」を用いるものが多かった。

また、日本語の「気」を構成要素として持つ比喩的慣用表現と、対応する中国語の表現とでは、比喩形式、意味用法、使用範囲にほぼ違いは見られなかった。

一方、日本語では比喩を用いた慣用表現が、中国語では同じ慣用表現でも、比喩を持たずに、一般的な表現であるものも見られた。

日中両言語とも、「気」を構成要素として持つ慣用表現に用いられる比喩形式は、ほぼ同様であったが、本調査の範囲内では、メタファーとメトニミーの比喩形式のみであった。

慣用表現「気が小さい」に対応する中国語の慣用表現の「小心眼儿（訳：心が小さい）」のように、日本語より、中国語の表現に使用範囲が広いものが散見された。

9.2 今後の課題

本研究は、先行研究を踏襲して、従来の身体語彙の定義を再検討し、『分類語彙表』に収録されている「身体語彙」を調査して、整理を行うことと、書き言葉における身体語彙慣用表現の使用を分析して、「一次～三次」身体語彙慣用表現の特徴を検討した。さらに日中両言語の持つ特徴を探ってみることを目的の一つとして、比較対照を通して、両言語における「身体語彙慣用表現」の相違を考察した。

しかし、本研究の身体語彙の「基本義」、「拡張義」に関する研究は「二次」・「三次」身体語彙の上位3位である6つの語にとどまり、身体語彙を構成要素として持つ比喩的慣用表現の日中対照も、「二次」・「三次」身体語彙のそれぞれで代表的な「血」と「気」を構成要素としても比喩的慣用表現の一部に絞って、行うまでにとどまった。

したがって、今後の課題として、次の2つを挙げておきたい。

1) 本論文で扱えなかった「二次」・「三次」身体語彙の基本義、拡張義の日中対照、及びそれらの語彙を構成要素として持つ比喩的慣用表現の日中対照。

2) 中国語母語話者の日本語習得の促進のため、身体語彙慣用表現をどのように教材化すべきか。

参考文献

1. 日本語文献

- 有菌智美 (2005) 「身体部位(「手」、「口」)を含む慣用表現の意味分類」, 『日本認知言語学会論文集』 5, pp. 487-497
- 有菌智美 (2006) 「分解可能な慣用表現における身体部位詞の意味拡張」, 『日本認知言語学会論文集』 6, pp. 1-11
- 有菌智美 (2007) 「身体部位詞を構成要素に持つ日本語慣用表現の統語的凍結性」, 『言葉と文化』 8, pp. 139-156, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科
- 有菌智美 (2008a) 「分解不可能な慣用表現の慣用的意味の成立--<身体の状態(の変化)>から<精神状態(の変化)>への意味拡張」, 『日本認知言語学会論文集』 8, pp. 263-273, 日本認知言語学会
- 有菌智美 (2008b) 「「顔」の意味拡張に対する認知的考察」, 『言葉と文化』 9, pp. 287-301, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科1
- 有菌智美 (2009) 『身体部位詞を構成要素に持つ日本語慣用表現の認知言語学的研究』, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士論文
- 石田プリシラ (1996) 「日英語の対照研究: 「目」の慣用句を中心として」, 『筑波応用言語学研究』 (3), pp. 49-63
- 石田プリシラ (1998) 「慣用句の変異形について—形式的固定性をめぐって—」, 『筑波応用言語学研究』 5号, pp. 43-56
- 石田プリシラ (1999) 「動詞慣用句の慣用性の度合い: 統語的固定性を目安として」, 『筑波応用言語学研究』 6, pp. 69-83
- 石田プリシラ (2000) 「動詞慣用句に対する統語的操作の階層関係」, 『日本語科学』 (7), pp. 24-43, 国書刊行会
- 石田プリシラ (2002) 「日本語慣用句の研究—慣用句の特性と意味を中心に」, 筑波大学
- 石田プリシラ (2003a) 「慣用句の意味を分析する方法」, 『日本語と日本文学』 37, pp. 13-26, 筑波大学国語国文学会
- 石田プリシラ (2003b) 「慣用句の意味分析: 《驚き》を表す動詞慣用句・一般動詞を中心に」, 『筑波応用言語学研究』 10, pp. 1-16
- 石田プリシラ (2004) 「動詞慣用句の意味的固定性を計る方法: 統語的操作を手段として」, 『國語學』 55(4), pp. 42-56, 日本語学会
- 石田プリシラ (2006) 「英語慣用句の意味解釈について: 日本語の母語話者の解釈方法を中心に」, 『筑波応用言語学研究』 13, pp. 13-27
- 石田プリシラ (2015) 『言語学から見た日本語と英語の慣用句』, 開拓社

- 伊藤眞(1991)「<口承と文芸>慣用句とそのモデル化の試み」,『獨逸文學』86, pp. 157-166,
財団法人学会誌刊行センター
- 伊藤眞(1992a)「慣用句の意味構造」,『言語文化論集』35, pp. 93-108, 筑波大学
- 伊藤眞(1992b)「慣用句対照研究:日・独慣用句の対応関係」,『言語文化論集』36, pp. 155-169,
筑波大学
- 伊藤眞(1997)「言語の具象性・比喩性・受動性—日・独慣用句をめぐって—」,『ヴォイスに関
する比較言語学的研究』, pp. 249-297, 三修社
- 伊藤眞(1999a)「慣用句の具象性についての一考察」,『言語文化論集』51, pp. 95-177, 筑波
大学
- 伊藤眞(1999b)「慣用句的意味の成立要因について」,『Rhodus』15号, pp. 185-197, 筑波ド
イツ文学会
- 伊藤眞(2002)「慣用句の語用論的制約について」,『学習院大学ドイツ文学会研究論集』
6, pp. 41-63
- 伊藤眞(2005)「日独慣用句の構成要素の比喩性について」,『学習院大学ドイツ文学会研究
論集』9, pp. 75-94
- F. ウンゲラー／H-J. シュミット(1998)『認知言語学入門』,池上嘉彦(訳),大修館書店
- 王珍妮(2008)「中国語における「歇後語」の発生—その成立と名称について—」,奈良女子大
学大学院人間文化研究科人間文化研究科年報第23号, pp. 289-297
- 王天予(2009)「「かたい」の多義構造の日中対照研究」,拓殖大学大学院『言語教育研究』第9
号, pp. 115-128
- 王天予(2010)「日本語慣用句の研究現状と課題—日本国内の研究と中国での研究を中心
に」,拓殖大学大学院『言語教育研究』第10号, pp. 55-67
- 王天予(2013)「中国人学習者による日本語慣用表現の理解に関する一考察—類似表現のあ
る慣用表現を中心に—」,日本語教育方法研究会誌Vol. 20 No. 1
- 王天予(2013)「中国人学習者による日本語慣用表現の理解に関する考察—身体部位詞と形
容詞からなる慣用表現を対象に—」,拓殖大学大学院博士論文
- 大堀壽夫(2002)『認知言語学』,東京大学出版会
- 賈惠京・吉田則夫(2006)「身体語を含む慣用句についての日韓対照研究」,『岡山大学教
育学部研究』第132号, pp. 115-121
- 笠川紘史(2007)「身体語彙を含むイディオムの日英比較」,『中京英文学』27号, pp. 35-55
- 楠見孝(2007)『メタファー研究の最前線』,ひつじ書房
- 桂小蘭(1992)「日本語と中国語の慣用句に関する一考察:慣用句構成語の比較を中心に」,
大阪大学言語文化学1, pp. 93-102
- 加藤奈美(2007)『日独対照研究—身体部位名称を含む慣用句を用いて—』思言,東京外国
語大学記述言語学論集第3号

- 川島嘉美(2008)「所有表現の認知的研究：名詞化における容認性逆転現象」,『金沢大学
学術情報リポジトリ』第16号, pp. 35-44
- 菊地康人(2000)「所有の「ある」と「もっている」」,『世界の日本語教育』第10号, pp. 147-163
- 金水敏(2004)「グローバル時代における日本語—“客観化”をめぐって—」,『日語日文
学研究』第49輯, pp. 15-30
- 国広哲弥(1982)『意味論の方法』,大修館書店
- 国広哲弥(1985)「慣用句論」,『日本語学』第4巻第1号, pp. 4-14, 明治書院
- 国広哲弥(1986)「語義研究の問題点—多義語を中心として」,『日本語学』9月号, 明治書院
- 国広哲弥(1989)「五感をあらかず語彙—共感覚比喩的体系」,『言語』第18巻11号, pp. 28-31,
大修館
- 国広哲弥(1994)「認知的多義論—現象素の提唱—」,『言語研究』106号, pp. 22-44
- 国広哲弥(1997)『理想の国語辞典』,大修館書店
- 国広哲弥(2006)『日本語の多義動詞(理想の国語辞典Ⅱ)』,大修館書店
- 小池清治・小林賢次・細川英雄・山口佳也(2002)『日本語表現・文型辞典』,朝倉書店
- 小池清治・スベトラニコワ(2003)「慣用句の分類とその応用」,『宇都宮大学国際学部
研究論集』第16号, pp. 89-104
- 呉琳(2016)『日本語の慣用句に関する研究概観』,『日中語彙研究』第6号(2016), pp. 87-105,
愛知大学中日大辞典編所
- 呉琳(2017)『コーパスに基づく日本語慣用句の研究』,北海道大学博士
- 阪田雪子(2004)「連語・慣用句」,『講座日本語と日本語教育第7巻日本語の語彙・意
味』, pp. 224-252, 明治書院
- 柴田武編(1976)『ことばの意味』,平凡社
- 白石大二(1961)『日本語の発想 語源・イデオロム』,東京堂出版,1961年11月5日
- 白石大二(1977)「解説:国語慣用句とその研究のもたらすもの」,『国語慣用句大典』,
pp. 525-593, 東京堂
- Surenjav Oyunzul(2010)『日本語とモンゴル語の「頭部」の身体語彙慣用句の対照研究—
「目」の身体語彙を中心に—』,広島大学大学院国際協力研究科修士論文
- スレンジャブオユンズル(2013)「日本語とモンゴル語の「目」を含む慣用句の比較研究—
モンゴル語の所有接合語「НЬ」を中心に—」『比較文化研究』第107号, pp. 31-42
- スレンジャブオユンズル(2014)「日本語とモンゴル語の所有表現の比較—「目」を含慣用
句を中心に—」,『比較文化研究』第110号, pp. 79-91
- 薛鳴・呉月新(2002)「慣用句の理解に見られる母語の影響—中国人日本語学習者の場合」,
中京学院大学研究紀要中京学院大学
- 宋誓天(2005)「韓国語の日本語教育における慣用句の研究」,『日本文学研究』第40号,
梅光学院大学日本文学会

- 宋誓天(2006)「慣用句の構成語彙間の意味関係と対訳の問題点—日韓両国語の比較を中心として」, 語彙研究会学会誌4号, pp. 55-68
- 高一彦(1974)「慣用句研究のために」, 『教育国語』 38, 教育科学研究会国語部会
- 田中聡子(2002a)「「口」の慣用表現—メタファーとメトニミーの相互作用—」, 『言葉と文化』 3号, pp. 5-20, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科
- 田中聡子(2002b)「視覚表現に見る視覚から高次認識への連続性—視覚の文化モデル—」, 『言語文化論集』 23巻第2号, pp. 155-170
- 田中聡子(2003)「心としての身体慣用表現から見た頭・腹・胸」, 『言語文化論集』 第24巻第2号, pp. 111-124, 名古屋大学
- 田中聡子、クキゼチアナ(2004)「日露慣用表現に見る身体と精神の捉え方」, 『言語文化論集』 第25巻第2号, pp. 55-83, 名古屋大学
- 田中聡子(2005)「顔と《ЛИЦО》: <顔>概念の日露対照研究」, 『世界の日本語教育・日本語教育論集』 15, pp. 103-116, 独立行政法人国際交流基金
- ダニーミン・佐野洋(2001)「日本語学習者のための慣用句データベースの作成統計処理を用いた一手法の提案」, 『コンピュータと教育』 62-8, pp. 55-62
- 谷ロー美(2003)『認知意味論の新展開メタファーとメトミニー』, 英語学モノグラフシリーズ20, 研究社
- 谷ロー美(2013)『応用認知言語学とレトリック』, 大学英語教育学会JACET中部支部紀要(11)
- 辻幸夫(2002)『認知言語学キーワード辞典』, 研究社株式会社
- 鄭海燕(2002)「身体部位名称を含む慣用句についての計量的分析:中国語との対照を通して」, 愛知教育大学国際教育学会研究紀要121, pp. 157-165
- 程長善(1996)「日本語慣用句の語彙的な特徴に関する一考察」, 『経営研究』 第9巻第3号, pp. 455-470
- 中右実・巻下吉夫・瀬戸賢一(1997)『文化と発想とレトリック』, 研究社印刷株式会社
- 鍋島弘治朗(2011)『日本語のメタファー』, くろしお出版
- 鍋島弘治朗(2016)『メタファーと身体性』, ひつじ書房
- 新井政議(1992)『成語林故事ことわざ慣用句』, 旺文社
- 倪秀梅(2019)「身体語彙についての分類—『分類語彙表—増補改訂版』から採集した身体語彙を中心に—」, 拓殖大学大学院言語教育研究第19号
- 倪秀梅(2021)「日本語における「二次的」「三次的」身体語彙慣用表現に関する考察」, 拓殖大学大学院言語教育研究第21号
- 西尾寅弥(1972)『形容詞の意味・用法の記述的研究』, 秀英出版
- 日本語表現研究会著(1995)『からだ言葉の事典』, PHP 研究所
- 芳賀矢一(1911)「身體に関する色々の言い廻し」, 『学生』 富山房

- 橋本邦彦(1999)「目のメタファー日本語とモンゴル語の対照研究」,『表現研究』第69号, pp. 52-60
- 橋本邦彦(2002)「身体メタファーに見る自己理解」,『室蘭工業大学紀要』第52号, pp. 23-31
- 馬場典子(2002)「「腹が立つ」の動機づけに関する一考察」,『言葉と文化』第3号, pp. 31-44, 名古屋大学大学院・国際言語文化研究科
- ファルザネ・モラディ(2014)「身体語彙を含む日本語の慣用句の分析:ペルシア語との対照を通して—「目」「手」「口」「身」を用いた表現を中心に—」,一橋大学機関リポジトリ
- 深田智・仲本康一郎(2008)『概念化と意味の世界:認知意味論のアプローチ』,研究社
- 方小賛(2011)「日本語と中国語における「鼻」を含んだ慣用句の比較」,『外国文学』(60), pp. 15-32, 宇都宮大学外国文学研究会
- 方小賛(2011)「日本語と中国語における「首」を含んだ慣用句の比較」,宇都宮大学国際学部研究論集(31), pp. 137-150
- 方小賛(2011)「日本語と中国語における身体語彙慣用句の比較研究—認知言語学の視点からた「頭部」表現を中心に—」,宇都宮大学国際学研究科博士論文
- 星野命(1976)「身体語彙による表現」,『日本語講座第4巻・日本語の語彙と表現』, pp. 153-182, 大修館
- 前田富祺(1993)「日本語の感情を表すことば」,『日本語学』1月号, pp. 4-13
- 松本曜(2000)「日本語における身体部位詞から物体部分詞への比喩的拡張:その性質と制約」,坂原茂編『認知言語学の発展』, pp. 295-324, ひつじ書房
- 松本曜編(2003)『認知意味論』,シリーズ認知言語学入門(第3巻),大修館書店
- 宮地裕(1975)「日本語の表現の類型」,『国語シリーズ別冊3 日本語と日本語教育—発音・表現編—』,文化庁
- 宮地裕(1982)『慣用句の意味と用法』,明治書院
- 宮地裕(1985a)「慣用句の周辺—連語・ことわざ・複合語—」,『日本語学』4(1), pp. 62-75 明治書院
- 宮地裕(1985b)「日本語慣用句考」,(『日本語・日本文化研究論集』第三輯,大阪大学文学部
- 宮地裕(1986)「日本語慣用句考」,『日本語・日本文化研究論集』3, pp. 1-25, 大阪大学
- 宮地裕(1991)「慣用句の意味」,『「ことば」シリーズ34 言葉の意味』, pp. 65-76 独立行政法人国立国語研究所
- 宮地裕(1999)『敬語・慣用句表現論』,明治書院
- 宮地敦子(1979)『身体語彙の史的研究』,明治書院
- 松原純一(1999)「現代日本語の慣用句」,『聖徳大学研究紀要』第10号, pp. 93-99
- 村木新次郎(1997)「慣用句・機能動詞結合・自由な語結合」,『日本語学』第4巻、第1

- 号, pp. 15-27
- 榎山洋介(1994)「形容詞「カタイ」の多義構造」,『名古屋大学日本語・日本文化論集』No. 2, pp. 65-90, 名古屋大学留学生センター
- 榎山洋介(1997)「慣用句の体系的分類—隠喩・換喩・提喩に基づく慣用的意味の成立を中心に—」,『名古屋大学国際国文学』80号, pp. 29-43, 名古屋大学国語国文学会
- 榎山洋介(2002)『認知意味論のしくみ』, 研究社
- 榎山洋介(2006a)「認知意味論の新発展—メタファーを中心に—」,『日本語認知言語学会論文集』6号, pp. 505-507
- 榎山洋介(2008)「メタファーの認知的基盤と経験的基盤」,『言語文化研究叢書』7, pp. 97-111, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科
- 榎山洋介(2009)『日本語表現で学ぶ入門からの認知言語学』, 研究社
- 榎山洋介(2010)『認知言語学入門』, 研究社
- 榎山洋介(2014)『日本語研究のための認知言語学』, 研究社, 2014年11月1日
- 森田良行(1966)「語彙—慣用的な言い方」,『講座日本語教育』第2分冊, pp. 61-78, 早稲田大学語学教育研究所
- 森田良行(1985)「動詞の慣用句」,『日本語学』第4巻第1号, pp. 37-44, 明治書院
- 森田良行(1989)「人間関係を表す慣用表現」,『言語』第18巻, pp. 35-41, 岩波書店
- 森田良行(1994)『動詞の意味論的文法研究』, 明治書院
- 山梨正明(1988)『比喩と理解』, 東京大学出版会
- 山梨正明(1995)『認知文法論』, ひつじ書房
- 山梨正明(2000)『認知言語学原理』, くろしお出版
- 山梨正明(2004)『ことばの認知空間』, 開拓社
- 山本寛太(1975)「慣用句とその教育の問題」,『覆刻文化庁シリーズ8 語源・慣用句』明治図書, pp. 245-305
- 横山辰次(1935)『熟語の研究—特に身體の部分的名稱を應用したものについて』, 岩波書店, 1935年12月15日
- 横山辰次(1955)『国語の慣用語』, 早稲田大学富山図書館研究図書
- 横山辰次(1975)「国語の慣用語」,『覆刻文化庁国語シリーズVIII 語源・慣用語』教育出版, pp. 151-152
- 吉川佐紀子(1999)「日本人の表情会話時の表情は何を伝えるか」,『日本語学』第18巻5-9号, pp. 36-43
- 吉田則夫・支洪濤(2002)「身体部位名称を含む慣用句についての計量的分析」,『岡山大学教育学部研究』第121号, pp. 157-165
- 吉田則夫・支洪濤(2003)「身体部位名称を含む慣用句についての日中対照研究—「目」の場合」,『岡山大学教育学部研』第124号, pp. 93-100

- 吉永尚(2008)『心理動詞と動作動詞のインターフェイス』, 廣橋研三
李明玉(2007)『日本語と韓国語の慣用表現の差異』, 笠間書院
林八竜(2002)『日・韓両国語の慣用的表現の対照研究: 身体語彙慣用句を中心として』, 明治書院
和田節(1969)「からだことば考」, 『思考の科学』94, 思想の科学社

2. 中国語文献

- 陈华琴(2007)「现代汉语惯用语及其文化内涵分析」, 中央民族大学修士論文
李敏英(2008)「中日惯用句表现之比较研究」, 山東師範大学修士論文
鲁宝元(2002)『汉日语言研究文集』(五), 北京出版社
鲁宝元(2005)『日汉语言对比研究与对日汉语教学』, 华语教学出版社
马国凡(1982)「汉语固定词组的修辞作用」, 『内蒙古师院学报(哲学社会科学版)』4, pp. 1-15
孙光贵(2002)「惯用语的定义与熟语的分野」, 『长沙电力学院学报(社会科学版)』Vol. 17, No3, pp. 101-103
吴建生(2007)「惯用语的界定及惯用语词典的收目」, 『语文研究』4, pp. 10-15, 山西社会科学院
杨秀明(2008)「漳州方言惯用语及其文化蕴涵—惯用语性质范围之个案研究」, 『现代语文(语言研究版)』12, pp. 115-117
张积家・石艳彩(2009)「汉语惯用语的产生机制」, 『心理学报』Vol. 41 No8, pp. 659-675, 中国科学院心理研究所
张宗华(1985)「关于慣用語詞典的收詞問題」, 『辞書研究』5, pp. 70-74, 上海辞書出版社

3. 辞書・辞典 (日本語)

- 『日本国語大辞典』(1972. 12-1976. 3), 日本大辞典刊行会編, 小学館
『日本語語源辞典』(1984), 清水秀晃現代出版
『語源大辞書』(1988), 堀井令以知東京
『日本語百科大事典』(1988), 金田一晴彦・林大・柴田武, 大修館書店
『日本語基本動詞用法事典』(1989), 小泉保ら, 大修館書店
『成語林 故事ことわざ慣用句』(1992), 尾上兼英 [監修], 旺文社
『例解中国慣用語辞典』(1994), 王永全・小玉新次郎, 東方書店
『大辞泉』編集部編(1995), 『大辞泉』, 小学館
『大辞林第2版』(1995), 松村明編, 三省堂
『大辞泉第二版増補・新装版』(1998), 松村明小学館

- 『広辞苑第5版』(1999), 新村出, 岩波書店
『語源辞典形容詞篇』(2000), 吉田金彦東京堂出版
『明鏡国語辞典』(2002), 北原保雄大修館
『例解慣用句辞典』(2002), 井上宗雄, 創拓社
『分類語彙表一増補改訂版』(2004), 国立国語研究所編, 大日本図書
『新明解国語辞典(第六版)』(2004), 山田忠雄三省堂
『日本国語大辞典(第二版)』(2006), 第三卷小学館
『デジタル大辞泉 逆引き大辞泉』, 小学館
『分野別小事典 慣用句』, 小学館監修
『日本国語大辞典』, オンライン版
『小学館全文全訳古語辞典』, オンライン版
『例解新国語辞典(第四版)』, オンライン版

4. 辞書・辞典 (中国語)

- 『現代汉语慣用句规范词典』(2001), 李行健, 长春出版社商务印书馆编辑部
『汉语慣用語辞典』(2004), 陈光磊, 汉语大词典出版社
『現代漢語詞典(第五版)』(2005), 社科院語言研究所商務印書館出版社
『汉语大词典CD-ROM版V3.0』(2007), 汉语大词典编辑部, 商务印书馆
『現代汉语词典第5版』(2008), 中国社会科学院语言研究所词典编辑室, 商务印书馆
『辞海(第六版)』(2009), 中華書局
『漢語大字典』, オンライン版
『辞典修訂版』, オンライン版
『大辞海』, オンライン版

5. コーパス (日本語)

- 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』

6. コーパス (中国語)

- 『北京语言大学汉语语料』

謝辞

本研究を遂行し博士論文をまとめるに当たり、終始暖かい激励とご指導、ご鞭撻をいただきました指導教授である小林孝郎先生に、心より深く感謝を申し上げます。研究の進め方、考え方、まとめ方など研究の基礎から研究全般にわたり、懇切丁寧にご教授いただき、ご支援やご指導をしていただきました。時に応じて、厳しくご指導いただいたこと、また優しく励ましてくださったことを通して、私自身の至らなさを実感することができたことは、今後の努力の糧になるものであります。

本研究を遂行するに当たり、博士論文中間発表と完成発表の際、貴重なご教示と多くのご助言をいただきました。遠藤裕子先生、阿久津智先生、山田政通先生、小井亜津子先生、平山邦彦先生には謹んで感謝の意を表します。先生方のご助言やご指導なくしては、本論文の完成は不可能であったことを記すとともに、深甚の謝意を表します。

また、日本に留学に来てから現在にわたり、温かく見守っていただくとともに、多くのご支援ご指導を賜りました拓殖大学国際課の職員の皆さま、大学院事務課の職員の皆様に深く感謝の意を申し上げます。

さらに、論文作成にあたり、協力し、助言してくださった同ゼミの常智利さん、孫向宇さんに深く感謝しております。留學生活におきましては、多数の友人たちとの出会いに恵まれ、温かく励ましていただきました。とても全員の名前を挙げることはできませんが、皆さんに深く感謝しております。

最後に、これまで自分の思う道を進むことに対し、温かく見守り、そして辛抱強く支援してくれた両親、主人、娘に対して、お詫びの意を表すと同時に、感謝の意を表し、謝辞といたします。

<付録1>七種の慣用句辞典・研究書から採集した慣用表現のリスト

1) 宮地 (1982)

一次							
目							
目がない (一)	目がない (二)	目くじらを立てる	目途がつく／目途をつける	目に合う	目に浮かぶ	目にする	目につく
目にとまる	目に入る	目に見えて	目のかたきにする	目を落とす	目をつける	目をつぶる	目をみはる
目をやる	人目に余る	人目に立つ	人目をくらす	人目を避ける	人目を忍ぶ	人目をはばかる	人目を引く
目がきく／目をきかせる	目がくらむ／目をくらす	目が肥える	目が覚める／目を覚ます	目頭が熱くなる／目頭を熱くす	目が高い	めがねにかなう	目が早い
目が回る／目が回るよう／目を回す	目から鼻に抜ける	目先が利く	目先を変える／目先が代わる	目玉が飛び出るほど／目の玉が	目と鼻の間	目に余る	目に角を立てる
目に触れる	目にも留まらぬ／目にもとまらぬ	目にももの見せる／目にももの見せ	目の色を変える／目の色が変わる	目の黒いうち	目の中に入れても痛くない	目鼻がつく／目鼻を付ける	目星をつける／目星がつく
目も当てられない	目を射る	目を疑う	目を奪う	目をおおう	目をかける	目を配る	目を凝らす
目を皿にする／目を皿のように／めをひからす／目を光らせる	目を白黒させる／目を白黒する	目を据える／目が据わる	目を注ぐ	目をそむける	目を通す	目を盗む	目をはなす
一目置く	お目にかかる／お目にかける	遠目がきく	鶴の目鷹の目	羽目になる	日の目を見る	猫の目のように	抜け目がない
驚きの目をみはる	木目が細かい	白い目で見ると	長い目で見ると	金に糸目をつけない	駄目を押す	ひどい目に合う	
手							
手にする	手も足も出ない	手を打つ (一)	手を打つ (二)	手を焼く	大手を広げる	大手を振って	奥の手／奥の手を出す
手があがる	手があく／手をあける	手がかかる／手をかける	手が切れそう	手が切れる／手を切る	手が込む／手のこんだ	手が足りない	手がつけれない
手が出ない／手が出る／手を出す	手が届く	手がない	手が離れる／手を離す	手がふさがる	手が回る／手を回す	手ぐすねを引く	手癖が悪い
手塩にかける	手玉に取る	手に汗を握る	手に余る	手に入れる	手に負えない	手にする	手につかない
手に取るよう	手になる／手にする	手に乗る	手に渡る	手の内を見せる／手の内を読む	手の裏を返すよう	手を合わせる	手を入れる／手が入る
手を変え品を変え	手を貸す	手を借りる	手を切る	手を下す	手をこまねく	手を差し伸べる	手を束ねる
手を尽くす	手を付ける／手がつく	手を取り合う	手を取る	手を握る	手を抜く	手をのばす	手を引く
手を広げる	手を休める	あの手この手	手もなく	触手をのばす／触手が伸びる	割れるような拍手	小手をかざす	先手を打つ
赤子の手をねじる／赤子の手を	かゆいところに手が届く						
口							
口に合う	口にする	口火を切る	口をそろえる	口を叩く	口がうまい	口が重い	口が堅い
口が酸っぱくなるほど	口がすべる／口を滑らせる	口が減らない	口から先に生まれる	口から出任せ／口から出任せを	口が悪い	口車に乗る／口車に乗せる	口に乗り
くちばしが黄色い	くちばしを入れる	くちびるをかむ	口も八丁手も八丁	口や筆に尽くせない／口にも筆	口を入れる	口をきく	口を添える
口を出す／口が出る	口をつく	口をつぐむ	口を尖らせる	口を挟む	口を開く	口を割る	口角泡を飛ばす
一口に言えば	大きな口をきく／大きい口をき	開いた口が塞がらない					
心							
心当たりがある	心が沈む	心を奪う	苦心に苦心を重ねる	苦心の末	心が動く／心を動かす	心が躍る／心を躍らせる	心が弾む／心はずませる
心がほぐれる	心がまぎれる／心をまぎらせる	心にかける／心にかかる	心に刻む／心に刻みつける	心に留める	心に触れる	心にもない	心の糧
心のこもった／心を込めた／心を引く／心がひかれる	心の丈	心を打つ／心を打たれる	心を鬼にする	心を砕く	心を配る	心を汲む	心をとらえる
	心を許す	心血を注ぐ	心が痛む／心を痛める				
足							
あげ足を取る	足が地につかない	足がすくむ	足かせになる	足並みをそろえる／足並みがそ	足もとを見る	足を洗う	足を運ぶ
足を引っ張る	足音をしのばせる	足がつく	足が出る／足を出す	足がにぶる	足が棒になる／足を棒にする	足げにする	足に任せる
足の踏み場がない	足元から鳥が立つ	足元にも及ばない	足元に火がつく	足元にも寄り付けない	足を奪う	足を止める／足が止まる	一足違い
長足の進歩	二の足を踏む	抜き足差し足／抜き足差し足					
身							
身が引き締まる／身を引き締め	身に余る	身に及ぶ	身にしみる	身につまされる	身になる	身も蓋もない	身を固める
身を切られる／身を切られる思	身を削る	身を立てる	身を引く	身をひるがえす	身を持って	身を寄せる	身を持ち崩す
骨身にしみる	骨身にこたえる	骨身を惜しまない／骨身惜しま	骨身を削る	骨を埋める	肩身が広い	肩身が狭い	身が入る／身を入れる
身につく／身につける	身の置き所がない	身の毛もよだつ	身も蓋もない	身を粉にする	一身をささげる	身に覚えがある	
胸							
胸くそが悪い	胸がつぶれる	万感胸に迫る	胸がいつぱいになる	胸が躍る／胸を躍らせる	胸がすく	胸が詰まる	胸が張り裂ける
胸がふさがる	胸に浮かぶ	胸に描く	胸に刻む	胸に迫る／胸迫	胸につかえる	胸に響く	胸を痛める／胸が痛む
胸を打つ／胸を打たれる	胸を締め付ける	胸をときめかす／胸をときめく	胸をなでおろす	胸を膨らませる／胸が膨らむ	胸を割って話す	胸襟を開く	

拓殖大学大学院言語教育研究科博士後期課程

腹							
自腹を切る	腹が大きい	腹が黒い	腹がすわっている／腹を据える	腹が立つ／腹を立てる	腹が太い	腹が減る	腹鼓を打つ
腹に据えかねる	腹の皮がよじれるよう	腹の虫がおさまらない	腹を決める／腹が決まる	腹をこしらえる	腹をさぐる	腹を割って話す	腹が立つ／腹を立てる
腹が減る	腹を決める	おなかを抱える／お腹を抱えて	片腹痛い				
耳							
聞き耳を立てる	小耳に挟む	耳にする	耳に入る	耳を貸す	耳を傾ける	耳を澄ます	耳が痛い
耳が遠い	耳が早い	耳にする	耳にたこができる	耳につく	耳に挟む	耳よりの話	耳を疑う／耳をうたぐる
耳をそばだてる	耳を揃える／耳がそろろう	耳をつんざく					
鼻							
出鼻をくじく	鼻息が荒い	鼻息を伺う	鼻が利く／鼻を利かせる	鼻が高い	鼻っ柱が強い／鼻柱が強い	鼻であしらう	鼻にかける
鼻につく	鼻持ちならない	鼻を折る	鼻を高くする	鼻をつく	鼻を鳴らす	木で鼻をくくる	鼻をあかす
顔							
顔が広い	顔をする	顔が売れる	顔が利く／顔をきかせる	顔がつぶれる／顔を潰す	顔から火が出るよう	顔に泥を塗る	顔向けができない
顔を曇らせる／顔が曇る	顔を出す／顔が出る	合わせる顔がない	そ知らぬ顔	何食わぬ顔	大きな顔をする／大きい顔をする	浮かない顔／浮かぬ顔	
頭							
頭を横にふる	頭にくる	頭が上がらない	頭が下がる／頭を下げる	頭を痛める／頭が痛い	頭を抱える	頭をひねる	頭をもたげる
頭角を現す	音頭を取る	先頭を切る					
肩							
肩を持つ	肩身が広い	肩の荷が下りる／肩の荷を下ろす	肩が軽い／肩が軽くなる	肩で息をする	肩で風を切る	肩を怒らせる	肩を落とす
肩をすばめる	肩を並べる	肩を持つ					
首							
首っかけになる	首をかしげる	鬼の首でも取つたよう	首が回らない	クビになる／首にする	首を切る	首を突っ込む	首を長くする／首を長くして待
首をひねる	小首をかしげる						
歯							
奥歯にものが挟まる	歯が浮く	歯切れが悪い	歯止めをかける／歯止めがかか	歯に衣を着せない	歯が立たない	歯が抜けたよう	歯の根が合わない
歯を食いしばる							
腰							
腰が抜ける／腰を抜かす	腰が低い	腰が弱い／腰が強い	腰を浮かせる	腰を折る	腰を据える	本腰を入れる	
腕							
腕が上がる／腕を上げる	腕が鳴る	腕に覚えがある／腕に覚えの	腕によりをかける	腕をこまねく／手をこまねく	腕を振るう	腕を磨く	
肝							
度肝を抜く	心肝を寒からしめる	肝に銘じる	肝が据わる	肝が太い	肝をつぶす／肝が潰れる	肝を冷やす／肝が冷える	
尻							
尻に火がつ	尻馬に乗る	尻が重い	尻目にかける	尻尾を出す／しっぽが出る	尻尾を掴む		
骨							
骨を折れる／骨を折る	骨身にこたえる	骨身にしみる	骨身を惜しまない／骨身惜しま	骨身を削る	骨を埋める		
面							
臆面もなく	面の皮が厚い	仮面をかぶる	おもてを伏せる	おもてを輝かせる			
根							
根も葉もない	根に持つ	根掘り葉掘り	根を下ろす	根を張る			
指							
指折り数える	後ろ指を指される／後ろ指を指	十指に余る	食指が動く／食指を動かす				
舌							
舌鼓を打つ	舌を巻く	舌の根も乾かないうちに	舌を出す				
尾							
尾を引く	尾ひれをつける／尾ひれがつく	尻尾を出す／しっぽが出る	尻尾を掴む				
筋							
背筋が寒くなる	一筋縄では行かない	背筋を立てる					

拓殖大学大学院言語教育研究科博士後期課程

背							
背筋が寒くなる	背にする	背を向ける					
羽							
羽が生えたよう	羽根を伸ばす	羽目を外す					
腸							
腸が煮えくり返るよう	断腸の思い	はらわたがちぎれるよう					
顎							
あごが落ちるよう	あごで人を使う	あごを出す／あごが出る					
髪							
緑の黒髪	うしろ髪を引かれる	間髪を入れず					
体							
ほうほうの体	体を壊す						
皮							
化けの皮が剥がれる／化けの皮	欲の皮が突っ張る						
股							
四股を踏む	股にかける						
膝							
膝を乗り出す	膝を交える						
脚							
脚光を浴びる	馬脚をあらわす						
眉							
眉をひそめる	愁眉を開く						
爪							
爪に火をともし	爪の垢ほど						
臍							
へそを曲げる	へそをかく						
脇							
小脇にかかえる／小脇にはさむ	脇目もふらず						
額							
猫の額のように	額を集める						
脛							
脛に傷を持つ	すねをかじる						
瞳							
ひとみを凝らす	ひとみを据える						
角							
角が取れる／角を取る							
腑							
腑に落ちない							
喉							
喉から手が出るほど							
肌							
一肌脱ぐ							
毛							
身の毛もよだつ							
眼							
眼中にない							

拓殖大学大学院言語教育研究科博士後期課程

二次							
血							
血が通う	血がにじむ(よる)	血の気が引く	血道をあげる	血も涙もない	血がつながる/血のつながった	血の出るよう	血の巡りがいい/血の巡りが悪い
血湧き肉躍る	血を沸かす/血が沸く	血を分ける/血を分けた	血相を変える				
息							
鼻息が荒い	鼻息を向う	息を呑む	息が切れる/息を切らす/息を切らした	息が詰まる/息を詰める	息の根をとめる/息の根が切れる	息を切って/息を切らして	息をこらす
息をこらす	息をつく/息をつく暇もない	息を引き取る	息を吹き返す				
声							
声涙共に下る	声をかける	うぶ声を上げる	声を上げる/声を立てる/声が上が	声を限りに/声を限りよ	声を枯らす/声を枯らして/声がか	声をしのはせる/声をひそめる	声をのむ
力							
力の限り	力を入れる/力が入る	力を落とす	力を尽くす	力を添える	死力を尽くす		
寝る・眠る							
永遠の眠り	寝食を忘れる	寝返りをうつ	寝覚めが悪い	寝ても覚めても	夜も目も寝ずに/夜も目も寝ないで		
音							
音を上げる	弱音を吐く	音に聞く/音に聞こえた	ぐうの音も出ない				
涙							
雀の涙	泣きの涙	涙にむせぶ	涙をのむ				
言う							
ものをいう	物を言わせる						
脈							
脈がある	脈を取る						
跡・痕							
(爪痕を残す	爪痕が残る)						
尻							
尻とも思わない							
汗							
玉の汗							
あぐら							
あぐらをかく							
三次							
気							
浩然之気/浩然の気を養う	平気の平左	鬼気迫る	気に食わない	味も素っ気もない	あつけにとられる	気が気でない	気がする
気がつく	気に入る	気にする	気になる(一)	気になる(二)	気をつかう	気をつける	いい気になる
嫌気がさす	うす気味が悪い/うす気味悪い	お気に召す	気炎を上げる	気がうつる/気をうつす	きがおける/気が悪くない	気が重い/気が軽い	気がきく/気を利かす/気が利かない
気が腐る	気が進む	気が済む	きがせく	気が高ぶる	気が立つ	気がつく/気がつ	気が強い/気が弱い
気が遠くなる	気がとがめる	気が長い/気が短	気が抜ける/気が抜けない/気を抜	気が張る/気を張	気が暗れる	気が引ける	気がふれる
気が変になる	気がめいる	気かもめる/気をまよ	気位が高い	気勢を上げる/気勢が上がる	気にかかると/気にかける	気に食わない	気に障る
気に留める	気に病む	気のない	気骨が折れる	気前がいい	気を失う	気を落とす	気を配る
気をそらす	気を取られる	気を取り直す	気のをまれる	気を吐く	気を回す	きをよくする	
意							
注意を引く	不意を打つ	不意を襲う	不意を食う/不意を食らう	不意をつく	意地地がない	意地が悪い	意地になる
意地を張る	意のまま/意のままにする/意のまま	意表に出る	意表をつく	意を決する			
思							
思案に余る	思案に暮れる	思案の末	血を吐く 思い死ぬ 思い 断頭	思うつぼ	思想を尽かす/愛想が尽きる	思いもかけない/思いも及ばない	思いをこらす
思いをめぐらす							
鳴り							
鳴りを鎮める	鳴りを潜める	悲鳴を上げる	蚊の鳴くよう	閑古鳥が鳴く			
願							
願ったり叶ったり	願ってもない	一生のお願い/一生の頼み					
精							
精が出る/精を出	精根を打ち込む/精根はめて	精も根も尽きる/精根尽き果てる					
想・想像							
想像がつく	想像を絶する	愛想を言う					
影							
影も形もない	見る影もない	影が薄い					
感							
感極まる	感情に走る						
笑							
一笑に付す	微笑みを浮かべる/微笑みが浮かぶ						
念							
念のため	念を押す						
性							
性こりもなく	性に合わない						
志							
志を立てる	志を遂げる						
考							
考えにふける	考えも及ばない						

拓殖大学大学院言語教育研究科博士後期課程

形							
影も形もない	型にはまる／型にはめる						
愁							
春愁に富む	愁眉を開く						
恨み							
恨みを飲む	恨みを買う						
情							
情が怖い							
泣き							
泣きの涙							
痛							
片腹痛い							
恥							
恥を知る							
調子							
調子に乗る							
痺れ							
しびれを切らす／痺れが回れる							
喜び							
よろこびにひたる							
心配							
心配をよそに							
悔い							
悔いを残す／悔いが残る							
遺憾							
遺憾に堪えない							
響感							
ひんしゆくを買う							
歩み							
牛の歩み							
癪							
癪癪を起こす／癪癪が起きる							
嘘							
真っ赤な嘘							
喧嘩							
喧嘩を売る／喧嘩を置く							
痩せ							
痩せても枯れても							
機嫌							
機嫌を取る							
希望							
希望に燃える							

2) 白石 (1995)

目・眼							
目に涙が浮く	あしき目を見る	目をしばたたく	アブが目が抜けたようだ	目を伏せる	石白の目を切る	痛い目を見る	見る目が恥ずかしい
外目をする	うのめたかのめ	お目にかかる	お目にかける	犬目玉を食う	犬目玉を食らう	大目に見る	蚊の目
片目が見えない	片目も開かない	片目が悪い	からい目を見る	眼孔が小さい	白い目を向ける	目交せて知らせる	目もなく笑う
つらい目に遭う	目を立てる	猫の目行政	日の目を見る	日の目を見ない	日の目が見えなく	目をしばたたく	人目を奪う
ひと目を飾る	人目を忍ぶ	人目をする	人目を包む	人目を盗む	人目をはかる	人目を恥じる	人目をはばかる
人目を守る	人に立つ	人目がいとほしい	人目がない	人目も見苦しい	人目まれなり	目は口ほどに物を	目がある
目が合わない	目が開く	目が開ける	目が驚く	目が輝く	目がかすむ	目がきく	目が腐る
目が暮れる	目が減する	目が覚める	目がしょぼつく	目が爛れる	目が潰れる	目が留まる	目が働く
目が光る	眼はひつつる	目が舞う	目舞い足振るう	目が回る	目を回す	目が見える	目を見る
目くれ鼻血た	目も口もはだかる	目も心も呆れる	目が吊るし上がる	目を赤める	目を明いて通れ	目を開けて通れ	目を覆う
目を疑う	目をかける	目が恥ずかしい	目をさえかけない	目を掠める	目を切る	目を配る	目を忍ぶ
目をする	目をそばだてる	目を背ける	目を立てる	目をつける	目をつけられる	目をつぶる	目を閉じる
目を留める	目を抜く	目を拭う	目を盗む	目を眠る	目を離す	目を放つ	目を離れない
目を引く	目を引き口を引く	目を引き鼻をひく	目を開く	目を塞ぐ	目を迷う	目を剥く	目を向ける
目を病む	目を患う	目を怒らす	目を驚かす	目を輝かす	目を食わす	目を食わせる	目を覚ます
目を澄ます	目を逸らす	目を見す	目を見せる	目をうるませる	目を光らせる	目を喜ばせる	目を奪われる
目をかけられる	目を打ち潰す	目を吊り上げる	目を見上げる	目を見つめる	眼を見張る	目を見晴らせる	目を見開く

拓殖大学大学院言語教育研究科博士後期課程

目を逆立てる	目をしばたたく	目をさらほどにする	目を三角にする	目をぼちくりさせ	目も当たられない	目に飽きる	目に余る
目に入る	目にかける	目に遮る	目に立てる	目に立たぬ	目に角を立てる	目に角を立てて睨む	目にもたまらぬ
目につく	目に触れる	目に留める	目に留まる	目に見える	目に見る	目にも水耳にも聞かぬ	目に涙が浮く
目に涙がたまる	目に涙がたまらぬ	目に時々は知りな	目にものを見せる	目で見耳で聞く	目を持ってする	目もなく笑う	目がいい
目が良くなる	目が痛くなる	目が黒い	目の黒いうち	目が恥ずかしい	目が細い	目を細くする	目が弱い
目が悪い	目も心も曇り	目を大きくする	目を丸くする	目に近い	目もあやになり	目と鼻の間	目と鼻の先
目の色を変える	目の上の鱗が落ち	目の上の瘤	目のかたきにする	目のさやが外れる	目のさやの抜けた	目の毒	目の肌痛い
目のひまがある	目の闇を空かす	目頭が熱くなる	目先が利く	目先だけしか見え	目尻が下がる	目尻を下げる	目押しに
目鼻を付ける	目鼻を一つ所に取	目交ぜで知らせる	まなこを開ける	目眦皆裂く	横目で睨む	瞼目も振らず	
心							
心を得る	心が直る	心がつく	心に心をからかう	心がつく	親の心を取る	心が安い	独り身を心に任せ
心が堅い	心をいられる	心が広い	心がある	心が痛む	心が動く	心が起こる	心も及ばず
心がかかる	心が砕ける	心がこもる	心が澄む	心がせく	心がたがう	心がつく	心がときめく
心が解ける	心が留まる	心が直る	心が残る	心が入る	心が働く	心が離れる	心が晴れる
心が燃える	心が病む	心がい	心が落ち着く	心が鬼の如くなる	心が亡くなる	心が空になる	心がわつさりとな
心と言葉が相違う	心と実がこもる	心をあふるべし	心を明ける	心を合わせる	心を痛める	心を入れる	心を置く
心にかなう	心を凝らす	心を静める	心を沈む	心を澄ます	心をそそる	心を染める	心を立てる
心を尽くす	心を尽くして気が	心を留める	心を唱える	心を捉える	心を取る	心やる	心を許す
心を失う	心を軽くする	心を固くする	心を安くする	心を取り失う	心を入られる	心に入る	心に入れる
心に浮かむ	心にかか	心にかける	心にかからう	心に心をからかう	心にしみる	心に心を許す	心に据える
心に留める	心に任せる	心に錠を下ろす	心で寝て口でけ	心から放つ	心が痛い	心が広い	心が安い
心が苦しい	心が恥ずかしい	心が麗し	心が一つである	心ならぬ音を泣く	心にもあらず	心も心ならず	心の鬼
心の鬼が出てくる	心の鬼に思いとど	心の鬼に苦しい	心の鬼なり	心がけがよい	心がけが悪い	心より外に	心臓が強い
心臓が弱い	心臓がいくつあ	心を惑わす	心が短い				
手							
手を握る	横手を打つ	手に触る	犬の手も人の手に	手をやる	大手を広げる	大手を広げて待つ	大手を広げてつ
大手を振る	手ぐすねを引く	差し手引く手に	手の裏を返す	手がある	手が上がる	手がきく	手が込む
手が滑る	手が詰る	手が出る	手が出ない	手が出せない	手が届く	手が鳴る	手が回る
手が戦慄く	手の舞い足の踏む	手も足も出ない	手も力もない	手をあかく	手を遊ばす	手を合わせる	手を入れる
手を懐に入れる	手を打つ	手を打ち洗う	手を負う	手を下ろす	手を掻く	手をかける	手を貸す
手を切る	手を砕く	手を下す	手を拱く	手を指す	手を束ねる	手を済ます	手を擽る
手を出す	手を叩く	手を使う	手を尽くす	手を付ける	手を取る	手を握る	手を拳る
手を抜く	手が放されぬ	手を離れる	手を払う	手を引く	手を広げる	手を振る	手を触れる
手を巻く	手を惑わす	手を焼く	手を虚しくする	手をコソコソとす	手に汗を握る	手に当たる	手に合わない
手に負えない	手に落ちる	手に掛かる	手に据えたたか	手に付かない	手につける	手にとるように	手に握る
手に乗る	手にもたまらず	手に持つ	手がきく	手もない	手の裏を返す	手足が金のように	手足を動かすよう
手足をものが迷う	手入れを擽る	手応えがする	手しやくをする	手出しをする	手八丁口八丁	手鼻をかむ	手間がいろいろ
手前がいい	手間を取る	手間が取れる	手間に合わない	手弄りにする	手感いをする	猫の手も借りたい	両手に花
口							
大口をあく	大口を開ける	大口を叩く	大口に食う	陰口が飛ぶ	陰口をきく	陰口がうるさい	口がきく
口をきく	口は災いの元	口は禍の門	口が開かない	口が過ぎる	口がすべる	口が付く	口が塞がる
口が曲がる	口が干し上がる	口と心が違	口を開いたり手	口を開ける	口を入れる	口を覆う	口を抱える
口を固める	口がきける	口を吸う	口を練む	口をそろえる	口を出す	口を叩く	口を立てる
口を閉じる	口を閉じて黄金	口を拭う	口を塞ぐ	口を守る	口がたむ	口固めをする	口定め言う
口をよく喋る	口を酸くして気の	口に合う	口に合わぬ	口に入る	口に食らうなすび	口に入る	口に出す
口に運ぶ	口に任せる	口に手を当てる	口に初がつお	口へ持って行く	口へ入る	口で言う	口で伝える
口から出す	口が重い	口が軽い	口が早い	口が広い	口がいい	口が悪い	口から高野
口から先に生まれ	口車に乗せる	口車に乗る	口付きの男	口齒にかかる	口ばかり心は遠長	口ばかり奥行き	唇を返す
唇を噛む	唇を翻す	口を立てる	虎口をくつろぐ	口に乗る	悪口を言う	口を濯ぐ	
頭							
頭が上がらない	頭がいい(悪い)	頭が痛い	頭が痛む	頭が打つ	頭が重い	頭が重たい	頭がかたい
頭がしつかりして	頭が高い(低い)	頭から	頭から足のつま先	頭から水を浴びよ	頭から湯気を立て	頭が割れるように	頭で理解する
頭にある	頭に毛がない	頭にくる	頭につく	頭に湯気を立てる	頭の黒い鼠	頭を上げる	頭を痛める
頭を痛む	頭を押さえる	頭を抱える	頭をか	頭を壁にぶつけ	頭を刈る	頭を下げる	頭を絞る
頭を剃る	頭を揃える	頭を叩く	頭を縦に(横に)振	頭を使う	頭を悩ます	頭をはねる	頭をはる
頭をひねる	頭をほぐす	頭を丸める	頭をもたげる	頭を割る	頭を悪くする	頭が打つ	かしらを洗う
かしらを痛む	かしらを打ち割る	かしらを下ろす	かしらをかく	かしらを下げる	かしらを剃る	かしらを張る	かしらを振る
かしらをもたげる	かしらから黒煙を	かしらが痛い	かしらが重い	頭が堅い	かしらが白い	かしらの毛が立つ	かしらの髪が太る
かしらのゆき	頭を低れる	頭を畳につける	頭が高い(低い)	頭痛が下がる	頭痛がする	頭痛が直る	頭痛を患う
身・体							
身を砕く	体が溶ける	体を覆う	体を縮める	体からあふれる	体が大きい	体が重い	体が楽になる
身を投げる	体を交わす	身を心に任せる	身が固まる	身が苦しむ	身が練む	身が温む	身が入る
身を入れる	身が震える	身が燃える	身を折る	身を失う	身を売る	身を隠す	身を飾る
身を切るような	身を焦がす	身を沈める	身をしのぐ	身をそむける	身を投げる	身を放つ	身をもがく
身を悶える	身を揉む	身をもんで笑う	身を働かす	身を震わす	身を悪く振る舞う	身をなきになす	身を以て

拓殖大学大学院言語教育研究科博士後期課程

身に余る	身に応ぜぬ果報	身に叶う	身にしみる	身につく	身になす	身に似合わない	身に生まれつく
身に取り付く	身につまされる	身から火を出す	身が軽い	身が苦しい	身が置きところが	身も蓋もない	身も世もない
身の毛が立つ	身の毛がよだつ	身の毛が太る	身の毛を詰める	身のほど知らず	身の病を労る	身なりがいい	身なりが悪い
耳							
耳に聞き入れる	耳に傾ける	うち休む寝耳に聞 ^く	耳に留まる	馬の耳に風	小耳に聞きはさむ	片耳にきく	耳に留める
耳をこすって雨を知る	寝耳に入る	寝耳に水	寝耳へ水が入る	耳を傾ける	耳がきく	耳がすわる	耳が留まる
耳が留まる	耳が汚れる	耳を洗う	耳を疑う	耳を覆う	耳を傾ける	耳をきく	耳を澄ます
耳をそばだつ	耳を揃える	耳を立てる	耳を留める	耳を唱える	耳を塞ぐ	耳をふたぐ	耳を揃る
耳を振り立てる	耳をさるような	耳に入る	耳へ入る	耳に言い入れる	耳に聞く	耳にささやく	耳にする
耳に立つ	耳につく	耳に触れる	耳で聞く	耳が痛い	耳に痛い	耳が疎い	耳が賢い
耳が堅い	耳がかゆい	耳が遠い	耳が悪い	耳にタコができる	耳の垢を取って聞	耳の付け根まで真	耳のよそに聞く
耳よりの話							
胸							
(人の胸を) あく	胸をかかさぐる	胸は恐ろしい	胸中が広い	胸が走る	胸が打ち騒ぐ	胸が痛む	胸が騒ぐ
棟騒ぎがする	胸が透く	胸が抱く突く	胸がつかえる	胸がつぶれる	胸が焼ける	胸が開く	胸がふさがる
胸がどきどきする	胸がムカムカとす	胸がいっばになる	胸を打つ	胸を押さえる	胸を踊らす	胸をきわめる	胸を焦がす
胸を裂くほど	胸を刺す	胸をさする	胸を晒す	胸を叩く	胸を突く	胸を潰す	胸を悩む
胸を張る	胸を開く	胸をまじなう	胸を病む	胸を割る	胸を患う	胸をなでおろす	胸を打たれる
胸に手を置く	胸に余る	胸にこたえる	胸に満ちる	胸が痛い	胸が恐ろしい	胸が汚い	胸が悪い
胸が悪くなる	胸の火が燃える	胸上の炎焦	胸のひまをいつし	胸勘定	胸糞が悪い	胸倉を掴む	胸三寸
胸算用							
足							
揚げ足を取る	足が歩く	足が痛い	足が痛む	足が折れる	足がすくむ	足が滑る	足がつく
足が詰まる	〜から足が出る	足が地につく	足にくいを踏み立てる	足に針を踏み立てる	足に任せて	足の立ちどをまどとこる	足の立てどの浮く
足の踏みどころ	足踏みをする	足も立たず目も見えず	足を洗う	足を食われる	足を逆さまにして	足をさし下す	足をすりこ木にする
足を空に	足を出す	足を使う	足を突つ込む	足を取られる	足を伸ばす	足をはかりに	足を運ぶ
足を引く	足を踏む	足を向ける	足を揉む	足を病む	足を痛める	足腰が立たない	足腰が抜ける
足手を見ればすきくわのごとく	足止めを食らう	足並みの乱れ	足元から鳥が立つ	足元の明いうちに	足元はよろよろ	雨の脚	後ろ足を踏む
馬の足を休める	足が歩く						
顔							
(顔が) 赤くなる	赤い顔	あきれた顔	天ノ下の顔よし	顔を向ける	浮かぬ顔	大きくため息をつく	顔が赤らむ
顔がしかむ	顔が立つ	顔が立たぬ	顔がつぶれる	顔が汚れる	顔を上げる	顔をあげられない	顔を合わせる(合わす)
顔を隠す	顔を飾る	顔をくつつける	顔をしかめる	顔をそばめる	顔を背ける	顔を出す	顔が出されぬ
顔を立てる	顔を覗かせる	顔を拭く	顔をふくらす	顔を見ぬ先は	顔を向ける	顔をよごす	顔をクシヤクシヤにする
顔に免ずる	顔に免じて	顔が赤い	顔が赤くなる	顔を赤くする	顔が広い	顔がつややかだ	顔から火が出る
顔に泥を塗る	顔に糺染をひき散らして	顔は入見知りしない	聞かぬ顔	顔もちが悪い	借りるときの地蔵顔返すときの聞蔵	洗い顔	顔をしかめる
鼻							
(鼻を) 明かす	鼻持ちがならない	鼻の先に取り付く	鼻が強い	気で鼻をこくる(くぐる)	鼻をつまむ	鼻が利く	鼻が利かない
鼻が詰まる	鼻があぐらをかい	鼻を明かす	鼻を怒らす	鼻をうごめかす	鼻をかむ	鼻をしかめる	鼻を吸る
鼻を掻き落とす	鼻を揃む	鼻を鳴らす	鼻をひじく	鼻を拭く	鼻をふさぐ	鼻をひる	鼻を引つ掛けない
鼻にかける	鼻につく	鼻に当てる	鼻であしらう	鼻が痛い	鼻が高い	鼻を高くする	鼻が強い
鼻が低い	鼻をして口の事か	鼻の穴へ吸い込む	鼻の巢へ吸い込む	鼻の先をこする	鼻の先にいる	鼻の先に取り付く	鼻の先であしらう
鼻の下が干し上	鼻の下がひまがな	鼻血が止まる	鼻血押しのごぼ	鼻持ちがならない			
腹							
腹が減る	田舎腹	鼻が膨れる	馬の太腹がひたる	腹を病む	背も腹も切れる	すき腹にすかせ給	腹をこなす
腹が痛む	腹がいる	腹が切れる	腹が鳴る	腹がしくしくする	腹が空く	腹が据わる	腹が立つ
腹が減り山	腹が北山だ	腹をいる	腹を抱える	腹を切る	腹を探る	腹を据える	腹を据えかねる
腹を損なう	腹を立つ	腹を立てる	腹を立てて踊る	腹を減らす	腹が汚い	腹を振る	腹に据えかねる
腹で味わう	腹が大きい	腹が黒い	腹を悪くする	腹の皮を振る	腹の皮をよる	腹筋をよる	腹の中が掻き乱れる
腹背に敵を作る	虫腹が痛む	虫腹が起こる					
尻							
尻が温まる	尻がくる	尻がすわる	尻がすわらない	尻が抜ける	尻が割れる	尻をかける	尻をからげる
尻を据える	尻を叩く	尻を詰める	尻を拭う	尻を端折る	尻を引く	尻を引っ叩く	尻を結ぶ
尻を結ばぬ糸	尻をよこす	尻を割る	尻を持ち込む	尻にかける	尻に敷く	尻につく	尻に火がつく
尻に帆をかける	尻に目薬	尻から焼けてくる	尻が重い	尻が軽い	尻が長い	尻の穴が小さい	尻馬に乗る
尻目にかける	尻目にみる	尻からげ	尻餅をつく	尻が抜ける			
肝							
良い肝をつぶす	肝が消える	肝心かなめ	肝腎かなめ	肝胆を砕く	肝が潰れる	肝が勝る	肝をいる
肝を消す	肝をつぶす	肝を抜く	肝を冷やす	肝に伝える	肝に銘じる	肝が太い	肝心が失せる
肝心が騒ぐ	肝心も消え果てる	肝心を感わす	肝心を感わせる	肝に伝える			
肩							
肩がこる	肩が使える	肩が張る	肩が休まる	肩を入れる	肩をそびやかす	肩を並べる	肩を張る
肩をひねる	肩を揉む	肩が重い	肩が軽くなる	肩が強い	肩の荷が下りる	肩の骨を折る	肩車に乗せる
肩身がすぼる	肩身が広い	肩をさす					

拓殖大学大学院言語教育研究科博士後期課程

面							
面におおう	面をうつ伏せる	面をす	面をふたぐ	面を向ける	面をよごす	面の色を直す	ほえづらをかまく
面を踏む	面の皮が厚い	面の皮をはぐ	面の皮千枚張り	つらづえをつく	面を汚す	面を乱る	面を破る
面目がない							
腰							
腰が動けない	腰が動く	腰が折れる	腰が深まる	腰が座らぬ	腰が抜ける	腰を炙る	腰を打つ
腰を折る	腰をかがめる	腰をかける	腰を据える	腰を引く	腰を浮かせる	腰が痛い	話の腰を折る
本腰を入れる							
首							
首が飛ぶ	首を上げる	首を掻く	首を傾げる	首を斬る	首を継ぐ	首をつなぐ	首を取る
首を延べる	首をひねる	首を振る	首をやる	首を長くする	頸にかかる	頸がない	首のすげ替えをする
猫の首に鈴をつける							
歯							
歯止めになる	歯が痛む	歯が浮く	歯が立たない	歯が抜ける	歯を噛む	歯を食いしばる	薬を出す
歯を剥き出す	歯を悩む	歯を病む	歯に衣着せぬ	歯がない	歯が痛い	歯切れがよい	歯止めをする
あご							
あごが落ちそう	あごが出る	あごがはずれる	あごが干し上がる	あごをつるす	あごではえを追う	あごで人を使う	あごをしゃくる
あごを出す	顎を突き出す	あごを撫でる	あごを外す	あごが干し上がる			
頬							
頬がゆがむ	頬が腫れる	頬が歪む	頬が緩む	頬を赤らめる	頬を紅潮させる	頬をはらす	頬を膨らす
頬を膨らます	頬を歪める	頬杖を突く	頬べたを膨らす				
懐							
懐が寒い	うちがえの懐	懐が温まる	懐へ入れる	懐に入れる	懐へねじ込む	懐が暖かい	懐が重い
懐が重たい	懐が寂しい						
舌							
舌が回る	舌を噛む	舌を食う	舌を出す	舌を振る	舌を巻く	舌を巻かせる	舌を焼く
舌の先を食い切る	舌鼓を打つ						
髪							
髪を惜しむ	髪を刈る	髪を剃る	髪を結う	髪をもとどりに取る	かみが重い	間に髪を容れず	白髪がかす尾に過る
膝							
膝が振るう	膝を打つ	膝をつく	膝を突き合わせる	膝を巻く	膝を乗り出す	膝枕をする	
毛							
身の毛がよだつ	身の毛がよだつかんづめにする	毛が生える	毛がよ立つ	毛が老いる	毛を生やす	毛を引く	毛を吹いて疵を求む
毛がない							
喉							
のどに詰まる	喉が渴く	喉が干る	喉を絞る	喉に詰まる	喉笛を掻く	喉元過ぐれば熱さを忘る	
喉元まで出る							
眉							
喜悅の眉を開く	眉をひそめる	眉をひそむ	眉を開く	眉を寄せる	眉あいが伸びる		
臍							
臍の下は開けな	臍が曲がっている	へそを曲げる	臍をつかまれる	へそで茶を沸かす	へそを掻く		
指							
後ろ指を指す	指をくわえる	指をさす	指を差させる	指を差される			
角							
牛の角にはち	牛の角を蜂が刺す	牛の角文字	角が折れる	角をつかめて牛を殺す			
骨							
大骨を折る	骨が折れる	骨を折る	骨身にこたえる	老骨に鞭打つ			
根							
根からたわいがな	根を断ち葉を枯ら	根掘り葉掘り	根も葉もない	根から鳴かぬ			
髭							
お髭をする	髭を剃る	髭を取る	髭を生やす				
額							
額には矢は立つと	額を集める	額に汗を流す	額から汗が出る				
皮・膚							
皮と肉との間	皮が向ける	化けの皮を表す	膚に触れる				
乳							
牛の乳房を絞る	乳が脹る	乳を絞る					
背							
背も腹も切れる	背に腹は代えられ	背が高い					
尾							
狗の尾を継ぐ	尾に尾をつける	尾を引く					
腕							
腕が上がる	腕を折る	腕を買われる					

拓殖大学大学院言語教育研究科博士後期課程

傷							
痛き傷に平塩を注ぐ	傷が痛い						
腸							
腸が切れる	腸を断つ						
神経							
神経を逆なでにする	神経をとがらせる						
胆							
胆がすわる							
肘							
肘鉄砲を食う							
腑							
臟腑を揉む							
脂							
脂が乗る							
胃							
胃が痛む							
肺							
肺を病む							
えくぼ							
えくぼに入る							
二次							
声							
あまた声して	鬼の声がする	蚊の声が弱い	黄色い声	黄色なる声	声がある	声が枯れる	声がする
声が立たない	声を上げる	声を上げてなく	声を合わせる	声を立てる	声を潜める	声を絞り出す	声大きい
声が高い	声が小さい	声を借します	声を揃える	声を限りに	声をはかりに	洪い声	雀の千声鶴の一声
雀の千声より鶴の	八声の鶴						
涙							
涙が尽きる	涙にあふれる	嬉し涙を流す	男の涙	上下涙を流す	涙に沈む	涙を落とす	涙が落ちる
涙が干る	涙をこぼす	涙が出る	涙が流れる	涙をたる	涙を拭う	涙を振りはえる	涙を振るう
涙におぼはれる	涙に曇る	涙に暮れる	涙に濡れる	涙にむせぶ	涙もかきあえず	涙に脆い	涙の種
涙の目が開かない							
息							
息を返す	息が切れる	息が詰まる	息を返す	息を殺す	息をする	息をする間もない	息をつく
息を継ぐ	息を詰める	息を呑む	息を引き取る	息を潜める	息の長い追及	息の下に	息の下に言う
大息をつく	息の根の続くほど張り上げる	息の根を止める	大息をつく	ため息が出る	ため息が漏れる	ため息をつく	
言う							
言わず語らず	言わぬは言つにまきる	言わぬ先に	言わぬより	言う口の下から	言うに言われぬ	言う言葉の下から	言うに及ばず
言うにも余る	言うより早く	言うまでもない					
汗							
汗がでる	汗にある	あせも涙もあらし	汗水になる	汗をかく	汗を流す	汗を握る	汗水を流す
大汗になる	大汗を流す						
力							
鬼の力が立ち添う	力を貸す	力を注ぐ	力に余る	力に任せる	力がない	力こぶしがこらえる	
音							
音がする	音に聞く	音に立てる	音をする	音を立てる	音を泣く		
血							
血が下る	血が垂れる	血をあやす	血を分ける	血の涙を絞る			
小便							
小便をする	小便が漏れる	小便をたれる					
いびき							
いびきがする	いびきをかく	いびきをする					
鳴り							
鳴りをしずめる	鳴りを潜める						
あくび							
あくびをする	大あくびをする						
咳							
咳をする	咳払いをする						
脈							
脈が打つ	脈を打たす						
唾							
つばを飲む	唾の一つも吐きかける						

拓殖大学大学院言語教育研究科博士後期課程

あぐら							
あぐらをかく							
おなら							
おならをする							
皺							
しわが寄る							
垢							
垢が抜ける							
三次							
気							
気味を悪がる	味も素っ気もない	味気ない	気で気を病む	気が多い	気がいい	気になる	気が強い
意気に燃える	気に入る	気を損ずる	人氣が荒い	気がつく	老いの気	男の気を取る	気に入る
気に合う	気がある	気が勝つ	気が変わる	気がきく	きがせく	気をせく	気が立つ
気が違う	気が尽きる	気がつく	気をつける	気が詰まる	気がとがめる	気が上る	気が張る
気が向く	気に向く	気もめる	気が遠くなる	気を入れる	気を置く	気が置ける	気を起こす
気を変える	気を配る	気を静める	気をそらす	気を損ずる	気をつかう	気を尽くす	気を晴らす
気を回す	気をもむ	気を取り直す	気を大きく持つ	きをよくする	気をのまれる	気が知れる	気が知れない
気に合う	気に当たる	気に入る	気に応ずる	気にかける	気にかかる	気に食わない	気にさう
気が長い	気が早い	気が短い	気が悪い	気が爽やかになる	気の毒	気分をさす	気骨が折れる
気色を霞める	気色を取り直す	気色が快い	気が上る	気がつく	気が上る	気がある	短気は損気
うそ							
うそが交じる	嘘を言う	うそを食う	うそをつく	嘘をつかないもの	嘘つき	うそようだ	嘘から出た真
うその四百	うそ八百	うそ腹を立てる					
憂い							
憂いの火にいられる	憂かりける人	憂き世話を病む	憂きとも	憂き名を流す	憂き身に余る	憂き目に合う	憂き世をそむく
憂い心が居られる							
思い							
思う心を叶える	思うことが叶う	おもうほど	思うように	思いがはれる	思いを叶える	思いをひそめる	思いの外のこと
思い寝に聞く							
笑い							
今泣いた馬がもつ 笑う	大笑いになる	笑いを飛ばす	笑いが溢れる	笑いを催す	笑いが大きくなる	笑いものにする	笑いものになる
感							
感をなす	感を催す	感に堪えない	感に打たれる	感がない	感が深い	感がたつ	感をする
情							
田舎の人こそ情を 知らわ	情は人のためなら ず	情を知る	情が怖い	情に厚い	情にもろい	情けをかける	人情に欠ける
機嫌							
機嫌が直る	機嫌を損ねる	機嫌が損ねる	機嫌を損ずる	機嫌を取る	機嫌を直す	機嫌がいい	機嫌が悪い
精							
精を入れる	精がある	精を出す	精が出る	精魂を傾ける	精魂に当たる	精一杯	
欲							
犬の欲張り	欲を言えば	欲をかく	欲に目が暮れる	欲が深い	欲の皮	欲心に住す	
跡							
跡が続く	あとからはげる	跡のままに	跡や枕に	跡を暗くする	いつにない跡を追 う		
念							
(同情の念に)厚 い	念が入る	念を入れる	念に念を入れる	念を押す	念頭を去らない		
影							
影が薄れる	影がさす	影を潜める	影が薄い	影のように	影も形も		
喜び							
喜びにくる	喜び泣きをする	喜びを言う	喜びの余りに	喜びの眉を開く			
恥							
恥が隠れる	恥をかく	恥をかかせる	恥を隠す	恥をさらす			
意							
意に介さぬ	意地が悪い	意表に出る	意表を突く				
怒り							
怒りに触れる	怒りに燃える	怒りを解く	憤を発する				
泣き							
今泣いた馬がもつ 笑う	うなざがなく	男泣きになく					
勢い							
勢に乗る	勢い猛に	勢いに乗る					
恨み							
恨みを買う	恨みつちみを募ら せる						
疑い							
疑いが晴れる	疑いなき人あり						

拓殖大学大学院言語教育研究科博士後期課程

性							
性が合う	性に合う						
祈り							
祈りが上の空になる	祈りを祈る						
勤							
勤がさえる	勤が深い						
願							
願いが叶う							
姿							
姿を消す							
歩み							
歩みを運ぶ							
痛み							
痛みを病む							
嘆き							
明け暮れ嘆きけるに							
度胸							
いい度胸だ							
慮							
遠慮がない							
喧嘩							
犬も食わない喧嘩							
沈黙							
沈黙は金							

3) 宮園 (1999)

一次							
目・眼							
二枚目	一目置く	白眼	目には目を	目は口ほどに物を言ふ	目病み女に風邪引き男		
心							
以心伝心	小心翼翼	親の心子知らず	心頭滅却すれば火もまた涼し	魚心あれば水心			
足・脚							
蛇足	馬脚を現す	揚げ足を取る	足を洗う				
口							
切り口上	口車に乗る	口に蜜あり腹に剣あり					
手							
手ぐすねを引く	手塩にかける	飼犬に手を噛まれる					
頭							
頭角をあらわす	鯛の頭も信心から						
骨							
恨み骨髓に徹す	恨み骨髓に入る						
牙							
象牙の塔	歯牙にもかけない						
根							
大根役者	根回し						
舌							
二枚舌	舌先三寸						
顔							
顔が立つ	知らぬ顔の半兵衛						
羽							
白羽の矢を立てる	切羽詰まる						
面							
面食らう	八面六臂						
あご							
あごを出す							
臍							
へそくり							
胸							
安堵の胸を撫で下ろす							

拓殖大学大学院言語教育研究科博士後期課程

耳					
馬の耳に念仏					
背					
団栗の背比べ					
鱗					
逆鱗にふれる					
皮					
渋皮がむける					
腹					
腹八分目					
眉					
焦眉の急					
胆					
臥薪嘗胆					
頸					
刎頸の交わり					
角					
蝸牛角上の争い					
爪					
能ある鷹は爪を隠す					
髪					
白髪三千丈					
身					
身から出た錆					
えくぼ					
あばたもえくぼも					
二次					
聞く					
百聞は一見に如かず	一を聞いて十を知る				
喧嘩					
後の喧嘩を先にする	夫婦喧嘩は犬も食わぬ				
涙					
涙を揮って馬護を斬る					
呼吸					
阿吽の呼吸					
力					
縁の下の力持ち					
言う					
言わぬが花					
声					
鶴の一声					
垢					
垢抜ける					
三次					
気					
人生意気に感ず	病は気から				
影					
一天影に映ゆれば百犬喜に映ゆ	杯中の蛇影				
念					
正念場	念には念を入れよ				
憂い					
杞憂	遠慮なければ近憂あり				
歩					
五十歩百歩	犬も歩けば棒に当たる				
思い					
磯の鮑の片思い					

拓殖大学大学院言語教育研究科博士後期課程

泣き						
泣く子と地頭には勝てぬ						
容						
女は己を悦ぶ者のために容づくる						
嘘						
嘘八百						
笑い						
ほくそ笑む						
姿						
あられもない姿						
情け						
情けは人の為ならず						
慮						
千慮の一失						
勢い						
破竹の勢い						
志						
燕雀安んぞ鴻鵠の志を知らんや						

4) 国広 (2010)

一次						
手						
大手を振る	手当たり次第	手当たりばったり	手触り	手のひらを返したよ うな	手を引く	濡れ手で粟
脚・足						
揚げ足を取る	揚げ足をすくう	足を洗う	足をすくう	足を引く		
目・眼						
魚の目	薄目を開ける	目配り	目配せ	目障り		
頭						
頭割り	頭角を現す	頭角を抜く				
舌						
舌先三寸	舌の先	舌の根				
体						
体を壊す	体調を崩す	体調を壊す				
羽						
白羽の矢を立てる	白羽の矢を射止める					
耳						
耳あたりが良い	耳触りが良い					
眉						
眉をひそめる						
面						
矢面に立つ						
指						
指折り数える						
心						
一心同体						
顔						
顔に剣がある						
髪						
危機一髪						
口						
口先三寸						
首						
小首をかしげる						
二次						
息						
一息つく						
唾						
固唾を呑む						

拓殖大学大学院言語教育研究科博士後期課程

三次							
気							
気が置けない	気が置ける	気障り	気ばかり焦る				
怒り							
怒り心頭に達する	怒り心頭に発する						
痛み							
痛みに耐える	痛みに絶える						
意							
意志薄弱							
念							
正念場							
情け							
情けは人の為ならず							

5) 西谷 (2016)

一次							
手							
新手の詐欺	回向を手向ける	大手を振る	後手に回る	逆手に取る	手向けの香華	手数をかける	手を拱く
手を汚す	手が離れる	手を変え品を変え	濡れ手で粟	手を入れる	触手を伸ばす	手に負えない	諸手を上げる
手を引く							
目							
一目置く	開眼供養	血眼になる	目の当たりにする	目途が立つ	目に一丁字もない	目に角を立てる	目が据わる
目くじらを立てる	目をくぐる	目に物見せる	目の色を変える	目を盗む	目端が利く		
口							
口の端に上る	口耳の学	糊口を凌ぐ	虎口を脱する	人口に膾炙する	口裏を合わせる	口が滑る	口が減らない
口にする	口火を切る	口を挟む	開いた口が塞がらない	口も八丁手も八丁			
頭							
頭を垂れる	正直の頭に神宿る	頭が高い	一頭地を抜く	頭の上の蠅も追えない	頭角を現す	泣く子と地頭には勝てぬ	頭が固い
頭が下がる	頭が黒いネズミ						
足・脚							
一足飛び	揚げ足を取る	二足の草鞋を履く	後足で砂をかける	馬脚を現す	足元から鳥が立つ	足を洗う	浮足立つ
身							
身上を潰す	身を粉にする	肩身が狭い	身命を賭する	身も蓋もない	身を呈する	身銭を切る	身に覚えがある
心							
心を一にする	一心不乱	心が躍る	良心の呵責を覚える	疑心暗鬼を生ず	心血を注ぐ	男心と秋の空	
顔							
顔を汚す	汗顔の至り	顔色なし	所得顔をする	顔が利く	顔色を窺う	合わせる顔がない	
歯・牙							
歯牙にもかけない	毒牙にかかる	歯に衣着せぬ	櫛の歯が欠けたよう	ごまめの歯ざしり	歯が浮く		
骨							
気骨がある	気骨が折れる	骨の髄まで	骨身を削る	骨肉相食む	老骨に鞭打つ		
体							
体を壊す	体をなす	体のいい	這々の体	体があく			
耳							
耳朶に触れる	耳目を引く	俗耳に入りやすい	耳を聳する	小耳に挟む			
尾							
尾羽打ち枯らす	掉尾を飾る	尾ひれをつける	驥尾に付す				
首							
首を傾げる	首を縦に振る	首を突っ込む	寝首をかく				
舌							
長広舌を振るう	舌が滑る	舌先三寸	舌端火を吐く				
指							
指呼の間	指をくわえる	食指が動く					
腹							
腹に一物	腹が据わる	自腹を切る					
腰							
腰が据わる	話の腰を折る	胸三寸に納める					
あご							
あごが干し上がる	あごを出す						
背							
背に腹はかえられぬ	団栗の背比べ						

拓殖大学大学院言語教育研究科博士後期課程

肝							
肝が据わる	肝に銘ずる						
胸							
胸襟を開く	胸が躍る						
面							
面も振らず	淡面を作る						
眉							
愁眉を開く	柳眉を逆立てる						
角							
角が取れて丸くな る	角を矯めて牛を殺 す						
髪							
間髪を入れず	後ろ髪を引かれる						
羽							
羽を伸ばす							
尻							
尻に敷く							
鼻							
木で鼻を括る							
鱗							
逆鱗に触れる							
脂							
脂が乗る							
腸							
腸が煮えくり返る							
肌							
一肌脱ぐ							
唇							
ほぞを噛む							
乳							
乳離れができない							
膝							
膝を交えて相談す る							
脇							
脇が甘い							
踵							
踵を返す							
肘							
掣肘を加える							
肉							
苦肉の策							
毛							
九牛の一毛							
二次							
声							
声色を使う	寂として声なし	鶴の一声	ここの声を上げる				
言							
多言を弄する	他言は無用	言うに及ばず	言うに事欠いて				
息							
息せき切る	意気に感じる	息の根を止める					
鳴							
鳴かず飛ばず	閑古鳥が鳴く	非を鳴らす					
唾							
唾棄すべき輩	困唾を呑む						
血							
血肉の争い	血道を上げる						
涙							
紅涙を絞る	雀の涙						
呼吸							
阿吽の呼吸							
涎							
垂涎の的							
脈							
脈がある							

拓殖大学大学院言語教育研究科博士後期課程

おくび							
おくびにも出さない							
咳							
響咳に接する							
三次							
気							
英気を養う	気後れがする	気がさす	鬼気迫るものがある	邪気を払う	嫌気がさす	氣勢を上げる	気が置けない
影							
影が薄い	見る影もない	影の形に添うように	三尺下って師の影を踏まず				
意							
意に介さない	意に介する	片意地張る	意を体する				
跡							
跡を継ぐ	跡を付ける	人跡未踏の地					
響							
響を扱う	響に放つ						
念							
念が入る	念頭に置く						
感							
万感こもこも至る	感に堪えない						
思い							
思い半ばに過ぎる	思案に余る						
笑い							
笑う門にも福が来る	一笑に付す						
想							
愛想が尽きる	妄想も小想も尽き果てる						
恨み							
遺恨を晴らす	恨み骨髄に徹す						
情							
惻隠の情							
沈黙							
沈黙は金							
瘦せ							
瘦せても枯れても							
反吐							
反吐が出る							
喧嘩							
金持ちけんかせず							
筋							
堪忍袋の緒が切れる							
魄							
落魄の身となる							
態							
悪態を吐く							
情け							
情けは人の為ならず							
志							
青雲の志を抱く							
憂い							
憂き身をやつす							
機嫌							
機嫌を取る							
慮							
千慮の一失							
精							
精魂尽きる							
恥							
恬として恥じない							
嘆き							
亡羊の嘆							
怒り							
怒り心頭に発する							
嘘							
嘘も方便							

6) 林 (2002)

一次							
目							
大目玉を食う	大目に見る	お目玉を食う	お目にかかる	お目にかける	片目があく	片目をつむる	この目で見ると
白い目で見ると	血眼になる	長い目で見ると	ひとみを凝らす	人目がうるさい	人目に余る	人目にさらす	人目に立つ
人目につくと	人目を忍ぶ	人目をつつむ	人目をばばかり	人目を引くと	まなじりを決する	目のあたりにする	目のあたりにみる
見る目がある	見た目	目がいい	目がいく	目がうつると	目顔で知らせる	目が利くと	目がくらむ
目が肥える	目がさえる	目が覚める	目が覚めるような	めがしらが熱くな	めがしらがうるむ	めがしらを押さえ	めがしらをぬらす
目が鋭いと	目がすわる	目が高い	目が近い	目が血走ると	目が届くと	目が飛び出るほど	目が留まると
眼角を立てると	目がない	目が走ると	目が早い	目が光ると	目が回ると	目からうろこが落	目から鼻に抜ける
目くじらを立てると	目先が利くと	目先を変える	目じゃない	目尻にしわを寄せ	目尻を下げる	目と鼻の先(間)	目と耳をふさぐ
目にあまると	目に入れる	目に浮かぶ	目に映ると	目に角を立てると	目に染みると	目にする	目に立つ
目に血が入る思い	目に付くと	目に飛び込む	目に留まると	目になれる	目に入る	目には目	目に触れる
目に見える	目に物言わせる	目にも見せる	目に焼きつく	目の色が変わると	目の上のこぶ(た	目の皮がたるむ	目の黒いうち
目の敵にする	目の毒	目の前が暗くなる	目の前に浮かぶ	目のやり場がない	目端が利くと	目鼻がたつ	目鼻がつくと
目鼻立ちが整う	目引き袖引き	目星をつける	目も当てられない	目もあやに	目もくれない	目を欺くと	目を疑う
目を奪う	目をうるませると	目を覆う	目を輝かす	目をかける	目をかすめると	目をくぐると	目を配ると
目を凝らす	目を避けると	目を皿のようにす	目を三角にする	目を白黒させる	目を澄ます	目を注ぐ	目をそばだてると
目をそむけると	目をつける	目をつぶると	目を吊り上げる	目を通すと	目を閉じると	目を盗む	目をはなすと
目を引くと	目を開くと	目をふさぐ	目を細めると	目を丸くする	目を見張ると	目をむくと	目を向けると
目をやる	目をよろこばす	脳目もふらない					
口							
あいた口が塞がら	後口が悪い	大きな口をきく(陰口をきく(た	軽口をたたく	口裏を合わせる	口がいやしい	口がうるさい
口が多い	口がおごると	口が重い	口がかかると	口が固いと	口が軽いと	口が腐っても	口がきけても
口が寂しい	口数が多い	口数が少ない	口がすっぽくなる	口がすべると	口が達者だ	口がへらな	口が曲がる
口から先に生まれ	口が悪い	口車に乗せると	口に合う	口に出すと	口に出ると	口に戸は立てられ	口にのぼると
口に任せると	口の下から	口の下で	口の端にのぼると	くちばしが黄色い	くちばしを入れる	口ほどにもない	口元がゆるむ
口元をほころばす	口元を歪めると	口を合わせる	口を入れる	口をきくと	口を切ると	口をきわめると	口を探す
口をさしはさむ	口を添えると	口を揃えると	口を出す	口をついて出ると	口を尽くす	口をつぐむ	口をつける
口をつつしむ	口を開ざす	口をぬぐう	口を濡らす	口のをりする	口を挟む	口を封じると	口を塞ぐ
口への字に曲げ	口への字に結ぶ	口を緘す	口を結ぶ	口をやしなう	口を割ると	口角泡をとばす	でっかい口をきく
憎まれ口をきく(一口に言う	人の口にのぼせると	へらず口をたたく				
顔							
青い顔をする	合わせる顔がない	顔色から血の気が	顔色をうかがう	顔色を変える	顔色を見る	顔が一変する	顔が青ざめると
顔が合わせられな	顔が亮れる	顔が利くと	顔が曇ると	顔がこわばると	顔がそろう	顔が立つ	顔がつかると
顔がつぶれる	顔が広い	顔がほころぶ	顔から血の気が引	顔から火が出る	顔に泥を塗ると	顔に紅葉を散らす	顔ぶれがそろう
顔向けができない	顔を合わせる	顔を生かす	顔をうかがう	顔をかす	顔をさらす	顔をそむけると	顔を出す
顔をつなぐ	顔を並べると	顔をのぞかせると	顔を見せると	顔面から血の気が	面の皮が厚いと	面の皮をはぐ	どの面さげと
なにくわめ顔	面と向かって	わがもの顔					
耳							
聞き耳を立てると	聞く耳を持たない	小耳に入れる	小耳にはさむ	耳が痛い	耳が汚れる	耳の痛い思いをす	耳が遠いと
耳が早い	耳に入れる	耳に障ると	耳にする	耳にたこができる	耳に立つ	耳につくと	耳に届くと
耳に飛び込む	耳に留めると	耳に残ると	耳に入る	耳に挟む	耳に響くと	耳に触れる	耳を疑う
耳を打つ	耳をかさない	耳を傾けると	耳を澄ます	耳をそばだてると	耳をたてると	耳をつくと	耳をつんざくと
耳をはばかり	耳をひらく	耳を塞ぐ	耳に蓋をする	わが耳を疑う			
頭							
頭が上がらない	頭があつくなる	頭がいかれる	頭が痛い	頭が固いと	頭がきれる	頭がさえる	頭が下がる
頭が働く	頭が低い	頭が古いと	頭から水を浴びた	頭から湯気を立て	頭にある	頭に浮かぶ	頭に入れる
頭にくると	頭に血が上がる	あまたにない	頭を上げる	頭を痛めると	頭を押さえる	頭を抱えると	頭をしぼると
頭をそると	頭を使う	頭を悩ませると	頭を離れない	頭をひねると	頭を冷やす	頭をめぐらす	頭をもたげると
かぶりを振ると							
鼻							
小鼻をうごめかす	小鼻をふくらませ	鼻息が荒いと	鼻息をうかがう	鼻があぐらをかく	鼻が利くと	鼻が高い	鼻がつかると
鼻薬をかがせると	鼻毛を数えると	鼻毛を抜くと	鼻先であしらう	鼻先でせせら笑う	鼻っ柱が強い	鼻っ柱を折ると	鼻であしらう
鼻で笑う	鼻にかける	鼻につくと	鼻の下が長い	鼻の下を伸ばす	鼻持ちならない	鼻も引つ掛けな	鼻を明かす
鼻をうごめかす	鼻を折ると	鼻をつき合わせる	鼻をならす				
首							
首が危ないと	首がつながると	首が飛ぶ	首がまわらない	首になる	首になわをつける	首根を押さえる	首をかしげると
首を切ると	首をくくると	首を左右に振ると	首をすくめると	首を揃えると	首を縦に振ると	首をつっこむ	首を長くして
首をひねると	首を振ると	首を横に振ると	小首をかしげると				

拓殖大学大学院言語教育研究科博士後期課程

胸							
胸糞が悪い	胸が熱くなる	胸が痛む	胸がいっぱいにな	胸が騒ぐ	胸がすく	胸が使える	胸がつぶれる
胸が詰まる	胸がはやる	胸が張り裂ける	胸が暗れる	胸三寸に曇む	胸に余る	胸に納める	胸に聞く
胸に刻む	胸に迫る	胸に曇む	胸に鉛をい置く	胸に火がつく	胸に秘める	胸に焼きつく	胸のうちの明かす
胸のつかえがおり	胸を打つ	胸をえぐられる思	胸を躍らせる	胸を借りる	胸を貸す	胸を焦がす	胸をつく
胸をときめかせる	胸をなでおろす	胸を張る	胸を開く	胸を膨らます	胸を割る		
腹							
片腹が痛い	下腹を張らせる	自腹を切る	私腹を肥やす	腹がある	腹がいえる	腹が大きい	腹が決まる
腹が黒い	腹が立つ	腹が太い	腹が減る	腹がよじれる	腹に一物	腹の皮をよる	空の虫が治まる
腹を合わせる	腹を切る	腹をくくる	腹をえぐる	腹をかかえる	腹をこしらえる	腹を肥やす	腹をさぐる
腹をみすかす	腹をみぬく	腹を詫む	腹を割る				
腰							
腰が落ち着く	腰が重い	腰が砕ける	腰が据わる	腰が強い	腰が抜ける	腰が低い	皮脂が弱い
腰巾着に徹する	腰につける	腰をあげる	腰を入れる	腰をうかす	腰を折る	腰を下ろす	腰をかける
中腰になる	逃げ腰になる	本腰を入れる					
肝・胆							
肝胆相照らす	肝胆を砕く	きもが据わる	きもが小さい	きもがつぶれる	きもが冷える	きもが太い	きもに銘じる
きもを決める	どきもを抜く						
腸							
断腸の思い	はらわたがくさる	はらわたがちぎれ	はらわたが煮えく	はらわたが見え透	はらわたをたたれる		
手							
合いの手を入れる	上手に出る	上手に行く	王手をかける	大手を振る	かしわ手を打つ	後手に回る	下手に出る
手足となる	手足を伸ばす	手があがる	手が空く	手がある	手がいっぱいだ	手が後ろに回る	手がかかる
手が込む	手が足りない	手がかかない	手が尽きる	手がつけれない	手が出ない	手が届く	手がない
手が長い	手が入る	手が離れる	手をはぶける	手が早い	手が塞がる	手が回らない	手心を加える
手塩にかける	手玉にとる	手付けを打つ	手取り足取り	手に汗を握る	手に余る	手に入れる	手に負えない
手に落ちる	手にかかっている	手にかける	手にする	手につかない	手に手をとって	手に届く	手に取るよう
手に握る	手に乗る	手に入る	手の内	手の打ちようがな	手の内を明かす	手の内を明らさま	手の内をさらす
手の内を見せる	手の裏を返す	手のつけようがな	手の中にある	手の施しようがな	手回しがいい	手も足も出ない	手を上げる
手を当てる	手を入れる	手を打つ	手をかえ品をかえ	手をかける	手を貸す	手を借りる	手を切る
手を下す	手を組む	手を加える	手をこまめく(拱	手を差し伸べる	手を染める	手を出す	手を使う
手を尽くす	手をつける	手をつなぐ	手を止める	手を握る	手を抜く	手を濡らさず	手を離す
手を離れる	手を引く	手を広げる	手を触れる	手を回す	手を結ぶ	手を焼く	手を休める
手を緩める	手を汚す	手を煩わす(わす	一手に握る				
足							
あげあしを取る	足が宙に浮く	足が重い	足が釘付けになる	足が地につかない	足がつく	足が出る	足が遠のく
足が早い	足が棒になる	足が向く	足腰が立たない	足腰が弱い	足蹴にする	足手まといになる	足で書く
足止めを食う	足並みが揃う	足並みが乱れる	足に任せる	足場を失う	足場を固める	足の踏み場がない	足踏みをする
足元がすくわれた	足元に付け込む	足元に火がつく	足元にも及ばない	足元にもよれない	足元の明るいうち	足元を見る	足を洗う
足を入れる	足を奪われる	足を限りに	足をすくわれる	足をとられる	足を抜く	足を伸ばす	足を運ぶ
足を引っ張る	足を踏み込む	足を向けて寝られ	土足で上がる	二の足を踏む	一足先に	一足早い	無駄足を踏む
尻							
尻馬に乗る	尻尾をつかむ	尻が青い	尻が暖まる	尻が重い	尻が軽い	尻が来る	尻がこぼれぬ
尻が据わらない	尻が長い	尻が割れる	尻車に乗る	尻毛を抜く	尻すぼみになる	尻にしく	尻に火がつく
尻に帆をかける	尻の持って行き場	尻餅をつく	尻を上げる	尻を押す	尻を落ち着ける	尻を据える	尻をたたく
尻をぬぐう	尻をほしよる	尻をまくる	尻を持ち込む				
肩							
肩がこる	肩すかしを食う	肩で息をする	肩で風を切る	肩にかかっている	肩に乗る	肩の荷が下りる	肩の荷が軽くなる
肩身が狭い	肩身が広い	肩をいからす	肩を入れる	肩を貸す	肩をそびやかす	肩を並べる	肩を持つ
身							
生身を削る	生身をひきぐ	身が固まる	身が軽い	身が縮む思い	身が入らない	身が引き締まる	身がもたない
身に会う	身に余る	身に覚えがない	身にこたえる	身にしみる	身に迫る	身につく	身につける
身につまされる	身の置き所がない	身の毛がよだつ	身のすくむ思い	身のほどを知る	身を任せる	身二つになる	身も凍る思い
身も心も	身も蓋もない	身も世もない	身を入れる	身を置く	身を起こす	身を落ち着ける	身を落とす
身を切られる	身を砕く	身を汚す	身を削る	身を焦がす	身を粉にする	身をさらす	身を沈める
身を持つ	身を浸す	身をすくめる	身を立てる	身をついやす	身を尽くす	身をつつしむ	身を挺する
身を投じる	身を投げる	身を乗り出す	身をひく	身をひそめる	身を震わせる	身をもちくずす	身をやつす
身を寄せる	わが身にひきつけ	わが身を燃焼させる					
骨							
骨髄に徹する	骨がある	骨が折れる	骨がしゃりになつ	骨に徹する	骨の髄まで	骨の髄までしゃぶ	骨抜きになる
骨身にこたえる	骨身にしみる	骨身を削る	骨身を惜しまず	骨を埋める	骨を拾う		
額							
額に青筋が浮かぶ	額に汗する	額にしわを寄せる	額に八の字を寄せ	額を集める			

拓殖大学大学院言語教育研究科博士後期課程

心臓							
心臓が強い	心臓が止まりそう	心臓に毛が生えて	心臓が弱い				
肺腑							
肺腑の抜けたよう	肺腑を砕く	肺腑をつく	肺腑を抉する	肺腑に落ちない			
臍							
へそが曲がる	臍で茶を沸かす	ほぞを固める	ほぞをかむ				
背							
背筋が凍る	背筋が寒くなる	背中をつめたいも	背にする	背筋が冷たくなる	背を向ける		
胃							
胃が痛い	胃が痛む						
腕							
腕があがる	腕がいい	腕が利く	腕が立つ	腕が鳴る	腕に覚えがある	腕によりをかける	腕をこまめく
腕をさする	腕を鳴らす	腕をふるう	腕を磨く	腕を見せる			
指							
後指を指される	指一本ささせない	指折り数える	指を屈する	指をくわえて	指を染める	指をつめる	
爪							
爪に火をともし	爪のあかほどもない						
掌							
掌を返すよう							
膝							
膝が笑う	膝元を離れる	膝を打つ	膝を折る	膝を崩す	膝をたたく	膝を正す	膝を突き合わせる
膝を乗り出す	膝を交える						
きびす							
きびすを返す	きびすを接する	きびすをひるがえ	きびすをめぐらす				
肘							
肘鉄砲を食う	肘鉄を食う						
股							
二股の棒を持つ	二股をかける	股にかける					
臍							
すねに傷を持つ	臍をかじる						
二次							
血							
返り血を浴びる	血気にはやる	血が頭に上る	血がおどる	血が通う	血が騒ぐ	血がたぎる	血がつながる
血がにじむ	血がのぼる	血が引く	血が沸く	血で血を洗う	血と汗	血となり肉となる	血の雨を降らす
血の色を失う	血の気をうせる	血の気が多い	血の気がさす	血の気が少ない	血の気をなくす	血の気が引く	血の気を失う
血の気を持って余す	血の涙	血のにじむような	血の出るような	血の巡りが悪い	血祭りにあげる	血道をあげる	血も涙もない
血わき肉おどる	血を受ける	血をしぼる	血をのぼらせる	血を吐く思い	血を引く	血を見る	血を分ける

7) 木原 (2014)

一次							
目							
大目に見る	長い目で見える	ひどい目に遭う	ひどい目に遭わず	見る目がある	目が利く	目が眩む	目が肥える
目が高い	目が冴える	目頭が熱くなる	目頭を押さえる	目が据わる	目が点になる	目の玉が飛び出る	目が届く
目がない	目が離せない	目が回る	目から鱗が落ちる		目から火が出る	目障り	目尻を下げる
目と鼻の先	目に余る	目の中に入れても痛くない	目に浮かぶ	目に触る	目に付く	目に留まる	目に入る
目に触れる	目に見えている	目にも留まらぬ	目の色を変える	目の色が変わる	目の上の瘤	目の黒いうち	目の毒
目の保養	目の前	目のやり場に困る	目も当てられない	目を覆う	目もくれない	目を疑う	目を奪う
目を輝かす	目をかける	目を配る	目をくらます	目を肥やす	目を凝らす	目を覚ます	目を血にする
目を三角にする	目を白黒させる	目を背ける	目を逸らす	目をつける	目をつぶる	目を通す	目を盗む
目を光らす	目を引く	目を伏せる	目を細める				
手							
痛手を負う	手が空く	打つ手がない	打つ手がある	手がない	手を打つ	手が要る	手が後ろに回る
手が掛かる	手が切れる	手を切る	手が込む	手が足りない	手がつけられない	手が出ない	手が届く
手が早い	手が塞がる	手が回らない	手が回る	手が焼ける	手詰まり	手取り足取り	手直しをする
手を入れる	手を加える	手に汗を握る	手に余る	手に負えない	手に職	手に付かない	手に手を取る
手に取るように	手に乗らない	手に渡る	手も足も出ない	手もなく	手を挙げる	手を合わせる	手を打つ
手を替え品を替え	手を貸す	手を借りる	手を組む	手を拱く	手を染める	手を出す	手を尽くす
手を付ける	手を通す	手を抜く	手を離れる	手を広げる	手を焼く	手を緩める	手を煩わせる

拓殖大学大学院言語教育研究科博士後期課程

口							
開いた口が塞がらない	口裏を合わせる	口がうまい	口が着る	口が肥える	口が重い	口が堅い	口が軽い
口が腐っても	口が裂けても	口が寂しい	口が過ぎる	口が酸っぱくなる	口を酸っぱくして	口が滑る	口を滑らす
口から先に生まれる	口が悪い	口車に乗る	口添えをする	口直しをする	口に合う	口ににする	口に出す
口に任せる	口の端に上る	口八丁手八丁	口火を切る	口を利く	口を揃える	口を出す	口をついて出る
口を慎む	口を尖らす	口を挟む	口を塞ぐ	口を割る	糊口を凌ぐ	減らず口を叩く	
顔・面							
合わせる顔がない	大きな顔をする	顔が売れる	顔が売れている	顔を売る	顔が利く	顔を利かす	顔が立つ
顔を立てる	顔がつぶれる	顔を潰す	顔が広い	顔から火が出る	顔に出す	顔に出る	顔に泥を塗る
顔ぶれが揃う	顔を赤らめる	顔を合わせる	顔を貸す	顔を出す	顔を見せる	顔を繋ぐ	顔を並べる
顔が並ぶ	厚顔である	面の皮が厚い	面の皮をはぐ	面汚し			
頭							
頭打ちになる	頭が上がらない	頭が痛い	頭が切れる	頭が下がる	頭から湯気を立てる		頭に入れる
頭に入る	頭にくる	頭の回転が速い	頭を痛める	頭を使う	頭を突っ込む	頭を悩ます	頭を捻る
頭を冷やす	頭を丸める	頭角を現す					
胸							
胸が痛む	胸を痛める	胸がいっぱい	胸が躍る	胸が弾む	胸をときめかす	胸を膨らます	胸が騒ぐ
胸が空く	胸がつかえる	胸が張り裂ける	胸に手を当てる	胸のつかえが取れる	胸焼けがする	胸を打つ	胸を貸す
胸を借りる	胸をなでおろす	胸を張る					
首							
首が危ない	首が繋がる	首が飛ぶ	首を斬る	首が回らない	首にする	首になる	首を切る
首に縄をつける	首の皮一枚	首を傾げる	首をすげ替える	首を縦に振る	首を突っ込む	首を長くする	首をひねる
首を横に振る							
腹							
私腹を肥やす	腹が据わる	腹が立つ	腹を立てる	腹黒い	腹に一物ある	腹に据えかねる	腹の皮がよじれる
腹を抱える	腹の足し	腹の虫が収まらない	腹をくくる	腹を下ろす	腹を据える	腹を探る	腹を割る
耳							
聞き耳を立てる	耳を傾ける	耳を澄ます	小耳に挟む	耳が痛い	耳が肥える	耳が早い	耳に障る
耳にタコができる	耳につく	耳に残る	耳を疑う	耳を貸す	耳を揃える	耳を塞ぐ	
足							
足が重い	足が地につく	足が付く	足が出る	足が遠のく	足が棒になる	足を洗う	足を奪う
足を揃う	足を取られる	足を伸ばす	足を引っ張る	足を向ける			
鼻							
鼻が高い	鼻が曲がる	鼻であしらう	鼻で笑う	鼻にかける	鼻の下が長い	鼻の下を伸ばす	鼻持ちならない
鼻を明かす	鼻をへし折る	鼻を突き合わせる	鼻をつく				
肩							
肩入れる	肩を持つ	肩が軽くなる	肩の荷が下りる	肩の荷を下ろす	肩が凝る	肩で息をする	肩で風を切る
肩肘を張る	肩を怒らす	肩を落とす	肩を並べる				
腰							
腰が重い	腰が軽い	腰が砕ける	腰が据わる	腰を据える	腰が抜ける	腰を抜かす	腰が低い
腰が引ける	腰を落ち着ける	腰を折る					
腕							
腕が上がる	腕を上げる	腕がいい	腕のいい	腕が立つ	腕が鳴る	腕に覚えがある	腕によりをかける
腕を振るう	腕を磨く						
舌							
舌打ちする	舌が肥える	舌足らず	舌鼓を打つ	舌の先で	舌の根の乾かぬうちに		舌を巻く
二枚舌を使う							
眉							
眉に唾をつける	眉を吊り上げる	眉をひそめる	眉をしかめる	眉間にしわを寄せ			
尻							
尻が重い	尻が軽い	尻に敷く	尻に火がつく	尻拭いをする			
膝							
膝が笑う	膝を打つ	膝を突き合わせる	膝を交える	膝を乗り出す			
指							
後ろ指を指される	指一本	指折り数える	指切りをする	指をくわえる			
歯							
奥歯に物が挟まる	歯が浮く	歯が立たない	歯に衣着せぬ	歯を食いしばる			
あご							
顎が落ちる	顎が外れる	顎で使う	顎を出す				
毛							
毛の生えた	心臓に毛の生えた	つむじを曲げる					
額							
額に青筋を立てる	額に汗する	額を集める					

頬							
頬が落ちそう	頬が緩む	頬を膨らます					
喉							
喉が鳴る	喉から手が出る						
肝							
へそが茶を沸かす	へそを曲げる						
けつ							
ケツの穴が小さい	ケツを捲くる						
あご							
あごが落ちる							
唇							
唇を噛む							
肘							
肘鉄砲を食う							
爪							
爪に火を点す							
脇							
脇が甘い							
背							
背に腹はかえられぬ							
股							
股にかける							
脛							
脛をかじる							
踵							
踵を返す							

<付録2> 本論文で取り扱う「一次」～「三次」身体語彙慣用表現リスト

「一次身体語彙慣用表現」

目	目が明く	目が利く	目が肥える	目が覚める	目が高い	目が近い	目が散る	目が詰む
	目が点になる	目が届く	目が留まる	目がない	目が離せない	目が光る	目が眩む	目が回る
	目が行く	目がよい	勝ち目がある	勝ち目がない	目頭が熱くなる	目先が利く	目先が変わる	目尻が切れ上がる
	目鼻がつく	羽目が外れる	見る目がない	目から鱗が落ちる	目から鼻へ抜ける	目から火が出る	目に余る	目に一丁字なし
	目に掛かる	目にかける	目に角を立てる	目に染みる	目に障る	目に立つ	目につく	目に留まる
	目に留める	目に入る	目に触れる	目に見えて	目にも留まらない	目に物を見せる	裏目に出る	大目に見る
	尻目にかける	落ち目になる	二言目には	目障りになる	羽目になる	ひどい目に遭う	人目に余る	人目に晒す
	人目に立つ	人目につく	ふしめになる	目八分に見る	弱り目にたたり目	目の色を変える	目の上のこぶ	目の上のたんこぶ
	目の玉	目の玉が飛び出る	目のつけどころ	目の詰まった	目の中に入れても痛くない	目の縁	十目の見るところ	目睫の間
	目と鼻の先	見た目のよい	鶉の目鷹の目で	長い目で見ると	目で物を言う	欲目で見ると	目も当てられない	目もくれず
	目もくれぬ	目ばたもえくぼ	夜の目も寝ずに	わき目も振らず	目を明ける	目を疑う	目を奪う	目を奪われる
	目を覆う	目をかける	目をかすめる	目を配る	目をくらます	目をくれる	目を凝らす	目を覚ます
	目を皿にする	目を皿のようにする	人目を忍ぶ	目を白黒させる	目を据える	目を注ぐ	目をそばだてる	目をそばめる
	目を逸らす	目を楽しませる	目を付ける	人目をつつむ	目をつぶる	目を通す	目を閉じる	目を留める
	目を盗む	目を走らせる	目を離す	目をほらす	目を光らせる	目を引く	目を開く	目をふさぐ
	目を伏せる	目を細める	目を丸くする	目を回す	目を見合わせる	目を見張る	目を見開く	目をむく
	目を向ける	目をやる	目を喜ばせる	青い目をする	跡目を継ぐ	網の目をくぐる	生き馬の目を抜く	色目を使う
	覆き目を見る	上目遣いをする	負い目を負う	大目玉を食う	目頭を押さえる	目角を立てる	目くじらを立てる	目くそ鼻くそを笑う
	目こぼしをする	目先を変える	目尻を下げる	目鼻を付ける	目振りを入れる	羽目を外す	人目を盗む	人目をばはかる
	人目を引く	役目を果たす	横目を使う	脇目を振る	金に糸目をつけない	一目置く	二目と見られない	抜け目ない
	人の見る目	目引きそで引き	目玉た飛び出る	面目丸つぶれ				

拓殖大学大学院言語教育研究科博士後期課程

手	手が上がる	手が空く	手が掛かる	手が切れる	手が込む	手が足りない	手が付かない	手が付く
	手が付けられない	手が出ない	手が届く	手が離せない	手が離れる	手が早い	手がふさがる	手が回る
	手が後ろに回る	手癖が悪い	王手がかかる	小手が利く	火の手が上がる	喉から手が出る	手放しで喜ぶ	ぬれ手であわ
	手に汗を握る	手に余る	手に合わない	手に入れる	手に入れやすい	手に受ける	手に負えない	手に負える
	手にかかる	手にかける	手に提げる	手にする	手につかない	手に手を取る	下手に出る	手に取る
	手に握る	手に乗る	手に持つ	手中に収める	後手に回る	手遅れになる	手塩にかける	人手にかかる
	手のある	手の込んだ	手の出し方がない	手の付いた	手の平を返す	手のひらを返すよう	手も足も出ない	手もなく
	抜く手も見せず	手をあげる	手を当てる	手を合わせる	手を入れる	手を打つ	手を置く	手を替え品を替え
	手をかける	手をかざす	手を貸す	手を借りる	手を切る	手を組む	手を加える	手を擦る
	手をこまぬく	手を差し伸べる	手を締める	手を染める	手を出す	手を携える	手を叩く	手を束ねる
	手を尽くす	手を付ける	手を繋ぐ	手を通す	手を取り合う	手を触れる	手を握る	手をのばす
	手を抜く	手をのばす	手を離れる	手を引く	手を広げる	手を触れる	手をふる	手を施す
	手を回す	手を結ぶ	手を焼く	手を煩わす	赤子の手をねじる	赤子の手をひねるよう	痛手を負う	王手をかける
	大手を広げる	奥の手を使う	胸いかに手をかまれる	かしわ手を打つ	小手をかざす	先手を取る	手刀を切る	触手を伸ばす
	手出しをする	手並みを見せる	抜き手を切る	人手を借りる	人手を頼む	人手を控える	人手を煩わす	平手打ちを食う
平手打ちを食らわす	揉み手をする	横手を打つ	あの手この手	お手並み拝見	万雷の拍手	手ぐすね引く	お手柔らか	
口	口がうまい	口がうるさい	口が奢る	口が重い	口が掛かる	口が堅い	口が軽い	口が肥える
	口が裂けても	口が寂しい	口が過ぎる	口が滑る	口が減らない	口がほぐれる	口が回る	口が悪い
	後口が悪い	口にする	口に出す	口に上る	口に乗る	口車に乗る	口の端に掛ける	口の端に上る
	口ほどにもない	口も八丁手も八丁	口を合わせる	口をかける	口を利く	口を切る	口を極めて	口を糊する
	口を滑らす	口をそろえる	口を出す	口をついて出る	口をつぐむ	口を尖らせる	口を閉ざす	口を閉じる
	口をぬぐう	口をぬらす	口をはさむ	口を開く	口をふさぐ	口を封じる	口をへの字に曲げる	口をへの字に結ぶ
	口を結ぶ	口を割る	悪たれ口をたたく	大きな口をたたく	大口をたたく	陰口を利く	口裏を合わせる	口角泡を飛ばす
	口火を切る	糊口をしのぐ	冗談口をたたく	ため口を利く	憎まれ口を利く	憎まれ口をたたく	無駄口を利く	無駄口をたたく
	減らず口をたたく	悪口を言う	口舐りする	口八丁手八丁				
身	身が固まる	肩身が狭い	身が入る	肩身が広い	身が持てない	身に余る	身に覚えのない	身に覚えがない
	身に染みる	骨身に染みる	身に過ぎる	身につく	身に付ける	身につまされる	身二つになる	受け身になる
	骨身にこたえる	骨身に堪える	身の置き所がない	身の毛もよだつ	身の程知らず	身もふたもない	身も世もない	身を焦がす
	身を入れる	身を売る	身を置く	身を起こす	骨身を惜しむ	骨身を惜しまない	身を落とす	身を固める
	身をかかわす	身を切られるような	身を砕く	身をくねらせる	当身を食らわす	身を削る	身を粉にする	身を沈める
	身を持する	身を捨てる	肩身を狭くする	身を立てる	身を尽くす	身を挺する	身を投じる	身を投げる
	身を任せる	身を持ち崩す	身を持って得々	身を引く	身を委ねる	身を寄せる	黄身をやつす	全身全霊を打ち込む
	骨身をけずる	身の深白を明かす	明日は我が身	肌身離さず				
腹	腹が黒い	腹が下る	腹が洪る	腹が空く	腹が据わる	腹が立つ	腹が突っ張る	腹が張る
	腹が膨れる	腹が太い	腹が減る	小腹が立つ	腹に据えかねる	腹に巻く	腹の皮をよる	腹の据わった
	腹の立つ	腹のできた	腹の虫がおさまらない	腹を合わせる	腹を痛める	腹を抱える	腹を固める	腹を決める
	腹を切る	腹をくくる	腹を下す	腹をこしらえる	腹を肥す	腹を壊す	腹を探る	痛くもない腹を探られる
	腹をさす	腹を据える	腹をすかさず	腹を立てる	腹を減らす	腹を割る	自腹を切る	私腹を肥やす
	背に腹は代えられぬ	詰め腹を切る	腹八分	腹藏ない	むかつ腹を立てる	腹汚い		
顔	顔が合わせられない	顔が売れる	顔が利く	顔がそろう	顔が立つ	顔が潰れる	顔がはれる	顔が広い
	顔向けができない	合わせる顔がない	顔から火が出る	顔にかいてある	顔に出す	顔に出る	顔に泥を塗る	尊顔を接する
	汗顔の至り	顔色のよい	知らぬ顔の半兵衛	花のかんばせ	顔を赤らめる	顔を合わせる	顔を売る	顔を貸す
	顔を曇らせる	顔をしかめる	顔をそろえる	顔を出す	顔を立てる	顔を突き合わせる	顔を作る	顔をつなぐ
	顔を潰す	顔を直す	顔を見合わせる	顔を見せる	顔を向ける	顔を汚す	大きな顔をする	顔色を変え
	怖い顔をする	尊顔を拝する	青白い顔	苦虫を噛み潰したような顔	顔色なし			
心	心が痛む	心が騒ぐ	心が疲れる	心の底	心がはやる	居心地がよい	下心がある	心得がある
	心掛けのよい	心持がよい	心臓が強い	心にかか	心にかか	心にかか	心にそう	心に留める
	心にもない	怒り心頭に発する	核心に触れる	心魂に徹する	心臓に毛が生えている	生きた心地もない	心を致す	心を痛める
	心をくすぐる	心を砕く	心を配る	心を込める	心をやる	心を許す	心を読む	核心をつく
	心血を注ぐ	心魂を傾ける	心胆を寒からしめる	手心を加える	重心を置く	心行くまで	心痛む	心置きなく
	心なしか	心ならずも	心もとない	天にも昇る心地				
胸	胸が痛む	胸がいっぱいになる	胸が裂ける	胸が騒ぐ	胸がすく	胸がつかえる	胸がつぶれる	胸が詰まる
	胸がとどろく	胸が張り裂ける	胸がふさが	胸が焼ける	胸こそが悪い	胸騒ぎがする	胸に余る	胸に抱く
	胸におさめる	胸に落ちる	胸に刻む	胸にしんとくる	胸にたたむ	胸にこたえる	胸に迫る	胸の内
	胸のすくような	胸のつかえ	胸のつかえが下り	胸を痛める	胸を打つ	胸を躍らせる	胸を貸す	胸を借りる
	胸をさす	胸を焦がす	胸をたたく	胸を突く	胸をとどめかす	胸をとどめかす	胸をなでおろす	胸を張る
	胸を膨らませる	胸筋を開く	胸ぐらを取る					
足	足が奪われる	足が付く	足がつる	足が早い	足がふらつく	足並みがそろう	足に任せる	足元にも及ばない
	足の取れた	足の踏み場もない	二の足の草鞋を履く	足もとへも寄り付けない	足を洗う	足を入れる	足を奪う	足をすくう
	足をすくわれる	足をすりこ木にする	足を取られる	足を引っ張る	足を棒にする	足を使う	足を留める	足を運ぶ
	足を踏み入れる	二の足を踏む	足を向ける	後足で砂をかける	揚げ足を取る	足取りをつかむ	足並みをそろえる	足場を置く
	足元を見る	空足を踏む	驕足を伸ばす	無駄足を運ぶ	無駄足を踏む	一足飛びに	浮足立つ	抜き足差し足
	からすの足跡							

拓殖大学大学院言語教育研究科博士後期課程

頭	頭が上がらない	頭が痛い	頭がさえる	頭の下がる	頭が高い	頭が働く	頭が低い	頭にくる
	頭打ちになる	先頭に立つ	念頭に置く	路頭に迷う	怒り心頭に発する	頭の中が真っ白になる	頭の雪	頭のよい
	頭を痛める	頭を下ろす	頭を押さえる	頭を抱える	頭を下げる	頭をしぼる	頭を出す	頭を使う
	頭を悩ます	頭を働かす	頭をはねる	頭をひねる	頭を冷やす	頭をもたげる	頭を丸める	かぶりを振る
	首頭を取る	頭角を表す	先頭を切る	話頭を転ずる	生死の関頭	頭でっかち		
鼻	鼻が高い	鼻が出る	鼻が曲がる	鼻血が出る	鼻水が出る	鼻っ柱が強い	目鼻がつく	鼻であしらう
	鼻で笑う	鼻先でせせら笑う	鼻にかかる	鼻にかける	鼻につく	鼻の下	鼻の下が長い	鼻の下を伸ばす
	目から鼻へ抜ける	鼻も引っかけない	鼻を明かす	鼻を打つ	鼻をうごめかす	鼻を折る	鼻をかむ	鼻を高くする
	鼻を垂らす	鼻を突く	鼻を鳴らす	鼻をひる	鼻っ柱をへし折る	鼻柱をへし折る	木で鼻をくくったような	木で鼻をくくる
	鼻毛を読まれる	目鼻を付ける	目こそ鼻くそを笑う	目と鼻の先	鼻持ちならない			
耳	耳が痛い	耳が遠い	耳が肥える	耳が早い	耳がよい	耳に当たる	耳に入れる	耳に逆らう
	耳に障る	耳にする	耳にたこができる	耳に立つ	耳につく	耳に留まる	耳に留める	耳に入る
	耳に挟む	小耳にはさむ	俗耳に入りやすい	寝耳に水	耳朶に触れる	馬の耳に念仏	耳を疑う	耳を傾ける
	耳を貸す	耳を澄ます	耳をそばだてる	耳をそるえる	耳をつんざく	耳をふさぐ	耳を聳する	聞き耳を立てる
	牛耳をとる	針の耳	パンの耳					
肩	肩が怒る	肩がこる	肩が張る	肩身が狭い	肩身が広い	肩にかける	肩にする	双肩に担う
	肩の荷が下りる	肩の荷を下ろす	肩で息をする	肩で風を切る	肩を入れる	肩を貸す	肩を怒らす	肩を落とす
	肩をすくめる	肩をそひやかす	肩をたたく	肩を並べる	肩を張る	肩を持つ	肩を揉む	肩透かしを食う
	肩透かしを食わせる	肩身を狭くする	一肩担ぐ					
腰	腰がある	腰が重い	腰が軽い	腰が砕ける	腰が据わる	腰が高い	腰が立たない	腰が立つ
	腰が強い	腰が抜ける	腰が低い	腰が弱い	腰に提げる	腰に付ける	腰砕けになる	腰を上げる
	腰を入れる	腰を浮かす	腰を落ち着ける	腰を下ろす	腰を折る	腰をかける	腰を据える	腰を抜かす
	腰を割る	本腰を入れる	話の腰を折る					
首	首がすわる	首がつながる	首が飛ぶ	首が回らない	首にする	首になる	おくびにも出さない	首を掻き落とす
	首をかしげる	首を切る	首をくくる	首をすげ替える	首を縦に振る	首を突っ込む	首を長くする	首を捻る
	首を振る	首を横に振る	首根っこを押さえる	小首を傾ける	寝首をかく	鬼の首を取ったよう	首の皮一枚	思案投げ首
	首尾よい							
骨	骨が折れる	気骨が折れる	骨と皮になる	骨髄に徹する	骨身にこたえる	骨身に染みる	恨み骨髄に徹する	骨の折れる
	骨肉の争い	愚の骨頂	ばかの骨頂	骨を惜しむ	骨を折る	骨を捨てる	大骨を折る	小骨を折る
	骸骨を乞う	骨身を惜しまない	骨身を惜しむ	骨身をけずる	無駄骨を折る	なかなか骨だ	骨肉相食む	
尻	しりがあたたまる	尻が重い	しりが軽い	しりが来る	尻が据わる	尻が長い	しりが割れる	しり癖が悪い
	尻に敷く	尻に火がつく	尻馬に乗る	尻目にかける	しりの穴	しりをあげる	しりをからげる	尻を据える
	しりをはしよる	尻をまくる	しりを割る	尻毛を抜く	しりもちをつく	しりっぺた	しり付き	
面	面と向かう	体面にこだわる	矢面に立つ	泣き面に蜂	面の皮	面の皮が厚い	面の皮をはぐ	赤面の至り
	いい面の皮	面も振らず	臆面もなく	面を取る	仮面をかぶる	仮面を脱ぐ	しかめ面をする	体面を保つ
	ふくれっ面をする	ほえ面をかく	面皮をはぐ	面目を失う	面目を施す	額面どおり		
歯	歯が浮く	歯が立たない	歯が抜ける	歯車がかみ合う	歯車がかみ合わない	歯形が残る	くしの歯が欠けたよう	歯に衣を
	歯に衣着せぬ	奥歯に物の挟まった	歯牙にもかけない	歯の根が合わない	歯切れのよい	歯触りのよい	年歯も行かぬ	歯を食いしばる
	歯をかむ	歯を立てる	白い歯を見せる	歯止めをかける	歯止めをする	歯がゆい		
肝	肝が据わる	肝が太い	肝に答える	肝に染みる	肝に銘じる	肝をいる	肝を奪う	肝を落とす
	肝を消す	肝を据える	肝をつぶす	肝を練る	肝を冷やす	荒肝を抜く	荒肝をひしぐ	肝胆を砕く
	度肝を抜かれる	度肝を抜く	肺肝を砕く	肝胆相照らす				
皮	皮離れがよい	渋皮がはげる	面の皮が厚い	化けの皮が剥がれる	欲の皮が突っ張る	欲の皮が張る	面皮をはぐ	面の皮をはぐ
	化けの皮を表す	腹の皮をよる	薄皮のむけた	うその皮	首の皮一枚	面の皮	いい面の皮	化けの皮
	一皮むける	骨と皮になる						
腕	腕がある	腕が鳴る	腕に覚えがある	腕によりをかける	腕の利く	腕の立つ	腕の振るいどころ	腕を組む
	腕をこまぬく	腕をさする	腕を振るう	腕を磨く	二の腕	のれんに腕押し		
舌	舌が回る	筆舌に尽くし難い	舌触りのよい	舌をかむ	舌を出す	舌を振るう	舌を巻く	舌鼓を打つ
	舌端火を吐く	二枚舌を使う	弁舌を振るう	陰で舌を出す	舌足らず	舌先三寸		
膝	膝が抜ける	膝が笑う	膝を折る	膝を抱える	ひざをかかめる	ひざを崩す	膝を屈する	ひざを組む
	膝を進める	ひざを抱く	ひざを正す	膝を突き合わせる	ひざをつく	ひざを交える		
毛	毛が抜ける	毛が生える	心臓に毛が生えている	兎の毛で突いたほど	毛筋のよい	毛並みのよい	身の毛もよだつ	尻毛を抜く
	毛を吹いて糞を求める	鼻毛を読まれる	総毛立つ	毛羽立つ				
背	上背がある	背筋が寒くなる	背にする	背に腹は代えられぬ	背中合わせになる	背の高い	背の低い	どんぐりの背比べ
	背水の陣	背を向ける	背筋を立てる	背中をかく				
指	食指が動く	指先がじんとする	十指の指すところ	指呼の間	指折りの	指を操る	指を折る	指をくわえる
	指をくわえて見る	後ろ指を指される	後ろ指を指す	三つ指をつく				
髪	髪がそけい立つ	緑の黒髪	髪を下ろす	髪を染める	髪をとかす	髪を撫で付ける	髪を結う	後ろ髪を引かれる
	間髪を入れず	怒髪天を衝く	間髪					
筋	筋が通る	背筋が寒くなる	筋の通った	毛筋のよい	筋を通す	胸筋を開く	背筋を立てる	筋立てをする
	筋道立った	筋骨たくましい	一筋縄ではいかない					

拓殖大学大学院言語教育研究科博士後期課程

肌	肌が荒れる	鳥肌が立つ	肌を入れる	肌を脱ぐ	肌を許す	肌を汚す	片肌を脱ぐ	もろ肌を脱ぐ
	肌触りのよい	肌身離さず	一肌脱ぐ					
眉	まゆが曇る	眉に唾を付ける	眉に唾を塗る	眉に火がつく	眉を吊り上げる	眉をひそめる	眉を開く	眉を寄せる
	愁眉を開く	柳眉を逆立てる	まゆ一つ動かさない					
尾	尾ひれが付く	驢尾に付く	驢尾に付す	尾ひれを付ける	尾を引く	尾羽うち枯らす	首尾よい	
傷	傷がつく	傷のある	傷を負う	傷をつける	刀傷ざたに及ぶ	脛に傷を持つ	傷ついた	
角	角が立つ	角が落ちる	角が取れる	角が生える	角を出す	角を生やす	頭角を表す	
懐	懐が厚い	懐が暖かい	懐が寂しい	懐が寒い	懐を痛める	懐を肥やす		
臍	へその緒	臍(ほぞ)の緒	へそで茶を沸かす	臍(ほぞ)を決める	へそを曲げる	へその緒を切つて		
顎	あごが落ちる	あごが干し上がる	あごで使う	あごを出す	あごを外す			
牙	歯牙にもかけない	きばをかむ	きばをとぐ	きばを鳴らす	きばをむく			
体	体面にこだわる	体をかむ	体面を保つ	体を張る	ほうほうの体			
眼	眼中に置かない	眼中にない	眼下に見る	のみ取り眼で	眼光紙背に徹する			
腸	腸が煮えくり返る	腸を断つ	断腸の思い	断腸の思いをする	羊腸たる山道			
頬	頬が落ちる	頬がこける	ほっぺたが落ちる	ほおを膨らます	ほおづえを突く			
羽	羽振りのよい	羽を伸ばす	尾羽うち枯らす	切羽詰まった	毛羽立つ			
股	こまたが切れ上がる	股に掛ける	二またをかける	小股をすくう	股立を取る			
腑	腑が抜ける	腑に落ちない	腑の抜けたような	肺腑を突く	胃の腑			
嘴	嘴が黄色い	嘴の黄色い	嘴を入れる	くちばしを挟む				
尻尾	尻尾を出す	尻尾をつかむ	しっぽを振る	しっぽをまく				
肉	粹肉(ひにく)の嗅	骨肉の争い	血湧き肉躍る	骨肉相食む				
喉	喉が鳴る	喉が詰まる	喉から手が出る	咽喉を扼する				
額	額に汗する	額にしわを寄せる	額を集める	額を合わせる				
鱗	目から鱗が落ちる	逆鱗に触れる	片鱗を示す					
胆	肝胆を砕く	心胆を寒からしめる	肝胆相照らす					
脚	脚光を浴びる	馬脚を表す						
唇	唇をかむ	唇をとがらす						
こぶ	目の上のこぶ	目の上のたんこぶ						
神経	神経に障る	神経を逆なでする						
髓	骨髓に徹する	根み骨髓に徹する						
脛	脛に傷を持つ	親の脛をかじる						
爪	爪に火をともし	爪を研ぐ						
脳	脳漿をしぼる	脳みそをしぼる						
肺	肺肝を砕く	肺腑を突く						
ひげ	ひげが濃い	ひげのちりをはらう						
肘	ひじをつく	肘鉄砲を食らわす						
脂	脂が乗る							
えくぼ	目ばたもえくぼ							
骸	骸骨を乞う							
旋毛	つむじをまげる							
瞳	瞳を凝らす							
臂	一臂の力を貸す							
まなじり	まなじりをけつする							
脇	小脇に抱える							

「二次身体語彙慣用表現」

血	血肉の争い	血が頭に上る	血が上る	血がおどる	血が通う	血が凍る(ような)	血が下る	血が騒ぐ
	血が渋く	血が滾る	血が垂れる	血が繋がる	血が出る	血が流れる	血がにじむ	血が滲む(よう)
	血がのぼる	血が躍る	血が引く	血が沸く	鼻血が出る	血気が尽きる	血圧が上がる	血圧が下がる
	血で血を洗う	血と汗	血となり肉となる	血に飢える	血に狂う	血に逆らう	血に濡れる	血気にはやる
	血に火がつく	血に浸る	血に燃える	血に基づく	血に酔う	血気に逸る	血祭りに上げる	血眼になる
	血の汗	血の汗を流す	血の雨	血の雨が降る	血の雨を降らす	血の色を失う	血の海	血の気
	血の気が頭へ上る	血の気が多い	血の気がさす	血の気が少ない	血の気が引く	血の気を失う	血の気をうせる	血の気を持って余す
	血の気をなくす	血の筋は七代	血のつながった	血の出るよう	血の通った	血の涙	血の涙を絞る	血のおいが漂う
	血のにじむような	血の道	血の巡り	血の巡りがいい	血の巡りが悪い	血色のよい	血統のよい	血は争えない
	血は水よりも濃い	血も凍るような	血も涙も無い	血も肉もない	血を味わう	血を浴びる	血をあやす	血を洗う
	血を受ける	血を受け継ぐ	血を失う	血を奪う	血を汲む	血を捧げる	血を授ける	血をしぼる
	血を吸う	血を吸る	血を注ぐ	血を出す	血を継ぐ	血を流す	血を舐める	血をのぼらせる
	血を吐く思い	血を引く	血を冷やす	血を見る	血を以て血を洗う	血を宿す	血を沸かす	血を分ける
	生き血をしぼる	生き血を吸う	返り血を浴びる	血相を変える	膏血を絞る	心血を注ぐ	血道をあげる	血湧き肉躍る

拓殖大学大学院言語教育研究科博士後期課程

息	息が合う	息が荒い	息が上がる	息が重い	息が掛かる	息が通う	息が切れる	息が苦しい
	息が凍る	息が絶える	息が続く	息が詰まる	息が通る	息が長い	息が鳴る	息が抜けない
	息が抜ける	息が入る	息が弾む	息がびったり	息が深い	息が乱れる	ため息が出る	ため息が漏れる
	鼻息が荒い	息の緒	虫の息	息の長い追及	息の下に	息の下に言う	息の根が留まる	息もつかせず
	息もつかせぬ	息を荒くする	息を荒げる	息を入れる	息を失う	息を落とす	息を返す	息をかく
	息を切らす	息を切る	息を切らせる	息をこぼす	息を凝らす	息を殺す	息をする	息をする間もない
	息を立てる	息をつく	息をつく暇もない	息を継ぐ	息を詰める	息を整える	息を止める	息を鳴らす
	息を抜く	息を延ぶ	息を呑む	息を吐く	息を弾ませる	息を引き取る	息を潜める	息を吹き返す
	息を交える	息を漏らす	息を弱くする	息抜きをする	肩で息をする	息の根の続くほど張り上げる	息の根を止める	大息をつく
	ため息をつく	吐息を流す	鼻息を伺う	青息吐息				
力	力がある	力が落ちる	力が衰える	力が及ばない	力が及ぶ	力が加わる	力がこもる	力が足りない
	力が足りる	力が尽きる	力がつく	力が強い	力が出る	力が乏しい	力がない	力が抜ける
	力が入る	力が放つ	力が潜む	力が弱い	力がわく	力こぶしがこらえる	鬼の力が立ち添う	力とする
	力に余る	力にする	力に頼る	力になる	力に任せる	力の限り	力を合わせる	力を入れる
	力を生む	力を得る	力を落とす	力を貸す	力を借りる	力を加える	力を込める	力を添える
	力を注ぐ	力を出す	力を尽くす	力をつける	力を問う	力を抜く	力をのぼす	力を引く
	力を振るう	力こぶを入れる	鬼の力が立ち添う	死力を尽くす	馬力をかける	力点を置く	一臂の力を貸す	回天の力
	縁の下の力持ち	力及ばず						
声	声が上がる	声がある	声が大きい	声が掛からない	声がかかる	声が枯れる	声がかれるほど	声がする
	声が高い	声が立たない	声が小さい	声が出る	声を通る	声が太い	蚊の音が弱い	喊声があがる
	鬼の音がする	声を上げる	声を荒げる	声を合わせる	声を惜しまず	声を限りに	声をかける	声を枯らす
	声をしのばせる	声を絞り出す	声を揃える	声を出す	声を立てる	声をのむ	声をはかりに	声を潜める
	うぶ声を上げる	歓声をあげる	喊声をあげる	掛け声をかける	呱呱の声をあげる	産声を上げる	声色を使う	ときの声をあげる
	蚊の鳴くような声	声色を使う	あまた声して	黄色い声	黄色なる声	呱呱の声	洪い声	寂として声なし
	声涙共に下る	雀の千声より鶴の一声	八声の鶴	天の声	ときの声	声涙ともに下る		
言う	唐人の寝言	うわごとを言う	小言を言う	泣き言を言う	寝言を言う	不足を言う	物を言う	物を言わせる
	礼を言う	あきれて物が言えない	あまりと言えはあまりの	言う口の下から	言う言葉の下から	言うに言われない	言うに言われぬ	言うに及ばず
	言うに事欠いて	言うにも余る	言うまでもない	言うもおろか	言うより早く	いわく言い難し	言わず語らず	言わずと知れた
	言わずもがな	言わぬが花	言わぬ先に	言わぬは言うにまざる	言わぬより	言を食む	言を左右にする	言語に絶する
	他言は無用	多言を弄する	嫌みを言う	一言もない				
涙	涙が落ちる	涙が尽きる	涙が出る	涙が流れる	涙が干る	涙にあふれる	涙におぼれる	涙にかきくれる
	涙に曇る	涙に暮れる	涙に沈む	涙に濡れる	涙にむせぶ	涙に脆い	涙の種	涙の目が開かない
	男の涙	雀の涙	随喜の涙	声涙ともに下る	血の涙	泣きの涙	血も涙も無い	涙もかきあえず
	涙を落とす	涙をこぼす	涙をたる	涙を拭う	涙をのむ	涙を揮って馬蹠を斬る	涙を振りはえる	涙を振るう
	嬉し涙を流す	紅涙を絞る	上下涙を流す					
汗	汗がでる	血と汗	汗にある	大汗になる	汗水になる	手に汗を握る	額に汗する	玉の汗
	血の汗	血の汗を流す	汗顔の至り	あせも涙もあせそう	汗をかく	汗を流す	汗を握る	大汗を流す
	汗水を流す							
笑	笑いが溢れる	笑いが止まらない	笑いが大きくなる	一笑に付する	笑つぽに入る	大笑いになる	笑いものにする	笑いものになる
	笑いを飛ばす	笑いを催す	一笑を買う	失笑を買う	目くそ鼻くそを笑う	微笑みを浮かべる	笑い事でない	笑う門には福が来る
音	音がする	音が出る	ぐうの音	ぐうの音も出ない	音に聞く	音に聞こえた	音に立てる	音をあげる
	音をする	音を立てる	音を泣く	音頭を取る	本音を吐く	弱音を吐く		
脈	脈が上がる	脈がある	脈が打つ	脈が下がる	脈がない	脈が乱れる	脈を打たす	脈を取る
	脈を診る	気脈を通じる	一脈通じる					
食	食わず嫌い	食はず嫌い	弾みを食う	道草を食う	無駄飯を食う	食うか食われるか	煮ても焼いても食えぬ	食うや食わず
	虫が食う	言を食む						
見	見てのとおり	見果てぬ夢	見向きもしない	見も知らぬ	見るに忍びない	見るに堪えない	見るに見かねる	日の目を見る
	泣きを見る							
聞	見えも外聞もない	聞くに堪えない	聞くに忍びない	聞き捨てならない	聞こえがよい	聞こえが悪い	百聞は一見に如かず	一を聞いて十を知る
寝	永遠の眠り	寝食を忘れる	寝返りをうつ	寝覚めが悪い	寝ずの番	寝ても覚めても	夜の目も寝ずに	夜の目も寝ないで
鳴	閑古鳥が鳴く	鳴かず飛ばず	鳴りを静める	鳴りを潜める	非を鳴らす	悲鳴をあげる	不平を鳴らす	
唾	固唾を呑む	眉に唾を付ける	眉に唾を塗る	唾の一つも吐きかける	唾を付けておく	つばを飲む	唾棄すべき輩	
泣	泣きどころ	弁慶の泣き所	泣きを見る	泣きを入れる	泣き寝入りする	泣く子も黙る		
しわ	しわが寄る	顔にしわを寄せる	しわを伸ばす	しわを寄せる	しわ寄せする			
咳	空咳が出る	聲咳に接する	咳を切ったように	咳をする	咳払いをする			
喧嘩	喧嘩を売る	喧嘩を買う	後の喧嘩を先にする	夫婦喧嘩は犬も食わぬ				
覚	覚えがよい	覚えがめでたい	バカの一つ覚え	めまいを覚える				
知	知らず知らずのうちに	知らぬ間に	思わず知らず	知らぬが仏				
吐	暴言を吐く	嘔吐を催す	反吐が出る	げろを吐く				
歩	五十歩百歩	蝸牛の歩み	歩を合わせる	百歩譲って				

涎	涎が出る	垂涎の的	涎を垂らす	涎を流す				
いびき	いびきをする	いびきをかく	いびきをする					
小便	小便が漏れる	小便をする	小便をたれる					
屁	屁とも思わない	屁をひる	屁をすかす					
あくび	あくびをする	大あくびをする						
痕	爪痕が残る	爪痕を残す						
糞	糞をひる	目くそ鼻くそを突う						
飛	鳴かず飛ばず	飛ぶ鳥を落とす勢い						
眠	とこしえの眠りにつく	惰眠をむさぼる						
めまい	めまいがする	めまいを覚える						
垢	垢抜ける							
飽く	飽くことを知らない							
あぐら	あぐらをかく							
疑	疑いを抱く							
おくび	おくびにも出さない							
おなら	おならをする							
語	言わず語らず							
瘡	瘡をかく							
くしゃみ	くしゃみが出る							
呼吸	阿吽の呼吸							
しゃっくり	しゃっくりが出る							
秋波	秋波を送る							
黙る	泣く子も黙る							
痰	痰がからむ							
吠	負け犬の遠吠え							
踏	踏んだり蹴ったり							
演	演垂らし							
反吐	反吐が出る							

「三次身体語彙慣用表現」

気	気が合う	気が荒い	気がある	気がいい	気が移る	気が多い	気が大きい	気が置けない
	気が置ける	気が重い	気が勝つ	気が軽い	気が変わる	気が利く	気が気でない	気が腐る
	気が狂う	気が差す	気が冷める	気が爽やかになる	気が沈む	気が洪る	気が知れない	気が知れる
	気が進まない	気が進む	気が済まない	気が済む	気がする	気が急ぐ	気がそがれる	気が高ぶる
	気が立つ	気が小さい	気が違う	気が散る	気が尽きる	気がつく	気がつける	気が詰まる
	気が強い	気が遠くなる	気が通る	気が咎める	気がない	気が長い	気が抜けない	気が抜ける
	気が上る	気が乗らない	気が乗る	気が早い	気が弾む	気が張る	気が晴れる	気が引き締まる
	気が引ける	気が塞ぐ	気がふれる	気が減る	気が変になる	気が紛れる	気が回る	気が短い
	気が向く	気が減入る	気もめる	気が休まる	気がゆく	気が緩む	気が弱い	気が若い
	気が悪い	嫌気がさす	気合がかかる	氣勢が上がる	気分がよい	気分が悪い	気骨が折れる	気前がいい
	気味が悪い	根気が要る	根気が切れる	寒気がする	眠気が差す	吐き気がする	勇気が出る	気で気を病む
	気に合う	気に当たる	気に入らない	気に入る	気に応ずる	気にかかる	気にかける	気に食わない
	気に障る	気にしない	気にする	気にそう	気に染まない	気に染む	気に留める	気になる
	気に入られる	気に向く	気に病む	あつけにとられる	お気に入りに	お気に召す	意気に燃える	本気になる
	気の合った	気の利いた	気のせい	気の毒	気のない	気の張り	気の緩み	気は心
	気は世を蓋う	短気は損気	気もそぞろ	気を入れる	気を失う	気を移す	気を奪う	気を置く
	気を起こす	気を落とす	気を変える	気を兼ねる	気を利かす	気を利かせる	気を配る	気を冷ます
	気を静める	気をせく	気をそらす	気を損ずる	気を出す	気を散らす	気を遣う	気を尽くす
	気をつける	気を強くする	気を通す	気を取られる	気を取り直す	気をとる	気を長引く	気を抜く
	気をのまれる	気をのむ	気を吐く	気を払う	気を晴らす	気をはらむ	気を張る	気を引き締める
	気を引き立てる	気を引く	気を紛らす	気を回す	気を迎える	気を持たせる	気を持つ	気をもむ
	気をやる	気を許す	気を緩める	きをよくする	気を楽にする	気を悪くする	気を養う	怖気を振るう
	気合を入れる	気合をかける	気合を込める	氣勢を張る	勇気を出す	万丈の気を吐く	気障り	味も素っ気もない
	同気相求める	病は気から						

拓殖大学大学院言語教育研究科博士後期課程

意	意が薄れる	意が固まる	意が通じる	意がわかる	意がわく	意気地がない	意地が立つ	意地が悪い
	意に合う	意に介さず	意に介さない	意に介さぬ	意に介する	意にかなう	意に逆らう	意に沿う
	意に染まない	意に満たない	意地にかける	意地になる	意表に出る	意のあるところ	意のまま(に)	意地の悪い
	底意地の悪い	意を抱く	意を致す	意を受ける	意を得る	意を覚える	意を固める	意を口にする
	意を配る	意を酌む	意を決する	意を込める	意を悟る	意を知る	意を注ぐ	意を体する
	意を正す	意を通じる	意を掴む	意を尽くす	意を強くする	意を払う	意を迎える	意を用いる
	意を持つ	意を漏らす	意を読む	意地を通す	意地を張る	意表を突く	敬意を払う	好意を寄せる
	誠意を持つ	注意を払う	注意を引く	不意を打つ	不意を襲う	不意を食う	不意を食らう	不意を突かれる
不意を衝く	意余って力及ばず	片意地張る	未必の故意	意気地なし	意地汚い			
念	念が入る	念が狂う	念が募る	念が強い	念が残る	念が晴れる	念が潜む	念が湧く
	怨念が宿る	余念がない	念に念を入れる	怨念にケリをつける	怨念に火がつく	念頭に置く	念のため	念の入った
	念を抱く	念を入れる	念を受け継ぐ	念を失う	念を生む	念を押す	念をかき立てる	念を隠す
	念をかみ殺す	念を込める	念を捧げる	念を募る	念を強める	念を深める	念を振り払う	念を増す
	念を持つ	念を燃やす	怨念を負う	怨念を断つ	怨念を吐く	怨念を呼び覚ます	疑念を打ち消す	懸念を孕む
	懸念を招く	雑念を置く	雑念を消す	雑念を捨てる	雑念を払う	信念を貫く	信念を曲げる	念頭を去らない
	無念を埋める	無念を雪ぐ	無念を託す	無念を残す	無念を果たす	無念を晴らす	正念場	
思	愛想が尽きる	思いがはれる	思うに任せない	思案に余る	思案に暮れる	一思いに	思案の末	思いの丈
	思いの外(のこと)	思いのまま	思いも及ばない	思いもかけない	思いもつかない	思いも寄らず	思いも寄らない	思いを致す
	思いをかける	思いを叶える	思いをこらす	思いを馳せる	思いを晴らす	思いをひそめる	思いをめぐらす	思想を尽かす
	血を吐く思い	死ぬ思い	断腸の思い	思う存分	思うまま	思わず知らず	鮑の片思い	へとも思わない
	やっとの思いで	おもうほど	思い寝に聞く	磯の鮑の片思い	思い半ばに過ぎる			
情	情が移る	情が怖い	情が深い	人情が厚い	情に厚い	情にもろい	人情に欠ける	情を売る
	情けをかける	情を交わす	情を知る	情を通じる	苦情を言う	強情を張る	情理を尽くす	浮世の情け
	悪女の深情け	惻隠の情	情け知らず	情け無用	情けのない	情けも容赦もなく	情けは人のためならず	
感	感じがよい	感がたつ	感がない	感が深い	感じが悪い	感に打たれる	感に堪えない	感に堪える
	感に入る	感をする	感をなす	感を催す	痛痒を感じない	今昔の感	隔世の感	感極まる
	万感こもごも至る							
うそ	うそが交じる	嘘から出た真	うその皮	うそのようだ	うその四百	嘘で固める	嘘も方便	嘘を言う
	うそを食う	うそをこく	嘘をつかないもの	うそをつく	うそ腹を立てる	うそ八百	真つ赤な嘘	
恥	恥が隠れる	恥の上塗り	恥も外聞もない	恥をかく	恥をかかせる	恥を隠す	恥をさらす	恥を忍ぶ
	恥を知る	恥を雪ぐ	恥をそそぐ	恥知らず	会稽の恥	恬として恥じない		
憂	憂い心が居られる	憂き身に余る	憂き目に合う	憂いの火にいられる	憂さを晴らす	憂き世話を病む	憂き名を流す	憂き身をやつす
	憂き世をそむく	憂きとも	憂き晴らし	後顧の憂い	遠慮なければ近憂あり	杞憂		
影	影が薄い	影が薄れる	影が差す	影の形に添うように	影のように	影も形もない	見る影もない	影を落とす
	影を潜める	形影相伴う	三尺下がつて師の影を踏まず	一犬影に映ゆれば百犬声に吹ゆ	杯中の蛇影			
精	精がある	精が出る	精魂に当たる	精も根も尽きる	精を入れる	精を出す	精根を打ち込む	精魂を傾ける
	精神を集中する	精一杯	精根込めて	精根尽き果てる	精魂尽きる			
跡	跡が続く	あとからはげる	跡のままに	跡や枕に	いつにない跡を追う	跡を暗くする	跡をくらす	跡を絶たない
	跡を絶つ	跡目を継ぐ	跡を付ける	人跡未踏の地				
勢い	威勢がよく	勢いに乗る	勢いのよい	勢いの悪い	騎虎の勢い	決河の勢い	破竹の勢い	日の出の勢い
	飛ぶ鳥を落とす勢い	威勢を張る	余勢を駆る					
欲	欲が深い	欲に目が暮れる	欲心に住す	欲の皮	欲の皮が突つ張る	欲の皮が張る	欲も得もない	欲を言えば
	欲をかく	犬の欲張り						
想	愛想が尽きる	想像がつく	愛想も小想も尽き果てる	愛想を言う	愛想を尽かす	愛想を振りまく	想像を絶する	想像をたくましくする
	想像もつかない							
機嫌	機嫌がいい	機嫌が直る	機嫌が損ねる	機嫌が悪い	機嫌を伺う	機嫌を損ねる	機嫌を損ずる	機嫌を取る
	機嫌を直す							
恨み	恨みに思う	恨み骨髄に徹する	恨みを買う	恨みをのむ	恨みを晴らす	恨みつらみを募らせる	遺恨を晴らす	
志	志を立てる	志を遂げる	大志を抱く	青雲の志	青雲の志を抱く	風雲の志	無雀安んぞ鴻鵠の志を知らんぞ	
喜	喜びにくる	喜びにひたる	悲喜こもごも至る	喜びの余りに	喜びの眉を開く	喜びを言う	喜び泣きをする	
苦	苦にする	苦になる	苦に病む	生みの苦しみ	塗炭の苦しみ	苦汁をなめる		
怒	怒りに触れる	怒りに燃える	怒り心頭に達する	怒り心頭に発する	怒りを解く	憤を発する		
願	願いが叶う	願をかける	願いを叶える	願を立てる	願ってもない	願ったり叶ったり		
嘆き	風樹の嘆	髀肉(ひにく)の嘆	亡羊の嘆	望洋の嘆	明け暮れ嘆きけるに			
調子	調子が外れる	調子に乗る	調子のよい	調子を合わせる	調子を取る			
痛	痛くもかゆくもない	痛みに耐える	痛みに絶える	痛みを病む	痛痒を感じない			
慮	遠慮がない	考慮に入れる	千慮の一失	慮外ながら	遠慮深い			
考	考えにふける	考慮に入れる	考えも及ばない					
悔い	悔いが残る	悔いを千歳に残す	悔いを残す					
癩	癩の種	癩癩が起さる	癩癩を起こす					
愁	春愁に富む	哀愁を帯びる	愁眉を開く					

拓殖大学大学院言語教育研究科博士後期課程

魂	心魂に徹する	魂を入れ替える	心魂を傾ける					
熱	熱が出る	熱に浮かされる	熱を上げる					
祈り	祈りが上の空になる	祈りを祈る						
疑	疑いが晴れる	疑いなき人あり						
勘	勘がさえる	勘が深い						
姿	姿を消す	あられもない姿						
痺れ	痺れが切れる	しびれを切らす						
悲	悲喜こもごも至る							
響	響に放つ	響を扱う						
痒	痛くもかゆくもない	痛痒を感じない						
喘	余喘を保つ							
遺憾	遺憾に堪えない							
悦	悦に入る							
媚び	媚びを売る							
神	神に入る							
心配	心配をよそに							
沈黙	沈黙は金							
睨み	にらみを利かせる							
瘦せ	瘦せても枯れても							
酔い	酔いが覚める							
容	女は己を悦ぶ者のために 容つくる							
霊	全身全霊を打ち込む							